

昭和 62 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1991 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



豊楽殿基壇跡

カラー図版一 解説

平安宮豊楽殿基壇跡

豊楽殿の北辺中央部で発見した、凝灰岩の切り石による壇上積み基壇の一部である。延石、地覆石、羽目石とも風化した痕跡は認められず造営当初の姿をよくとどめている。このように旧状をよく保っているのは、北廊を構築した際にこれらの切り石はそのまま基壇の版築土の中に埋められてしまったからである。使用されていた凝灰岩はすべて、奈良県二上山辺から産出されるものであった。

(鈴木久男)



豊楽殿出土緑釉軒瓦



豊楽殿出土鴟尾

カラー図版三 解説

和泉式部町遺跡

周知のように太秦・嵯峨野一帯には、数多くの古墳が点在ないし群集してきたが、これらの古墳を築造してきた人々の集落遺跡に対する考古学的調査は当地域で10例に満たないのが現状である。

現在では家が建ち並び、平坦に見える当地域も、当時は小河川によっていくつもの丘陵や段丘に分かれており、当遺跡もそのような段丘の一つに立地している。この段丘の南端部に、秦氏ゆかりの木嶋坐天照御魂神社（通称蚕の社）が鎮座しており、戦前には写真左方にまで境内が広がっていたとされる。このような段丘上に、弥生時代中期から断続的に営まれてきた住空間は、渡来系の新しい生活要素の波が押し寄せるにつれ突如として断絶する。（辻 裕司）



和泉式部町遺跡全景（南西から）

序

昭和62年度において発掘調査した成果の概要は本報告書の冒頭に述べてあるが、中でも最も注目すべきものとして二、三をあげると 1. 豊楽殿跡（第一章の5）、2. 三条南殿跡（第1章の10、左京四条三坊）と、3. 平安初期の邸宅跡（第一章の22、右京六条一坊）がある。共通した点はそれぞれが調査者としてはできれば、現地そのままに保存すべきものと考えたものである。

豊楽殿跡と推定した遺跡は、残存状況が、発掘調査を行う前からそれと判別できるものであった。その付近は1920年頃までは田圃であった。区画整理で、残っていた遺構面を切下げ、道路が造られた。その遺構の西南部に東洋史学者故羽田亨博士が自宅を建設された。その時博士はその敷地を道路面まで下げ、ならされることはなかった。恐らく故先生は、その土地が平安宮の豊楽殿の跡と意識されていたと思われる。そのような土地が近年になって羽田家から離れることになり、マンションの建設が考えられた。

ところで、この街路に下水管敷設工事が行われるようになりその立会調査を古代学研究会が行って、凝灰岩・瓦片などが多数出土して平安宮跡として重要な遺構があることは確認できていた。調査して（ここでは概要を説明しているのみだが、詳細な報告は後日にされるはず）この遺跡は国も、行政方針として保存の方途を取られることになった。

第2にあげたのは、三条通烏丸西、南側の地点にあたる。院政期、院の近臣として威勢を誇っていた藤原実能の邸宅であり、院三方（白河・鳥羽・待賢門院）の御幸もあった庭園遺構が出土し、保存を考えたが、依頼者の都合から不可能ときまった。ただし出土した遺構は他に移動して保存されることには話がついた。

第3は、右京六条一坊五町の地を調査の対象としている。しかし平安時代には誰が使っていたかの手懸かりは得られなかった。それを6区に分け調査を行い、全区の調査を終えた。一町の西南部はガスのシリンダータンクで壊され、その北部は湿地帯で平安の遺跡は残っていなかったが、東部に北から南に遺跡が残り、住宅として主要な正殿から、一邸宅に必要な建物を残し、平安時代も10世紀頃を示す遺構とわかった。遺構による平安時代の邸宅を示す例として、保存すべきことを調査依頼者の（株）リサーチ・パークに申し入れたが諸種の事情から保存できないけれど、復原模型作製は可能だということから、その会社で「平安京寝殿造り遺構研究会」を造り、昭和63年5月25日に初回の協議会を持ち、以後6回の協議を重ね平成元年1月28日に最終案を得て作製を開始、5月16日に、それをリサーチ・パークの中庭に造られた模型室に収めた。

これを寝殿造りとして扱ったのは、平安時代前期のものとして、平安時代中期か後期に完成した形式の原型と認めたからである。

調査した遺構が以上の三つのスタイルで残されることになったが、そのことすら不可能の場合もある。しかしいずれにせよ、調査自体も調査依頼者の理解と協力を待って成立して行くものであるから、この年報にはその裏にかくされた協力者が多数あったことを思い、その方々に感謝の意を込めて挨拶を申し上げるものである。

平成3年8月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

凡 例

1. 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 62 年度に実施した事業の年次報告である。
発掘調査（第 1 章）、試掘・立会調査（第 2 章）、資料整理（第 3 章）、事務報告（第 4 章）とした。
2. 試掘・立会調査のうち、調査継続中のため次年度に報告する分は表 2 に示した。
3. 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系 VI によった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
4. 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図（2,500 分の 1、10,000 分の 1、30,000 分の 1）を修正して使用した。
5. 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
6. 遺構のうち表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
S A（柵）、S B（建物）、S D（溝）、S E（井戸）、S F（道路）、
S G（池）、S K（土壌）、S X（その他の遺構）
7. 各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点である。
8. 昭和 62 年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、昭和 62 年 4 月～12 月実施分は昭和 62 年度の各発掘調査概報に、昭和 63 年 1 月～3 月実施分は昭和 63 年度の各発掘調査概報に報告してある。
9. 図版一～六の調査地点番号の I は発掘調査、II は試掘・立会調査を表す。試掘・立会調査は付表 2 の番号を用いており、第 2 章の報告番号とは一致しない。
10. 本年度の調査並びに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。また本年度の調査のうち、平安京調査会の協力によって実施した調査については文末に記した。
11. 写真は、遺物写真及び一部を除く発掘調査の遺構写真は牛嶋茂・村井伸也が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
12. 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。編集と調整は、永田信一、吉村正親、鈴木廣司が行った。

目 次

第1章 発掘調査

I 昭和62年度の発掘調査概要 … 1

II 平安宮・京跡

- 1 平安宮朝堂院……………4
- 2 平安宮内裏1……………5
- 3 平安宮内裏2……………6
- 4 平安宮内裏3……………7
- 5 平安宮豊樂殿……………8
- 6 平安京左京北辺二坊……………9
- 7 平安京左京北辺三坊……………13
- 8 平安京左京二条三坊……………17
- 9 平安京左京三条四坊……………20
- 10 平安京左京四条三坊……………23
- 11 平安京左京五条一坊……………31
- 11 平安京左京五条四坊……………32
- 13 平安京左京六条二坊……………34
- 14 平安京左京六条三坊……………36
- 15 平安京左京八条二坊……………40
- 16 平安京右京北辺二坊……………41
- 17 平安京右京一条二坊……………42
- 18 平安京右京三条二坊……………43
- 19 平安京右京四条二坊……………45
- 20 平安京右京五条一坊……………49
- 21 平安京右京五条三坊……………51
- 22 平安京右京六条一坊……………53
- 23 平安京右京六条二坊……………54

24 平安京右京八条二坊……………56

25 平安京右京九条二坊……………57

III 白河街区

26 岡崎遺跡・法勝寺隣接地……………58

27 法勝寺跡……………63

28 尊勝寺跡……………65

IV 鳥羽離宮跡

29 鳥羽離宮跡第122次調査……………72

30 鳥羽離宮跡第123次調査……………73

31 鳥羽離宮跡第124次調査……………74

32 鳥羽離宮跡第125次調査……………75

33 下鳥羽遺跡……………76

V 中臣遺跡

34 中臣遺跡第68次調査……………80

35 中臣遺跡第69次調査……………81

36 勸修寺旧境内……………82

VI 長岡京跡

37 長岡京左京一条三坊1……………85

38 長岡京左京一条三坊2……………86

39 長岡京左京二条三坊……………87

40 長岡京左京四条三・四坊……………91

41 久我東町遺跡……………99

VII その他の遺跡

42 円乗寺跡……………100

43 和泉式部町遺跡……………103

44 北野麿寺……………110

45 南春日町遺跡……………113

46 伏見城々下町……………116

47	上久世遺跡	119
48	大藪遺跡	122

第2章 試掘・立会調査

I	昭和62年度の試掘・ 立会調査概要	123
---	----------------------	-----

II 平安宮・京跡

1	平安宮朝堂院	125
2	平安宮兵庫寮	126
3	平安京左京四条一坊	127
4	平安京右京二条四坊	128
5	平安京右京五条二坊	129
6	平安京右京六条一坊	130

III 平安京域以外の遺跡

7	法勝寺跡	132
8	鳥羽離宮跡1	133
9	鳥羽離宮跡2	134
10	下鳥羽遺跡	136
11	広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡・ 和泉式部町遺跡・一ノ井町遺跡・ 森ヶ東瓦窯跡・常盤東ノ町古墳群 ……………	137
12	常盤東ノ町古墳群・常盤仲之町 遺跡・広隆寺旧境内	141
13	法成寺跡	143
14	檜原廃寺・檜原遺跡・ 檜原廃寺瓦窯跡	144

15	鳴谷古墳・盆山経塚・ 峰ヶ堂城跡	148
16	大藪遺跡・中久世遺跡	150
17	法性寺跡・正覚寺跡	154
18	伏見城々下町	157

第3章 資料整理

1	遺跡測量	159
2	コンピュータ	160
3	写真撮影	161
4	保存科学	162
5	遺物復原	166
6	報告書の刊行	166

第4章 事務報告

1	人事異動	167
2	普及啓発及び技術者養成事業 ……………	167
3	京都市考古資料館の状況	170
4	組織及び役職員	173

付表

1	昭和62年度発掘調査一覧表 ……………	175
2	昭和62年度試掘・立会 調査一覧表	178

図版目次

- | | | |
|-------|---------------|--|
| 図版 1 | 調査地点位置図 (1) | 平安京跡調査地点位置図 |
| 図版 2 | 調査地点位置図 (2) | 1 白河街区調査地点位置図
2 中臣遺跡調査地点位置図 |
| 図版 3 | 調査地点位置図 (3) | 鳥羽離宮跡調査地点位置図 |
| 図版 4 | 調査地点位置図 (4) | 長岡京城調査地点位置図 |
| 図版 5 | 調査地点位置図 (5) | 1 北西部地域調査地点位置図
2 西部地域調査地点位置図 |
| 図版 6 | 調査地点位置図 (6) | 南東部地域調査地点位置図 |
| 図版 7 | 平安京左京北辺二坊 | 1 遺構面 1 全景 (東から)
2 遺構面 2 全景 (東から) |
| 図版 8 | 平安京左京北辺三坊 (1) | 1 調査区全景 (西から)
2 溝 394 全景 (北から)
3 油小路路面・西側溝全景 (北から) |
| 図版 9 | 平安京左京北辺三坊 (2) | 土壙 158 出土土器 |
| 図版 10 | 平安京左京二条三坊 (1) | 1 最終遺構面全景 (西から)
2 S K 70 (南から) |
| 図版 11 | 平安京左京二条三坊 (2) | 出土陶器 |
| 図版 12 | 平安京左京二条三坊 (3) | 出土陶器・蒨絵漆器 |
| 図版 13 | 平安京左京三条四坊 (1) | 1 最終遺構面全景 (東から)
2 安土桃山時代以降遺構面全景 (東から) |
| 図版 14 | 平安京左京三条四坊 (2) | 1 安土桃山時代屋敷跡
石組溝と地業 (北東から)
2 室町時代集石遺構 (北西から) |
| 図版 15 | 平安京左京三条四坊 (3) | 出土陶器 |
| 図版 16 | 平安京左京三条四坊 (4) | 出土陶器 |
| 図版 17 | 平安京左京三条四坊 (5) | 出土陶器 |
| 図版 18 | 平安京左京三条四坊 (6) | 出土陶磁器 |
| 図版 19 | 平安京左京四条三坊 (1) | 1 1 区 全景 (北西から) |

	2	2区 全景 (南から)
図版 20 平安京左京四条三坊 (2)	1	3区 全景 (北から)
	2	3区 南部遺水遺構 (南西から)
図版 21 平安京左京五条四坊	1	調査区全景・プラン1 (東から)
	2	調査区東部・プラン2 (東から)
図版 22 平安京左京六条二坊	1	No.15 調査区全景 (北から)
	2	No.15 調査区南壁 (北から)
図版 23 平安京左京六条三坊	1	調査区全景 (北から)
	2	六条坊門小路 (東から)
図版 24 平安京左京八条二坊	1	平安時代遺構全景 (西から)
	2	池状の落込 (西から)
図版 25 平安京右京三条二坊	1	中・近世遺構面全景 (西から)
	2	平安時代遺構面全景 (西から)
図版 26 平安京右京四条二坊	1	全景 (東から)
	2	西鞆負小路全景 (北西から)
図版 27 平安京右京五条三坊	1	全景 (東から)
	2	調査区東半 (北西から)
図版 28 平安京右京六条一坊	1	試掘2トレンチ西半部 (南西から)
	2	試掘4トレンチ断面西壁 (東から)
図版 29 平安京右京六条二坊	1	全景 (西から)
	2	建物柱穴列 (東から)
図版 30 岡崎遺跡	1	第2面全景1 (北から)
	2	第2面全景2 (北から)
図版 31 尊勝寺跡	1	全景 (南から)
	2	北部全景 (東から)
図版 32 鳥羽離宮跡第122次調査	1	全景 (南から)
	2	外堀石垣 (南東から)
図版 33 下鳥羽遺跡 (1)	1	弥生時代全景 (北から)
	2	S K 161 (北から)
	3	S K 163 (北から)

- 図版 34 下鳥羽遺跡 (2) 1 古墳時代全景 (北から)
2 平安時代井戸 S E 31 断ち割り状況
3 S K 72 (北東から)
- 図版 35 下鳥羽遺跡 (3) 1 S K 161 出土土器
2 S K 163 出土土器
- 図版 36 勸修寺旧境内 1 I 区 池 S G 1 全景 (北から)
2 II 区 4 トレンチ溝全景 (北から)
- 図版 37 長岡京左京二条三坊 (1) 1 8-1 次調査区 中世遺構面 (北から)
2 8-2 次調査区 弥生時代から長岡京期遺構面 (北東から)
- 図版 38 長岡京左京二条三坊 (2) 1 8-2 次調査区 長岡京期遺構面 (南西から)
2 8-2 次調査区 弥生時代中期方形周溝墓 (東から)
- 図版 39 長岡京左京四条三・四坊 (1) 1 T-2 区 長岡京期東半部遺構面 (西から)
2 T-2 区 長岡京期 S E 45 断ち割り断面 (西から)
- 図版 40 長岡京左京四条三・四坊 (2) 1 X-1 区 長岡京期遺構面全景 (西から)
2 X-2 区 長岡京期遺構面全景 (東から)
- 図版 41 長岡京左京四条三・四坊 (3) 1 X-3 区 方形周溝墓 S D 5 (北東から)
2 X-3 区 奈良時代遺構面全景 (西から)
- 図版 42 長岡京左京四条三・四坊 (4) 1 Y-1 区 第 2 面全景 (東から)
2 Y-1 区 第 3 面東半部火葬墓群 (西から)
- 図版 43 長岡京左京四条三・四坊 (5) X-2 区 S E 4 出土土器
- 図版 44 長岡京左京四条三・四坊 (6) X-3 区 S E 7 出土墨書土器
- 図版 45 長岡京左京四条三・四坊 (7) X-3 区 S D 7 出土土師器
- 図版 46 長岡京左京四条三・四坊 (8) X-3 区 S D 7 出土須恵器
- 図版 47 円乗寺跡 1 調査区全景 (北から)
2 築地及び側溝 (北から)
- 図版 48 和泉式部町遺跡 (1) 1 22 号住居全景 (北から)
2 12 号住居全景 (北東から)
- 図版 49 和泉式部町遺跡 (2) 1 2 号住居全景 (北から)
2 15 号住居全景 (南から)

図版 50	和泉式部町遺跡 (3)	1 3号住居全景 (南東から) 2 1号住居全景 (北から)
図版 51	和泉式部町遺跡 (4)	1 6・14・19号住居全景 (南東から) 2 16号住居全景 (北東から)
図版 52	和泉式部町遺跡 (5)	22号住居出土弥生土器
図版 53	和泉式部町遺跡 (6)	古墳時代前期住居出土土器
図版 54	和泉式部町遺跡 (7)	古墳時代前期住居出土土器
図版 55	和泉式部町遺跡 (8)	古墳時代中期住居出土土器
図版 56	和泉式部町遺跡 (9)	古墳時代中期住居出土土器
図版 57	北野廃寺	1 東限溝・築地跡全景 (北から) 2 平安時代溝 (北から)
図版 58	南春日町遺跡	1 1区 全景 (西から) 2 2区 全景 (西から)
図版 59	伏見城々下町	1 試掘4グリッド断面 (北から) 2 試掘6グリッド全景 (西から)
図版 60	伏見城々下町	1 調査区全景・プラン1-1 (北から) 2 調査区全景・プラン1-2 (北から)
図版 61	上久世遺跡 (1)	1 I期 調査区全景 (北西から) 2 I期 調査区南半部全景 (北西から)
図版 62	上久世遺跡 (2)	1 II期 調査区北半部全景 (西から) 2 S B 11 (西から) 3 S K 14 (南から)
図版 63	鳴谷古墳	1 第5地点北土手全景 (北西から) 2 第5地点南土手全景 (北西から)

第1章 発掘調査

I 昭和62年度の発掘調査概要

昭和62年度に当研究所が京都市内で実施した発掘調査件数は48件である。本年度も都城遺跡を始めとして、各遺跡で新発見並びに従来の調査・研究成果を更に補強する遺構・遺物を検出しており、特筆すべき資料も多い。次に本年度の調査成果の概略を述べる。

平安宮・京跡 調査件数は25件に昇る。内訳は平安宮域5件、平安京左京域10件、同右京域10件である。本年度は宮城関係遺構、条坊関係遺構並びに宅地内建物また庭園遺構などみるべきものが多い。

平安宮域の調査では、豊楽殿跡(5)で検出した凝灰岩製の壇上積基壇の発見が特筆できる。基壇は、造営当初の姿を良くとどめ遺存状況も良好なことから、土地所有者も遺構の重要性和保存の必要性に理解を示され、調査地は買収ののち保存されることになった。なお、内裏3(4)においても基壇・雨落溝などが検出され、更に内裏2(3)の調査でこれらの続きを認めている。

平安京左京域においては、左京三条四坊(9)の調査で三条大路路面並びに宅地内溝を検出したほか、安土桃山時代に比定できる町屋敷跡から多量の茶陶類が出土している。左京四条三坊(10)では平安時代後半代の遺存状況の良好な庭園跡を検出している。左京六条三坊(14)の調査では東洞院大路・六条坊門小路の交差点部分を検出し、かつそれらが中世を通じて同位置に保たれたことを明らかにした。

平安京右京域においては、右京北辺二坊(16)の調査で一条大路北側溝を検出した。右京四条二坊(19)の調査では西鞠負小路の両側溝・西側築地・路面を良好な状態で検出したほか、宅地内において掘立柱建物群を認めている。また、宅地内における掘立柱建物群は右京五条三坊(21)、右京六条一坊(22)、右京六条二坊(23)の調査などで検出している。このうち右京六条一坊の調査は、平安京のほぼ一町にわたる範囲の調査であり、各建物の配置など寝殿造りの様相解明に大きな手懸かりを得た。報告書刊行予定であり、ここではごく簡易に触れるのみである。

平安京造営以前の遺構・遺物については、弥生時代の竪穴住居が豊楽殿跡下層で検出され、右京五条三坊では土壙群から弥生土器が出土した。そのほか、弥生土器は左京北辺三坊(7)、左京五条四坊(12)の調査でも出土している。

古墳時代の遺構・遺物は、右京九条二坊（25）－唐橋遺跡－における竪穴住居の検出のほか、土器類は左京五条四坊、左京六条三坊、右京六条二坊、右京八条二坊（24）などの調査で検出している。

鎌倉時代以降の遺構・遺物は左京域の大多数の調査及び右京域の一部の調査で確認している。また本年度は桃山時代から江戸時代の茶陶の良質な一括資料が左京北辺二坊（6）、左京三条四坊で多量に出土しており、茶道・茶陶研究における好資料になろう。

白河街区 3件の発掘調査を実施した。六勝寺関係では尊勝寺跡（28）の調査で掘立柱建物・溝などを検出した。法勝寺跡（27）の調査では弥生時代から古墳時代の流路で多量の土器類が出土したものの、寺院に関連する遺構は認められなかった。岡崎遺跡（26）の調査では鎌倉時代から室町時代の遺構を数多く検出している。中世の遺構・遺物は他の2件の調査でも検出しており、中世の白河地域の様相を知る資料となった。

鳥羽離宮跡 下鳥羽遺跡を含め5件が数えられる。白河天皇御陵に関連して2件あり、122次調査（29）では御陵南側の外堀の石垣を検出し、南北の規模を確認することができた。124次調査（31）で検出した堀状遺構から12世紀後半代の呪術資料を含む木製品が出土した。鳥羽離宮期以降、中世・近世と連綿と続く遺構群は周知のものであるが、今回も123次調査（30）で確認している。

下鳥羽遺跡（33）の調査では弥生時代中期の方形周溝墓・竪穴住居、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居などを検出している。また、弥生時代前期の土壙からは山城地域で最も古い一群に属すると思われる土器が出土している。更に古墳時代後期、平安時代から室町時代と連綿と続く遺構が幾重にも重複して検出されており、それに伴う遺物も豊富に出土している。これまで漠然としていた下鳥羽遺跡の中心的な部分を探し当てた調査と考えて良いだろう。

中臣遺跡 3件の発掘調査を実施した。68次調査（34）では古墳時代後期の竪穴住居を、69次調査（35）では平安時代の掘立柱建物群などを検出している。

勸修寺旧境内（36）の調査では勸修寺に関連する鎌倉時代から室町時代の園池遺構のほか、縄文時代中・後期、弥生時代後期、平安時代の遺構・遺物を検出している。

長岡京跡 久我東町遺跡を含め5件の発掘調査を実施した。左京四条三・四坊（40）は京都市外環状線道路建設に伴う継続調査で、今年度は昭和60年度調査のT区西北部でT-2区、府道水垂上桂線以東でX-1～4区、Y-1区の調査を実施した。なお、Y-1区以東は長岡京域外となる、前年度の試掘調査の成果と合わせ新たに「羽東師志水町遺跡」と呼称した。

X-1～4区は東四坊々間小路とその両側の町内において柵列などで明確に区割され、整然と建ち並ぶ掘立柱建物群を検出した。また、古墳時代前期の方形周溝墓、奈良時代の掘立柱建物・溝なども認めている。左京二条三坊(39)は西羽東師川河川改修に伴う継続調査である。ここでは東三坊第二小路、弥生時代中期の方形周溝墓を検出している。左京一条三坊2(38)の調査では長岡京期の遺構は認められなかったが、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居などを多数検出している。

その他の遺跡 上記以外の京都市域の調査は7件ある。今年度は前記の豊楽殿下層、下鳥羽遺跡を始めとして、弥生時代から古墳時代の集落跡の調査において多くの成果をあげることができた。

和泉式部町遺跡(43)の調査では、重複した状況で22棟もの弥生時代から古墳時代の竪穴住居群を多量の土器類と共に検出した。これらの竪穴住居群は、大小の古墳また群集墳で知られる太秦・嵯峨野地域において、古墳が築造される以前からその盛期を迎えるまで、長らく生活の拠点となった一大集落遺跡として極めて貴重な資料といえよう。

また、上久世遺跡(47)、大藪遺跡(48)でも弥生時代・古墳時代の竪穴住居を検出している。編集の都合上、長岡京跡に含めたが左京一条三坊2(38)の調査地は大藪遺跡内でもある。これらの遺跡は桂川右岸域を上久世遺跡、中久世遺跡、大藪遺跡、東土川遺跡、羽東師遺跡と連続する遺跡群の一つである。これまでの調査成果により、これらの遺跡群内で認められた集落跡は大きな旧河川流域に沿った微高地上に営まれていることがわかっており、今年度の調査成果もそれをより補強するものである。

市内の北西部の調査では和泉式部町遺跡のほかに円乗寺跡(42)と北野廃寺(44)がある。円乗寺跡の調査では平安時代中期の仁和寺の寺域東限を示すと思われる築地の痕跡と内外両側溝を検出している。北野廃寺は同寺院推定域の調査としては第12次にあたる。ここでは、北野廃寺に後続する野寺の東限築地と内外両側溝を検出している。また、飛鳥時代の土器類もかなり出土しており、北野廃寺との関連も考えている。

洛西の大原野一帯も古墳時代後期の群集墳などで知られるところである。当地域では圃場整備事業に伴い、継続的な発掘調査を実施している。南春日町はかつての奈良時代の寺院跡を発見した地区であり、今回はその西南約500mの地点における調査(45)である。ここでは、前年度実施した近隣地での調査同様、平安時代の掘立柱建物などを検出している。

また(46)は、伏見城の城下町における調査で、桃山時代の大名屋敷の一部、商家と考えられる礎石建物などを検出している。(鈴木廣司)

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院

経過 昭和54年に行った当調査地南面道路のガス管理設に伴う立会調査で、朝堂院東第三堂の北縁と東縁を発見している。したがって、この調査で遺構が残っていれば、東第二堂を発見できるはずである。マンション建設に伴う事前の試掘調査で、その基壇縁とみる凝灰岩片を見つけている。その場所を含め約70㎡を、昭和62年7月10日～31日まで調査した。

遺構・遺物 調査した遺構の大半は、江戸時代の所司代関係である。平安時代の主な遺構は敷地南部の瓦溜である。

試掘調査で認めた凝灰岩片は浅い小穴に入れられたもので、基壇縁の施設ではなかった。基壇縁と推定する付近は、江戸時代の柵列で激しく破壊されていた。その南に平安時代の小溝がわずかに残っていたが、それも基壇縁の遺構かはわからなかった。基壇縁と推定する付近から南には、大きな瓦溜があった。その下位は瓦が希薄で、土取穴を兼ねていたようである。上位には瓦が層を為していた。瓦のほとんどが焼けていた。平安時代前・中期の特徴を示す瓦に混じって平安時代後期の特徴を示す瓦を若干認めた。土器が出土せず、遺構の年代は不確実であるが、平安時代後期と思われる。なお、基壇内と推定する部分では、柱穴の痕跡はおろか、整地の痕跡すらなかった。

小結 先のガス管理設に伴う調査で、朝堂院内の遺構がかなり明確になっている。今回の調査で、東第二堂の南縁を確定できると期待して調査したが、その付近は江戸時代に破壊されていた。ただ、今までの成果では、建物基壇内に瓦溜を検出した例はなく、今回の瓦溜もそれと矛盾するものではない。消極的な根拠ながら、東第二堂と第三堂の基壇間の距離をおよそ3丈とみておく。

(梅川光隆)

【平安京跡発掘調査概報】 昭和62年度 1988年報告

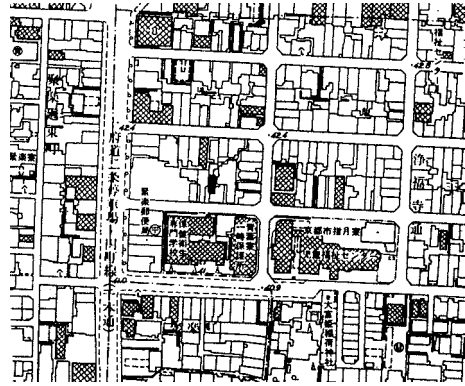


図1 調査位置図 (1:5000)

2 平安宮内裏1

経過 調査地は、大極殿院と中和院の間の広場にあたり、両院のほぼ中間に位置する。北隣の敷地を昭和59年に調査し、中和院に關係するとみられる平安時代前期の遺物を多量に採取している。昭和62年5月6日～26日まで、約85㎡を調査した。遺構面は地表下10cmと浅い部位にあり、江戸時代、平安時代の遺構を認めた。また、その下に、飛鳥時代頃の河川の跡を認めた。河川は、遺物の包含がごく微量であり、一部を断ち割り、その堆積状況を記録するにとどめた。



図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 平安時代の主な遺構は、瓦の帯状分布・土取穴・瓦溜である。

瓦の帯状分布は、調査区の中央に、幅1.5mで東西方向に走り、北から流入したような形で瓦が層を為す。この帯状分布を挟み、南と北では整地の状況が異なる。南は小礫を密に固め、標高約44.3mで面を為す。この標高は大極殿院内で検出した整地面と同数値である。北は、締めりの緩い土での整地で、面を為さない。これから、北の整地面は、いま少し高く、帯状分布を境に、整地面に南と北で段差があったと考えられる。

土取穴は調査区の東北隅にあり、中位に土器片を、上位に焼土粒・焼けた壁土を含む。火災の後の修復時に掘られた穴である。瓦溜は、その土取穴に接しており、多量の使用済みの瓦を意図的に破碎して投棄している。瓦に火痕はない。軒平瓦の顎裏に赤彩痕を認めるものが少なからずある。両遺構はいずれも10世紀後半頃のもので、建物、恐らく中和院の修復に係わる遺構である。

小結 大極殿院と中和院のほぼ中間で、東西に走る整地の段差を認めた。段は大極殿北廊の北約18mにあり、その南の整地面は大極殿院の整地面と同標高であった。大極殿院の広がりはこの段差までとすることができる。その北は少なくとも30cmは高い。このほか、中和院の修復に關係するとみられる10世紀後半の遺構があった。その時期は、天徳四年(960)の内裏初火災を契機とし、盛んに内裏に修復が行われる時期である。(梅川光隆)

『平安京跡発掘調査概報』 昭和62年度 1988年報告

3 平安宮内裏2

経過 調査地は平安宮内裏内郭の中央北より、貞観殿と登華殿の中間付近に推定される。試掘調査を実施したところ、遺構・遺物の残りが良好と判明、発掘調査を実施する運びとなった。調査は建物計画地に45㎡の調査区を設定。上から手掘りが進め、第1遺構群（江戸時代）、第2遺構群（室町時代）、第3遺構群（平安時代）を検出。特に第3遺構群で平安宮内裏関係の資料を得た。

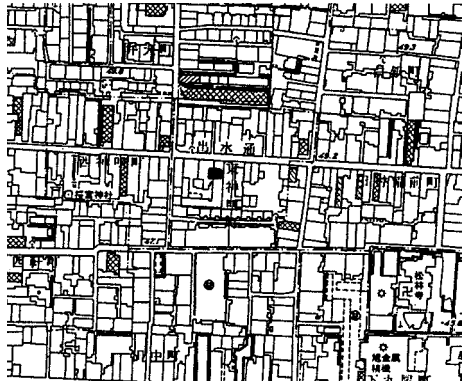


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 ここでは平安宮内裏に関連する第3遺構群について述べる。第3遺構群としたものには南北溝と大規模な土壇がある。南北溝は石敷溝で、幅0.8m、深さ0.3mあり、その形状から今回報告する平安宮内裏3で検出した石敷溝と類似する。土壇は東西、南北とも3m以上、深さが1.5m以上の規模を持つ。土壇内からは土器・瓦類のほかには壁土や凝灰岩が出土している。二次焼成を受けたものが多い点に特色がある。

遺物は主にこの土壇から出土している。土器類の器種構成は、土師器86.9%、須恵器1.2%、黒色土器0.7%、緑釉陶器1.7%、灰釉陶器0.4%、白色無釉陶器6.3%、磁器0.1%で、土師器が圧倒的に多いこと、白色無釉陶器の割合が高いことなどが特徴といえる。墨書土器の中には、「応和年三月」・「年八月」などと習書された白色無釉陶器皿が1点ある。このほか、軒丸瓦・軒平瓦を始めとする多量の瓦類、表面に化粧土をとどめた壁土、加工された面を持つ凝灰岩などが出土している。

小結 検出した石敷の南北の溝は、登華殿の東雨落溝に該当するものとみられる。大規模な土壇は、二次焼成を受けた遺物を多く含み、内裏火災の後に東側の貞観殿との間にうがたれた巨大な残土処理壇の可能性が高い。平安宮の内裏は、天徳四年（960）に初めて焼亡して以来、貞元元年（976）・天安三年（980）・天安五年（982）と頻繁に被災している。検出した土壇をどの火災に結び付けるかが問題になるが、ここでは墨書土器を参考に、天徳四年九月に起きた最初の火災と、翌応和元年（961）十一月の新造内裏遷御との間にうがたれた可能性を考えておきたい。

（丸川義広）

【平安京跡発掘調査概報】 昭和62年度 1988年報告

4 平安宮内裏3

経過 調査地は、内裏内郭の校書殿と蔵人町屋の間で、両者のいずれかを発見できる期待があった。民家新築に伴う事前調査として、約40㎡を、昭和62年8月24日から9月30日まで行った。結果、蔵人町屋の東南隅とみる遺構を発見し、9月19日に報道発表、翌20日に現地説明会を行った。

遺構・遺物 調査地の層序は、上から現代土層、江戸時代の整地土層、室町時代の耕作土層、平安時代前期の整地土層の順で、その下面は地表下約1.1mである。平安時代前期の整地土層は、間に少なくとも3度の被火災面を挟む。平安時代の遺構は、初期の遺構、前期の建物、中期の建物の3群がある。

初期の遺構は、幅50cmの带状掘込で、調査区の中央を南北に走り、調査区の南で東に折れる。校書殿に附属する施設の基壇縁とみられる。

前期の建物は、河原石を敷いた雨落溝が良好に残る。東西の雨落溝は、南面に合流して、更に南下する。雨落溝から3.3m内に基壇のかすかな高まりが残る。基壇縁は、後に西へ60cm移動した位置に造り直す。基壇縁と雨落溝の間には2度の被火災面があり、焼けた檜皮が堆積していた。明確な柱跡は検出していない。

中期の建物は、前期の雨落溝を覆う整地土の上で、南北に2.4m離れて並ぶ、礎石据付跡を確認した。

小結 内裏内郭での遺構の発見はいままで、内郭西廊・承明門など郭の縁辺の遺構が多かった。この調査では、郭内の建物を発見し、その遺構がどのようなものであるかを明らかにした。また、現存する内裏古図がかなり正確であることもわかった。特に、前期の建物は、蔵人町屋と考えてよい。その河原石敷きの雨落溝は、承明門や登華殿で発見した雨落溝と同趣である。これらの石敷溝を、内裏古図では「御溝」と呼んでいる。内裏古図では、蔵人町屋の東には「御溝」はみえない。これを、溝が9世紀中頃に埋められたためと考えると、内裏古図の遡上性を考える上で見逃せない事象である。また、記録には残らない内裏諸殿舎の火災が幾度もあったことがわかった。

(梅川光隆)

『平安京跡発掘調査概報』 昭和62年度 1988年報告



図1 調査位置図 (1:5000)

5 平安宮豊楽殿（巻頭カラー図版1・2）

経過 調査地は、京都市中京区聚楽廻西町85に位置する。この付近は、調査前から周辺部の地盤より一段高い地形になっていたところである。昭和51年に京都市文化財保護課が当地から南へ約20m下がった地点で立会調査を実施して、基壇の一部と、根固め石を発見した。その結果、この付近の高まりが豊楽殿の基壇ではないかと考えられるようになった。現在も調査地の北側及び東側には、その痕跡を一部

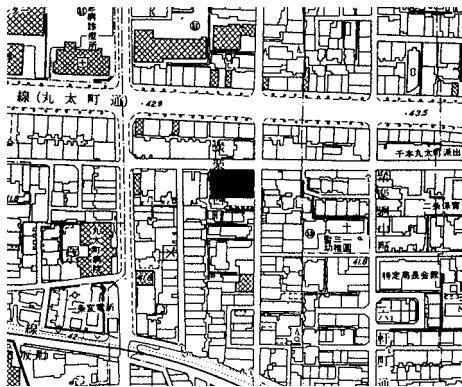


図1 調査位置図 (1:5000)

認めることができる。試掘調査の結果、遺構・遺物が残存していることが明らかとなり、発掘調査を実施する運びとなった。

遺構・遺物 豊楽殿基壇北縁の中央以西と西縁及び北廊の一部を発見した。

豊楽殿の基壇は後世の削平を受け、外装の切り石はほとんど取り去られていたが、それでも一部当初の姿をとどめていた。その結果、基壇は凝灰岩の切り石を用いた壇上積基壇であった。出土した切り石の寸法は以下のようなものである。延石は幅41cm、長さ101cm、高さ34cm、地覆石は幅26cm、長さ102cm、高さ28cm、羽目石は幅51cm、厚さ23cmを測る。階段は、中央間と、中央間から西へ3間目の位置で検出した。西の階段は、幅約450cm、出約270cmである。礎石の据付位置を示す根固めは、東西方向に5箇所遺存していた。根固めの構築工法は2種類認めた。柱間寸法は身舎の部分では15尺(4.5m)、廂は13尺(3.9m)である。今までの調査成果から豊楽殿の規模は桁行9間、梁行4間の東西棟である。

北廊基壇は、版築によって構築されていた。規模や基壇の外装を示すような据付痕や抜取跡などは認めないが、基壇の西側に、南北に並ぶ塼敷きを一部認めた。その他、豊楽殿基壇の下層から弥生時代後期の竪穴住居を2棟検出している。

建物は遺構の性格上、出土した遺物のほとんどが瓦塼類で、土器類は極めて少ない。北廊基壇の版築土内からは、緑釉を施した軒瓦や鴟尾などが出土している。

小結 今回の調査によって豊楽殿の正確な位置・規模を明らかにすることができた。また、豊楽殿と清暑堂をつなぐ北廊は、創建時に造営されていないことも確認した。(鈴木久男)

『平安京跡発掘調査概報』 昭和63年度 1989年報告

6 平安京左京北辺二坊（図版7）

経過 調査地は上京区小川通り一条下ル小川町 196 他で、マンション建設に伴う事前調査である。調査前には試掘調査を実施しており地表下約 1 m で南北方向の溝状遺構を確認している。今回の調査地は、平安京条坊の測量成果によると左京北辺二坊八町の西二行北一門に該当し、敷地の北側には一条大路の南築地が推定される。試掘調査の資料を基に、敷地のほぼ中央部に東西 23 m、南北 13 m の調査区を設定し、昭和 62 年 2 月 10 日に調査

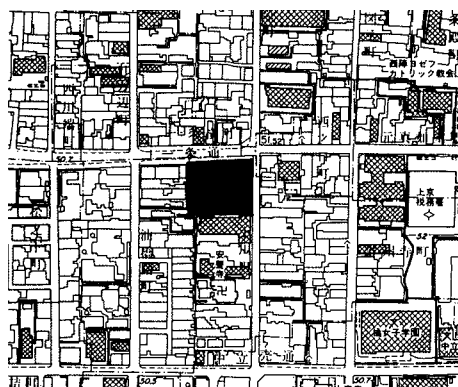


図1 調査位置図 (1:5000)

を開始した。検出した遺構は平安時代から江戸時代の各時代にわたる。試掘調査で検出した溝状の遺構は、更に規模の大きな濠になることが判明し、調査日程の多くをこの濠に費やした。最終的には平安時代の井戸などの調査を実施し 3 月 30 日に調査を終了した。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、まず現代層が約 20cm あり、次に江戸時代の焼土層約 40cm が複雑に交錯し堆積する。焼土層の上面からは同じく焼土を含む江戸時代の遺構が成立し、下面からは室町時代・桃山時代の遺構が成立する。次に暗褐色泥砂層が 20cm 堆積し、最後には褐灰色砂礫層の地山となる。

検出した遺構は大きく数時期に分けられる。平安時代の遺構は少なく井戸と数例の土塋がある。室町時代から桃山時代にかけての遺構には濠・井戸・土塋・柱穴などがあり、遺構の数では同時代のものが最も多い。江戸時代には井戸・柱穴のほかに陶磁器類が多量に投棄された大型土塋群がある。

井戸 (SE 142) は調査区の北東部で検出した。掘形は一辺が 1.6 m の方形で、深さ 4.5 m 以上あり、井戸内に腐食した縦板の痕跡が一部認められた。最終埋土には多量の炭を混入しており、中から土師器を主体とする多量の土器類が出土した。遺物の時期は 12 世紀後半代に考えられる。この井戸は完掘を断念せざるを得ず、そのため底部の状況は不明である。

井戸 (SE 10) は調査区北東隅で検出したもので、溝 (SD 104) を切って成立する。構造は自然石による円形石組みで、井戸の内径が 0.8 m、深さ約 1 m。当調査地で検出した江戸時代の井戸と比べると極めて浅い。井戸の時期は桃山時代と考えられる。

濠（SD 103）の主要部分は調査区北東隅の北壁下からわずかに南に延び、西に折れて北西部で更に南に折れて南壁まで延びる。なお、この濠に取り付く溝が2例あり、SD 104は濠の北東隅から斜め南東に延び、溝（SD 135）は濠の北西隅から斜め北西に延びる。SD 103は幅3～4.5 m、深さ1.6～2.4 mを測り、底部は3箇所に分段や窪みを設けており、断面形は逆台形を呈する。濠の埋土は底部20cmが暗灰色泥土層で、上部の大半は砂礫層である。SD 104は幅2.1 m、深さ1.8 mあり、SD 103より0.5 m浅くなっている。SD 135は幅1.3 m、深さ1.8 mありSD 103より一段深くなる。両溝の埋土はSD 103と同じく砂礫を主体とする。濠及び溝からの出土遺物は瓦のほか、土師器、陶器、瓦質土器、輸入陶磁器などがある。時期は15世紀末～16世紀後葉までのものを含む。

土壇（SK 66）は調査区の北端で検出した。北側は調査区外に延び確認できないが、東西幅が1.7 m、深さ約10cmの浅い方形土壇である。出土遺物には、土師器のほか桃山時代の茶陶である瀬戸黒茶碗（図4）・黄瀬戸の向付があり、他に備前の播鉢・盤などがある。瓦類では梅鉢紋の軒丸瓦（図3-1）が3点ある。同じ梅鉢紋を持つ飾り瓦の小片（図3-2）が調査区中央の土壇（SK 32）から出土した。この瓦には金箔が貼られている。

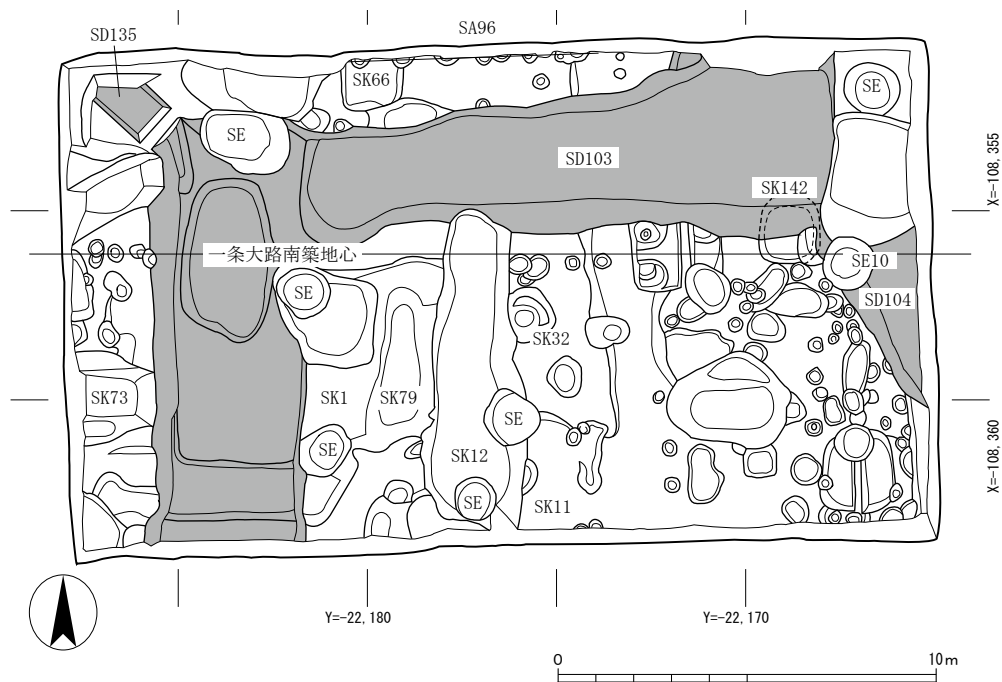


図2 遺構実測図（1：200）

土壙（SK 73）は調査区の西端で検出した。西側は調査区外で確認できない。形状は長方形を呈し、一部2段掘りされている。南北幅2.5 m、深さ1.9 mを測り、底部は平坦面を為す。下部には厚い灰層が認められた。出土遺物は少なく、土師器の皿と瓦類があり、瓦類の中には桐紋の飾り瓦（図3-3）がある。

柵（SA 96）は調査区の北壁下で検出した。柵は東西方向の5間分で、柱間隔は約1.1 mである。出土遺物の時期は室町時代後期に考えられる。

江戸時代の井戸は6基あり、調査区の西半部に5基、北東隅に1基検出した。井戸の石材として切り石を併用するものが多い。また調査区の中央部西寄りでは大型の廃棄土壙（SK 1・7・12）を検出した。それぞれの土壙は重複しているが切り合い関係になく、埋土にはいずれも炭・焼土を多量に含む。遺物の出土状況は陶磁器類や日用雑器を一括投棄した形である。3基の土壙からの出土遺物はかなり多く整理箱にして28箱分ある。

陶磁器類の産地は、伊万里・唐津・瀬戸・備前・信楽・丹波など多岐にわたり、「清閑寺」印や「栗田口」印のある京焼（図5）、軟質の施釉陶器なども出土している。他には窯道具と考えられる破片が出土しており注目される。これらの遺物は17世紀末から18世紀初頭に考えられる。

小結 当地は平安時代の縫殿町北端に位置する。今回検出した平安時代の井戸（SE 142）の位置は、方一町を占める縫殿町の東西中心線と、一条大路の南築地線の交差する部分に位置する。これは誤差の範囲であろうが井戸が築地推定線上にあることは、土地の利用状況を考える上での一資料であろう。

次にSD 103とこれに連なる2本の溝については、いつどのような目的で掘削されたかが問題になる。調査地である小川町には室町時代の文明六年（1474）から長亨三年（1489）にかけて将軍足利義尚の御所^註があったとされており、その場所は一条大路南、正親町小路北、小川通西、油小路東の地に考えられている。また戦国時代の上京には多くの構（かまえ）と呼ばれる防御施設が設けられた。今回検出した濠はそのいずれかに該当する可能性がある。しかし、遺構の性格

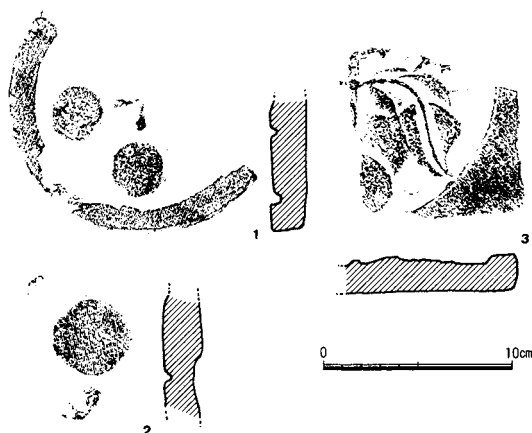


図3 出土瓦拓影・実測図（1：4）

上濠を構築した時期は明確ではなく、ただ前述したように出土遺物によって16世紀後葉には最終的に埋められたことが確かめられた。濠の水源については、江戸時代には「こかわ」と呼ばれ、町名である小川が考えられる。小川は小川通を南流し一条小川で西に折れて堀川に注ぐもので、今回検出した濠の数メートル北を東西に流れる。斜め北西に延びるSD 135については小川に向かっていることから、濠の水量調節機能を持つ溝である可能性が考えられる。また斜め東南に延びるSD 104については濠で囲まれた敷地内に水を引き入れるためのものであろうか。

江戸時代の土壙から出土した一括遺物は災害などにより廃棄されたものと考えられる。遺物の内容では伊万里焼・京焼などに優品が多く、窯道具や赤楽の皿などが出土していることから、調査地の西南に位置する「楽家」との関係が注目される。なお出土遺物に明暦二年(1656)以前铸造の寛永通寶や「御壺師 堺湊伊織」刻印の塩壺があり、当時の火災記事と併せるなら土壙の時期はかなり限定できる。今後更に出土遺物に検討を加えたい。(本 弥八郎)

註 「上京区小川御所跡(591頁)」「京都市の地名」平凡社 1979年



図4 SK 66 出土遺物



図5 SK 12 出土遺物

7 平安京左京北辺三坊（図版8・9）

経過 京都市立中立小学校の屋内体育館建て替えに伴い、事前に発掘調査を実施した。調査地点は、平安京左京北辺三坊一町の東辺南寄りに位置する。この一町は諸司厨町の一つ正親町が所在したとされる。また弥生時代の遺跡として周知される内膳町遺跡にも含まれる。これまでに周辺では、新町通を挟んで東接する市立上京中学校敷地内で2度の調査が実施され、それぞれ左京特有の遺構の重複した状況が明らかにされている。

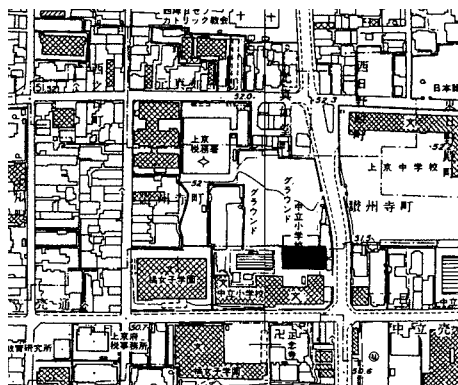


図1 調査位置図 (1:5000)

調査区は、試掘調査成果を基に、町小路の検出などを考慮し、東西約30m、南北約15mの範囲に設定した。調査の結果、平安時代から江戸時代に至る各期の遺構・遺物を検出した。併せてわずかではあるが、平安時代を遡る遺物が出土している。

遺構 調査区内の基本的な層序は、現地表下約80cmまでは旧校舍基礎があり、基礎下には室町時代の土層が厚さ約50cm、その下に鎌倉時代の整地層が厚さ約10cm堆積する。鎌倉時代の整地層下は、東半では褐色砂礫層が、西半では黄褐色砂泥層が堆積する。各層とも無遺物層である。なお西半では、この黄褐色砂泥層上面に、弥生時代の遺物包含層である褐色泥土層や平安時代の整地層の堆積が部分的に遺存していた。

平安時代の遺構については、調査区西半では前述した黄褐色砂泥層を対象とした鎌倉時代の土取穴によって大規模な削平を受けており、土取りを免れた箇所及び東半の褐色砂礫層上面などでわずかに検出したに過ぎない。同期の遺構には土塋・流路・柱穴などがある。鎌倉時代以降の遺構についてはほぼ調査区全域でまんべんなく検出している。鎌倉時代から室町時代の遺構には、町小路（道路敷・西側溝）・堀・柵・石室・柱穴・土塋・土取穴などがある。桃山時代から江戸時代の遺構には、区画施設・柱穴・井戸・土塋などがある。これらの遺構のうち特記すべきものについて次に概略を述べる。

土塋271は土器投棄穴である。遺物整理箱に6箱の遺物が出土した。遺物の遺存状態は比較的良好である。今回の調査で検出した唯一の平安時代前期に属する遺構である。

溝349は調査区東端で検出した南北方向を示す流路である。東肩口は未検出であるが、幅

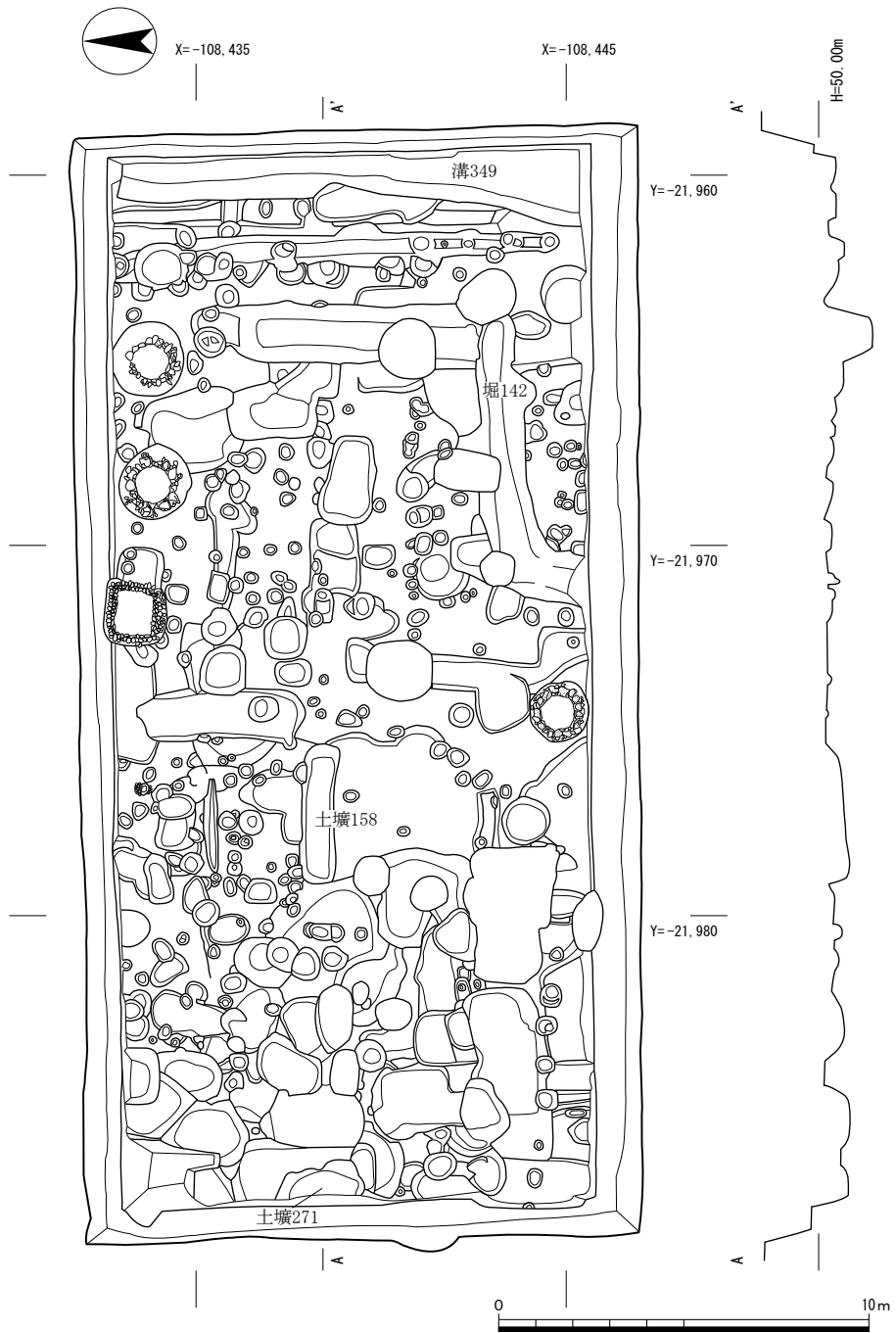


図2 遺構実測図 (1 : 200)

2m以上、検出面からの深さは約40cmある。条坊座標値から復原すると、町小路のほぼ中央部から東半部に位置する。堆積土層は2層に大別でき、下層は暗褐色砂礫層、上層は暗褐色泥土層で、それぞれ平安時代中期から後期の遺物が出土した。

町小路（道路敷・西側溝）は前述した溝349の上面で検出した。溝349が平安時代後期に比較的大粒の砂礫を運ぶ流れによって埋没した後、溝349の上面を整地して道路敷・西側溝を南北方向に敷設する。道路敷は鎌倉時代前期から室町時代後期までのものを5～6面検出した。道路敷は粘土・砂・小礫を使用しており、いずれも非常に堅固である。

堀142は主として南北方向を示す、断面形がU字状の遺構である。調査区内では2箇所で鈎型に折れ曲がる。この2箇所の曲折部には、長径15～50cm大の河原石で2～3段の石積みを構築している。下層では鎌倉時代、上層では室町時代後期の遺物が出土した。この堀の東肩に沿って大規模な柱穴列が連続しており、柵等の施設が考えられる。

土塋158は調査区中央で検出した東西方向に長い土塋である。検出面での規模は、長さ約3.5m、幅約1m、深さ約0.9mある。東端では壁面から底面に至る箇所が熱を受けて赤変する。また底部付近の全面に、熱を受けて赤変したスサ入りの壁材を含む灰層が厚さ10～20cm堆積する。土師器、瓦器、陶器、輸入陶磁器、鉄釘などが出土した。（図3）

遺物 遺物は遺物整理箱で182箱出土した。遺物内容は、磨製石斧、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、小形模造土器、墨書土器、瓦、金属製品、石製品、木製品、銭貨などがある。このうち特記すべきものについて述べる。

磨製石斧は、長さ6.85cm、幅3.35cm、厚さ1.15cmある。弥生土器には口縁部や底部の破片がある。須恵器では、飛鳥時代や奈良時代のものがある。輸入陶磁器では、平安時代中期以降の青磁・白磁、緑釉陶器のほか象嵌青磁片がある。銭貨は大半が北宋銭や明銭であるが流路からは乾元大寶が5枚出土した。瓦は平安時代前期から後期の軒丸・軒平瓦が15個体ある。鉄製品では、室町時代の燭台がある。現存高は29.9cm。鉄芯の上端に、花卉を打ち出した受皿部、下端に三叉の脚が付く。硯は陶製・石製合わせて5個体出土している。

小結 今回の調査では、平安時代前期以降連続と続く遺構・遺物を、更に下層では平安時代を遡るものも検出することができた。しかし、遺構の重複が激しく各遺構の有機的な関連性を把握するには至っていないが、逆にこのことは、当該地域が官衙町から中世の町へ変貌しつつも一貫して活況を呈していたことの反映に他ならない。なおこの中で、町小路の変遷の一端を明らかにすることができたことは今回の調査の重要な成果の一つでもある。

（辻 裕司）

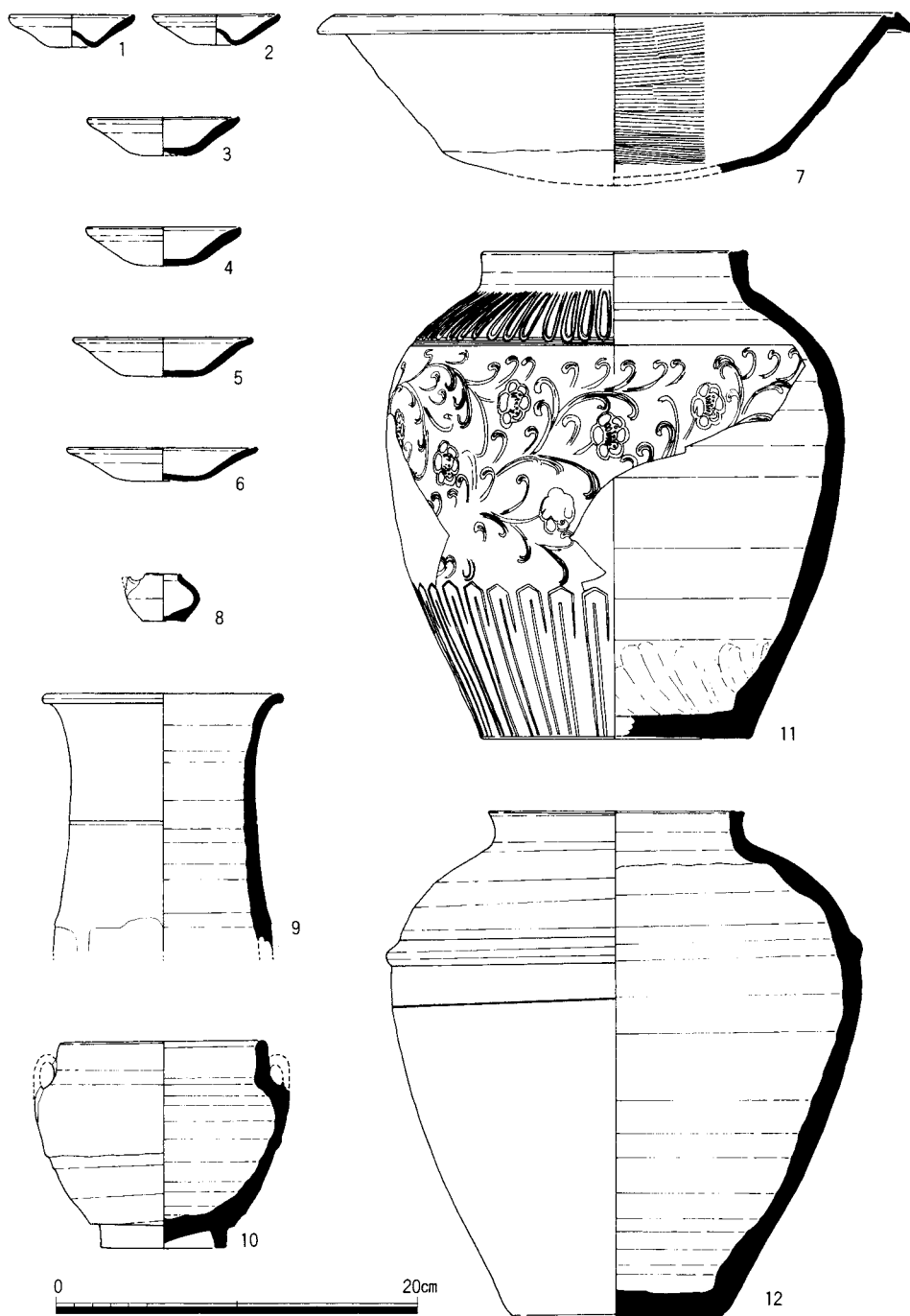


图3 土壙158出土土器 土師器皿(1~6) 瓦器鍋(7) 瀬戸水滴(8) 瀬戸筒形容器(9)
 瀬戸壺(10~12) (1:4)

8 平安京左京二条三坊（図版 10～12）

経過 京都市上京区室町通り榎木町下ル大門町 256 でマンション建設に伴う発掘調査を実施した。当該地は 1980 年に体育館建設に伴い実施した発掘調査の約 350m²が含まれる。調査期間は 1987 年 5 月 11 日から 7 月 23 日で、対象面積 1682m²のうち 270m²を調査した。

遺構 調査は、近世後期の蛤御門の変に伴う火災の焼土層を重機で除去した後に開始した。江戸時代の遺構には井戸・土塋などがある。

SE 6・21・22 は円形石組井戸で、検出面から 1.5 m と比較的浅い。土塋には方形で石組みのものがある。桃山時代の遺構には井戸・土塋・柱穴・建物などがある。建物は土間敷に礎石があるもので、2 間×2 間分を検出したが規模は不明である。井戸は合計 9 基検出し、調査区全域に分布している。SE 100・105 は掘形が円形で素掘りである。SE 90 は方形の石組みで一辺 1.5 m と規模が大きい。この時代の井戸は、近世の井戸に比べ深く、検出面から 3 m を越える。土塋には SK 11・70・76 などがあり、SK 70 は長辺 2.3 m、短辺 1.9 m、深さ 2.2 m 前後と規模が大きく、多量の土器・炭・釘などが含まれていた。

遺物 遺構の中心は 16 世紀後半から 17 世紀初頭のもので、出土遺物の大半もこの時代のものである。最古の遺物は暗茶褐色泥砂層から出土した 7 世紀前半代の師楽式系の製塩土器である。この層からは当該時期の須恵器は出土していないが、平安時代及び中世の包含層からは出土した。

平安時代前期・中期の遺物は、中御門大路の路面から出土したもので、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがあるが細片である。平安時代後期から鎌倉時代の遺物は土塋や柱穴から少量出土している。

室町時代の遺物は、前半期のものが土塋などから出土したが量は少ない。室町時代末（16 世紀後半）の遺物は、SK 70 A、SE 24・42・65・100・105・235 などから土師器、中国陶磁器染付、備前鉢、瀬戸・美濃窯の天目碗・黄瀬戸皿、志野の碗・皿、織部の碗・皿、楽焼碗などが出土した。国産陶器では天目碗・向付などが比較的多い。近世前半期の遺構は数が

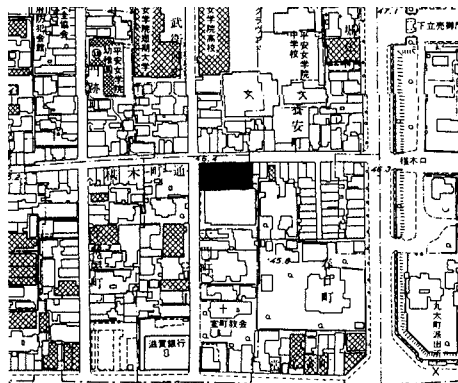


図 1 調査位置図 (1:5000)

少なく、井戸・小規模な土壙などがあり、土師器、国産陶器・伊万里・赤絵、瓦などが少量出土した。室町時代の遺物は相互に接合するものがあり、同時期に埋没している。

木製品では蒔絵の漆器が出土している。石製品では石仏が3点、墓石が1点出土している。金属製品では「天下一」銘の銅鏡、長さ2～3cmの鉄釘が多量に出土している。また、室町時代後期の土壙SK 70からは魚骨・鱗、鳥骨などが出土した。

小結 烏丸線遺跡調査会による烏丸通り榎木町付近では旧二条城時代の東西方向の堀が検出されており、榎木町通りが堀状遺構と重なっていると推定されていた。今回の調査はこの堀の延長を確認することを第一の目的とした。また上記の堀以外にも昭和55年度に今回の調査地の南で体育館新築に伴う発掘調査が実施され、幅5mの東西方向の溝が検出された。今回の調査では、これら旧二条城に係る遺構は未検出であるが、桃山時代を中心とする多数の井戸・掘立柱建物などを検出した。桃山時代を前後する時代の井戸は、深さが地表面から4～5mと深く、2～3mの近世井戸とは大きく異なる。これは旧二条城の建設・修築時に大規模な堀が周辺地域に掘られ、一時的に地下水位が下がった結果、井戸を深く掘った可能性がある。井戸の多くは石組みではなく素掘りで、円形のプランから桶組みの枠と推定できる。ただ、SE 24・100などでは井戸内から1m前後の平坦な石が出土し、礎石建物の礎石を井戸内に廃棄したものと推定した。



図2 「天下一」銘銅鏡

烏丸通り榎木町で検出した旧二条城関係の堀の検出を主要な目的としたが、対象遺構は検出できなかった。しかし、桃山時代を中心とする井戸・土壙・掘立柱建物などを多数検出した。その他、室町時代後半の池状遺構、平安時代前・中期の中御門大路の路面などを検出したが、側溝は検出できなかった。

(百瀬正恒・本 弥八郎)

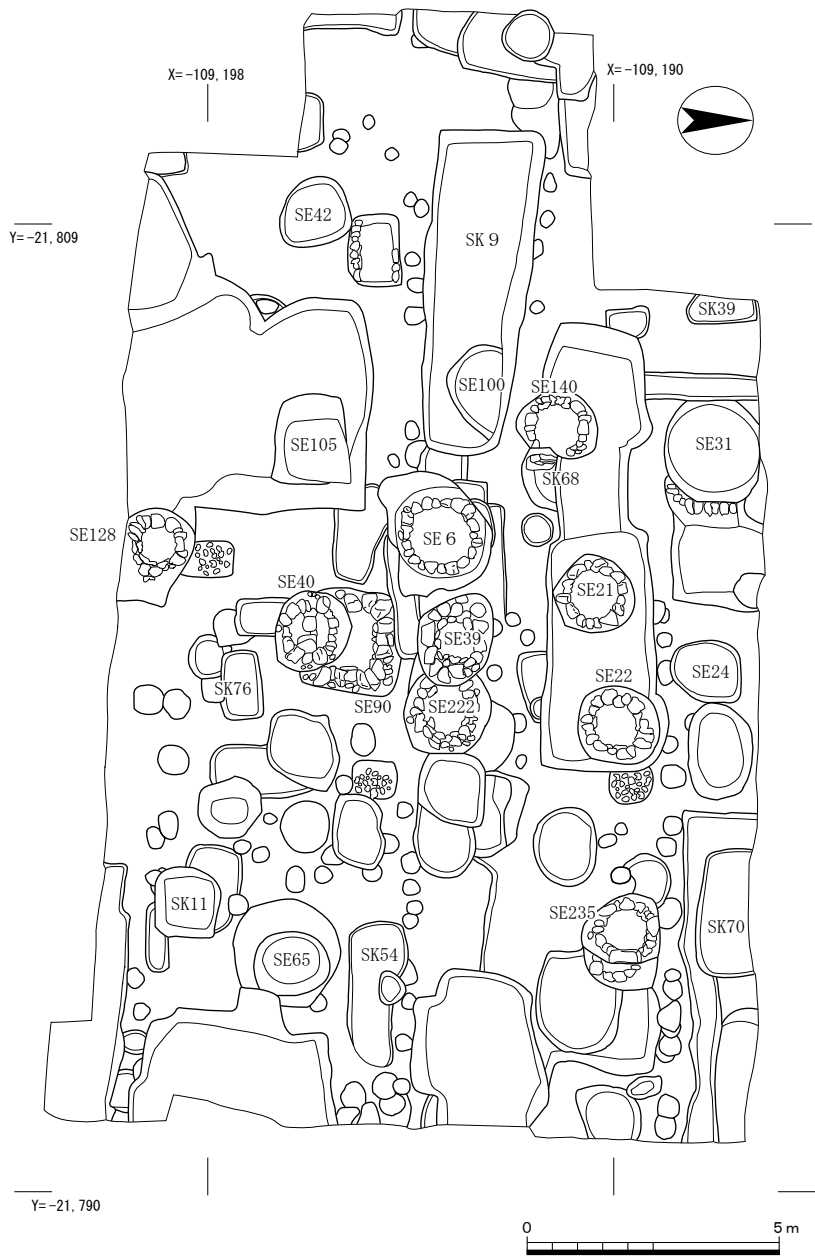


図3 遺構実測図 (1 : 150)

9 平安京左京三条四坊（図版 13～18）

経過 この調査は、中京区三条麩屋町東入弁慶石町に所在する店舗の新築工事に伴って実施した。調査地は、左京三条四坊十三町南端のほぼ中央に位置し、三条大路に接していることから、これらに関連する遺構・遺物の検出が予想された。また当該地は、文献史料に見える藤原家保の三条京極第に相当するとも言われていることから、これらに関連する遺構・遺物の存在も予想された。まず、遺跡の有無を確認するために、試掘トレンチを2箇所設置



図1 調査位置図 (1:5000)

した。その結果、平安時代後期から江戸時代までの包含層が良好な状態で残っていることが判明した。以上のことから、調査対象は工事範囲全域であるが、敷地の東半は既存建物の基礎などにより破壊が著しいことから、調査区は西半部に設置した。

遺構 調査区の基本層序は、三条大路路面部と宅地部分では異なる。路面部は、現代までの整地層が17層以上認められ、宅地部分では既存建物の整地層10cm、近代整地層35cm、江戸時代の整地層・焼土層70cm、桃山時代の整地層10cm、南北朝から室町時代の包含層50cm、鎌倉時代・平安時代の包含層がそれぞれ15cmで、それ以下は暗褐色砂礫と砂の互層となり、古墳時代の遺物を含む流路となる。

検出した遺構群は、平安時代から江戸時代中期までに至るもので、総数386基を数える。それらは、群として平安時代中期から後期、鎌倉時代から室町時代前半、安土桃山時代から江戸時代初期の3時期に大きく分かれる。いずれも平安京の宅地に関連したものであるが、その中でも安土桃山時代以降のものは、規模・構造ともに異なる。以下、各時期の遺構群について概略する。

① 平安時代中期から後期 主要なものとして、三条大路路面、それに接した門の一部と考えられる礎石列、そのすぐ北側に三条大路北築地内溝と考えられる東西溝がある。門は、後世の遺構に切られており規模や構造は不明である。宅地内では土器溜・土壙などを検出したが、それ以外には顕著な遺構を認めることができなかった。

② 鎌倉時代前半から室町時代前半 主要なものとして、三条大路路面、それに接した門

に伴う礎石列、三条大路北築地内溝など平安時代後期の遺構を踏襲している。その中で礎石列の周辺には、焼土層の分布が認められることから、火災にあったと考えられる。また、平安時代のものとは異なることは、門の北側一面に多数の柱穴が認められ、かつ重複している。柱穴は、調査区より更に周辺に広がっているようで、規模等は不明である。また建物に附属して、埋甕の施設も2箇所確認した。甕はいずれも常滑焼で、正置して据えられている。このほか調査区の東南隅に土器溜2箇所を確認した。

③ 安土桃山時代から江戸時代初期 主要なものは、三条大路与北側溝、それに接した町屋敷からなる。町屋敷は、通り庭を伴いそれに接して部屋と釜屋があり、その北側には裏庭がある。そこは庭石・井戸・方形石室・土壇などの施設で構成されている。町屋と裏庭の土間境は、掘込地業を伴う石積施設があり、それに沿って排水用の石組溝や椀形・瓦製土管列などがある。これらは、整地の範囲など同一の屋敷内のものと考えられることから、屋敷の規模は間口20m以上、奥行き22m以上の規模が想定できる。多量の桃山茶陶が出土した3基の大規模土壇は、いずれも裏庭にて検出した。

遺物 遺物は整理箱で230箱出土し、古墳時代から江戸時代までの長期にわたっている。その中でも安土桃山時代から江戸時代初期にかけての遺物が120箱強と全出土量の半数以上を占める。その内訳は、土器類が圧倒的多数で、特に茶の湯に関連するものが半数以上を占めることが際だった特徴といえる。以下、時代ごとに主要な遺物について概略する。

① 平安時代中期から後期 この時代のものには、土器類と瓦類がある。土器類は調査区の南端東西溝からまとまって出土し、その中には近江産緑釉陶器大椀なども含まれる。瓦類は調査区西北部の土壇からまとまって出土し、その周辺部を含めて軒丸瓦12点・軒平瓦7点が認められる。

② 平安時代末から室町時代 この時代の主要なものは、大部分が土器類で占められる。土器類はほとんどが土師器であるが、その中で2箇所の埋甕施設から常滑焼の甕が完形に近い状態で出土した。このほか、北宋から元に至る輸入銭が90枚ほど出土した。

③ 安土桃山時代から江戸時代初期 この時代のもものが全出土量の半数以上を占める。しかも茶の湯に関するものが大部分である。それらは、土壇などから出土した。内訳は、瀬戸、美濃、信楽、備前、丹波、唐津などの製品と共に朝鮮王朝白磁平茶碗、明染付などがある。茶の湯以外のものでは、ガラス製品、志野絵付の破片を利用したおはじき、犬人形などの玩具も認められる。

小結 今回の調査により左京三条四坊十三町南端の状況を平安時代から江戸時代までたど

ることができた。特に安土桃山時代の町屋敷に関する遺構群は、比較的良好な保存状態で検出できたことから、この時期の京都の町屋を理解する上で貴重な資料となった。またその成立が16世紀後半まで遡ることから、秀吉による天正の地割施行直後に建設された町屋敷であった可能性が高い。しかも裏庭から出土した多量の茶陶類には瀬戸黒、志野、備前の茶陶類を始め、向付・水差・花生など多種に昇り、桃山時代の茶陶研究上、貴重な資料といえる。また当屋敷の性格を知る上でも貴重な手懸かりである。 (堀内明博)

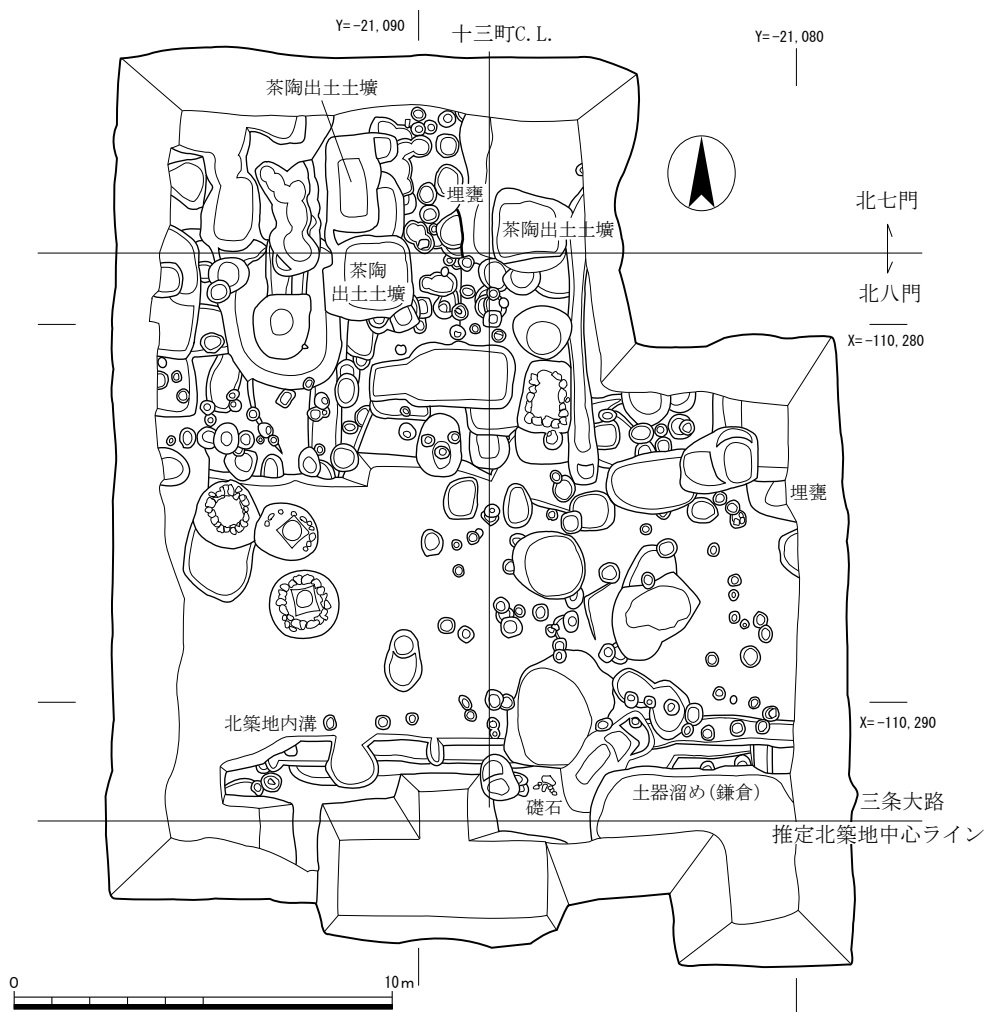


図2 遺構実測図 (1 : 200)

10 平安京左京四条三坊（図版19・20）

経過 調査対象地は、平安京左京四条三坊九町の中心部を含む北半の中央付近に位置する。同九町は、北側を三条大路、西側を室町小路、南側を六角小路、東側を烏丸小路により四方を画された一町である。平安時代のそれぞれの大路・小路は同じ名称の通りとして残る現在の街路とはほぼ重なって位置しており、ここには平安時代の道路と町割りがほぼそのままの形で生き続けている。

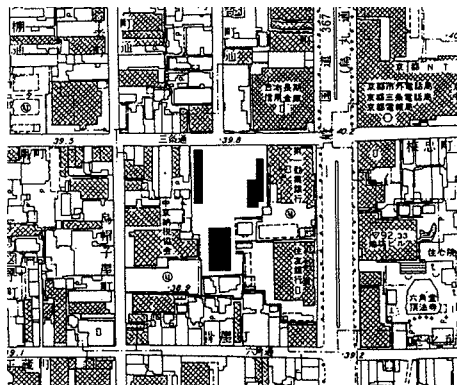


図1 調査位置図 (1:5000)

当地において千總本社ビルの建て替え工事が計画され、それに伴い1987年9月2日に当研究所が試掘調査を行った。この結果、平安時代の遺物包含層及び遺構が比較的良好な状態で遺存していることが明らかになった。これにより発掘調査を実施することになり、同年の11月初頭から調査を開始した。調査は翌年3月中旬まで継続し約4箇月半の期間を要して終了した。

調査対象地は3300㎡を越えており市街地中心部としては非常に広いが、旧社屋ビルの基礎部分や現状のままで残されている庭を除くと調査可能地域はかなり限定されたものとなる。この調査可能地域にそれぞれの調査目的に沿った3箇所の調査区（1～3区）を設定した。

調査の実施によって、平安時代から江戸時代に至る各時代の多様な遺構・遺物を多数検出し大きな成果を得た。以下の項で調査成果の概略を記す。

遺構 3区の平安時代中期後半から後期の遺構面において、島を伴う遣水（SG1）と大小の景石で構成されている庭園、その南側で建物（SB1）及びその建物から北へ延びる渡殿の柱穴列とみられる遺構群を検出した。

遣水は最も広い部分で南北の幅6.5m、深さ3～40cmを測る。中央部に長軸約4m、短軸約2mの島が設置されている。遣水は側壁部から底部及び島の周縁部まで全面に拳大の玉石を丁寧に敷き詰めて形成していた。玉石の間には白砂が入れられており、この状態で遣水は生きていたとみられる。青を基調とする礫群、目地が白でその上を清水が流れる図は、極めて清涼感のある景色を作り出していたことだろう。遣水としているが、その規模や底部の平坦さからみて浅い池状を呈していたとみられる。検出部分はこの小池と小島を中心とした

半独立的な小園池として形成されていた地域とみられる。全体としては東西の未調査区域に細くなって延びる遣水の延長部を想定している。水の流れは検出部では東から西であるが基本的には北から南であろう。

景石は北側陸部に5個、遣水内に2個、島の上に1個を検出した。景石7を除き、他は原位置を保っている。景石7は、後世に北側にうがった穴に落とし込まれており、元の状態を失っている。本来は立石であったと思われる。島の上に据えられた景石8はみる角度によって亀を思わせる姿を呈する良石である。この石の南側に根石が残っているがその上には景石8と対を為す石が据えられていたとみている。

建物（SB1）は6基の柱穴（P4～9）を検出しているが、全体像を知るには調査区の拡大が必要である。東西の柱間は24 m、南北は3.6 mを測る。柱列の南北ラインはほぼ真北を向く。身舎の軸方向は不明であるがこの検出部分については建物の北辺部と理解している。

ピット1～3はSB1から北側へ遣水部分をわたる渡殿の東側の柱列とみている。列の方位はSB1の南北ラインと合っている。水と絡む柱であるためか、柱周りには粘土が入れられておりSB1の柱穴とは工法が変えられている。この渡殿が取り付く北側の建物については旧ビルの基礎などにより検出できなかった。

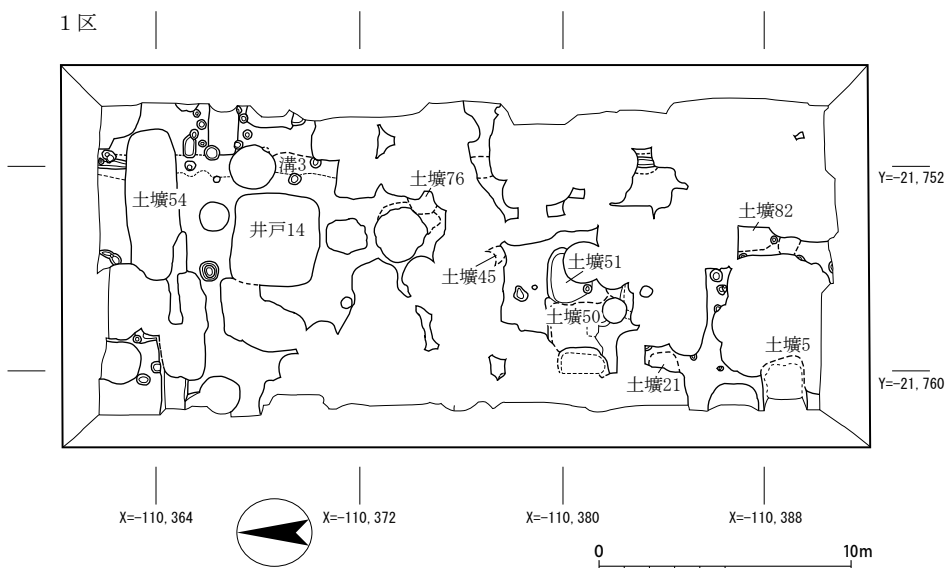


図2 1区遺構実測図（1：300）

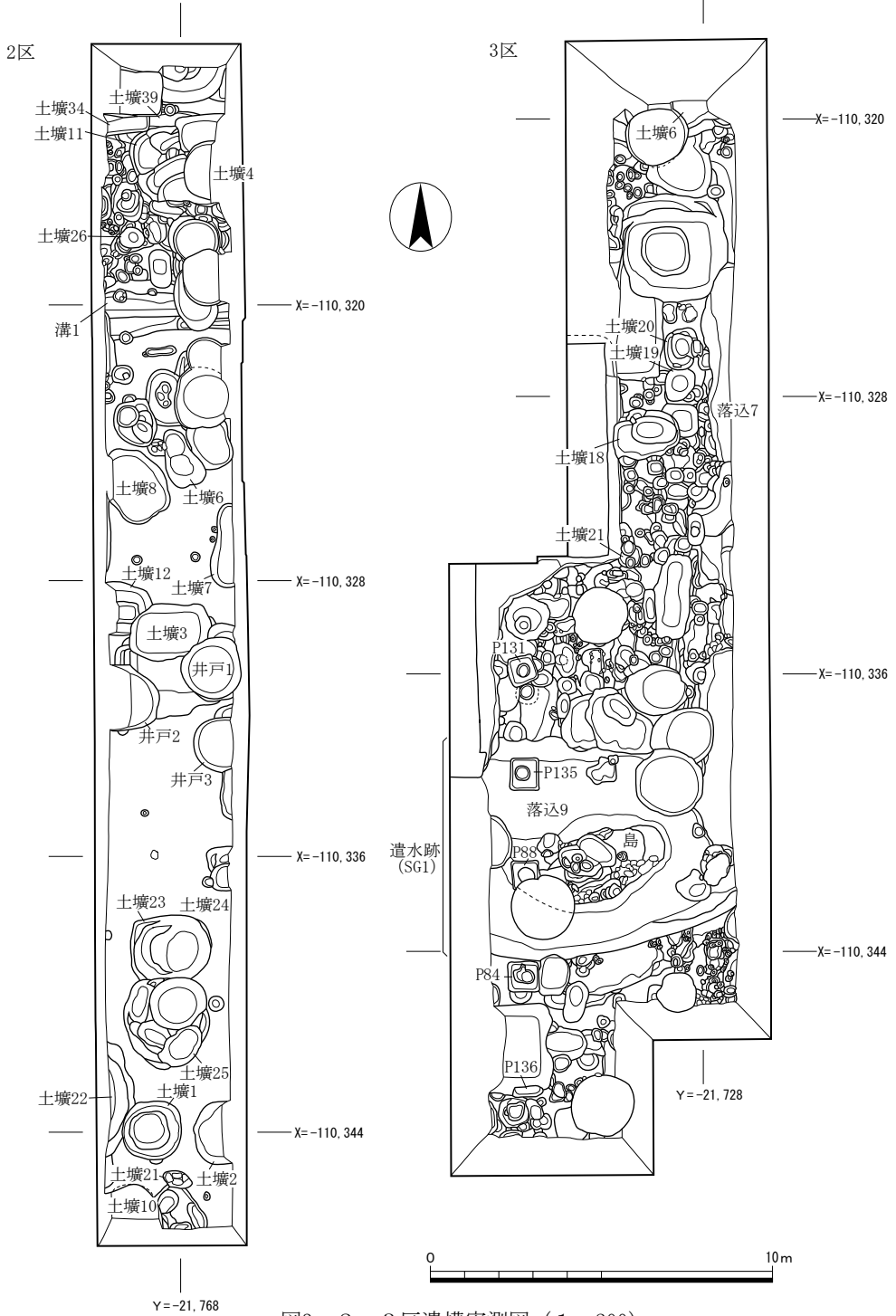


図3 2・3区遺構実測図(1:200)

落込7とした遺構は東壁沿いに調査区北部から遣水までを南北に走る溝状を呈する遺構である。この遺構の底部は南に向かって緩く傾斜し、遣水の玉石を取り去った底部へとつながってゆく。この遺構は出土遺物からみて、平安時代中期後半のうちに埋没してその機能を失っていたとみられる。検出状態や関連状況からみて玉石敷きの遣水の前段階に素掘りの遣水が存在していた可能性が大きいと考えている。景石は一部がこの段階ですでに設置されていた可能性もある。

遣水の埋土の上には焼土層が堆積しているが、この焼土が入れられた時点では庭はほぼ完全に埋没してしまっている。庭園と建物は、出土遺物や層位関係から平安時代中期後半代から後期前葉頃に築造され、同後期の12世紀前半中にはその姿を大きく変えて次代の邸宅が形成されるものと推定している。この邸宅も焼土層からみると平安時代後期のうちに焼亡してしまった可能性が大きい。

1区では、平安時代中～後期と判断している遺構面において調査区北辺部で径60～70cmと比較的大きな柱穴を数基検出した。また鎌倉時代に埋没したと考えている井戸14を調査区北半部の中央付近で検出した。掘形は1辺2.9～3mの方形で、井筒は1辺1mの方形縦板組である。しかるべき水準の邸宅に伴う井戸と思われる。

2区では北辺部において平安時代の三条大路南側溝2条（調査時、土壙34・39の名称で扱った）と、犬走と築地幅ほどの間隔をおいて並走する宅地内側の溝とみられる遺構を1条検出した。三条大路南側溝とみられる遺構は、両溝とも平安時代中期に比定できる遺物が出土しているが、土壙39の方が一時期古く、中期前半代には埋没している。土壙34は中期後半代に機能しておりその同時期中に埋没している。宅地内の溝は土壙39と並存していたと考えておりほぼ同時期に埋没している。対応する路面などの遺構はほとんど検出できなかった。

平安時代前期に比定できる遺構はごく少ない。遺構数が増加するのは平安時代後半代に入ってからであり、特に平安時代後期に比定できる遺構の増加は著しいものがある。この高密度状況は遺構の内容や性格の変化を伴いながら中世・近世・近代へと途切れることなく継続している。

遺物 平安時代前期から中期の遺物出土量は相対的には少ないが、新しい時代のほとんどの地層や遺構から少しずつではあるが出土している。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦など、京域内で一般的に出土するものが主であるが、中国から輸入された越州窯系青磁碗・邢州窯系白磁碗や、中でも出土例の少ない絞胎陶器碗など当時では希少な高級品もみられる。

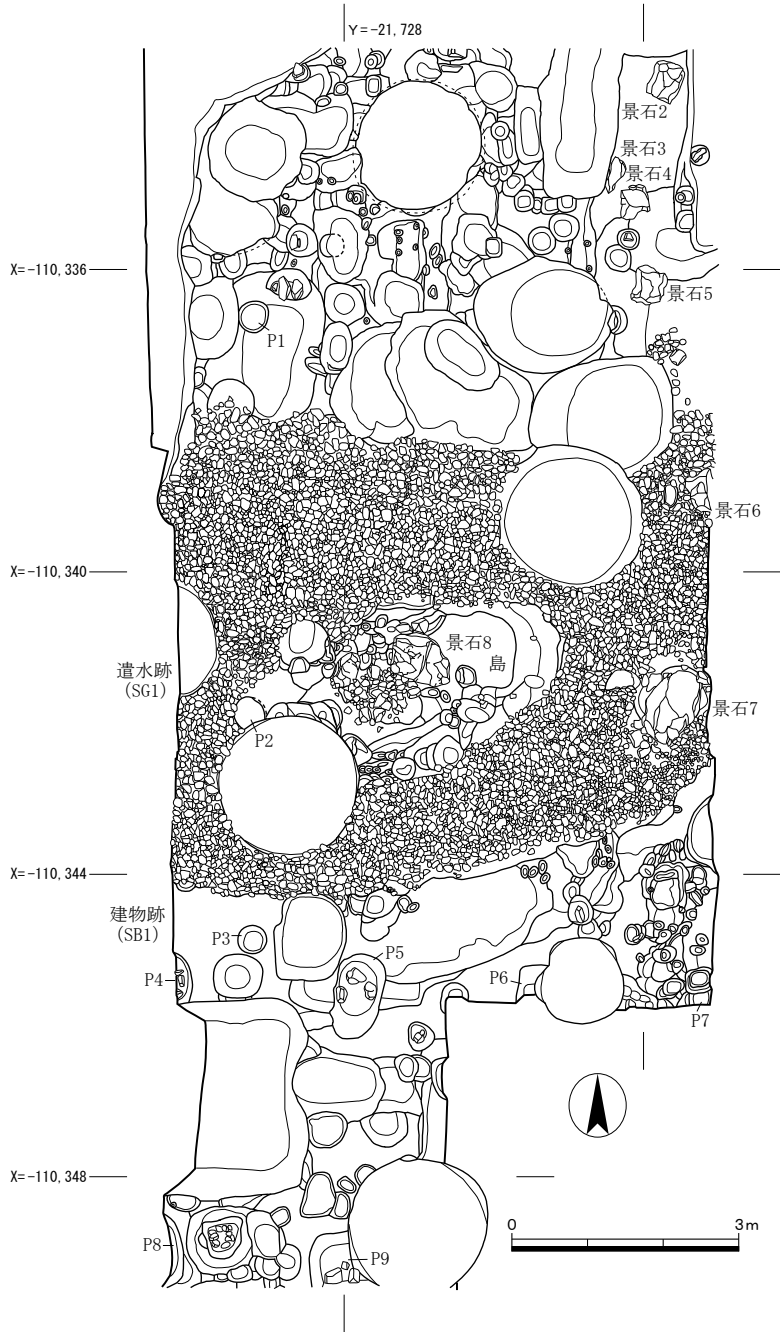


图4 3区SG1実测图(1:100)

平安時代中期後半代から後期には遺物出土量が急激に増加する。3区を中心に調査区の全域から土器・陶磁器・瓦類が多量に出土しており、一括出土資料も多く含まれている。

3区の落込7から多量の土師器を中心とする遺物が出土している。これらの土師器は平安時代中期後半代の半ば過ぎ（11世紀後半）に比定されると判断している。遣水の堆積土や埋土からは土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などが出土している。平安時代中期末頃に比定されるものが中心である。しかし、平安時代後期の土師器が少量ではあるが確実に出土している。遣水直上の焼土層からは、平瓦・丸瓦・軒瓦など多量の焼け瓦と共に土師器皿、瓦器椀、輸入陶磁器椀・壺など二次的に火を受けた遺物が出土している。輸入陶磁器の壺には白地黒掻き落とし牡丹文様を持つものがある。これは宋代の河北省磁州窯の典型といえるものである。類品の出土例はごく少なく貴重な資料といえる。この焼土層の出土遺物は平安時代後期のうち12世紀前半代に比定できるものが中心である。

鎌倉時代以降の各時代とも切れ目なく遺物の出土量は多い。当調査地では一括出土した良好な状態の資料を含め、各時代に比定できる遺物が多数出土している。近世に入っても遺物出土量の増加傾向は継続している。遺物の出土状況からも、当地が平安京成立以降各時代を通じて常に都市域であった様相を窺うことができる。

小結 平安時代の左京四条三坊九町は、中期頃まではどのように利用されていたのかは文献史料によっても不鮮明である。後期に入ると同町が三条棧敷殿として利用され、後に左大臣まで昇り権勢を振るう藤原実能の邸宅が当地にあったことが『中右記』、『長秋記』などの文献から窺うことができる。同九町の邸宅は藤原宗忠の日記『中右記』の天永三年（1112）12月19日の条にある「内御乳母二位初渡三条宅西對云々、……」を初見とする研究がある。この御乳母は堀河・鳥羽両天皇の乳母である藤原光子であり、また光子は実能の実母である。『中右記』大治二年（1127）6月14日の条には「……両院（白河法皇、鳥羽上皇）、按察使中納言の三条室町棧敷において御み物と云々……」とある。「公卿補任」によれば大治二年に於ける按察使は当時権中納言従三位の藤原顕隆であり、棧敷の造られた邸宅の主であったと理解される。顕隆は光子の甥にあたり、実能の室の父であり実能の義父である。2年後の大治四年（1129）の段階では同町にあった邸宅はすでに実能の手にわたっていたようだ。源師時の日記『長秋記』の大治四年3月9日の条に「三院御覽実能卿家事、九日丁亥 三院同車御覽左武衛宿所、池形風流、後亦任心、鹿立驛驢、河遊鴛鴦、一廻後還御……」という文章が見えるが、これは白河法皇、鳥羽上皇、待賢門院の三院が実能卿の邸宅を訪問した際同邸の園池について記されたものと解せる。実能はこの直後に鳥羽上皇へ同邸宅を献上しており、

以降上西門院や七条院の御所として鎌倉時代の初め頃まで使用されていたことが知られている。鎌倉時代以降には四条通と室町通を軸に中世都市として発展した下京の一画を占め、商家・町屋が建ち並ぶようだ。

三条大路を挟み当町の北側に位置する十二町とその東隣の十三町にはそれぞれ三条西殿、三条東殿と称する一町規模の邸宅が建ち並んでいたと推定されている。三条西殿は白河天皇以後順徳天皇に至るまで多くの天皇が里内裏の一つとして用い三条烏丸御所あるいは西三条内裏とも称されていた。一方の三条東殿も白河法皇、鳥羽上皇が院御所としており、東三条内裏とも称される。このように当地を含む三条烏丸周辺は平安時代後期から鎌倉時代初頭までのいわゆる院政期には烏丸五条周辺、鴨東の白河街区、鳥羽離宮と並ぶ当時の政治・文化の中心の一つであった。

今回、3区で検出した庭園と建物は寝殿造りの邸宅の一画を為すものとみている。邸宅規模としては一町の大きさが考えられ、今回の検出部分は一町の4分の1の北東ブロック中央付近やや北辺に位置している。このような位置関係から建物（SB1）は東の対と考え検出部分はその北辺部とみている。SB1から北へ延びる渡殿は北あるいは東北の対へ取り付くものであろう。庭の造作はこれらの建物からの観覧を意図したものと思われ、この小地域で一つのまとまりを持つ形を呈していたものであろう。この庭園と建物と成立年代、存続期間などを発掘資料の整理研究を進める中で厳密に検証する必要はあるが、庭の風情をめでられた藤原実能邸の一画であった可能性が大きいと考える。

寝殿造りは、以外と具体的な資料が少なくその実態は不鮮明な部分が多い。京域内での発掘資料もごく少なく、明確なものとしては堀河院・高陽院の2例にとどまる。どちらも園池を検出しているが建物との関係は現在の資料では明らかではない。また、両園池の様相は今回のものと異なる例である。そのような中で寝殿造りとみられる邸宅の一端を左京の中心地での調査によって検出できたことの意義は大きい。加えてこの邸宅が文献と直接結びつく資料とみられる点からもその重要性は高いといえるだろう。

補遺

岩手県の平泉に平安時代後期の長治二年（1105）に藤原基衡が建立した毛越寺という寺院が現存している。毛越寺の建物及び庭園の埋没部分は現在発掘調査が進められており、調査を完了した部分は復原保存され一般に公開されている。この寺院の庭園は現在では浄土庭園と称され平安時代後期の姿を残す数少ない名園として高い評価を受けている。

毛越寺の庭園は円隆寺、嘉祥寺と称された主要伽藍の南側前面に造られた大きな園池（大泉池）を中心とした庭園である。園池には橋を架けられた中島・出島・築山・荒磯・砂州・入江・玉石を敷き詰められた洲浜などが造られ、各所に立石を含む大小の景石が配置されそれらは非常に手の込んだ作庭がなされている。周辺樹木と共に変化に富んだ庭の景趣を作り出している。この園池の水は北側の中心的建物である嘉祥寺の東横脇を走る遣水によって導水され池の北東部に造られた落口から池にそそぎ込む。この遣水とその周辺も庭園の一部として丁寧な作庭されている。寺の裏山斜面に掘られた小池に溜められた湧水が細い溝を通して遣水の最奥部に導かれる。この奥部は遣水の中でも最も幅広く中央に中洲風の小島が造られ小池状を呈している。遣水のそこから先は狭くなり何度か曲流し小橋をくぐって池岸の落口へ至る。遣水は奥の小島を含め周辺から底部まで丁寧に玉石が敷き詰められ各所に景石を置き、流れの中には小さな石の島や段差部を設けるなど趣向を凝らした造りである。

今回、左京四条三坊で発見した庭園の一画は、この毛越寺庭園遣水奥部の小島のある小池状を呈する部分と非常によく似た景観を呈している。小島・小池の長軸方向は90°異なるが、ほとんど同様の作庭意図が看取できる。時代的にはどちらの庭園が先に造られたかは現時点では断言し難いが、同時代に一時期並存していたものとみられる。毛越寺の庭園は平安京に存在していたこのような庭園をモデルにして作庭されたことは間違いないだろう。なお、研究者によれば、毛越寺の庭園は鴨東の白河街区にあった六勝寺の筆頭寺院である法勝寺の庭園をモデルにしたとする説がある。しかし、法勝寺庭園の実体は発掘調査も進展しておらず、不明確な状態であり、今の所実証的な検討は不可能である。

(平安京調査会 小森俊寛・上村憲章)

11 平安京左京五条一坊

経過 郁文中学校の校舎建て替えに伴い、中庭を調査した。調査区の東端付近に大宮大路西側溝の検出が予想された。約130mを昭和62年6月13日から7月13日まで調査した。結果、平安時代の遺構は、井戸のみであった。調査区の東半分は、戦国時代頃の土取りによって大きく破壊を受け、大宮大路西側溝は発見できなかった。

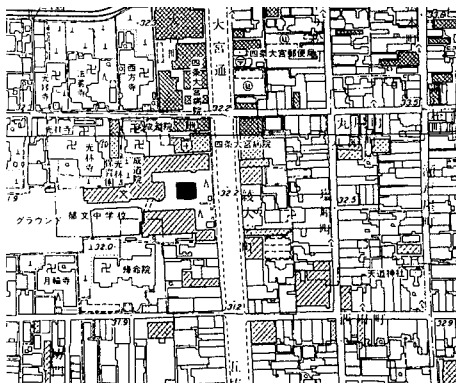


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 平安時代の遺構は井戸3基のみである。いずれも、1辺90cm前後の井戸枠の痕跡

を認め、時期も末期である。戦国時代頃の土取穴は、当初、大宮大路に沿う濠と誤って調査したが、最下部まで土層が乱れており、土取穴と判断した。

このほか、桃山時代から江戸時代後期に至る各時期の土壇・柱穴を認めたが、まとまりはない。

小結 平安時代の遺構は井戸のみであった。戦国時代期に濠と見まちがう土取穴があり、注意を要する。(梅川光隆)

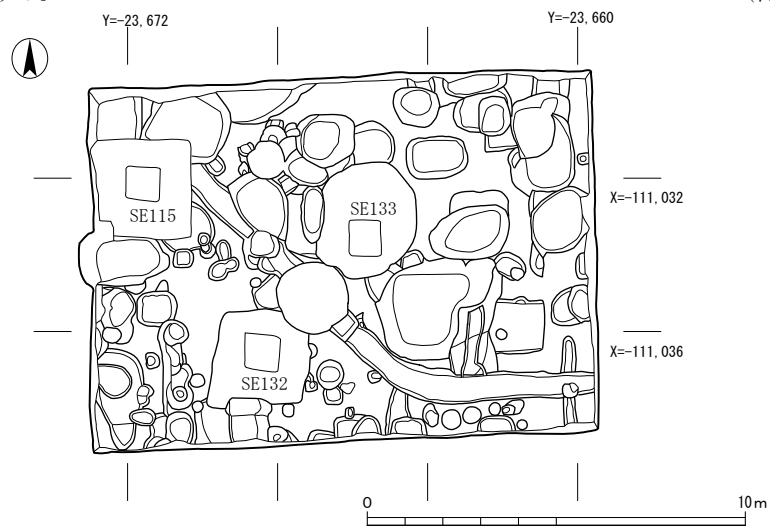


図2 遺構実測図 (1:200)

12 平安京左京五条四坊（図版 21）

経過 調査地は、平安京左京五条四坊八町における北西ブロックの南東部付近に位置する。この五条四坊における発掘調査は少なく、今回の調査は同坊に対しては試掘調査的な意味合いを持つ。しかし、調査期間等の問題があり調査は中世以前に絞ってしかなし得なかった。良好な条件下での調査ではなかったが、発掘調査を実施したことによって当地域の平安京成立以降の歴史の変遷及び平安京以前の遺跡の一端を明らかにする上での貴重な資料を得ることができた。

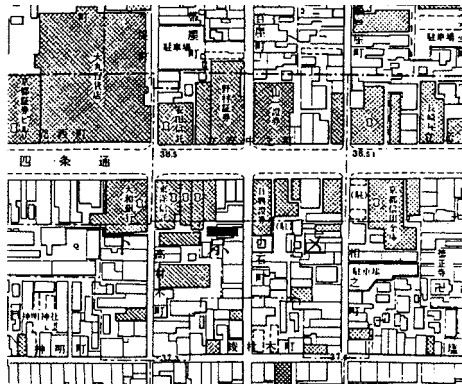


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 弥生時代から古墳時代の遺構は、明確なものを検出していないが、畿内第V様式の弥生土器及び庄内式の土師器などが一定量出土する遺物包含層を確認している。

飛鳥時代の竪穴住居は、平安時代以降の新しい時期の遺構に削除されている部分が多く不明瞭な点もあるが検出部分からみて4.5 m以上の一辺を持つ方形の竪穴住居である。床面からは、焼土の広がりを検出している部分もあり、また遺構内堆積土には、土器と共に焼土・炭片などが含まれていた。烏丸綾小路遺跡内での同期の遺構検出は今回が最初であるが、平安京左京と重なる地域でも初例と思われる。

平安京成立以降は、遺構・遺物の出土状態からみると稠密な都市化はやや遅れていた地域と考えられる。性格が推定できる明確な遺構の検出は、平安時代中期後葉から後期に入って以降である。この地で遺構数が急増し群で展開を示す段階は鎌倉時代も末期になってからである。以降は徐々に周辺地的様相から脱却し、中・近世都市の一画を占める地となる。

弥生土器は甕・壺・高杯が出土しており、畿内第V様式に比定できる資料とみている。古墳時代の遺物には土師器甕・壺・高杯（庄内・布留式の両者含む）、須恵器杯身・蓋・甕・壺がみられる。飛鳥時代の遺物は、1号住居などから土師器長甕・甕・杯、須恵器杯・甕などが出土している。鎌倉時代以前の遺物は、相対的に出土量は少ないが、飛鳥時代のものなど注目すべき資料が遺構に伴って出土している点は重要である。

平安時代の遺物は、緑釉陶器や灰釉陶器、黒色土器など前半代に位置付けられる土器・陶

器類及び後半代の土師器、須恵器、瓦類などが出土している。まとめて出土した遺物もあるが、出土量は少なく主に新しい時期の層・遺構への混入品として出土している。

鎌倉時代末期以降から室町時代には、前代までに比較して遺物の出土量が飛躍的に増加し、種類・器種とも豊富となる。この状況は、この地域の中世以降の変化を端的に示している。この時期の遺物には遺構からまとめて出土した良好な一括資料が多く、中世遺物の研究の好資料となるだろう。

小結 今回実施した発掘調査によって平安京左京五条四坊及びそれと重複する中世以降の京都の一端を把握することができた。烏丸四条付近の土層・遺構の在存状況とは異なるが、残存する遺構・遺物は近似した様相を示している。常に中心地域であったところとの微妙な差異が検証できれば、都市域の発展と変遷へアプローチできるだろう。

平安京の下層において弥生時代・古墳時代・飛鳥時代の遺物や遺構を検出したが、これからの新知見を加えた資料は烏丸綾小路遺跡の実像を解明する上で必要な資料となるだろう。どんな状況下での発掘調査においても、きっちりとした方法で調査を実施すれば成果は必ず上がるが、調査条件の改善と向上はより大きな成果を生むであろう。足下の歴史的遺産を破壊する権利が、現世代の人間にあるわけではない。(平安京調査会 小森俊寛)

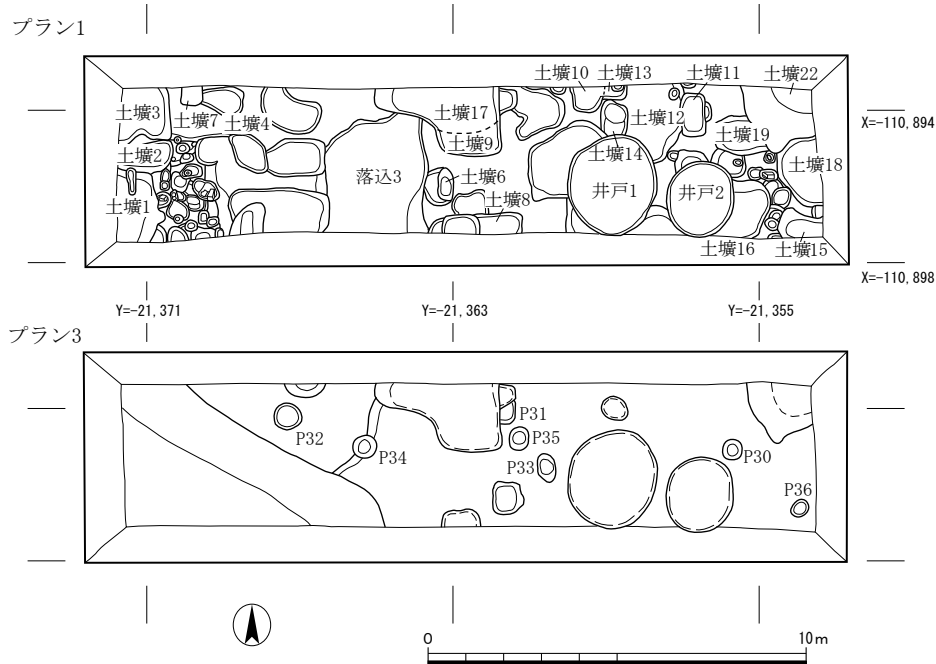


図2 遺構実測図 (1 : 200)

13 平安京左京六条二坊（図版 22）

経過 堀川共同溝の建設に伴う事前の発掘調査であり今年度で三年目となる。この工事の関連調査は工事予定の関係で、今年度で一旦中断される。今年度の工事予定区間は、堀川通花屋町上ル以北から五条通交差点部までであるが、工区北半部の五条通近くから同交差点付近は既埋設管による掘削部分も多く、また交通事情などの問題もあり調査を断念した。予定工区南半（堀川西歩道および同脇辺）に No.14・15 トレンチの2箇所を調査区を設定し調査を実施した。

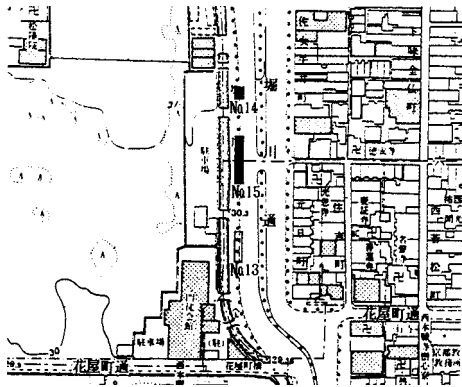


図1 調査位置図 (1:5000)

対象地区は平安京では堀川小路東半、六条大路を含む左京六条二坊十二町西端辺にあたる。発掘調査においても六条大路北側溝と路面及び堀川小路東側溝の検出を意図した。しかし予想外に堀川の川跡を調査区全面にわたって検出する結果となった。このため当初の調査目的は達成できなかったが、中・近世の堀川河道を確認できた点は成果といえる。

遺構・遺物 中世・近世の堀川は No.14・15 トレンチの幅いっぱい河道を検出している。堆積土最下層の砂礫層の出土遺物からみて中世には本調査地全体が河道内となっていたものと理解している。近世に入り江戸時代の前半には No.15 トレンチ南半で東肩部が調査区中央付近に新たに形成され、以降近代まで続く。しかし No.15 トレンチ北半～No.14 トレンチでは近代に入っても肩部は検出できなかった。江戸時代後期以降、六条通り以北については再度河道を東側に広げてその部分の川岸を何らかの施設（例えば船着き場）として利用していたものと考えている。六条通南側溝流入口付近から堀川の流れに直交する状態で西へ延びる杭列は、いわゆるしがらみと考えられるが、上述施設と関連するものの可能性も高い。

中世遺物は川堆積土の最下層部の砂礫層から少量出土したにとどまる。しかしこの部分の河道の形成時期を考える上で重要である。出土遺物の中心は江戸時代の土器・陶磁器類及び供伴出土した多量の木製品である。土器・陶磁器類は日常雑器を中心に比較的ポピュラーな様相を示している。木製品類も生活全般にわたる各種のものが多数出土している。中には漆塗りの仏具類など既出土資料例の少ないものも多く含まれている。近世の木製品資料は御土

居の堀や烏丸線関係の遺跡など、他の京城内の調査でも数多く出土した例が増加してはいるがまだまだ有機質資料の絶対数は少なく、その意味でも今回の木製品の多量出土は貴重なものである。

小結 今回実施した発掘調査によって、調査地全域が中世から近世にかけて堀川の河道と化していたことが明らかになった。しかし、当初の調査目的であった平安京関係の遺構・遺物は検出されなかった。理由はこの部分の平安京関係の遺構は、この中・近世の堀川移動によって、あるいは東側への移設工事によって完全に削平されてしまったことによると考えられる。重要な調査目的の一つは検出することはできなかったが、この付近については、中・近世の堀川が予想以上に東に位置していたことが明確となり、堆積状態からみて、水量も比較的豊富な状態で使用されていた可能性を把握できたことは有意義な成果といえる。京都における中・近世河川の水運利用などの研究は考古学的には進んでいないが、今調査成果を一つのきっかけとして今後は意図的に進めるべきであろう。

(平安京調査会 原山充志)

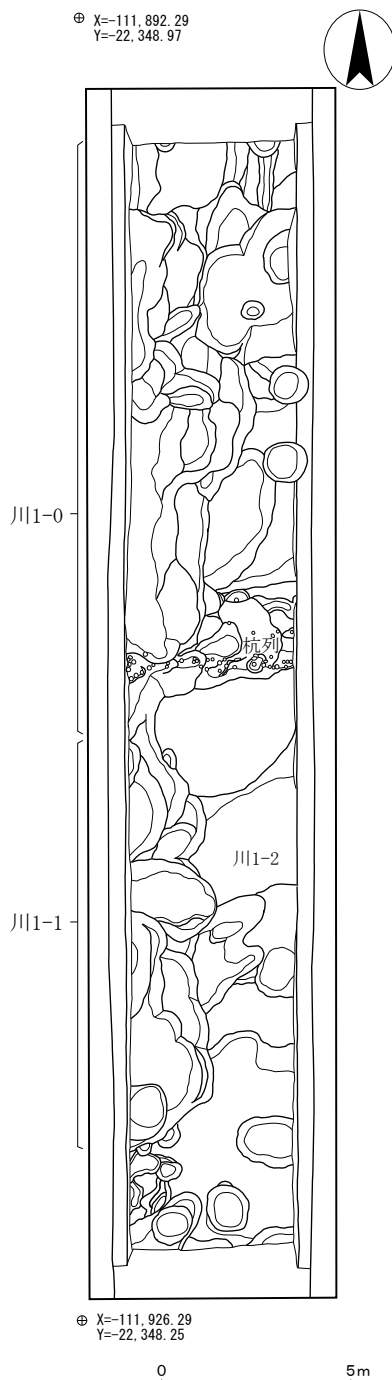


図2 No.15トレンチ遺構実測図 (1 : 200)

14 平安京左京六条三坊（図版 23）

経過 調査対象地は、平安京条坊復原モデルによれば、東洞院大路と六条坊門小路の両街路とその交差点の西側を含み、左京六条三坊十四町の北東部から同十五町南東部コーナー付近にまたがる敷地である。

十四・十五町は、文献史料的には平安時代の主要な邸宅などは知られていないが、この地域は烏丸小路・六条坊門小路の交差点あたりを中心に、白河上皇の院街が形成される地域として歴史的にはすでに知られたところである。

同町の隣接地には小六条院、六条内裏などが建ち並び、更にそれらの周辺には中院、六条院などもあり院政時代の政治の一大中心地となる。このようにみれば両町の文献の空白は考古資料によって埋めてゆく必要がある地域である。

しかし、当調査地の位置や範囲の関係から本調査にあたっては、平安時代の上記両街路及び交差点部が検出できるように考慮して調査区の設定を行った。その結果目的を達成できる成果をあげることができた。

遺構 南北通りである東洞院大路と東西通りの六条坊門小路の交差点部を含めて両路の各時代に機能していた路面と側溝群を検出した。

検出した六条坊門小路の最も古い側溝は、平安時代中期後半に比定できる。東洞院大路では同期の遺構は検出できなかった。調査区東壁沿いに走る平安時代後期に埋没する同大路側溝により路面西端部が削平されたか、あるいは同期の路面は調査区より東側に位置することによると考えている。以降の時代の東洞院大路は、平安時代後期に埋没して機能を停止する西側溝の上にまで広げて、あるいは道路全体が若干西側へ移設されて形成されている。大路についての築造状況は坊門小路と同様と推定できるが、今後の周辺調査に結論をゆづらなければならない点が多い。

平安時代中期以降から中世を通じて近世初頭までの間に比定できる道路関係の遺構は、東洞院大路の路面5枚、同西側溝2条。六条坊門小路の路面5枚、同北側溝4条、南側溝5条などである。平安時代以降の路面・側溝は少しずれたりしているが、平安時代の位置をほぼ

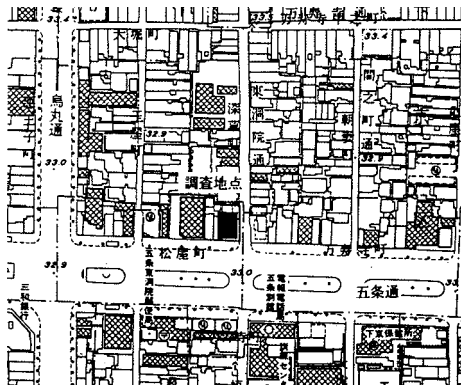


図1 調査位置図 (1:5000)

踏襲している。路面は積み上がり、側溝は近接する位置で重なり合って、幾度か再掘削されていた。このように平安時代に形成された道路は、近世初頭に大きく改変されるまで修築や再築を繰り返しながら連続して存在していたことが明らかになった。各期の路面は泥砂土と小礫の混じった土層によって形成されたものが基本であるが、両街路とも鎌倉時代から室町時代の路面は自然礫のかわりに花崗岩の小割礫を用いていた。このような例は左京の既調査例においても例がなく、検出状況は他の一般的な街路遺構と相当な差異がある。形成意図を解明する必要がある。しかし、単に端材を活用しただけという可能性もあり、多角度からの考察の必要な資料である。

両路交差点部の構造については、検出した各時代の小路側の両側溝は大路へ貫通していないといえる。大路側については、平安時代後期の西側溝は小路路面を切り込んで貫通していたが、室町時代の西側溝は路面を貫通しておらず、小路側溝へ接続すると思われる。これら

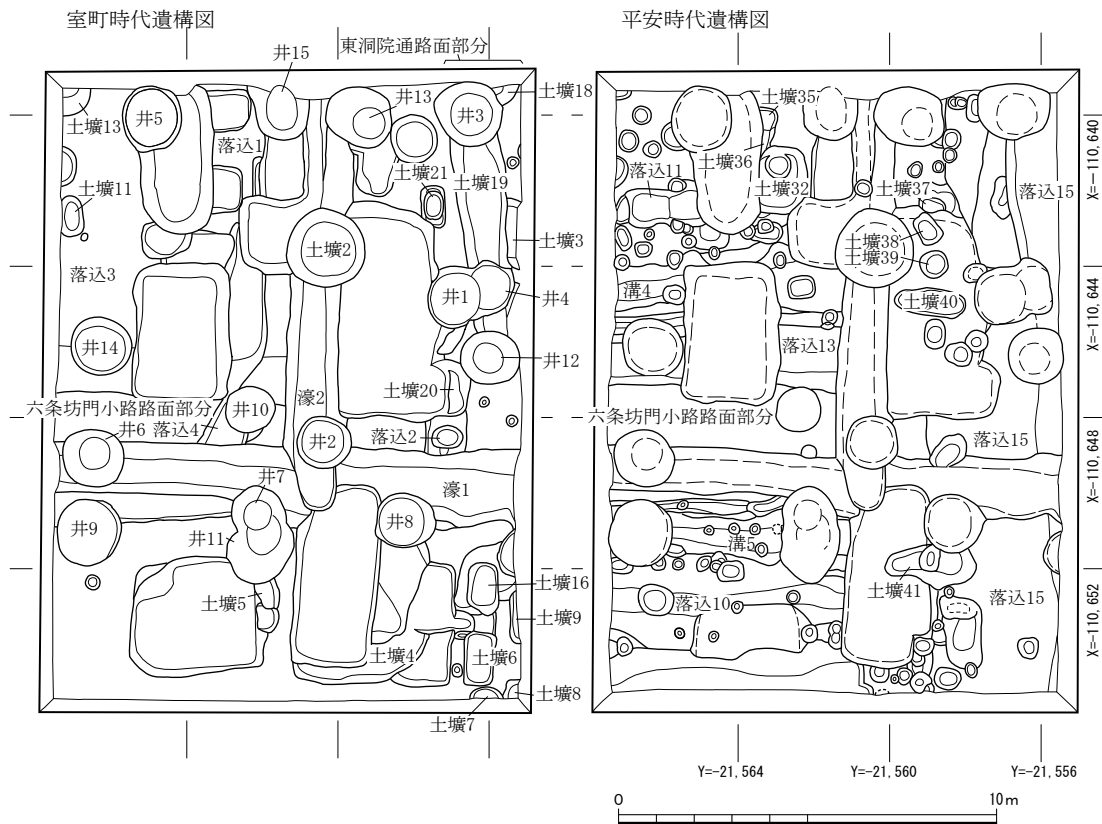


図2 遺構実測図 (1 : 200)

の状況から平安時代の大路路面の西側と小路路面は接続するために橋などの施設が必要と考えられるが、相当する柱痕などの痕跡は発見できなかった。比較的簡易な渡溝施設が想定される。しかし室町時代の両路面は交差点部西側ではT字状に接続していたといえる。

これらの街路関係遺構に対応する宅地側の遺構面において、平安時代後期以降の各時代の落込・土壙・ピットなど各種の遺構を検出している。しかし、宅地側の調査地が狭く各遺構の性格を確定するまでに至らなかった。

室町時代後期の遺構面において、室町時代末期に埋没し、その機能が失われた小規模な東西方向の濠1と南北方向の濠2を検出した。両濠とも幅1.2m程度、深さ約1mを測り断面形状はU字状を呈する。濠1は六条坊門小路の路面部南半を利用して設置されており調査区外へ延びる。濠2は東洞院通り西側を走り、調査区中央付近で北からT字状に濠1へ接続している。埋没土や出土遺物の共通性などから共存していたものと理解している。小規模であり濠と理解するには疑問もあるが、土塁が併置されていたとすれば立派に防護機能を有する。また、当時使用されていた路面の半分を掘り下げており日常性を否定した側面が明確である点、加えてその成立年代の時代性も考慮し濠とした。町屋の構の一部、あるいは戦術レベルの臨戦的性格の強い濠であろうと推定している。

桃山時代に入ると平安時代から室町時代にかけて連続した街路関係遺構などを覆う整地層が形成される。同層上面の遺構面及び江戸時代の遺構面では街路関係の遺構は存在していない。これは桃山時代の天正末期から文禄頃、豊臣秀吉によって実施された大規模な京都の都市改造による当地域の町割り変更に伴い街路が移設された結果と理解できる。

桃山時代以降江戸時代の遺構には、各時期の井戸があり、土間・土壙・ピット・掘込に加えて室などの遺構も伴っている。これらの近世遺構は町屋を構成する各種の施設遺構であり、当地域は桃山時代後半以降の比較的早い段階で近世下京の一画へ組み込まれたものと理解できる。

遺物 古墳時代の遺物は地山の砂礫層から出土しているが、すべて原位置を失い流れ堆積した遺物である。北東方向の比較的近地点に同期の遺跡が想定される。平安時代前期から中期前半代に比定できる遺物は、新しい時期の層・遺構へ混入したもので種類・量ともにごく少ない。出土遺物は平安時代中期後半（11世紀代）に入って質・量ともに増加するが、以後は近世まで各時代のもものが途切れることなく出土している。しかし、この内で時代別にみると鎌倉時代後半から室町時代前半代の遺物出土量は、前後の時代より相対的に少ないといえるが、この現象は当地が中世下京の都市域の中心から少しはずれた周辺地に位置していたこと

によると考えられる。

各時代の土器・陶磁器類は、椀・皿・壺・甕・鍋・釜・播鉢など日常生活と直結しているいわゆる日常雑器類が中心である。平安時代を始め各時代とも輸入陶磁器など当時の高級品も多く含まれているが、これらも主に椀・皿など食器類である。出土遺物の組成は、平安京域及び中・近世京都の都市域から出土する遺物群と共通するポピュラーな様相を示している。しかしこれらの出土遺物は一括出土した良好な資料も多い。

小結 今回実施した発掘調査によって、当地点において平安時代に形成された東洞院大路、六条坊門小路及びその交差点は、以後中世を通じてほぼ同位置で踏襲され機能していたことが明らかになった。しかしこの街路も桃山時代には調査区外へ消える。この動きは秀吉の都市改造に伴う改修や若干の移設に寄るものと理解できる。以後桃山時代から江戸時代は町屋地域として途切れることなく使用され現在に至っている。

街路以外の遺構や、遺物の検出状況から、当地域では平安時代後期を中心とする時期に遺跡の盛期が一つあり、鎌倉時代後半から室町時代にかけては都市の周辺地という停滞した状態と化すが、室町時代後半代には人々の活発な活動を示す遺構が現れ、近世には再び稠密な都市域となって行く様相を窺うことができた。

今回の調査によって得られた成果は、多様で大きなものであるが地域史を解明することはまだまだ難しい。当地周辺、特に東側での発掘調査例が少なく今後の増加が期待される。

(平安京調査会 小森俊寛・上村憲章)

15 平安京左京八条二坊（図版 24）

経過 調査地は平安京左京八条二坊十六町に位置し、周辺の調査でも近世から平安時代の遺構が数多く検出されている。当地に病院が新築されることになり実施した試掘調査でも平安時代から室町時代の遺構の残存状況が良好であったため、発掘調査を実施することになった。

遺構 検出した遺構は、江戸時代の井戸・土壇墓・土蔵の地業基礎、鎌倉時代から室町時代の土壇・井戸（石組2基・木枠組6基）・ピット、

平安時代の土壇・井戸・池状落込・溝である。鎌倉時代から室町時代の井戸は調査区の西半に集中している。これは、宅地内での井戸の占地に寄るものか地下水脈との関連だと思われる。また、井戸と対になるとされる土壇から、埴塼、銅製品が焼土・炭と一緒に出土しており、小鍛冶に関連するものとみられる。池状落込は、肩口から底部にかけて拳大の石を敷き詰めてあり、東肩には径30～40cmの石が数個配されている。この落込の下層から幅約5mの溝を検出した。溝は調査区のほぼ中央で途切れており、肩口には約50cmの間隔で矩形の杭を打ち込んだ跡があり、杭穴の深さは約1mを測る。

遺物 出土遺物の大半は土器類で、瓦類は少ない。土器類には土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などがあり、平安時代から室町時代に及んでいる。陶磁器には破片であるが長沙窯の褐釉水差などの優れた輸入品がみられる。他に籠あるいは箕と思われる編み物や箸がある。また、埴塼・浴皿など小鍛冶に関連する遺物も多い。

小結 今回の調査で検出した遺構には、大きく分けて鎌倉時代から室町時代のものと、平安時代から鎌倉時代初めのものがある。前者の遺構は井戸と土壇が主で、埋土中に多量の焼土と炭が含まれたものが多い。後者の遺構である溝は幅4.2m、深さ1.4mを測るが、調査区途中でなくなっており、どのような性格のものか不明である。（木下保明）

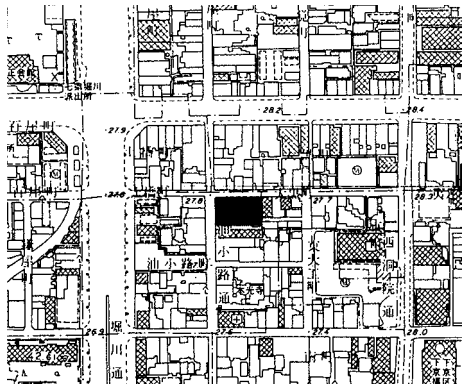


図1 調査位置図（1:5000）

16 平安京右京北辺二坊

経過 この調査は、京都市北区下白梅町に所在する民有地のビル新築工事に伴って実施したもので、調査地は北野白梅町交差点の東南部で山城盆地最古の寺院の一つ、北野廃寺の伽藍推定域南限のすぐ南側にあたり、敷地内において一条大路北端部も想定される。まず遺跡の有無を確認するため試掘調査を実施したところ一条大路北側溝と思われる東西溝を検出したため、発掘調査に移行されることになった。調査は、敷地全体を対象としてトレン

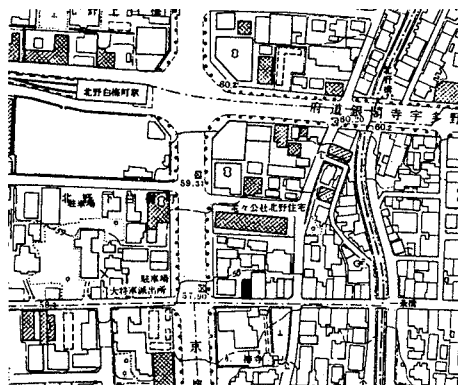


図1 調査位置図 (1:5000)

チを設置し、江戸時代以降の整地層は機械力によって排土を行った。その結果、平安京造営以前の遺構から室町時代に至る遺構群を検出することができた。

遺構・遺物 調査区南端で、平安時代前期から鎌倉時代の一条大路北側溝を確認した。それらは、平安時代前期に遡る溝が一番北に位置し、除々に南に下がり、後期から鎌倉時代前期のものは幅広の大きな窪み状を呈したことが判明した。それ寄り以降の溝は調査区内では認められなかったことから、更に南にあると考えられる。また、平安時代中期から後期の溝の北肩には、2mほどの幅で拳大の礫を敷き詰めたような施設が認められた。また一条大路北側溝から2.4m離れて前期の浅い東西方向の溝状遺構があり、その中から炭と共に土馬・獣骨など、祭祀に関連した遺物が出土した。更にそれより北に約8.4mの所にも東西溝が確認された。このような配置と溝間の数値は、延喜式左京職の東京極大路東側溝から中川までの値に類似するが、中川と東西溝との規模や築地の痕跡も認められないことなどの相異点も指摘される。前期末には整地と一部盛土の痕跡がわずかにあり、その北には南北方向の柱列や南北小溝が認められ、前期とはやや異なった様相を呈している。このような遺構の配置は、後期まで継続する。

小結 一条大路の北側は、平安時代前期から鎌倉時代前期まで存続し、北側にはそれに伴う各時期の遺構群が存在していることも判明した。 (堀内明博)

『平安京跡発掘調査概報』 昭和62年度 1988年報告

17 平安京右京一条二坊

経過 京都市立北野中学校校舎及び屋内体操場の解体・新築に伴う発掘調査である。

調査地は、平安京右京一条二坊十五町に推定されるところで、鷹司小路と野寺小路の条坊遺構及び御土居の検出が予想される地点である。調査区は、校舎・屋内体操場解体箇所はその基礎及び解体に伴う攪乱が予想されるため、校舎・屋内体操場跡地を避けて設定した。調査区は、逆「コ」の字状に設定したが、掘削後比較的残存状況の良好な調査区西側を一部拡張する。調査面積は、1300㎡である。

遺構・遺物 現代整地層を除去すると現地表下10～40cmで、本来遺構面であると考えられる砂層となる。しかし調査区の80%以上は、旧校舎・屋内体操場の基礎及び解体に伴う攪乱で、層の堆積はなく、遺構も攪乱の間でわずかに検出したに過ぎない。

発見した遺構は、桃山時代の溝・御土居の濠の南肩、鎌倉・室町時代の溝・土塹・柵列・柱穴など、平安時代前期の遺物包含層・ピットなどがある。

桃山時代の溝は、検出面での幅0.6～1m、深さ約0.5mを測り断面「V」字状を呈する。この溝の検出位置は、平安京条坊復原によると、鷹司小路南側築地心の位置にあたる。

平安時代の遺構は、調査区西側で包含層とわずかなピットを検出したに過ぎない。攪乱の合間から検出したピットであり建物としてまとめ得なかった。

なお、現地表下1.5mで始良火山灰層を確認した。

遺物は、包含層及び各遺構から出土しているが量は少ない。平安時代の遺物はすべて平安時代前期に属する。

小結 発見された桃山時代の溝の西延長線上約15mに御土居土塁が現存しており、この溝は御土居築造に伴う溝と考えられる。

今回の調査地は、旧建物の基礎・攪乱が著しく平安京造営時の遺構を確認することができなかった。調査区西側の現グラウンドは、比較的平安時代の包含層の残存状況が良好であることが調査区西断面などから予想され、今後の調査に期待される。 (菅田 薫)

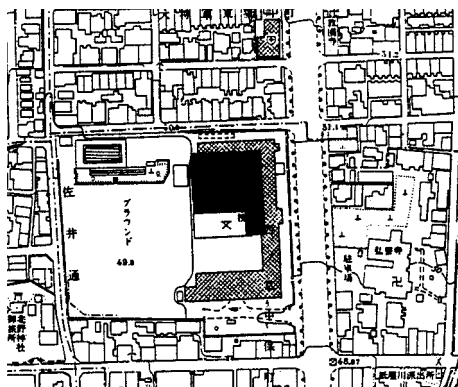


図1 調査位置図 (1:5000)

18 平安京右京三条二坊 (図版 25)

経過 調査地は中京区西ノ京にある西京商業高校の敷地内で、調査地点は正門東側のセミナーハウス建設予定地である。同校敷地内での調査は今回で2回目であり、前回の調査では右京三条二坊十五町の北東コーナーを確認しており、今回の調査は十五町の南東隅に該当する。設定した調査区は東西16m、南北12mである。遺構の残存状況は良好であり、検出した遺構は平安時代・室町時代・近世の3時期に分けられる。遺構の内容は溝・柱穴・

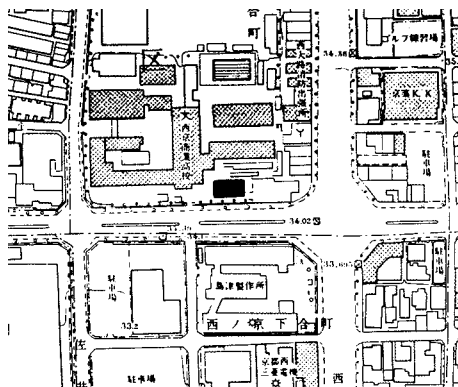


図1 調査位置図 (1:5000)

土壌などである。最終的には調査区南側を一部拡張し、平安時代の遺構の広がりを確認して調査を終了した。調査期間は1987年5月18日から6月12日までである。

遺構・遺物 調査地の層序は、地表下0.9mまでが近世と現代の耕作土を含む堆積で、次に中世の耕作土である黄褐色砂泥層が約10cm堆積し、同層下面から室町時代・平安時代の遺構を検出した。

平安時代の遺構には溝が4条・柱穴が26基ある。調査区のほぼ中央を東西に延びる溝SD 117は、幅1.2m、深さ約0.2mで溝底には凹凸がみられる。溝SD 118はSD 117の北約3.3m(心々間距離)で検出した東西溝で幅1.5m、深さ約0.3mあり、溝底の状況はSD 117に比べ平坦である。両溝からの出土遺物はSD 118が9世紀末、SD 117は10世紀に比定できる。南北溝SD 100・105は幅約0.4m、深さ0.1mあり、12世紀の遺物を含む。柱穴群はSD 117の南側だけに確認した。柵SA 131はL字状に曲がる。柵の柱間隔は2.5mで4間分を確認した。また柵に囲まれた部分に比較的大型の柱穴を6例検出した。その内3例は、1辺が約0.8mで方形を呈するものだが、柱間隔も不揃いで建物として把握できなかった。柱穴からの遺物はすべて9世紀末頃と考えられる。

室町時代の遺構には耕作用と考えられる小溝群と井戸SE 41がある。耕作用溝のほとんどは東西方向である。SE 41は掘形の径が約2mの不整円で、底面は一辺が1.2mの方形を呈する。井戸の深さは0.6mで、井戸の内部には特に施設は認められなかった。

江戸時代の遺構には耕作用の小溝とやや幅広の水路SD 24がある。SD 24は調査区の東

端を南北方向に流れ、埋土には多量の砂礫を含む。水路の氾濫のためか同時期の小溝からも、同様に砂礫が認められた。

出土遺物の総数は整理箱にして6箱である。比較的まとまって出土したのはS D 117・118からで、土師器のほかに緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器の白磁がある。

小結 今回の調査地は、条坊復原の測量値に当てはめると十五町東一・二行北六・七門の4区画にまたがっている。区画推定線に検出した遺構を対比させると、北六門と七門の境界線はS D 118の南肩部を通り、東一行と二行の境界線はS D 105の西1mを通る。東西溝のS D 117・118については地割りに関係したものと考えられよう。南側で検出した柱穴群はS D 118の時期に対応するもので、S D 117の時期に対応する柱穴は認められなかった。

昭和56年の1回目の調査では、押小路と野寺小路の西側溝などを検出しており、今回の調査で四行八門地割りを考える上での好資料を加えたことになる。(本 弥八郎)

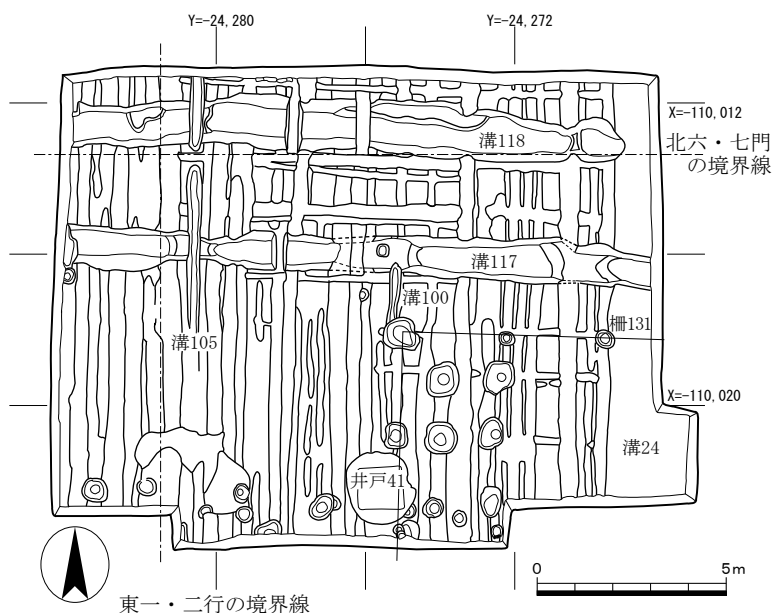


図2 遺構実測図 (1 : 200)

19 平安京右京四条二坊（図版26）

経過 調査地点は、右京四条二坊六町の北東部及び西靱負小路が想定できる位置にある。当該地には製材工場があり、その建物を撤去した後に、事務所兼用マンションを建設する計画が立てられた。製材工場の基礎あるいは機械据付基礎などでかなり攪乱されていると予想できた。このため、攪乱の度合い、遺構の残存状況などを確認する目的で試掘調査を実施した。その結果、攪乱部以外では平安時代の遺物包含層及び柱穴などの遺構が良好な状態

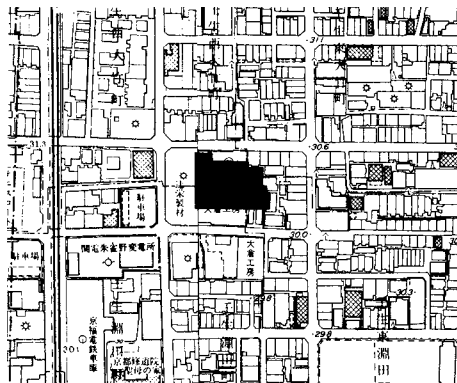


図1 調査位置図 (1:5000)

で遺存していることが明らかとなり発掘調査を実施した。調査区は東西約50m、南北27～36mの範囲で設定した。調査区北西部では、近代以降の盛土直下が地山となるが、それ以外では平安時代の整地層（黒褐色砂泥層）が南に向かって漸次、厚みを増して堆積している。

遺構 遺構は、平安時代前期の掘立柱建物・柵・井戸・土塋・路面・側溝、平安時代後期から室町時代の小溝、室町時代の路面、江戸時代の土取穴などを検出した。これらの遺構群のうち、主要な遺構の概略を以下に記す。

平安時代前期 遺構は、条坊に関連する一群と宅地に関連する一群に大別できる。調査区東側で検出したSA1、SD83・84、SF2は条坊復原モデルによると、西靱負小路の西側築地、東西両側溝、路面に各々が相当する。SD83・84とも、断面観察などから判断して新旧の2時期が考えられ、新しい段階でSD84は溝1条分ほど西へ、SD83は溝2条分ほど東へ造り変えられている。古い段階では両溝の心々間は約8.4mある。またSD83（古）とSA1間では北側で1.8m、南側で1.5mの間隔がある。なおSA1柱列の北半と南半では約30cmのずれが認められる。掘立柱建物は調査区中央部、北東部、南部付近で集中して検出した。いずれの建物もすべて、一部もしくは大部分が工場基礎の攪乱及び、江戸時代の土取穴で削り取られている。そのため、どのようにも復原することが可能であるが、妥当と考えられる復原案を図3に示した。確認できた柱列の重複・近接状況あるいは柱穴からの出土遺物などからみて3ないし4ほどの小期が考えられる。柱列は南北方向に規定される群と、北で東に振る群とに大別可能であり、南北に規定される群が最も古い。井戸は3基検出した。SE120は

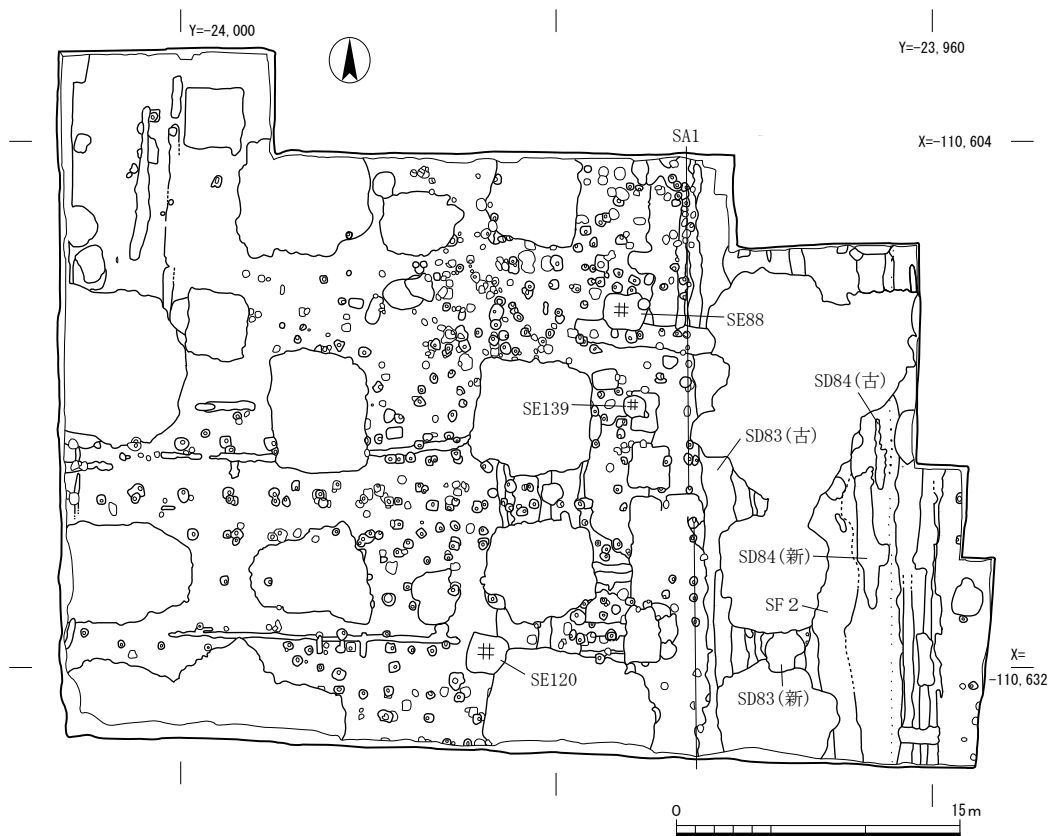


図2 遺構平面図 (1 : 400)

横棧縦板組。SE 88 は井籠組でや
や横幅のある板を使用している。上
下2段以上からなると考えられるが、
下部の一段のみ残存していた。SE
139 は素掘りと考えられるが、井戸底
部に曲物を2段組み合わせていた。

平安時代後期から室町時代 遺構
はすべて耕作に関連すると考えられ
る小溝である。

室町時代 調査区南東で検出した
路面がある。俯瞰的にみると、平安時代の西鞆負小路路面と一部重複するが、東側に1.5 m
以上のずれがあり、また断面観察の結果では西鞆負小路廃絶後、水田と考えられる間層が存

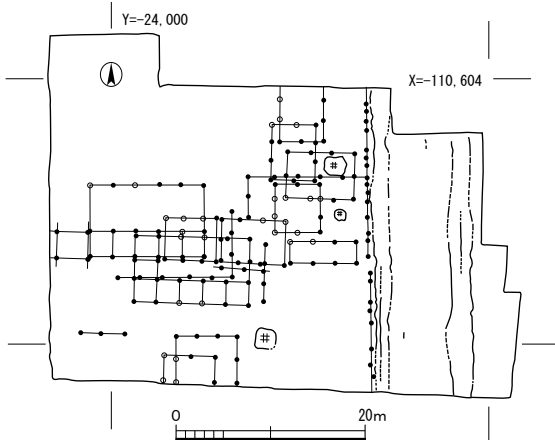


図3 建物復原(案)模式図(1 : 800)

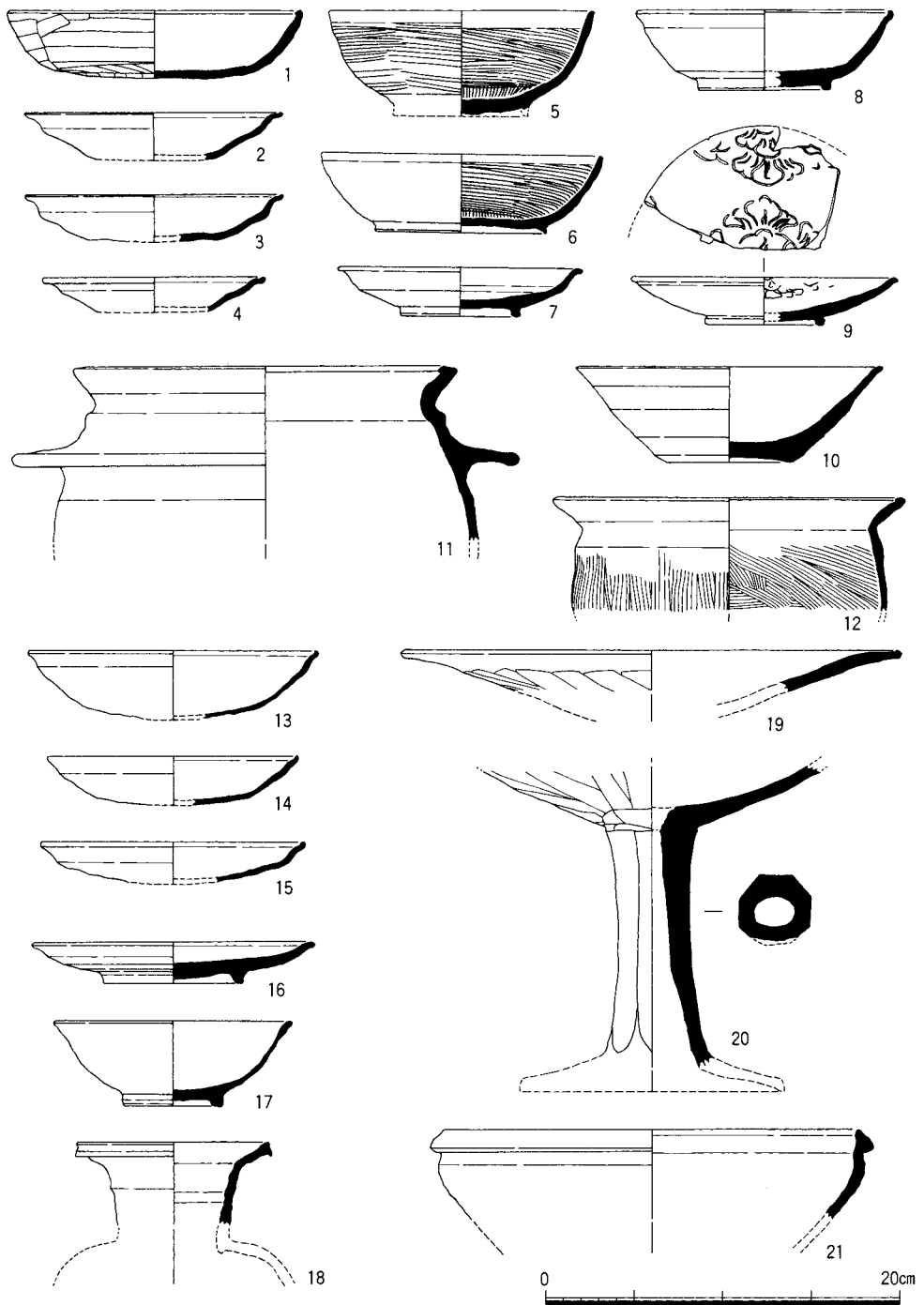


図4 出土遺物実測図 SD 84 (1~12) SD 83 (13~21) (1 : 4)

在し、その上面に礫敷きを施し路面としている。路面西側は工場の基礎で、東側は近代以降の溝で削り取られており、規模は不明であるが最大幅約6mを検出した。

遺物 平安時代を中心として江戸時代に至る各時期があり、整理箱にして177箱出土している。これらは土器類、瓦類が圧倒的に多いが、土器類には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器（青磁・白磁・三彩陶器）、瓦器、国産陶磁器がある。瓦類には、軒平瓦、軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。その他に陶硯（円面硯・風字硯など）、土製品（土馬・土錘）、石製品（石銚帯・砥石）、銭貨などがある。主として溝・井戸・柱穴・土壇・土取穴などから出土しているが、西鞆負小路東西両側溝であるSD 83・84からは比較的良好な資料が出土しており、図4に示した。

SD 83出土の土器類は、各器種の破片数によると次のようになる。総破片数3757片のうち、土師器57.7%、須恵器23.0%、緑釉陶器4.3%、灰釉陶器5.8%、黒色土器8.2%、その他1.0%である。また、SD 84出土土器類では同様に、総破片数2618片のうち66.6%・22.0%・2.8%・2.4%・5.8%・0.6%となる。これを杯・碗・皿の小型食器類に限定してみると、SD 83では総破片数2302片のうち土師器68.3%、須恵器4.6%、緑釉陶器7.0%、灰釉陶器7.5%、黒色土器12.5%となる。同様にSD 84では総破片数1617片のうち、79.7%・3.7%・4.4%・3.2%・8.8%となる。両者とも、土師器が最も高い比率を示すが、その他の器種においては、黒色土器の比率の高さがめだつ。

小結 調査区は、平安京条坊復原モデルに基づくと右京四条二坊六町、東一行、北一～三門に相当し、調査区東端に西鞆負小路が想定できる地点であった。調査の結果、西鞆負小路西側築地に相当すると考えられる柱列を検出した。この柱列は復原モデルの築地想定線から東へ約1.6～1.9mずれた位置にある。また、当柱列は調査区の中央からやや南寄りの箇所です約30cm東西に柱筋のずれが認められる。このずれが生じた箇所から北へ約2.4mの地点に、復原モデルによる北二・三门の境が想定される。なお、東側築地は削平されたと考えられ未検出であるが、西側柱列と西側溝（古）の心々間距離を東側のそれに当てはめると東側築地心が想定できる。この想定線と西側柱列間は12m弱が考えられ、復原モデルから得られる小路の幅に相当する。次に、宅地部で検出した掘立柱建物は、宅地割りの最小単位には収まらない建物群が復原可能であり、建物群の配置状態などから、宅地部は少なくとも4分の1町以上が班給されたと考えられる。

（平方幸雄・高橋 潔）

20 平安京右京五条一坊

経過 中京区壬生下溝町45番地で下京清掃局事務所の改築が計画された。建築面積は911㎡であるが、地下遺構の大半は既存建物によって破壊されており、調査可能な面積はわずかである。当地は右京五条一坊十三町に該当しており、事前に2箇所で行った試掘調査では中世の遺構を確認している。試掘調査の結果を基に、東西9m、南北12.5mの調査区を設定した。調査開始は昭和62年7月1日で、同月14日に調査を終了した。

遺構・遺物 基本層位は、地表下80cmまでが近・現代の整地層で、次に旧耕作土層が10cm堆積し、以下は地山である黄褐色砂泥層で、同層上面が中世の遺構検出面となる。検出した遺構は全部で18例である。耕作用の溝の5例は近・現代のもので、他は室町時代と桃山時代である。桃山時代の遺構は4例の不整形な土壇で、それぞれの間隔は東西が3m、南北が2mで方形に並ぶ。室町時代の遺構には不整形な土壇と湿地状落込がある。落込は調査区南西の一角を占め、南の調査区外に広がる。北側の肩口ラインは不整で、北西から南東に延びる。深さは0.6mあり、埋土は4層に分層でき、下部は泥質土が堆積する。



図2 調査区全景（北から）

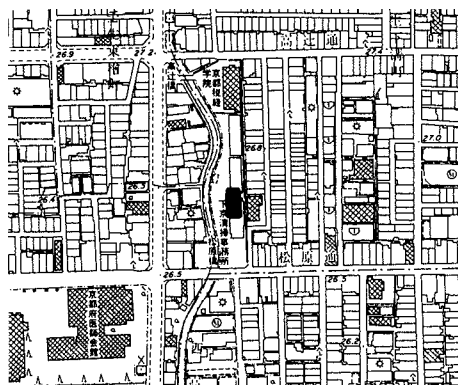


図1 調査位置図（1:5000）

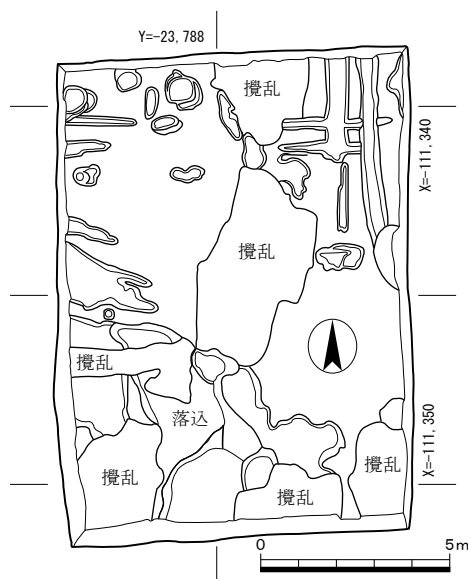


図3 遺構実測図（1:200）

出土遺物は整理箱にして4箱である。土壙・溝からの出土遺物は瓦，陶器，土師器，輸入染付などがあり，そのほとんどが小破片である。湿地状落込からの出土遺物も細片で磨滅したものが多。遺物の内容は，室町時代の土師器・陶器・瓦器・輸入陶磁器などがあり，平安時代の瓦・土師器・須恵器なども多く混入している。他には土馬・埴塙片，漆器椀などがある。

小結 今回の調査地は一町内の東四行北六・七門に位置する。北六門と七門の境界は調査区の南辺に推定されるが，後世の削平もあり境界を示すような遺構は検出できなかった。検出したのは中・近世の遺構のみで，当調査地の北約 20 m に設けた試掘トレンチでも同様の状況であった。室町時代の落込は人工的なものではなく自然に形成されたものと考えられる。今回は小面積の調査であったが試掘調査の結果と併せて考えるなら，平安時代の当地は比較的空閑地であったといえる。

(本 弥八郎)

21 平安京右京五条三坊（図版 27）

経過 この調査は、右京区西院矢掛町に所在する西院中学校屋内体育館新築工事に伴って実施したものである。調査地は、右京五条三坊四町に該当し、北を高辻小路、東を道祖（佐比）大路、南を五条大路、西を宇多小路に囲まれた一画で、条坊復原によるとその北東隅に想定される。昭和56年度に行われた既存調査で平安時代中期の建物や遺物などを良好な状態で検出したことから、今調査においてもそれに関連する遺構の存在が予想された。また、

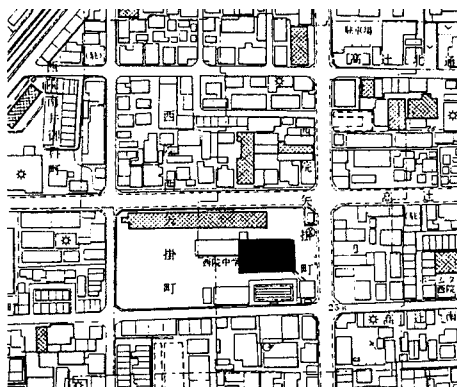


図1 調査位置図 (1:5000)

当該地周辺は既往の調査により弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地である西院遺跡の範囲内に想定されることから、これらに関連する遺構・遺物の検出も予想された。調査は工事範囲を対象とし、東西40m、南北18mの調査区を設定し、校舎建設時の整地土層と旧耕作土層を機械力により排土した後に開始した。

遺構 基本層序は、既往の調査例とほとんど同じで、校舎建設時の整地土層が40cm、旧耕作土層が20cm、灰褐色泥土層が約5cmある。この下は、黄灰色泥砂あるいは砂礫層の地山となり、遺構はすべてこの面で検出した。

検出した遺構群は、弥生時代から室町時代に及び、150基ほど確認した。その中で主要なものは、弥生時代と平安時代のものである。弥生時代のものは、調査区の西部で主に検出した土壇群があり、形状はいずれも不定形で規模も異なる。土壇は6箇所検出し、その内の西端で認めたものは、東西2.5m、南北1mほどの浅いものであるが、底からややまとまって土器が出土した。平安時代の遺構群は、調査区の東半で認められ、掘立柱建物・池状遺構・東西溝などがある。建物は、調査区の東北で一部分を認めただけで、東西4間以上のものである。柱間間隔は2.7mで、柱穴の掘形は一辺80cmを測り、建て替えが認められる。掘形内には、いずれも30cm以上の柱痕が認められ、礎板を置いたものもある。池状遺構は、建物の南端から南へ5.4mほど離れて位置し、東西12m以上、南北6mほどで、東から南に弧を描くような形状を呈する。その西北の肩には、小さな礫を敷いた洲浜状の施設も認められた。この遺構の底付近からは、獣骨・土馬などが出土した。東西溝は、その南側で一部分認められ、

佐比大路西側溝に注ぐ。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、整理箱で45箱を数える。それらは、弥生時代から室町時代まで含まれるが、大部分は平安時代のものである。9世紀後半の遺物は、池状遺構の北肩から完形に近いものが出土し、10世紀前半のものは、東西溝から土師器杯などが一括出土した。弥生時代の土壙からは、前期末の遺物が少量認められた。

小結 調査地とその近辺は、平安時代前期から中期にかけて規模の大きな建物と、それに池状の施設を伴った邸宅であったことが判明した。また、建物は、柱間隔・掘形から主要な建物であり、庭園のような施設を伴うことから、この時期の邸宅を考える上で貴重な資料といえよう。 (堀内明博)

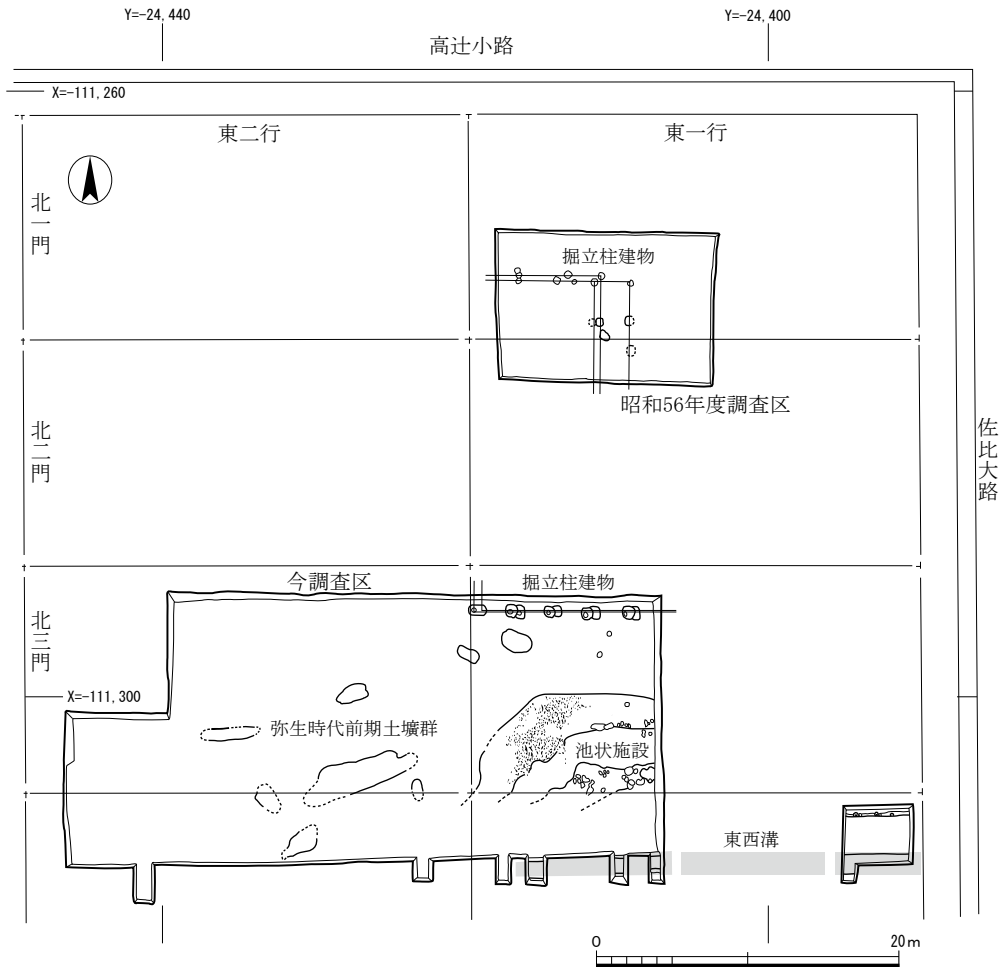


図2 遺構実測図 (1 : 500)

22 平安京右京六条一坊

経過 大阪ガス京都工場跡地東地区再開発に伴い調査した。同地は右京六条一坊五町のほとんどの部分を占め、北の一部は六町にかかる。再開発の計画をにらみ、五町の全貌を明らかにすることを目指し、1区から6区まで、計約1万㎡を調査した。期間は昭和62年9月16日から翌63年4月21日までである。

遺構・遺物 平安時代前期の邸宅及び平安時代終末から鎌倉時代にかけての町屋の遺構を認めた。また、調査区の一部に古湿地があり、そこから縄文・弥生・古墳の各時代の遺物が出土した。江戸時代、土取りによる破壊を受け、遺跡の残存状況は良好とは言えない。

邸宅は五町の東寄り4分の3を占める。邸宅内は柵で南北に2分し、南に主要な殿舎を、北に雑舎を配する。主要殿舎は、正殿を中心にして、東・西・北の3方に対屋4棟が建つ。北と東の対屋は廊で結ぶ。正殿と北の殿舎は中心を南北に揃えて並ぶ。東西の殿舎は、その中心線に対し非対称の配置である。正殿と南の六条大路との間の空間は狭く、そこに池は造っていない。門は東の西坊城小路に開くと考える。雑舎は南の中心線の北延長線上に身舎のみの建物があり、その東西にやはり非対称に建物がある。井戸は北と南に各1基を確認した。町屋跡は、五町の北の楊梅小路に面して建ち並ぶ状況が顕著である。町屋の敷地は間口15～20m、奥行き30mほどで、その表寄りに家を建てて、裏側を庭あるいは畑とする状況を確認した。敷地内に井戸を持つものと、持たないものがある。同じ時期、五町の東南部には小邸宅があったようである。瓦や壁土を濠の中に多量に投棄しており、付近に小堂の存在を裏付ける。

小結 平安京内では例をみない広面積を調査し、それに見合う成果を得た。平安時代前期の邸宅は、これまで不明であった当時の邸宅の実像を明らかにした重要な資料である。また、平安時代終末から鎌倉時代にかけての町屋も、絵巻物にみる町屋と酷似する状況で、その実例として重要である。現在、報告書を準備中である。なお、邸宅の40分の1の復原模型が原因者によって製作されている。

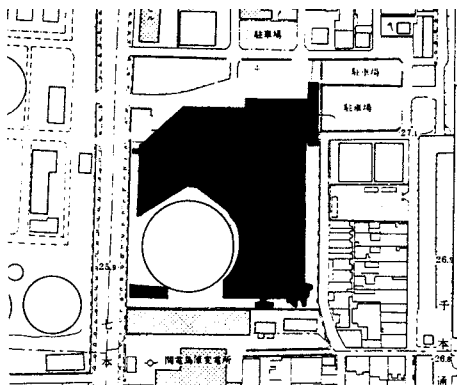


図1 調査位置図 (1:5000)

23 平安京右京六条二坊（図版 29）

経過 この調査は、右京区西院高田町に所在する民有地のビル新築工事に伴って実施した。調査地は、平安京右京六条二坊十町にあたり、北を樋口小路、東を西堀川小路、南を六条坊門小路、西を野寺小路に囲まれた宅地で、条坊復原からみるとその中央部のやや東に想定される。周辺部における既存の調査で平安時代の良好な遺構群を検出しており、当該地においてもこれらに関連する遺構群の検出が期待された。また、周辺は市立病院遺跡

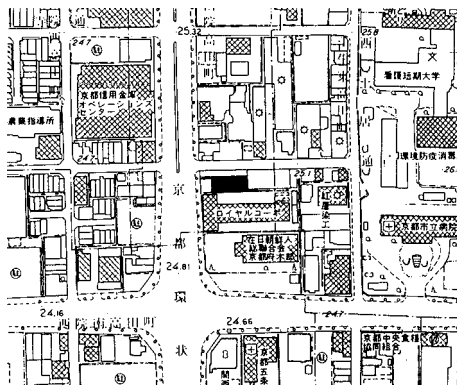


図1 調査位置図 (1:5000)

(古墳時代)の範囲に位置することから、これらに関連する遺構・遺物の検出も期待された。調査は、敷地全体を対象としたが既存建物による攪乱などから敷地南半分に調査区を設置した。その結果、平安時代前期から中期にわたる建物・土壇・溝などを検出し、かつ建て替えながら変遷していることが判明した。

遺構 基本層序は、周辺の既存調査例とほとんど同様で、まず既存建物建設時の整地土層が厚さ40cm、暗灰黄色砂泥層が厚さ約5cm、その下は黄灰色砂泥層の地山となり、その直上で古墳時代から室町時代の遺構を検出した。

検出した遺構群は、古墳時代、平安時代前期から中期、鎌倉時代から室町時代のものに3分することができる。まず古墳時代では、流路以外顕著なものは認められない。平安時代では、平安京の宅地関連のもので、今回検出した遺構中最も顕著なものである。鎌倉時代以降のものは、ほとんどが農耕に関連した溝群である。以下、平安時代の主要なものを概略する。

平安時代の検出した主要な遺構には、掘立柱建物が重複を含めて6棟以上、柵列2条、土壇・溝状遺構などがある。掘立柱建物は、調査区内中央でいずれも検出され、大きく南北2群に分かれ、かつ重複し、しかもその全容が明らかなものは少ない。全容が明らかなものはSB1があり、桁行5間、梁行2間で南庇の付く建物である。このSB1の母屋の南側柱列に重複して南群の建物群がある。これらは、SB1同様桁行は5間と同じであり、柱間寸法はSB1を含めて8尺5寸から9尺を測る。柱の掘形は、いずれも方形で一辺0.6～1mのものがある。柱当り内からは、いずれも瓦類が出土する。これに対して北群の建物は、桁行4間、

梁行2間以上のもので、建物内に間柱が認められる。柱間間隔はいずれも桁行が8尺、梁行が5尺と梁行がやや狭い建物である。また、南群の西で東西2間以上の建物を1棟検出した。その掘形は1辺60cmの方形で柱間間隔は6尺5寸である。柵列はいずれも建物の東方にあり、しかも南北方向のものである。

溝は、南群の建物の西方で東西方向に一部分認められたもので規模などは不明であるが、平安時代前期の遺物が多量に出土した。

遺物 遺物は整理箱で、40箱を数える。古墳時代から室町時代にわたるものが出土するが、平安時代前期から中期のものがその圧倒的多数を占める。その内訳は、約7割が土器類で、ついで瓦類、土製品や金属製品はわずかに過ぎない。平安時代の遺物は、溝などからまとまって出土した。その大部分は供膳形態のものが占めるが、その中には須恵器の円面硯、黒色土器の風字硯、口径が25cmを越える緑釉陶器椀・陰刻花文椀、墨書土器なども認められる。瓦類は、大部分が丸・平瓦で、軒瓦はわずかに過ぎない。

小結 調査の結果、六条二坊十町の中央寄りに平安時代前期から中期まで、南北に2棟建物が配置されていたことが判明した。これらの建物規模や柱間寸法から中心的なものと考えられ、しかも南北に密に2棟の建物を配置し、それ以上のもので構成された邸宅であったと考えられる。

(堀内明博)

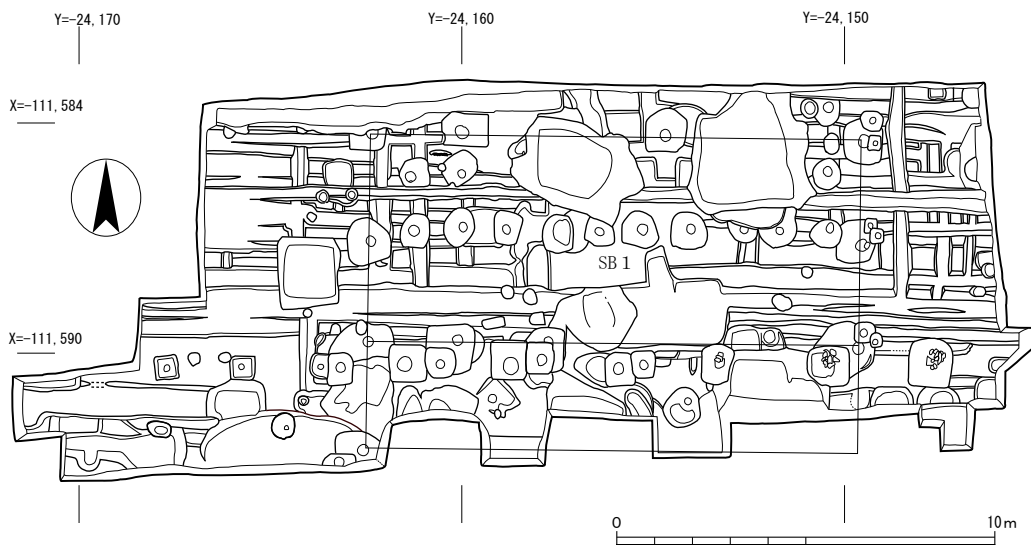


図2 遺構実測図 (1 : 200)

24 平安京右京八条二坊

経過 マンション建設に先立つ事前調査である。調査区は、工事基礎掘削の範囲に設定、東西 8.5 m、南北 35 m の 255m²を調査した。

当地は、平安京西市外町にあたり、また平安京造営以前の遺跡「西七条月読町遺跡」にも属する。

遺構・遺物 調査区に堆積する土層は、10層に大別できる。第2・3層は江戸時代、第4層は桃山時代の遺物包含層で、それぞれ10～30cmの層厚を測る。第5層は室町時代の遺物

包含層で10～20cmの層厚がある。第6層は層厚20cmで平安時代後期から鎌倉時代の遺物を包含する。第7層から9層は、平安時代前期の遺物包含層である。第10層は、砂・礫・粘土・腐植土の互層で、古墳時代の遺物が出土する。この第10層は、断ち割りの結果、現地表下4mまで同様な堆積を示し、庄内から布留式併行期の土器が混在している。

発見した遺構は、江戸時代の井戸・土壇・溝・柱穴・桃山時代の石組井戸・柱穴、鎌倉時代から平安時代後期の井戸・土壇・溝・柱穴、平安時代前期の土壇・溝・柱穴・湿地などがある。各時代の柱穴は、柱根・根石を残すものを含めて多数検出したが、建物としてはまとめ得なかった。平安時代前期の遺構は、南北溝1条、東西溝4条を検出した。南北溝は、平安京条坊復原によると、八町を東西に2分する中心線から東1.2mの位置にあり、東西溝は七条大路南築地心から12m南に1条、その溝から南に5.4m・2.7m・5.4mの間隔を持って検出している。この東西溝は、南北溝より西へ延びない。またこれらの溝は、板・杭などで乱雑に護岸している。

遺物は、各遺構・遺物包含層から出土している。特に、第7層から9層にかけての遺物包含層から多量の平安時代前期の土器類が出土した。

小結 今回の調査成果は、西市外町の復原を一步進めるものであるが、狭い調査面積での成果であり、今後近隣の調査成果の進展に伴い面的に遺構の広がり捉え、西市の復原を進める必要がある。

(菅田 薫)

【平安京跡発掘調査概報】 昭和63年度 1989年報告

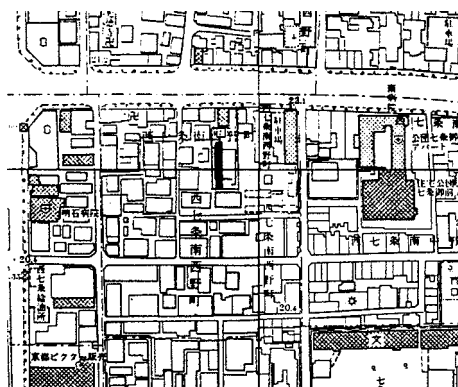


図1 調査位置図 (1:5000)

25 平安京右京九条二坊

経過 倉庫建設に先立つ事前調査である。当地は、西寺跡に隣接し、また古墳時代の集落跡である唐橋遺跡にあたる。試掘調査を行った結果、遺構の残存状況が良好であったため発掘調査を実施した。調査区は、東西15m・南北22mで設定。昭和62年7月15日から9月12日まで調査を実施した。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、盛土層・耕作土層・江戸時代の整地層の順に堆積し、その下に灰色砂礫層が堆積し、この層の上面で遺構を検出している。

検出した遺構は、古墳時代の竪穴住居・溝・土壇、平安時代前期の土壇・柱穴、平安時代後期から鎌倉時代にかけての柱穴、室町時代から江戸時代初期にかけての南北方向の柵列・礎石建物・石室^{いしむろ}がある。石室は、3方に石を積み方形を呈する。検出した大半の遺構は、平安時代から鎌倉時代の柱穴で、密に重複するが、これらの柱穴は建物としてまとめ得なかった。

出土した遺物は、各遺構・包含層から遺物整理箱に61箱ある。出土遺物の大半は、土器類で占めるが、江戸時代の石室から西寺関係の軒瓦が出土している。遺物の時期は平安時代から江戸時代まで各時代にわたる。

古墳時代の土器は、庄内式併行期から布留式併行期のものが主で、少量の初期須恵器が出土している。

小結 唐橋遺跡での竪穴住居は、既往の調査で16棟検出している。これまでの調査例では、古墳時代後期の竈を持つ竪穴住居が主であったが、今次調査では須恵器出現以前の時期であり古墳時代の唐橋遺跡を考える上で重要な知見を加えることができた。また平安時代前期の建物で「大倉口」と墨書した土師器杯があり、西寺子院の中の「倉垣院」との関連が想定され、西寺伽藍を支えた西寺子院群の復元に貴重な資料を得ることができた。

(菅田 薫・本 弥八郎)

『平安京跡発掘調査概報』 昭和62年度 1988年報告



図1 調査位置図 (1:5000)

Ⅲ 白河街区

26 岡崎遺跡・法勝寺隣接地（図版 30）

経過 調査地は白河街区及び岡崎遺跡にあたる。試掘調査の結果、遺構を検出したため発掘調査を実施した。発掘調査は幅 20 m、長さ 45 m の調査区を設定して行った。調査の目的は法勝寺北側隣接地域の状況解明、並びに弥生時代から古墳時代の遺構検出である。

遺構 調査地の地表面はグランドのため平坦であるが、旧地形は北から南へ大きく傾斜し、約 14 m の比高差がある。調査地の基本層序は、上から第 1 層 茶褐色泥砂層（近・現代盛土、厚さ 10～60cm）、第 2 層 茶灰色砂泥層（近世盛土、厚さ 20～50cm）、第 3 層 茶灰色砂泥層（中世包含層、厚さ 10～80cm）、第 4 層 灰色砂礫層（無遺物層）である。第 3 層上面（第 1 面）で近世から現代の遺構、第 4 層上面（第 2 面）で中世の遺構を検出した。第 2 面中央部位の標高は 55.4 m である。

第 1 面では調査区東部で S D 35、南東部で S X 34 を検出した。S D 35 の西側は北から南へ段状に下がり、溝などの遺構を若干検出したに過ぎない。

S D 35（幅 2～2.5 m、深さ 0.8～1 m、断面逆台形）は底部が平坦で、北から南へ流れる。埋土は茶灰色砂泥層で、黄色砂がレンズ状に堆積する。

S X 34（幅 7 m 以上、深さ 1 m）は西肩部を検出した。埋土は暗灰色泥土層で、沼状の遺構と考えられる。

第 2 面では調査区中央で S A 50 を検出し、これを境に遺構は東と西で大きく分かれる。西側では井戸・土壇・柱穴群を検出し、東側は数回にわたり造り替えた南北溝を検出した。

西側の柱穴は複雑に切り合い、建物の復原にまでは至っていない。柱穴は径 20～30 cm の円形で、底部に平坦な石を据えたものもある。

S E 15 は調査区南部で検出した。掘形は一辺 3 m の隅丸方形で、中央に石組みの井戸枠（一辺 1.5 m）を設ける。土壇は調査区西半部で検出した。埋土中に土器を多量に含むものがある。

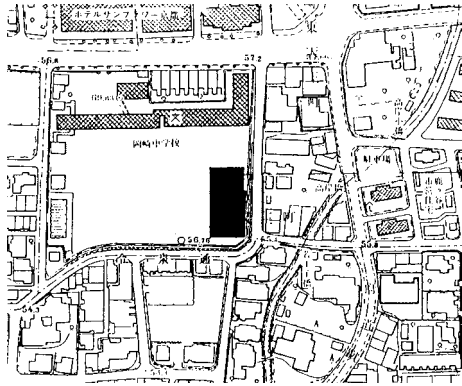


図1 調査位置図 (1:5000)

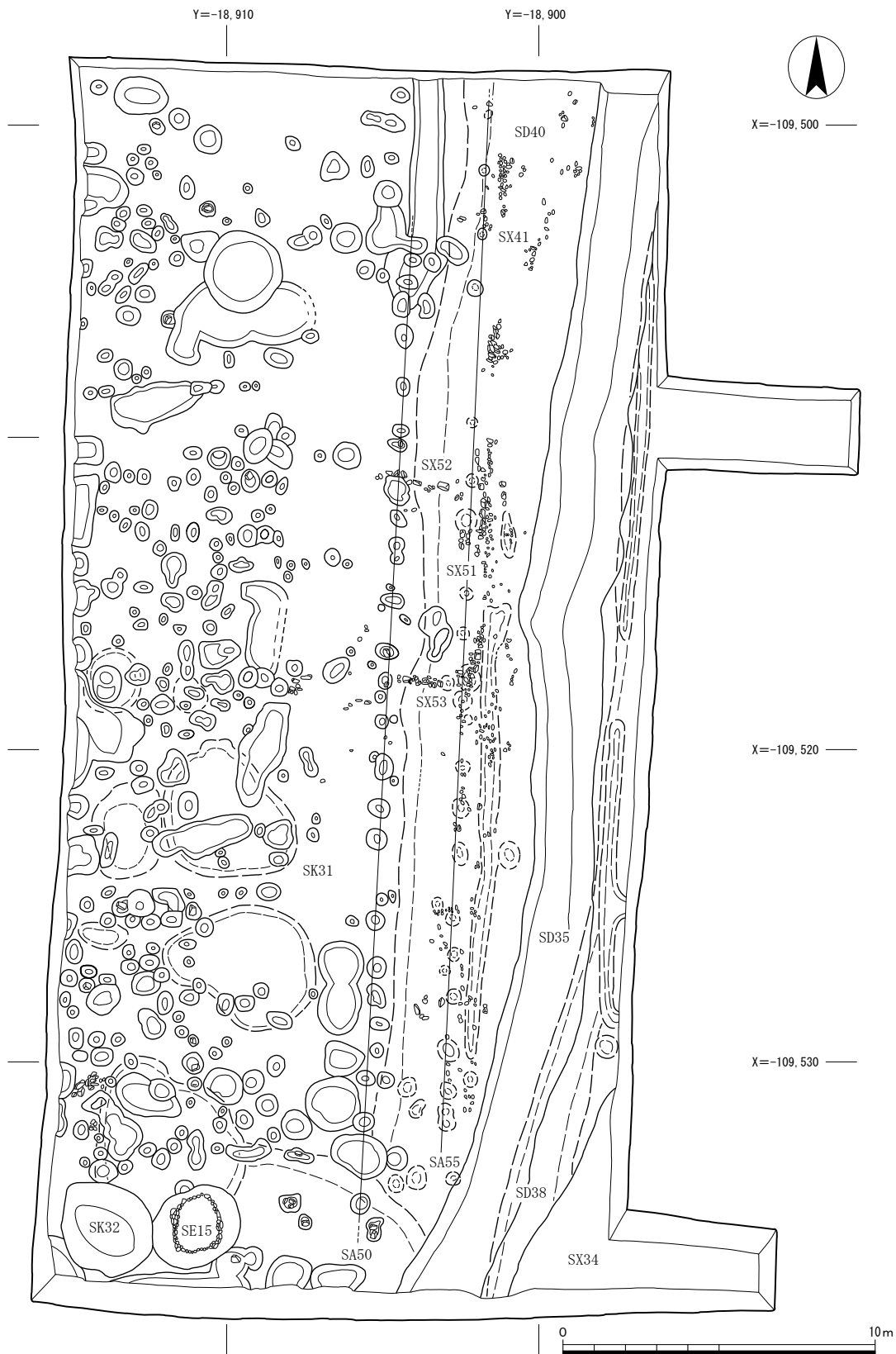


図2 遺構実測図 (1 : 200)

S A 50の間隔は1～1.5 mと一定でない。柱穴は径30cmの円形で底部に平坦な石を据えたものもある。方向は、N-35°07'-Eである。

S A 50 東側の南北溝群の時期は大きく3期に分かれる。最も古いものはSD 40で、これが埋まった後、東側にSD 38を掘削する。SD 38が埋まると、第1面で検出したSD 35が造られる。

SD 40(幅5 m以上、深さ0.6 m)は底部が平坦で、東肩はなだらかに下がる。溝内は灰色砂礫層と暗灰色砂泥層を互層にし、固く締めている。その整地の途中で石列SX 41を造る。SD 40の底部でS A 55を検出した。間隔は1～2 mと不揃いで、方向はS A 50と同一である。柱穴は径30cmの円形である。

SD 40 上面では南北方向の石列SX 51を、それと直角に東西方向の石列(SX 52・53、間隔は6.4 m)を検出した。SX 51の東側は、上面に栗石をつき固め堅固にする。

SD 38(幅7 m、深さ1 m)は東肩が調査区外へ続く。埋土は茶灰色土層・淡茶灰色砂泥層である。

遺物 遺物は整理箱で78箱分出土した。大半は土器類で瓦類は少ない。

弥生時代から古墳時代の遺物は、第2面の遺構及び第3層から少量出土した。弥生土器には壺・甕・高杯、古墳時代の須恵器には杯・甕がある。いずれも磨滅が少なく、付近に遺構の存在を窺わせる。

平安時代後期の遺物は第1・2面の遺構及び第3層から出土し、土器類と瓦類がある。土器類には土師器皿、瓦器碗、陶器鉢・甕、白磁碗などがある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、軒丸瓦は10種16点、軒平瓦は5種6点出土した。軒瓦の内7・8・13が各2点、他は1点ずつである。土製品には緑釉の土塔があり2点出土した。

鎌倉時代から室町時代の遺物は溝・土壇・井戸などを中心に多量に出土した。土器類には土師器皿・鍋・釜、瓦器碗・鍋、白磁、青磁碗・壺、陶器鉢・壺・甕などがある。土器類がまとまって出土した遺構は、SE 15(14世紀前半)、SK 31・32、SD 40などである。

近世の遺物は溝・第2層などから出土したが量は少ない。

小結 今回の調査では鎌倉時代から室町時代の遺構を多数検出し、白河地域における中世集落の様相を知る手懸かりを得た。当集落は14世紀から15世紀にかけて存続し、16世紀には廃絶し、その後水田になったと推定できる。弥生時代から古墳時代や平安時代後期の遺構はほとんど検出できなかったが、中世の遺構から遺物が多く出土しており、中世の開発により削平されたと考えられる。

検出した遺構のうち調査区中央部で検出したSA 50はSA 55を造り替えたと考えられるもので、この柵より東側には柱穴がみられないことから、住居地域の東を限るものであろう。SA 50の東側SX 51は、集落内の住居地域の区画を示すと考えられる。SX 51とSD 35との間は上面に石を敷き整地した道路状の遺構と推定できる。南北方向の柵列・溝・石列などの方位は、概ね真北より東に約3°振れる。この方位が旧愛宕郡の推定条里と似ることは注目できよう。

SA 50の西側に広がる柱穴は、かなり重複しており建物としてまとまらなかったが、柱穴は小さく、比較的規模の小さな建物と推定できる。周辺の土壌からは多量の土器が出土し、集落の生活様相を知ることができた。出土土器は土師器の皿・鍋などが多数を占め、輸入陶磁器などが少ないなどの特徴がある。

調査区東部で検出した溝と同様の溝を、調査地約270m南の法勝寺域内における第33次調査^註(1982年調査)で検出している。更に、江戸時代から明治時代の地図には岡崎中学校南西隅から南に流れる水路がみられることから、今回検出した溝は黒谷の東から当地域を通り法勝寺域に至る水路である可能性が高いといえよう。(上村和直)

註 調査次数は京都市埋蔵文化財研究所編『第9回調査成果交流会資料 山背の寺院跡』1986年による。

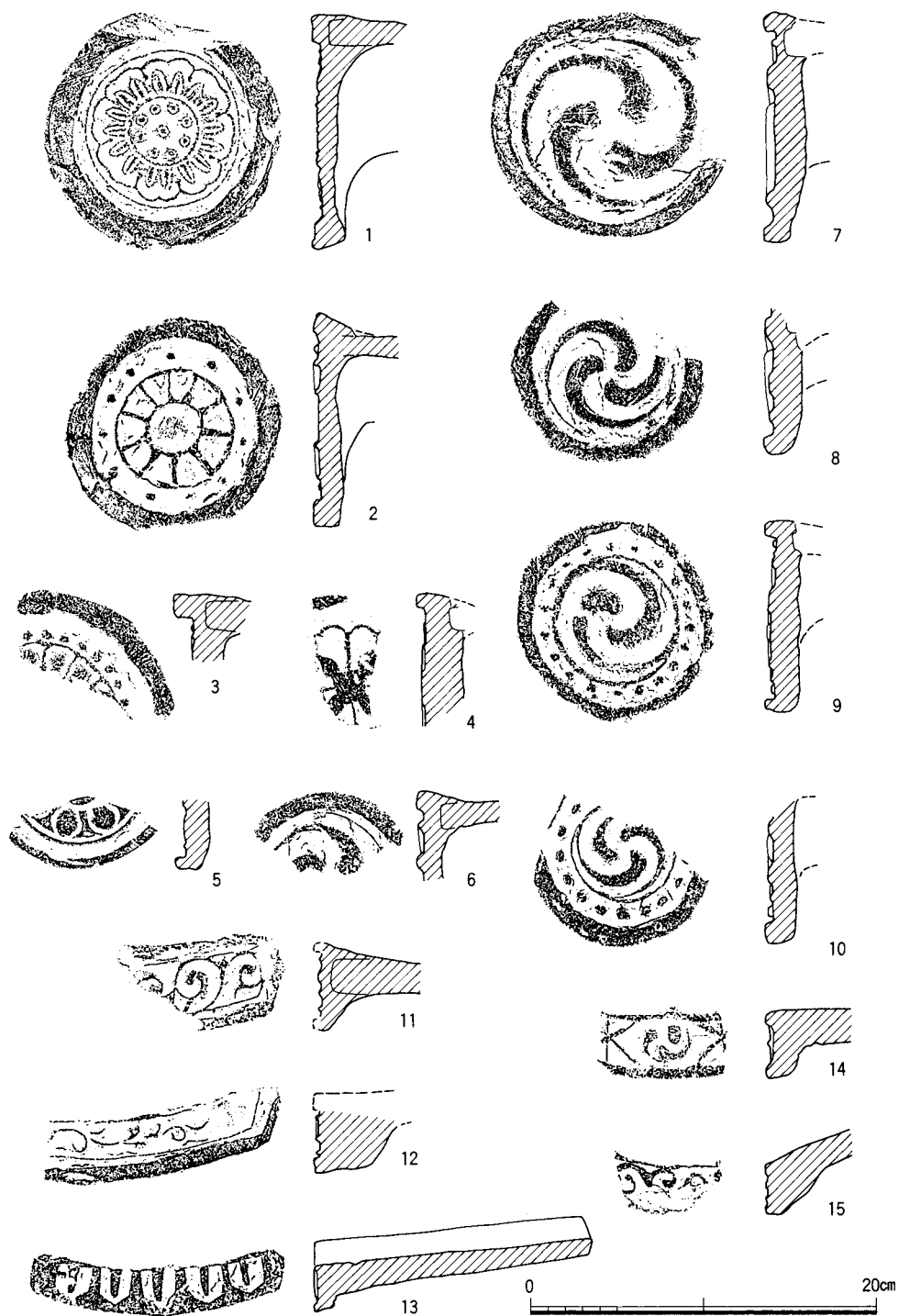


图3 出土軒瓦拓影·实测图 (1: 4)

27 法勝寺跡

経過 本調査は、法勝寺跡及び岡崎遺跡について実施し、京都市立岡崎動物園獣舎建設を契機とする。調査地点は北白川の扇状地上に位置する。法勝寺に関連する施設は、特に推定復原されている地点にはあたらないが、岡崎遺跡に関係する遺構は、昭和56年度に調査した古墳時代流路の上流部が想定できる位置にある。調査地点の層序は積土・耕作土・旧耕作土層が約1.1mあり、その下部から池状堆積土・流路堆積土層となる。

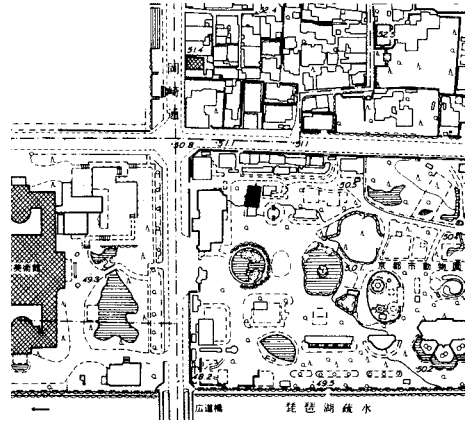


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 岡崎遺跡に関する遺構は自然流路を検出した。北東から南西方向にかけての流れを示し、最大幅は約8mある。

法勝寺に関する遺構は、調査区全体が池に入るとみられ、池に堆積した土層を2層（黒褐色泥砂層、オリーブ黒色・黒褐色泥土層）検出したのみである。堆積土の最下部、すなわち池底には木片・木葉・種実などの植物遺体が少なからず認められ、滞水状態が一定期間続いたとみられる。なお、調査区内では池の底面は比較的に平坦であり、水際に至る立ち上がりは認められなかった。

遺物は、自然流路から、弥生時代末から古墳時代初頭の壺・甕・鉢・高杯・器台・手焙形など土器類が比較的まとまって出土し、他に板状・杭状木製品が出土した。池を示す堆積土からは、平安時代末から室町時代の土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、青磁・白磁などの土器類、軒瓦、平瓦、丸瓦などが主に出土した。他に黒漆の下地に赤漆で内外面に三巴文を描く漆器碗も1点出土した。なお、自然流路から出土した主な土器を図2に示した。

小結 弥生時代末から古墳時代初頭の流路は、昭和56年度調査で検出した流路の方向と合致する。溝底の標高差からみて、昭和56年度の流路に相当し、北東から南西に向かって流れている。法勝寺に伴うとみられる池は、昭和56年度調査では検出しておらず、池の西側の水際は、該期調査地点と本調査地点に挟まれた未調査部分に位置しよう。（平方幸雄）

註 『京都市埋蔵文化財調査概要』 昭和56年度 1983年

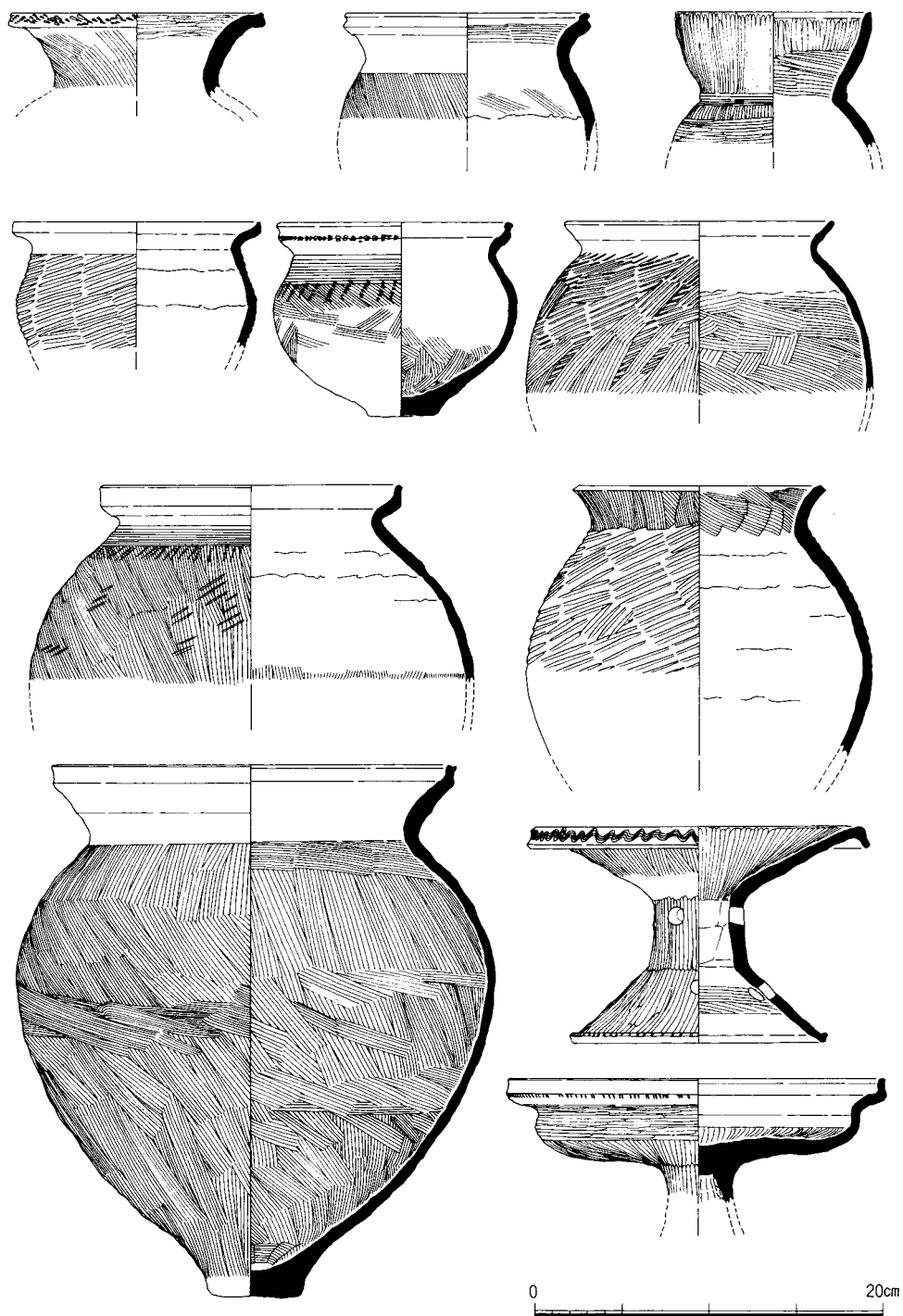


图2 出土遗物实测图 (1:4)

28 尊勝寺跡 (図版 31)

経過 調査地は尊勝寺推定寺域の北西部にあたり、岡崎遺跡にも含まれる。周辺では数次の調査を実施し、多くの遺構を検出した。調査地東側の第11次調査で瓦溜、第45次調査で建物(推定観音堂)、南側の第20・25次調査で建物(推定阿弥陀堂)、第21次調査で西_ノ辺築地などを検出した。試掘調査の結果、遺構を検出したため、発掘調査を実施した。調査の目的は、尊勝寺北限並びに寺域内の遺構検出である。

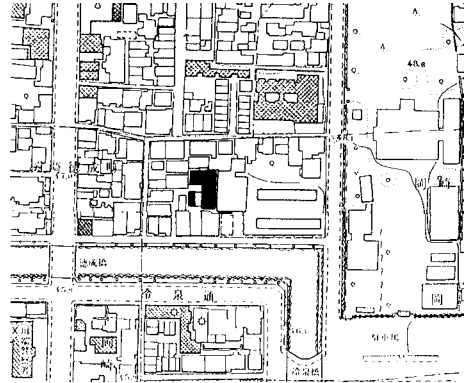


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 調査地周辺の地形は北から南、東から西へ傾斜する。遺構面も緩やかに傾斜し、西側の第44次調査地に比べ、約2m下がる。

調査地の基本層序は上から、第1層 黒色土層(近・現代盛土、厚さ20～50cm)、第2層 版築(平安時代、厚さ20～45cm)、第3層 茶灰色砂泥層(平安時代、厚さ30cm)、第4層 黄色砂層(無遺物層)である。第2層上面で平安時代後期から現代の遺構、第4層上面で平安時代後期以前の遺構を検出した。第2層上面の標高は45.5mである。

第2層は調査区全域で検出し、黒褐色砂泥層・茶褐色砂泥層・黄灰色砂泥層・灰白色粘土層などを、5～10cmの厚さに版築する。調査区北部では均一に積むが、南部では粗雑である。北部では上面に灰色砂礫層(厚さ10～20cm)を突き固め、施行範囲はSD1の南辺から南側8.3mまでに限られる。調査区南部では第2層上面の土が一辺2～4mごとに異なり、整地作業の単位と考えられる。第2層からは11世紀後半から12世紀初めの土師器、須恵器、白磁、瓦などが出土した。

調査の結果、平安時代後期以前、平安時代後期、鎌倉時代から室町時代の遺構を検出した。以下、主要な遺構についてその概略を記す。

SD 20～50 第4層上面で検出した南北・東西方向の溝(幅30～70cm、深さ5～20cm、断面逆台形)である。溝間隔は1～5m程度である。埋土は茶灰色砂泥層で、10～11世紀の土師器、須恵器、緑釉陶器が出土した。方位は検出長の長いものでN-1°28'-Eである。

SD 1 第2面上層で検出した素掘り東西溝(幅3.5m、深さ1.3～1.4m、断面逆台形)である。方向はW-1°33'-Nである。北肩2段、南肩一段の段を有する。底は平坦で東端が西

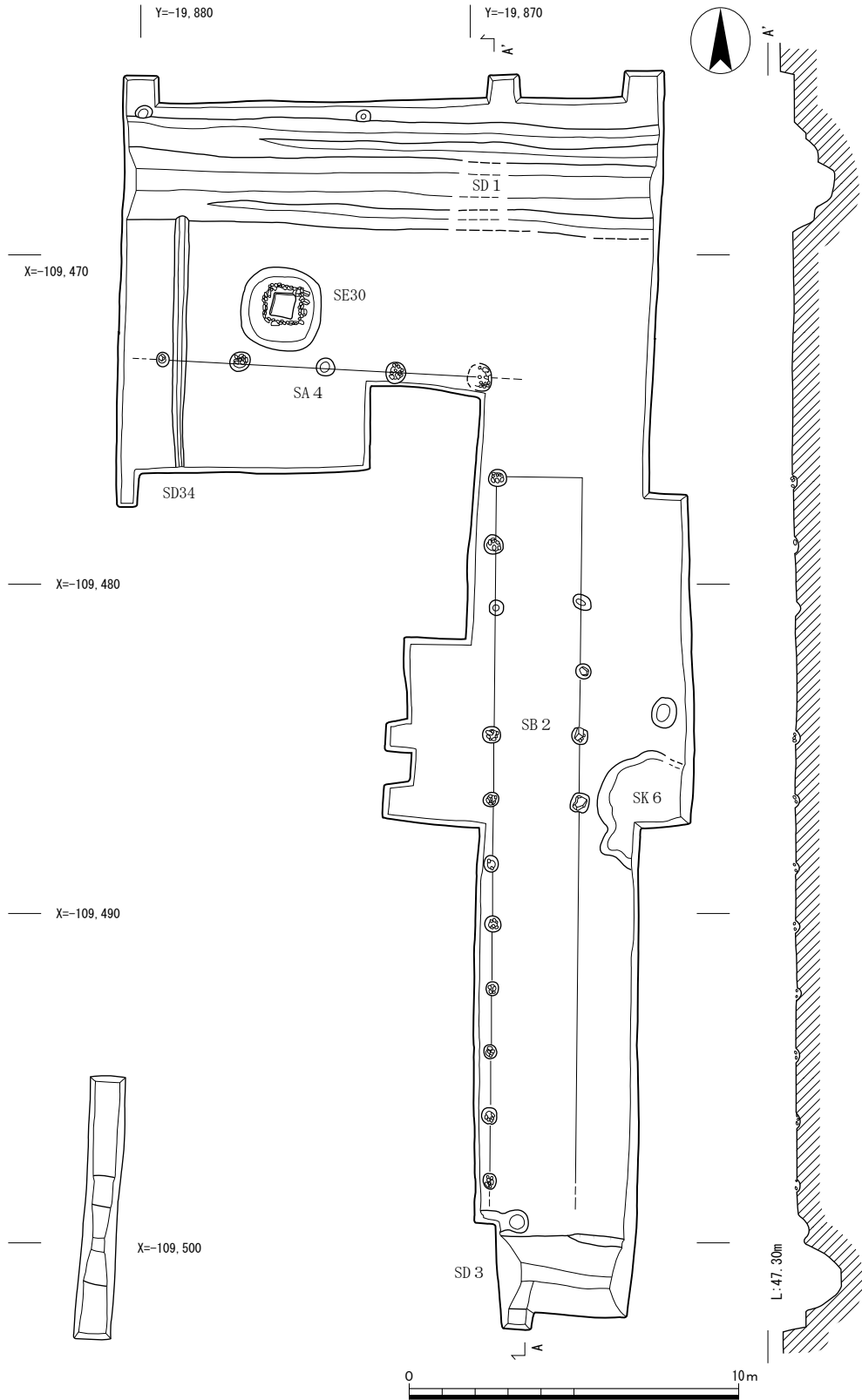


図2 遺構実測図 (1 : 200)

端より約10cm高く、東から西へ流れる。埋土は大きく上・中・下の3層に分けられ、上層は茶灰色砂泥層、中層は灰色砂泥層（間層に黄色砂が堆積する）、下層は灰色泥土層と灰色砂層の互層（拳大の石を多く含む）である。3層とも平安時代後期の瓦を多量に含む。土器は上層が鎌倉時代・室町時代の土師器・瓦器・青磁・白磁・陶器、中層は鎌倉時代・室町時代の土師器・瓦器・青磁・陶器、下層が平安時代・鎌倉時代の土師器・陶器であるが量は少ない。

S B 2 第2層上面で検出した桁行11間以上（1.95 m, 6.5尺等間）、梁行1間（2.8 m, 9尺）の南北礎石建物である。方位はN-0°16'08"-Eである。中央部3箇所礎石が残存する。掘形は方形（一辺35～40cm、深さ20～30cm）または円形で、中に径10cm程度の根石を入れる。根石の上に自然石（一辺30cm前後）の平坦面を上にして据え付ける。上面の標高は46.4 mである。掘形埋土は茶灰色砂泥層で、土師器小片が少量出土した。

S D 3 第2層上面で検出した東西溝（幅2.4 m、深さ1.4 m、断面U字形）である。方向はW-2°17'-Nである。埋土は3層に分けられ、上層は黄灰色砂泥層、中層は暗灰色砂泥層、下層は暗茶灰色砂泥層である。3層とも平安時代後期の瓦を多量に含み、鎌倉時代・室町時代の土師器・瓦器などが少量出土した。

S A 4 S D 1 南辺から南側約4.5～4.7 mの位置で検出した東西柵である。4間分検出し、東西両方向とも調査区外へ続く。柱間寸法は2.3 m（7.6尺等間）で、方位はW-3°30'12"-Nである。西端のみ礎石が残存する。掘形は円形（径60～70cm、深さ10～20cm）で、中に径10cm程度の根石を入れる。根石の上に自然石（一辺25cm）の平坦面を上にして据え付ける。上面の標高は46.5 mである。掘形埋土は暗灰色砂泥層で遺物は出土していない。

S K 6 A区中央部で検出した瓦溜（東西3 m以上、深さ約0.8 m）である。底は凹凸がある。埋土は暗茶灰色砂泥層で、平安時代の瓦類を多量に含む。

S E 30 A区北部で検出した石組みの井戸である。掘形は隅丸方形（一辺2.2 m、深さ2 m）である。井戸枠は一辺10～20cmの石を小石積みする。石の間に平瓦を若干入れる。底に一辺70cmの方形の横板組の井筒を設けている。井戸枠内埋土は暗茶灰色砂泥層で、瓦を多量に含む。掘形内埋土は茶灰色砂泥層で、小石と瓦片を含む。埋土中から室町時代の土師器皿・鍋、瓦器鍋、陶器甕などが出土した。

S D 34 A区北西部で検出した南北溝（幅45cm、深さ20cm、断面U字形）である。埋土は茶灰色砂泥層で、平安時代の瓦片、土師器小片を含む。

遺物 遺物は整理箱で180箱分出土し、その約9割が瓦類で土器類は少ない。

瓦類 瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・有段平瓦がある。主にSD1・SK6・SE30から出土した。軒丸瓦は11種21点、軒平瓦は24種45点出土した。軒瓦の内3・19・20・28は2点、5は7点、21は3点、34は6点、35は5点、他は各1点である。鬼瓦は眼の部分の破片が1点出土した。有段平瓦は広端幅22cm、狭端幅20cm、長さ28cm、厚さ2.5cmで凸面中央に4mmの段を有する。

土器類 土器類には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、磁器、陶器などがあるが量は少ない。縄文土器・弥生土器は第3層などから出土し、磨滅したものが多。平安時代の土器には土師

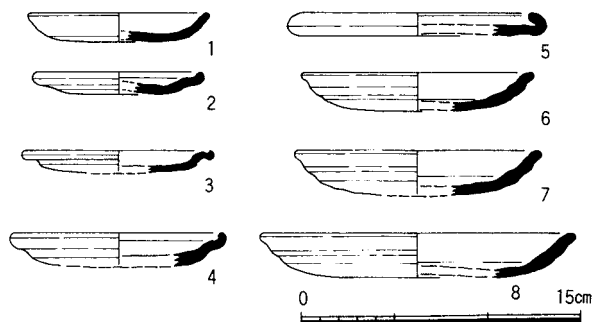


図3 第2層出土土師器(1:4)

器皿、須恵器杯・鉢、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、白磁碗、瓦器碗などがあり、第2層やSD1下層から出土した。鎌倉時代から室町時代の土器には土師器皿・碗・鍋・釜、瓦器碗・鍋、陶器播鉢・甕、青磁碗、白磁碗などがあり、第1層や井戸・瓦溜から出土した。

小結 検出遺構のうち、SD1とSB2は方向(北で東へ1°前後振れる)が揃い、これまで六勝寺域で検出した建物や溝の方向とほぼ一致している。出土した遺物などから考え、これらの遺構が尊勝寺に関連するものであると推定できる。SB2は調査範囲が狭いため性格については不明である。今回検出した地業は、すでに周辺の調査で類似したものを検出しており、建物の範囲に限らず尊勝寺域北西部をかなり広範囲に施工したことが明らかになった。時期は出土遺物から11～12世紀と推定できる。SD1南北両側は上面に礫を入れ更に堅固にし、礫の南辺がSD1の方向とほぼ一致することから、SD1に関連するものと考えられる。

今回の調査では尊勝寺の寺域内状況を知る上で貴重な資料を得ることができた。また検出したSD1は、尊勝寺のみならず、六勝寺域の地割りを復原する上での重要な手懸かりとなる。

(上村和直)

註 調査次数は「26 岡崎遺跡」と同資料。

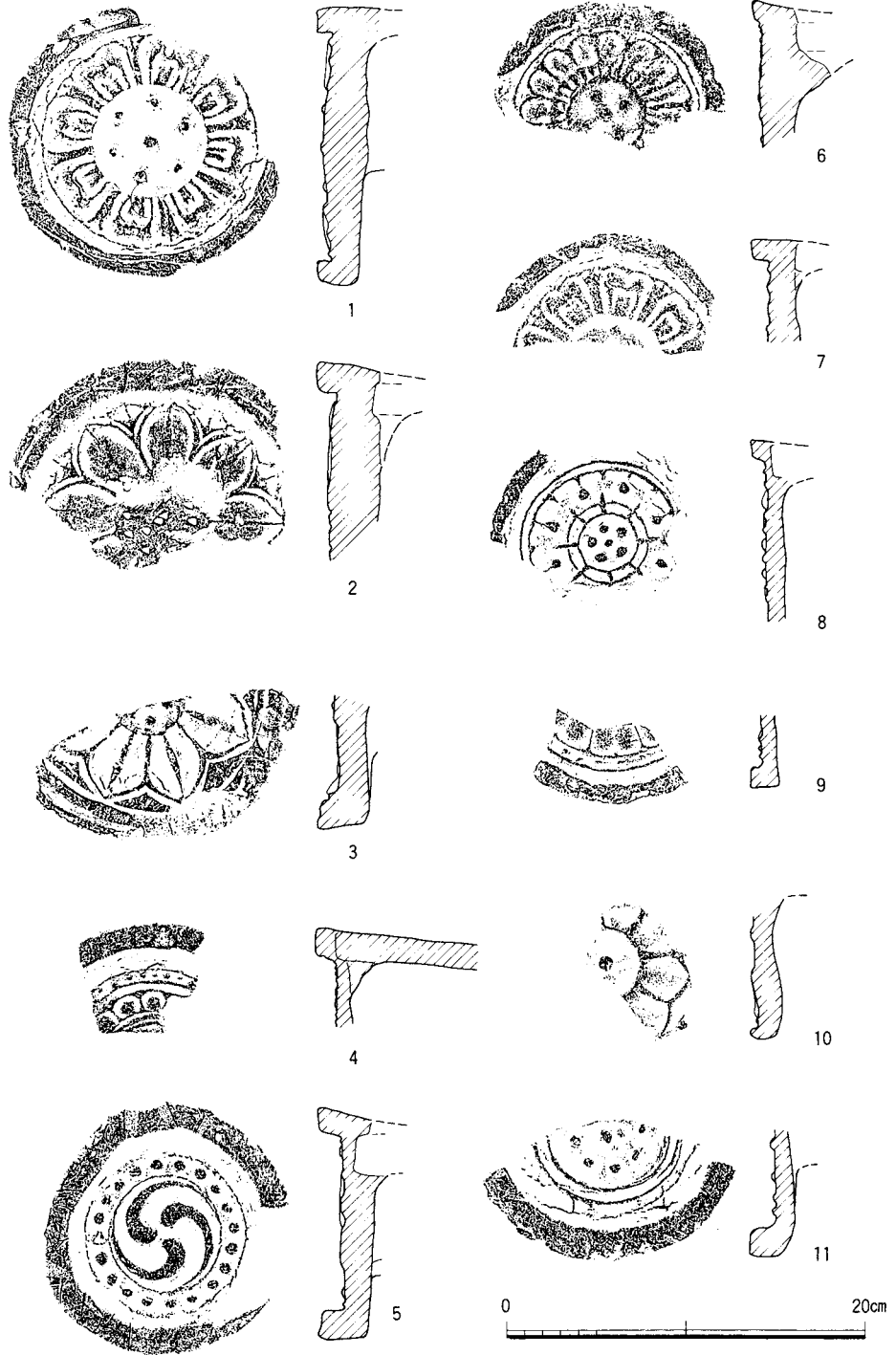


图4 出土軒丸瓦拓影・実測図 (1: 4)

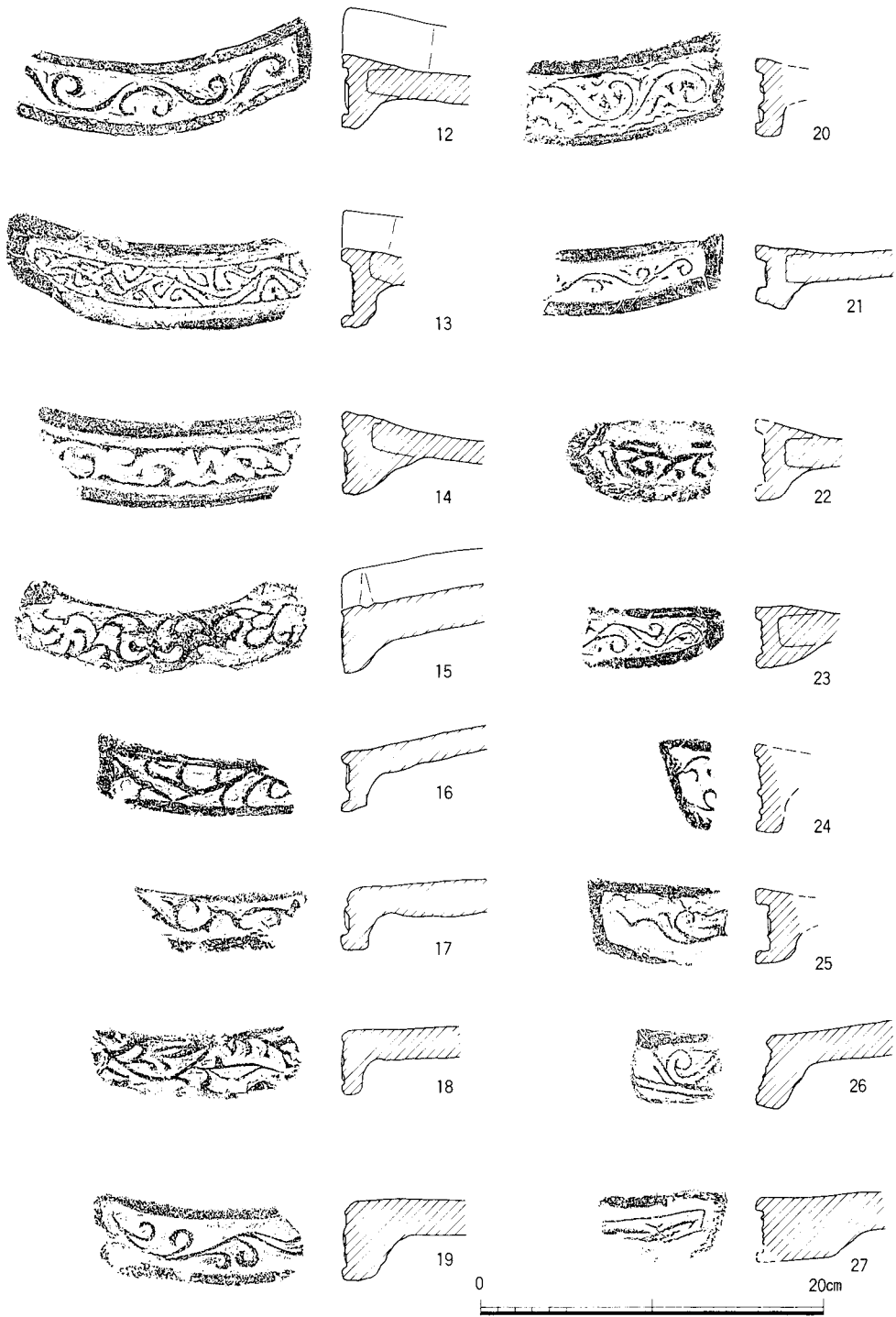


图5 出土軒平瓦拓影·实测图(1:4)

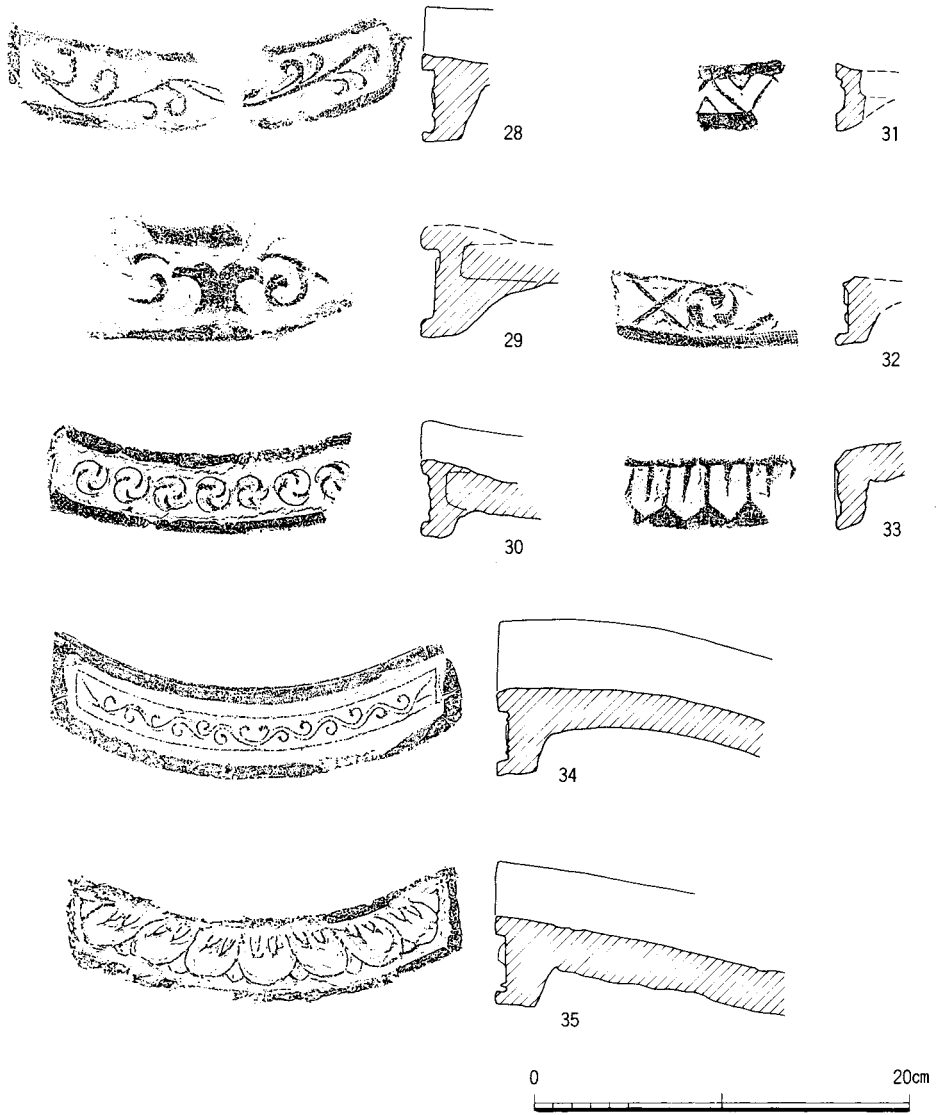


图6 出土軒平瓦拓影・実測図(1:4)

IV 鳥羽離宮跡（調査位置図は図版3）

29 鳥羽離宮跡第122次調査（図版32）

経過 調査地は白河天皇陵（成菩提院陵）の南側に隣接した水田地である。過去の調査では、白河天皇陵を画すると思われる外堀を第91次・第96次・第121次の各調査で検出している。そのため今調査では、外堀の南辺が東西に検出できることが予想された。調査区はほぼ正方形に設定したが、堀の石垣を検出した時点で、石垣の部分を隣地の境界線近くまで拡張した。検出した堀の石垣は土嚢に詰めた砂で覆い、調査を終了した。

遺構 検出した遺構には、東西方向の堀がある。幅7m～8.8m、深さ1.75m～1.90mを測る。堀の南肩は素掘りのままで、北側に石を積み上げて護岸している。これまでの調査と同様に石垣の上部は抜き取られていたが、今調査では他の調査と異なる点がみられた。それは既往の調査例では、大半が石を横にして積み上げていたのに対して、今回は縦に使用している箇所がみられた。調査区の中央部では横に階段状に積んでいるが、東側と西側では最下段を横に置いた後、その上に平たい自然石を縦に積み並べたものである。石材は花崗岩・チャート・砂岩などである。裏込めには凝灰岩の破片を多く用いていた。堀の底部では遺物の出土が多くみられ、土師器の皿が原型に近い状態で出土した。

遺物 出土した遺物は整理箱で36箱を数え、瓦類・土器類・金属製品などがある。複弁八弁蓮華文軒丸瓦は完形で、玉縁部には釘穴が開けられ、その中にL字形の角釘が残存していた。第121次でも同範の軒丸瓦が多く出土している。その他に鬼瓦・面戸瓦・丸瓦・平瓦がある。金属製品として風招と銅板がある。いずれもわずかに金鍍金が残っている。銅板は第121次でも出土しており、垂木先金具と思われる。

小結 今調査では予想通りに白河天皇陵の外堀を検出することができた。そのため南北の規模を確定することができた。御陵は堀の内側で南北55m、東西54mを測る大きさである。またこの堀はこれまでの調査と同様、内側を石垣で護岸している。今回出土した複弁八弁蓮華文軒丸瓦・偏行唐草文軒平瓦・鬼瓦・面戸瓦は、鳥羽離宮跡で出土する通称「有段瓦」と胎土・焼成が似通っているため、同じ瓦窯跡で生産されたと推定される。そしてその窯跡としては、火ぶくれあるいは癒着している有段瓦の出土した鳥羽離宮跡第30次調査の周辺が有力である。（鈴木久男・前田義明）

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和62年度 1988年報告

30 鳥羽離宮跡第123次調査

経過 調査地は現在の竹田内畑町の集落内に位置し、周辺には民家が建ち並んでいる。今調査は民家の新築に先だって行ったものである。当初試掘調査を実施し、平安時代から江戸時代までの各時代の遺構を発見したため、本調査へと移行した。周辺の調査成果をみると、中世以降の建物や井戸を検出している。調査区は建物建築範囲内で設定し旧耕作土及び近現代層まで重機を導入して掘り下げた。掘削土は場外へは搬出せずに、場内処理をした。

遺構・遺物 検出した遺構には、平安時代後期から江戸時代に至るまでの柱穴・溝・土壇・井戸などがある。大部分の柱穴は中世に属し、底部に根石を置くものがある。しかし調査面積が狭いことやピットの重複が多いことなどにより、建物の様相は明確に得なかった。このような状況は、東方60m離れた新堀川通の道路建設に伴う発掘調査の第54次・第71次・第88次と同様である。井戸は4基検出した。すべて素掘りの状態であるが、井戸枠を抜き取った後、きれいな土で埋め戻している。出土遺物は整理箱に22箱を数え、平安時代後期から江戸時代まで及ぶ。瓦・土師器・須恵器・陶磁器などがある。

小結 今回の調査では、東殿に造営された主要な建物遺構やその配置を知るような手懸かりは得られなかった。しかしながらここ数年来実施してきた調査によって、東殿の西限及びその周辺部の実態がかなり明らかになってきた。まず東殿の西限については第18次や第67次・第73次そして今年度実施した試掘調査から第75次調査地付近と考えられる。更に境界には園池が設けられていた可能性が高い。次に第88次調査地以北で検出した掘立柱建物群の西限は当調査地付近にあり、西へは展開しないと思われ、更に南へも広がらない。このような現象は現在の町ともよく符合している。

(鈴木久男)



図1 調査区全景(南から)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』

昭和62年度 1988年報告

31 鳥羽離宮跡第 124 次調査

経過 調査区は東殿北東部に位置している。調査区の南西部で実施した第 29 次では、柱穴群と井戸を重複した状態で検出している。このようなことから雑舎的な建物群が推定される地区と考えている。当初小規模な試掘調査を実施し、石敷遺構やピットを検出したため、本調査に移行した。まず南側に 24 m × 4 m の東西に長い調査区を設定したところ、西半部で南北方向の堀状遺構を検出した。そのため調査区を北側へ拡張した。

遺構 検出した主要な遺構には井戸・土塋・溝がある。溝は南北方向の堀状遺構である。幅 6～7 m、深さ 0.6 m を測る。溝の底部では多数の不定形土塋を検出したが、その性格は不明である。溝の堆積状況からは新旧が認められ、西側が新しい。そして西側では腐植土と共に平安時代後期の遺物が多量に出土した。井戸は方形を呈し、一辺 0.7 m を測る。薄い縦板の木枠を有し、底部に曲げ物を据えている。井戸からは室町時代の土器のほか、平安時代後期の瓦が出土した。

遺物 出土した遺物は整理箱で 95 箱を数える。平安時代後期から江戸時代まで及び、瓦、土器、木製品、石製品、銭貨などがある。軒瓦には山城系・播磨系・讃岐系・尾張系・河内系がみられる。東殿安楽寿院跡ではこれまで、尾張系の灰釉を施した瓦が出土することが知られていたが、今調査でも巴文軒丸瓦、蓮華文軒平瓦がまとまって出土した。溝から出土した土器には土師器、瓦器、須恵器、土師質土器、輸入陶磁器がある。また土師器小皿に人面を墨書したものが 1 点ある。太い眉、太い目などユーモラスに表現している。木製品には呪符・柿経・塔婆・題箋・漆器・折敷・下駄・木球などがある。柿経は妙法蓮華経を書写したものである。

小結 今調査で検出した堀状遺構は、調査区南端の溝と L 字形もしくは十字形に接続する可能性があり、何らかの区画を想定させるものである。今後の調査の進展を待ちたい。出土遺物に関しては、溝内から出土した呪符資料が重要である。呪符には裏面に方角が墨書されており、何らかの施設に東西南北に各一枚ずつ打ち付けられていたことが考えられる。また塔婆に「藤原氏女」と墨書されているものがあり、この一群が藤原氏と密接な関係にあることを示しており注目される。現在の所、共伴遺物から 12 世紀後半の段階が考えられ、古代末期の呪術や信仰に関する貴重な資料を得ることができた。 (鈴木久男・前田義明)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 62 年度 1988 年報告

32 鳥羽離宮跡第125次調査

経過 調査地は白河天皇陵及び第122次調査地と東西道路を隔てた南側に位置する水田地である。事務所が建築されることになり、まず試掘調査を実施したところ、陸部の可能性があったため本調査に移行した。調査区は白河天皇陵側に重点を置き設定した。その結果第122次とは堆積状況が異なっていることが判明した。明確な鳥羽離宮関係の遺構は検出できなかったが、並行期の遺構面を確認した。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、上から耕作土層の黒褐色泥土層(2.5 Y 3/2)、暗オリーブ褐色砂泥層(2.5 Y 3/3)、オリーブ黒色泥土層(5 Y 3/2)、暗褐色泥土層(2.5 Y 4/2)、黄灰色泥土層(2.5 Y 4/1)、オリーブ黒色泥土層(7.5 Y 3/2)そして地山層の暗オリーブ灰色シルト層(5 G Y 4/1)の順である。遺構には調査区西部で検出した南北方向の溝がある。北東から南西へやや湾曲する浅い溝で、幅1.2mと深さ0.15mを測り、灰色砂の埋土である。出土遺物はみられず、時期は確定し難い。この溝は暗オリーブ灰色シルト層上面で検出した。この上層のオリーブ黒色泥土層からは、少量であるが、古墳時代後期から平安時代後期までの遺物が出土し、暗オリーブ灰色シルト層上面が鳥羽離宮並行期の遺構面に相当すると思われる。出土遺物は整理箱に2箱を数えるに過ぎない。大半が小破片である。古墳時代後期から平安時代後期まで至る。

小結 調査地は白河天皇陵の南側に近接し、成菩提院に関する遺構が期待されたが、明確な遺構は検出できず、遺物の出土量も極めて少なかった。しかし堆積状況から調査区は陸部と考えた。その上層に凝灰岩の屑が混入しており、近辺で凝灰岩の加工を行った可能性がある。鳥羽離宮並行期の遺構面は標高12.7mを測るが、第122次と比較すると、1.1mも低い。この比高差の検討は今後の課題である。

(前田義明)



図1 調査区全景(南から)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』
昭和62年度 1988年報告

33 下鳥羽遺跡（図版 33～35）

経過 今調査は研修ホテル建設に伴う事前調査として実施した。調査地は下鳥羽公園の南側に位置し、これまで公園内で試掘調査が実施されているが、自然流路内にあっており、遺構・遺物は発見されていない。一方、公園の北東方向で昭和61年度に下鳥羽遺跡としては最初の発掘調査が実施され、古墳時代から平安時代の遺構・遺物が良好に遺存していることが判明した。今回は当初試掘調査を実施し、弥生時代・古墳時代の遺物包含層を検出した。よって

本調査に移行した。まず建物予定地に調査区を設定したが、調査の進行に伴って、検出した溝が調査区外に延び、その方向や規模を確認する目的で部分的に拡張を行った。調査の結果、弥生時代から中世までの遺構・遺物を検出することができた。

遺構 今回の調査で検出した遺構は弥生時代前期から中世まで及ぶ。その主要なものは弥生時代前期の土壇・溝、中期の方形周溝墓状遺構・竪穴住居、後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居、古墳時代後期の土壇墓・溝、平安時代中期の井戸、鎌倉・室町時代の耕作に伴う湿気抜溝群などがある。弥生時代前期のS K 161は調査区中央部で、S K 163は調査区南端部で検出した。S K 161は円形、S K 163は長円形を呈し、埋土には炭と灰が多く混入していた。S D 160は調査区を南北に蛇行しながら縦断している。幅2.5～3m、深さ0.7mを測る。中期の方形周溝墓状遺構は、周溝の東辺部のみを検出し、主体部は調査対象地外にあたるため不明である。南北に2基（S D 164・224）を並行して検出した。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居は計15戸検出した。円形・長方形・方形があり、調査区中央部以南の住居は削平が激しく、遺存状態が悪い。9号と11号の円形住居は弥生時代後期である。古墳時代後期には土壇墓4基と溝が1条ある。S K 72は長方形（幅0.6m、長さ2.1m、深さ0.1m）を呈し、埋土には焼土と炭を多く含み、完形の土器（須恵器蓋杯4個）を埋納していた。S D 34は弓状に湾曲し、西側の水田に延びている。平安時代中期には唯一井戸が1基ある。井戸は底部に大型の曲物を置き、その上部を縦板組としたものである。直径2m、深さ2mを測る。

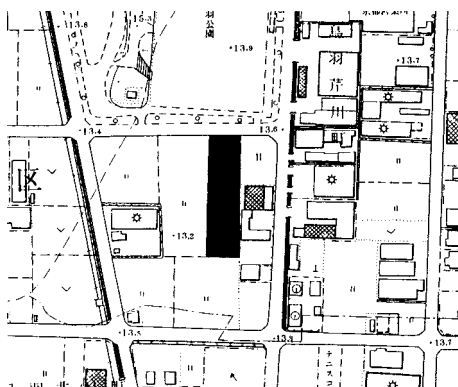


図1 調査位置図 (1:5000)

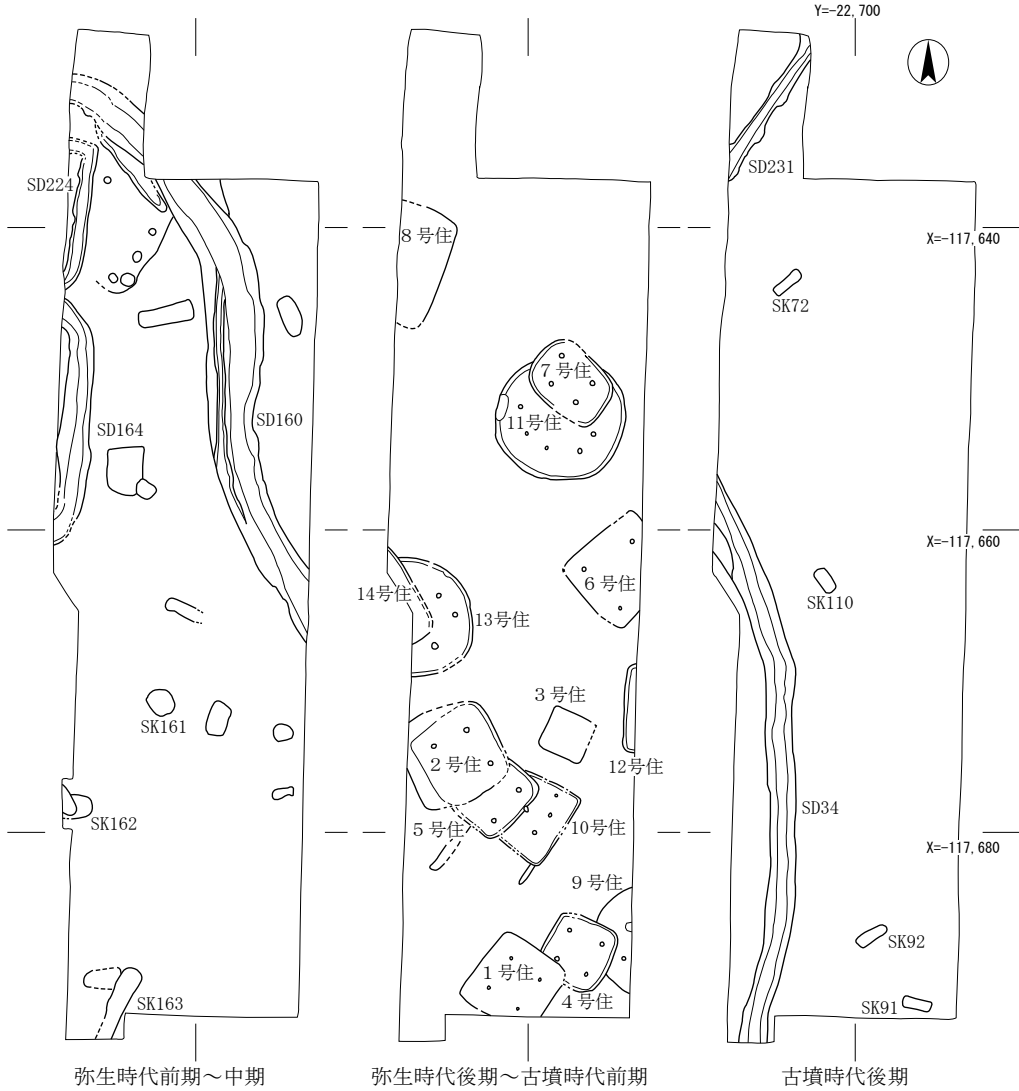


図2 遺構配置図 (1 : 500)

遺物 出土遺物は、弥生時代前期から室町時代までである。その中で注目される遺物としては、溝や土壇から出土した弥生時代前期の土器群がある。また石器には石包丁・石斧・石鏃、土製品として紡錘車・土錘がある。SK 161とSK 163出土土器の一部を図示する。SK 161には壺(1～6)・甕(8～18)・深鉢(7)がある。壺には肩部に削り出しの段を設け、鋸歯文を描いたもの(1)や、削り出しの突帯を有するもの(4)がある。甕には頸部に沈線文を施すもの(8～10・14)、口縁にキザミを有するもの(14・15)がある。深鉢は直立する口縁部

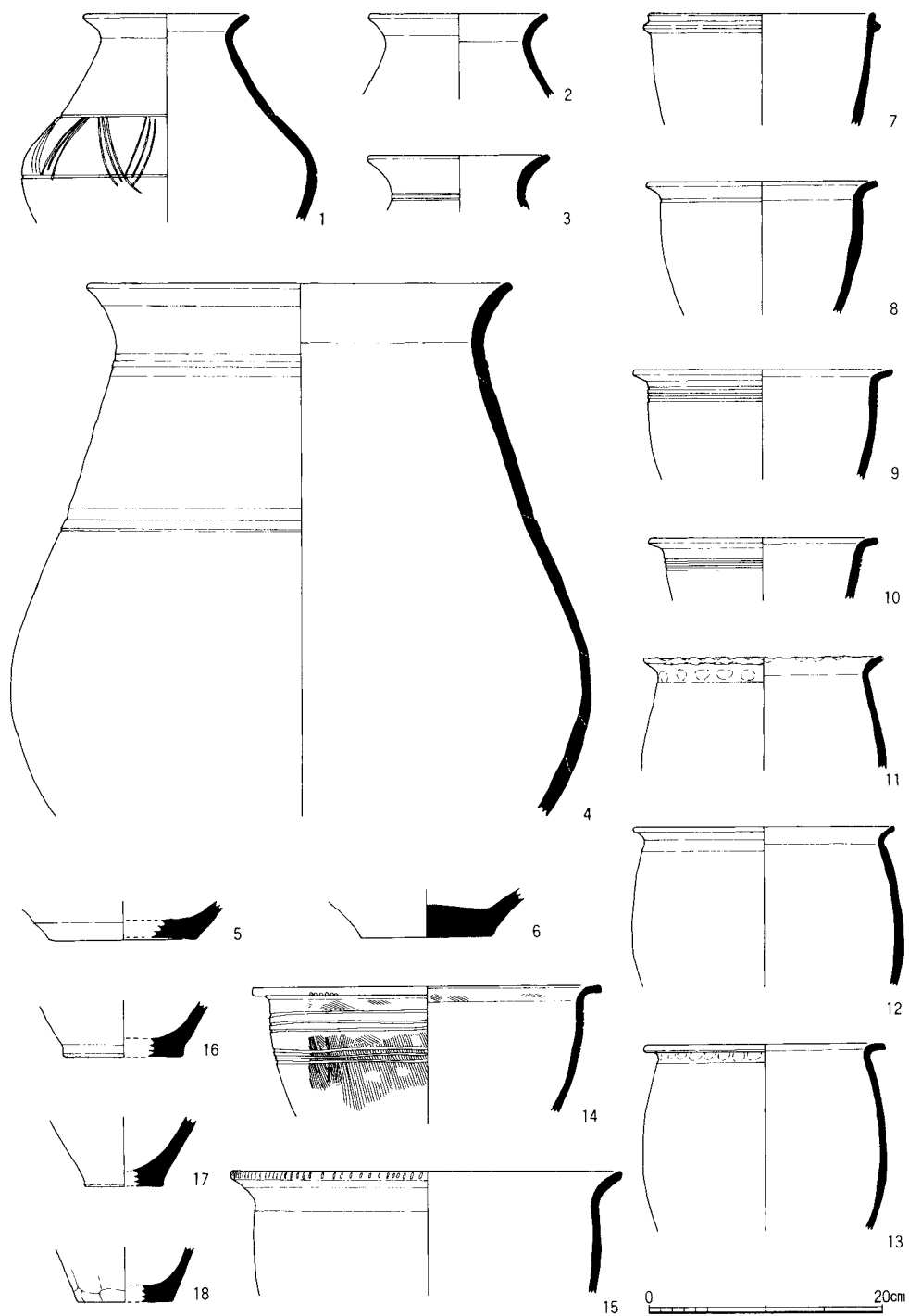


图3 SK 161 出土土器实测图 (1:4)

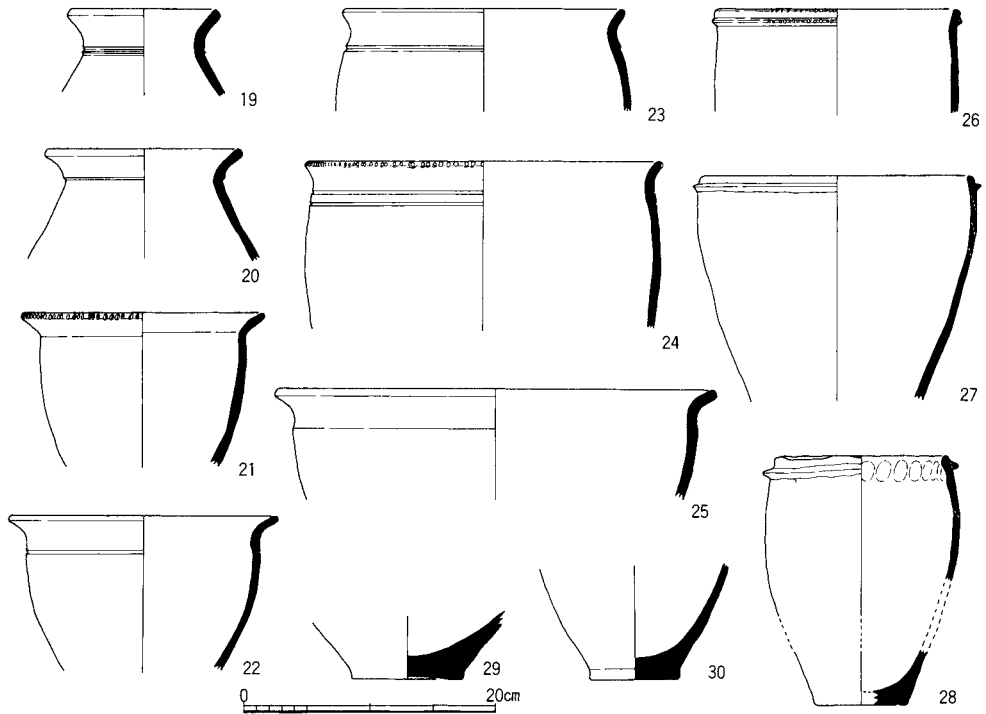


図4 SK 161 出土土器実測図 (1:4)

に貼り付けの突帯文を施す。SK 163もSK 161同様、壺(19・20)・甕(21～25・29・30)・深鉢(26～28)がある。他に木の葉文の壺片がある。木の葉文は壺の肩部に描き、X字形の軸に弧線を添えたものである。弥生時代後期の遺物は、11号住居からまとまって出土し、甕・壺・高杯・器台がある。古墳時代後期には、土師器甕・壺・高杯、須恵器甕・蓋杯、埴輪がみられる。平安時代以降の遺物は極めて少ない。

小結 今調査では弥生時代前期から中世に及ぶ遺構・遺物を検出し、重複の激しい複合遺跡であることが判明した。山城地域でも初期に属すると思われる弥生土器の一群が出土し、弥生文化の伝播を考える上において、重要な資料が得られた。遺構の性格から調査地の変遷を大まかにみると、弥生時代前期に始まり、中期に方形周溝墓状遺構が2基認められ、墓域と考えられる。その後、古墳時代前期までは集落が形成される。後期になると土壙墓群がみられる。そして飛鳥時代以降、平安時代までは不明であるが、平安時代中期には井戸があり、土器の出土もみられ、集落と思われる。鎌倉時代以降は耕作用の湿気抜溝が多数あり、水田となり現在まで至っている。以上のように遺構の重複が激しく、当該地は下鳥羽遺跡の中心地域に近いと推察される。

(前田義明・磯部 勝)

V 中臣遺跡

34 中臣遺跡 68 次調査

経過 調査地点は、栗栖野丘陵と通称されている低位段丘の高位面から南西へ約 70 m 旧安祥寺川寄りに位置する低位面にあり、中臣遺跡の西部にあたる。周辺部における既往の調査成果によると、弥生時代後期以降の竪穴住居を始めとし、集落を構成する遺構群が多数分布しており、当該地にもこれらの遺構群が遺存していると想定されていた。このような地点に住宅建

設が計画された。遺構等の有無を明らかにする目的で試掘調査を実施したところ、遺物包含層などを認めたことにより発掘調査を実施する運びとなった。

遺構・遺物 主な遺構は、弥生時代後期の土壇 1 基、古墳時代後期の竪穴住居 1 戸・溝 1 条などがある。そのほかに古墳時代前・後期の遺物包含層を検出した。

古墳時代後期の竪穴住居は、平面形が北東—南西方向に長い長方形を呈し、長軸 4.82 m、短軸 3.78 m である。長軸方向の西壁面にカマドを付設し、支柱穴は 4 箇所ある。溝は、断面形が逆台形を呈し、北西—南東方向に延長する。

遺物は、整理箱で 4 箱出土した。主な遺物には、縄文時代晩期の深鉢、弥生時代後期から古墳時代前期の壺・甕・高杯・器台、古墳時代後期の土師器甕・杯・椀、須恵器壺・杯などがある。なお、縄文土器は古墳時代前期の遺物包含層に混入した状態で出土し、突帯文を有する深鉢が主体を占める。

小結 古墳時代後期に形成され、周辺一帯に展開する竪穴住居のカマド付設位置についてみると、西北壁に付設 15、東北壁に付設 8、西南壁に付設 2、西壁に付設 1、不明 5 となる。竪穴住居相互が近接した位置・時期にあつてカマド付設位置（方向）が異なる例、あるいは同一方向に付設される例があるなど、そのあり方は一様でなく、このような現象面の背景について様々な想定も可能であるが、今後の調査例の増加を待って検討すべき課題である。

(平方幸雄)

『中臣遺跡発掘調査概報』 昭和 62 年度 1988 年報告

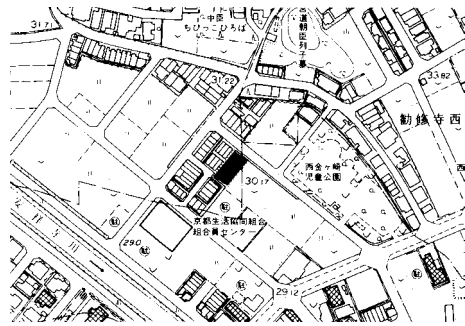


図1 調査位置図 (1:5000)

35 中臣遺跡 69 次調査

経過 調査地点は、栗栖野丘陵と通称される低位段丘の高位面に位置し、段丘崖に接する。

当該地に住宅建設が計画され、遺構等の有無を確認する目的で試掘調査を実施したところ、遺物包含層を確認した。周辺部における既往の調査成果とも照合し、何らかの遺構が遺存すると予想できたことで、発掘調査を実施した。

遺構・遺物 主な遺構は、奈良時代の土壇1基、平安時代の土壇1基、同時代と推定できる

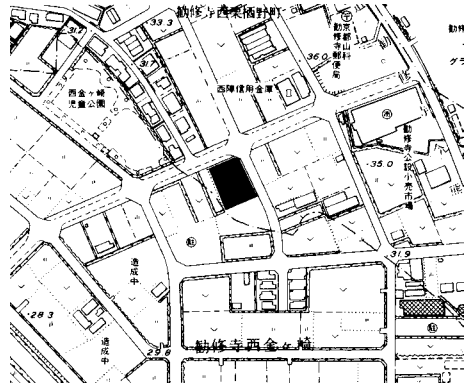


図1 調査位置図 (1:5000)

掘立柱建物2棟、室町時代以降の溝2条がある。そのほかに、古墳時代後期の遺物包含層を、調査区南西側で検出した。

掘立柱建物は2棟とも調査区外に延長し、全体の規模は不明であるが、建物の半分ほどを調査し得た1棟についてみると、梁行1間以上、桁行4間の建物で、柱間は梁行・桁行とも1.5 mある。建物の方位は、N-37°-W、N-40°-Wを示す。土壇は、平面形が長方形と長楕円形を呈し、前者は長軸約3.5 m、後者は長軸約1.6 mある。溝は、北西—南東方向に伸長し、段丘崖にはほぼ沿った方向を示す。

遺物は、整理箱で1箱出土した。主な遺物には、古墳時代後期の土師器甕、須恵器甕・高杯・杯、奈良時代の土師器甕・杯、須恵器平瓶、鉄器、平安時代の土師器杯、室町時代の土師器皿などがある。

小結 段丘高位面で営まれた集落は、これまでの調査成果(5・43・44次調査)により、古墳時代後期から奈良時代まで継続することが知られていた。今次調査の結果、奈良時代以降、少なくとも平安時代まで集落が継続すると推定できる資料を得たことになる。また、44次調査の奈良時代の掘立柱建物は、南北方向に規定される方位を示し、条里制との関連を窺わせるが、今次調査例はそれぞれN-37°-W、N-40°-Wの振れを有し、むしろ段丘崖の方向に近い。これは、地形的な制約を受けた結果、単にこのような振れを有しただけなのか、あるいは平安時代以降、条里制に制約を受けない建物が出現するのか、今後検討をしてゆく上で貴重な資料である。

(平方幸雄)

『中臣遺跡発掘調査概報』昭和62年度 1988年報告

36 勸修寺旧境内（図版 36）

経過 市道御陵六地藏線の拡幅工事を契機として、勸修寺旧境内で実施した発掘調査である。調査地点は、勸修寺々域の推定東限付近に相当する。勸修寺旧境内に分布する遺跡に対しては、これまで下水道埋設工事などを契機とする立会調査などを実施しているが、中世以前の勸修寺関連遺構は検出していない。このような調査経過があるため、前年度に対象地部分の試掘調査を実施した。その結果、遺構及び遺物包含層を確認し、今年度に発掘調査を実施することになった。調査対象地が東西 20 m、南北 275 m と狭長であり、また調査開始時においても未買収地があるなどの事情を考慮して、調査区を南からⅠ～Ⅲ区とした。更に、Ⅱ・Ⅲ区については1～4、1～3トレンチ（以下Tと略称）に分割した。なお、現・市道部分も対象地に含まれているが、大部分がすでに削平されているため新たに拡幅される部分（東西 8～10 m）を対象とした。

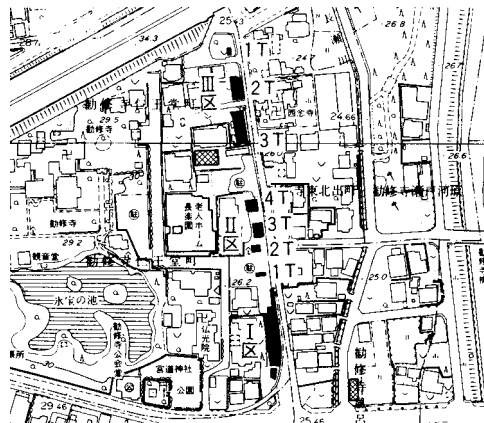


図1 調査位置図（1:5000）

遺構・遺物 Ⅰ～Ⅲ区の順で検出遺構の概略を以下に記す。

Ⅰ区 遺構の時期は、出土遺物からみて縄文時代中・後期、弥生時代後期、平安時代から江戸時代である。縄文時代の遺構は土壙状落込5基があり、Ⅰ区中央から南に点在する。弥生時代の遺構はピット状落込を1基のみ検出した。平安時代の遺構は、井戸・柱穴・石組土壙・土壙などがある。井戸は平安時代末から鎌倉時代前半に属し、掘形の平面形は不整隅丸方形で規模は80×100cm、深さ120cmある。鎌倉から室町時代の遺構は池・柱穴・土壙などがある。池はⅠ区のほぼ中央付近で検出したが、上半は後世の削平を受けている。池底には拳大の礫（玉石）を全面に敷き詰めている。南北の検出長約22 m、深さ10～20cmある。室町時代の遺構は柱穴・礎石・集石土壙・土壙など多数ある。

Ⅱ・Ⅲ区 主要な遺構は、Ⅱ・2・4T及びⅢ・2Tで検出した。Ⅱ・2Tでは、江戸時代末の宅地・建物・石組井戸を検出した。Ⅱ・4Tでは、平安時代末から鎌倉時代前半の南北溝1条を検出した。溝の西肩部は調査区外にあるが、最大検出幅約4 m、深さ約70cmある。Ⅲ・2Tでは、江戸時代の溝・柱穴・土壙などを検出した。

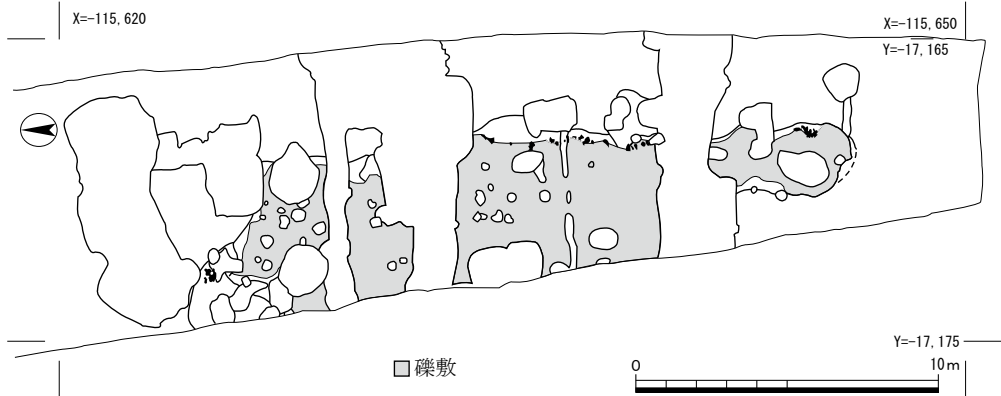


図2 池SG1平面図(1:250)

遺物は、縄文土器、弥生土器、石器(石鏃)、平安時代中期から江戸時代までの土器類、瓦類、銭貨、金属製品、木製品など多岐にわたり、遺物整理箱で57箱出土した。このうち主な軒瓦を図3に示した。なお、図示したII-2Tの軒瓦は近世の整地層に混入した状態で、試掘調査時の軒丸瓦はI区から出土した。

小結 当初、調査地点は勸修寺々域の推定東限付近に相当するため、それに関連する何らかの遺構が存在していると予測していた。今回の調査で寺域を画する、あるいは何らかの区画を示すと考えられる遺構としては、II-4Tで検出した南北溝をあげることができる。この南北溝は、平安時代末から鎌倉時代前半の遺物が出土し、溝の埋没時期が鎌倉時代前半に収まること、最大検出幅が約4mあることなどから、勸修寺に関連した区画溝である可能性が高い。勸修寺に関連する遺構としては、I区で濃密な分布状態を示す平安時代から室町時代の遺構群がある。これらの遺構群のうち池SG1は、勸修寺の園池を構成する池の一部であり、勸修寺に直接関連する遺構といえよう。

さて、勸修寺の創建年代は判然としないが、延喜五年(905)には定願寺になっており、創建年代はこれより極端には遡らないと考えられている。今回の調査で、平安時代前期に相当する遺構は検出していないが、10世紀中頃に相当する遺構としてI区の土壙2基がある。これまで当該時期の遺構・遺物が皆無であったことを考えると、わずか2基とは言え、当時の一端を知る手懸かりを得ることができたといえよう。(平方幸雄・菅田 薫・高橋 潔)

註 『京都市埋蔵文化財調査概要』 昭和58年度 1985年報告

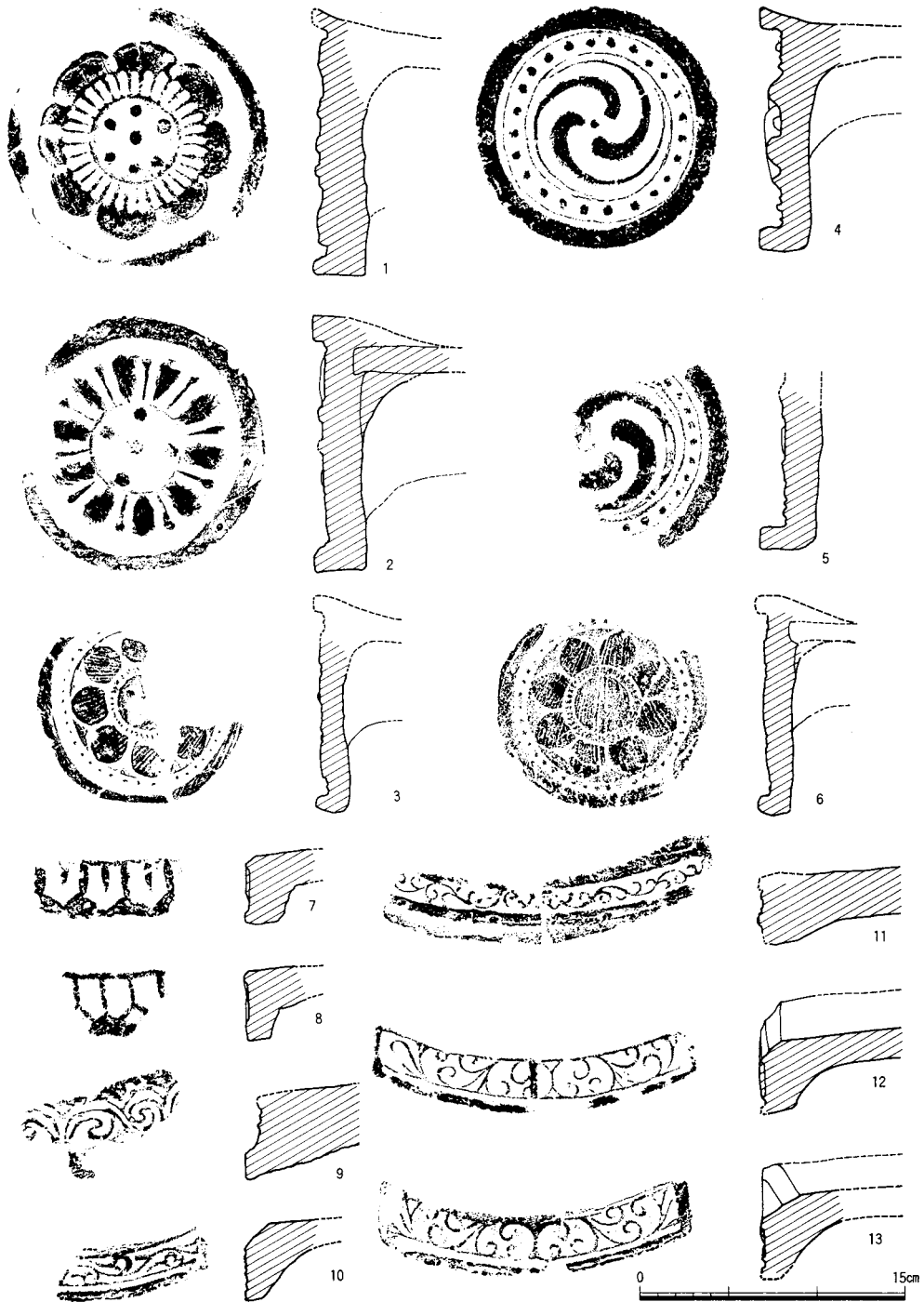


図3 I・II区出土軒瓦拓影・実測図 試掘(1・2)、1区SG1(4・5・7・8)、井戸(11)、土壇(9)、II-2トレンチ(3・6・10・12・13)(1:4)

VI 長岡京跡

37 長岡京左京一条三坊1

経過 調査地は、左京一条三坊十一町にあたり、工場建て替えのため調査を実施した。調査地西方の向日市の調査では、長岡京期の建物や弥生時代の流路などが発見されており、これらの遺構・遺物の検出に期待し調査に入った。発掘調査の前に試掘調査を実施し、対象地の西半分は土取穴により攪乱されていることがわかり、わずかに東端部に付近のベースとなる層位を確認し、この部分を対象として本調査に入った。

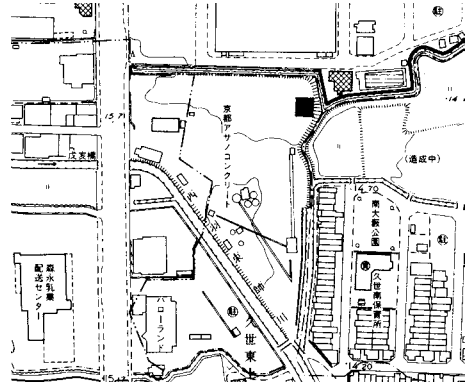


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 重機による掘削に入り、先の試掘調査で確認したベースとなる層が一度掘り返されたものであることが判明し、偶然に正位に埋め戻されたものと判断した。

表土下約5mまで掘削したがすべて攪乱層であることがわかり、本来の層位も確認できず掘削を終了した。遺物は、攪乱土にわずかに土器小片の混入がみられたのみである。

小結 今回の調査地は、表土下約3m以下に堆積する砂礫層を工場建設時に掘り下げ採取していたことがわかり、その深さは予想以上に達しており、層位の確認もできなかった。

当建設計画に関連して南側にも調査が予定されており、当該地の調査に期待したい。

(長宗繁一・百瀬正恒)



図2 調査区全景 (南西から)

38 長岡京左京一条三坊2

経過 調査地は長岡京左京一条三坊十六町及び中世の荘園・大藪荘にあたる。試掘調査の結果、古墳時代の遺構を認めたことから発掘調査に切り替えた。

遺構・遺物 検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居 14 棟・溝 2 条・柱穴多数である。弥生時代後期の住居 3 棟はいずれも円形（径 7 m）である。弥生時代後期から古墳時代初頭の住居は調査区西部で 2 棟検出した。いずれも隅丸方形で 1 棟は小型（一辺

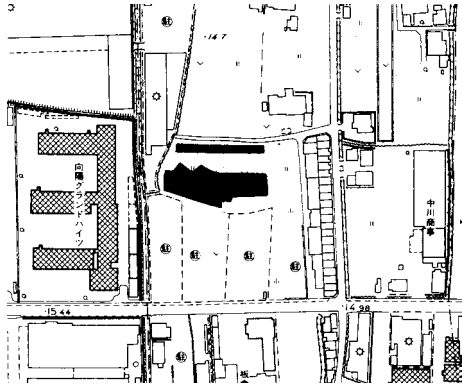


図1 調査位置図 (1:5000)

3 m) である。古墳時代前期（庄内期）の住居は調査区中央に空地を置き、西で 4 棟・東で 3 棟検出した。西は方形・隅丸方形で、規模は一辺 6 m 前後であるが、1 棟だけが大型（一辺 8.5 m）である。いずれも 4 本柱で、東辺に貯蔵穴を持つ。方向は東に 20～65° 振れ、数棟ずつのまとまりがみられる。東は 1 棟が円形、2 棟が多角形で規模は一辺 8 m 前後であるが、多角形の 1 棟は 9 本柱で中央に特殊遺構を持つ。この時期の後半には調査区中央に北から南へ流れる溝（幅 3～8.6 m、深さ 0.4～0.6 m、断面 U 字形）がある。古墳時代前期（布留期）の住居を調査区西部で 1 棟検出した。隅丸方形（一辺 6 m）で全周を拡張する。弥生時代以降の柱穴は調査区西半部を中心に検出した。掘形は方形と円形のものがあり、方形のものは建物として 3 棟まとまった。建物は 2×4 間、または 1×2 間と小規模で、方向はいずれも北で東へ 45° 振れる。時期は 7 世紀である。長岡京期の柱穴は調査区西部で少数検出したが、建物としてはまとまらない。

遺物は整理箱に 20 箱あり弥生土器、土師器が大半を占め、他には須恵器、石器（石包丁・砥石）、土製品などがある。弥生土器、土師器は大半が溝から出土し、住居からはほとんど出土していない。時期は弥生時代後期前半から古墳時代前期（布留期）である。

小結 調査地は中久世・大藪遺跡と東土川遺跡の間に位置するが、弥生時代から古墳時代に至る集落の存在が明らかになった。集落は中久世を中心とした集落群の一つと考えられ、短期間で廃絶している。また住居の配置から集落の構成を考えることができ、当地域の変遷を知る上で興味深い資料を得ることができた。

(上村和直)

39 長岡京左京二条三坊（図版 37・38）

経過 京都市伏見区久我西出町・南区久世東土川町で、西羽東師川の河川改修工事に伴う第8次調査を行った。周辺では隣接する北側を1985年に第6次、南側を1986年12月から翌年2月にかけて第7次として調査している。対象地は、長岡京左京二条三坊九・十六町に推定され、東三坊第二小路の検出が予想された。調査は1987年7月24日～8月13日（8-1次）と、10月1日～11月25日（8-2次）の2度に分けて実施した。なお、この調査は長岡京左京第177次調査にあたる。

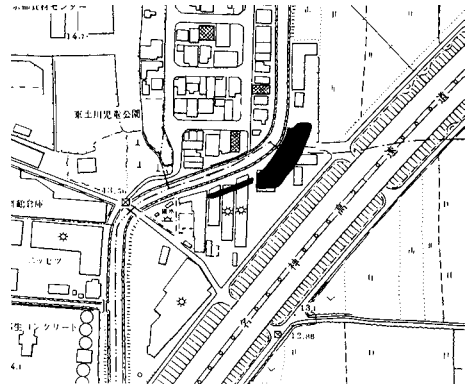


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 縄文時代から近世に至る各時代の遺構を検出した。地形は北部が高く、南部は低い。遺構面の土層も南北で異なり、北部は砂礫層、南部は黒褐色泥土層である。

近世の遺構は、用水路と土壇がある。土壇は肥料溜で、径70cm、深さ10cmの規模である。中世から近世の用水路（SD 20）は、砂礫をベースとする高台と湿地の境界に位置している。幅は4～5mで、深さ1mを測る。径5cm前後の杭を護岸用に打ち込んでいるが間隔は粗い。溝の埋土は灰褐色砂層と褐色砂礫層で、出土遺物はわずかである。現在この溝が伏見区と南区の境界となり、条里の界線になっている。

中世の小溝は南部の湿地部分では、11～12世紀代の堆積土層を掘り込んで形成している。

方向は正南北で、13～14世紀の遺物を含み、水田の成立時期を知ることができる。北部では、南北・東西の両方向があり傾いている。出土遺物は12～13世紀代の瓦器を中心とし、この遺物の年代で水田成立期と考えると南部との差はあまりない。

長岡京時代の遺構は、道路側溝・路面・土壇などがある。側溝（SD 8）は幅0.9m、深さ0.3mで、埋土は2層ある。上層は灰色砂泥層、下層は暗灰色泥砂層で、長岡京時代の須恵器・土師器・木片などが出土した。路面は、褐色の砂礫を敷き詰めたもので、SD 8とSD 35の間にあり、調査区南部では幅1.8mある。中央部を平安時代の土壇で破壊されているが、この北では幅が広がり3mになる。広がる部分にはSD 35はない。SD 35は路面の西側にあり幅0.9m、深さ0.1mある。埋土は灰色泥砂層で、少量の長岡京時代の土器が出土した。土壇（S

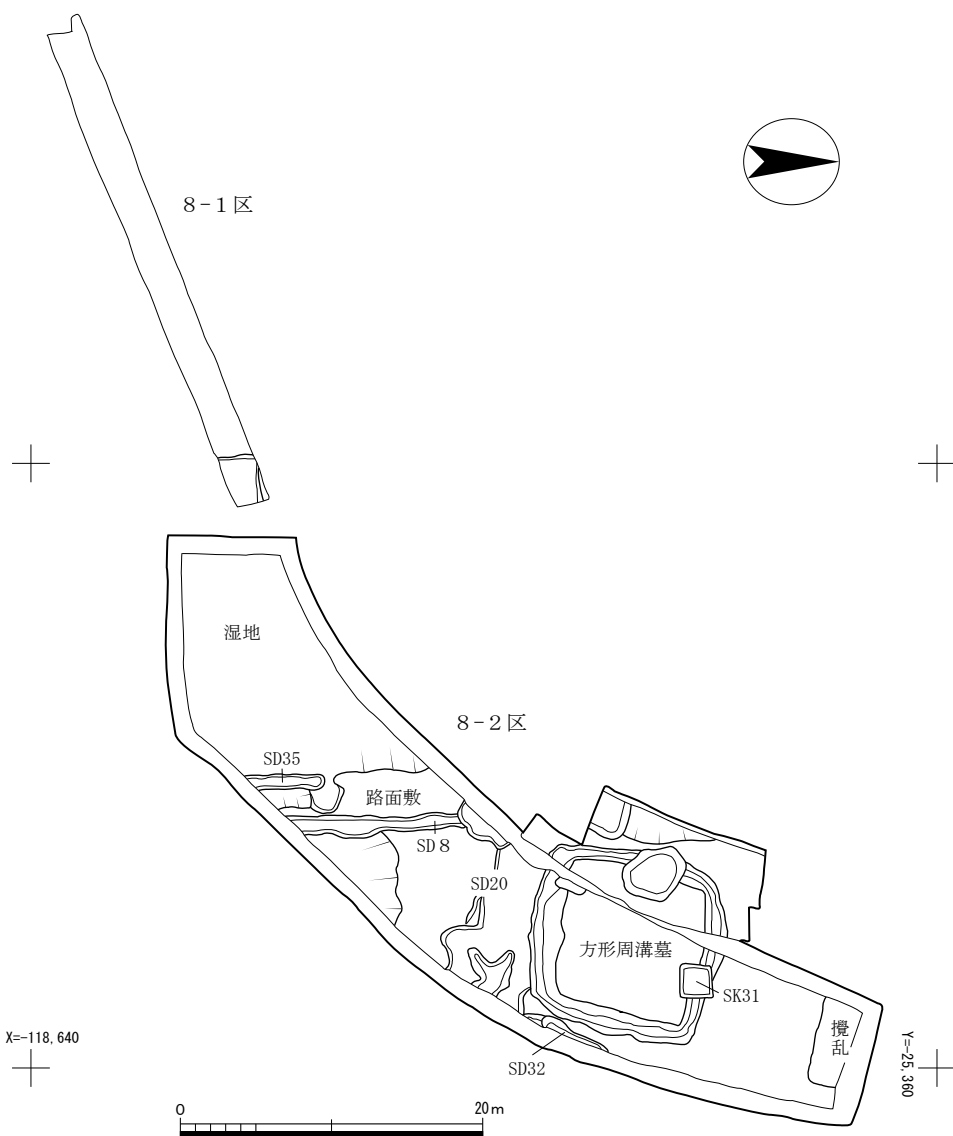


図2 遺構実測図（1：500）

K 31) は、方形周溝墓の北溝を破壊しており、一辺 2.3 m の方形で深さ 0.4 m ある。埋土は淡茶褐色泥砂混礫層が中心で、東部から鏡状の銅製品が出土した。

弥生時代から古墳時代の湿地（S X 36）は調査地の南部に広がる大規模な遺構で、河川の第 6 次調査も含めると南北方向に 150 m ほど検出している。最上層の上面から、長岡京時代の

土器、中層からは古墳時代後期の須恵器が出土した。層中には伐採された樹木や倒木類が少量と、葦が含まれていたが、木片はない。古墳時代前期の溝（SD 32）は南北溝と推定されるが、西肩部の一部を確認しただけで、規模・性格などは不明である。埋土の上層から古墳時代前期の甕が出土した。

弥生時代の遺構は、方形周溝墓があり、南・北・東・西の各溝を検出した。規模は東西方向12.4 m、南北方向が13 mある。南溝は南肩部を中・近世の用水路で破壊されており、幅2 m、深さ0.8 mである。完形の壺が口頸部を溝と直角方向の北に向け出土した。出土レベルは溝底から約8 cm 浮いた状態で、下半を青灰色粘土層中に、口頸部を褐色砂礫中に横たえていた。東・北溝は小破片が出土した。溝の堆積土層は各辺によって異なり、南溝は水が流れた状況が窺え、東・北溝は中心部からの崩壊した土層で埋まっており、盛土の存在が予想される。溝で囲まれた中心部を精査したが、主体部は確認できなかった。



図3 断ち割り状況・縄文時代遺構面

縄文時代の流路は、調査区東壁の断ち割りによって一部を確認した。流路堆積土の上層は還元状態の腐植土層で、下層は径1～3 mmの灰色砂層と腐植土層がブロックで含まれる。流路のベースは水色粘土層で、窪みに縄文時代晩期の土器、木片・腐植土が堆積し、足跡の痕跡が数個あった。

遺物 縄文時代から近世までの遺物が出土したが、量は少ない。

縄文時代の遺物は晩期の遺物が数点ある。弥生時代の遺物は、方形周溝墓から出土した完形の壺がある。古墳時代の遺物はSD 32から出土した布留式の甕、湿地状遺構から出土した須恵器杯身・蓋がある。

長岡京時代の遺物は、条坊の側溝から出土した土師器、須恵器、製塩土器などがあるが、いずれも小破片である。その他土馬があり、墨で鞍・鎧などを書いている。また緑釉陶器火舎の底部片がある。中世の遺物は、小溝に伴うもので、瓦器椀、土師器皿、中国陶磁器の青磁・白

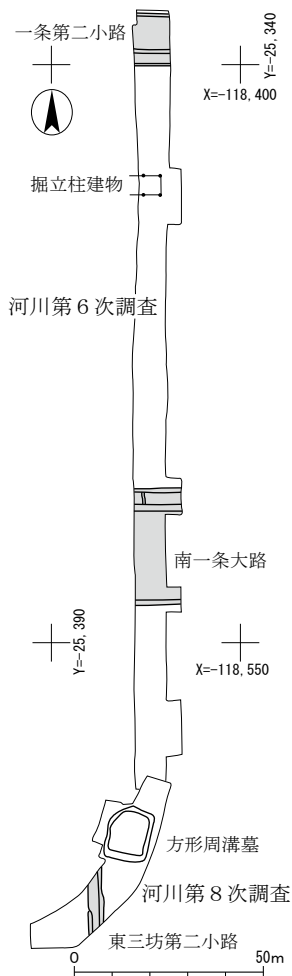


図4 条坊遺構配置図
(1:2000)

磁などがある。SD 20からは、完形の瓦器椀が出土した。近世の遺物は、用水路から国産の染付陶器の破片が出土した。

小結 8-2次調査区の中央部に地形の変換点があり、北部は高く台地状、南部は低く湿地状になっていた。ベースの土層も異なり、北部は砂礫層、南部はシルト層が堆積する。高台の北部では、河川改修の第6次調査で南一条三坊十三・十四・十六町が調査され、一条第二小路の路面と両側溝、南一条大路の路面と両側溝が検出された。十三町では条坊溝の宅地側に内溝があり、大路側では築地に造られた暗渠も検出されている。第7・8次調査では、長岡京時代の遺構面を形成する土層が暗灰色泥砂層で、湿地状をしており、条坊溝の検出が危ぶまれたが、8-2次調査では湿地と高台の変換点で条坊の遺構を検出した。条坊溝は暗灰色泥砂層を掘り込んで成立しており、路面は礫を薄く敷いていた。また、路面の西部には湿地の水を排水するために溝(SD 35)を掘っている。溝は、北の高台から緩く傾斜する地形の中途から南部に掘られ、この北では溝を廃止し、砂礫と湿地の黒色泥砂土を混ぜて路面を広げている。第6次調査の成果からすると、条坊側溝と推定されるSD 8は西側溝にあたる。また、東側溝は検出可能であったが未検出であった。路面が狭く、東側溝が未検出など問題も残るが、詳細は今後の周辺地域の成果を待つことにしたい。

弥生時代中期前半の方形周溝墓を検出した。周辺では調査地の西南160mの地点で向日町簡易裁判所新設に伴う発掘調査が、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって行われ、弥生時代中期前半の竪穴住居、土壇2基などを検出している。竪穴住居は、畿内第Ⅱ様式で、方形周溝墓と同一の時期であり、関連が認められる。周辺には鶏冠井遺跡・鶏冠井清水遺跡・石田遺跡・東土川遺跡などがあり、中でも鶏冠井遺跡は、縄文時代晩期から続く集落で、桂川右岸の拠点集落といえる。今回検出の方形周溝墓がどの集落に附属するかは、名神高速道路の東側の遺跡調査例がなく即断はできない。ただ北接する第6次調査では当該期の明確な遺構はなく、墓域は狭かったと思われる。方形周溝墓の南部に広がる低湿地は、弥生時代から古墳時代の良好な水田と推定できるが、遺構としては確認できなかった。

(百瀬正恒・丸川義広・長宗繁一)

40 長岡京左京四条三・四坊（図版 39～46）

経過 外環状線建設に伴う継続調査で、今年度は左京三坊内でT-2区、四坊内でX-1区からX-4区、京域外の東で羽東師志水町遺跡内のY-1区をそれぞれ調査した。T-2区は、昭和60年度に調査したT区（長岡京左京第146次調査）の北部にあたり、左京四条三坊三町に位置する。X-1区からX-4区は、四条四坊六・十一・十四町に位置し東四坊坊間小路、東四坊第二小路の推定地でもある。Y-1区は、昭和61年度の試掘調査で検出した平安時代後期から江戸時代の遺跡内に位置する。なお左京四条二坊十四町でU-2区を調査したが、砂礫層の堆積を確認したにとどまった。調査は左京174次にあたる。

遺構 以下各調査区の説明を、最も西に位置するT-2区から順次説明する。

T-2区 遺構面はT区と同様で、第1面の平安・鎌倉時代から順次下がり、第2面・長岡京跡、水田である第3面から最下層第5面までの5面を数える。第1面はT区及び西側の調査地V区に較べて遺構に乏しく空閑地に近い状況である。SD17はV区から続く平安時代の流路である。第2面・長岡京期の遺構は、T区から続く建物や溝を北東部と南西部で検出し、V区ですでに検出した東二坊大路東側溝の延長のほか、今回は石敷遺構・井戸・側板を持つ溝などを検出した。特にSE45、SX36、SD25の一連の遺構はセットとして捉えることができる井戸施設である。この井戸の南側には庇部分を小礫や礫で打ち固め、土間として利用していたと考えられる建物SB3を検出した。2×3間の母屋に北及び西に庇を持つ東西棟の建物である。SE45の北東に検出した建物は2時期の造り替えがあり、SB8の後にSB4を建て、この中で石敷部分や炉などを検出した。SB8は東西4間、南北1間以上、SB4は東西

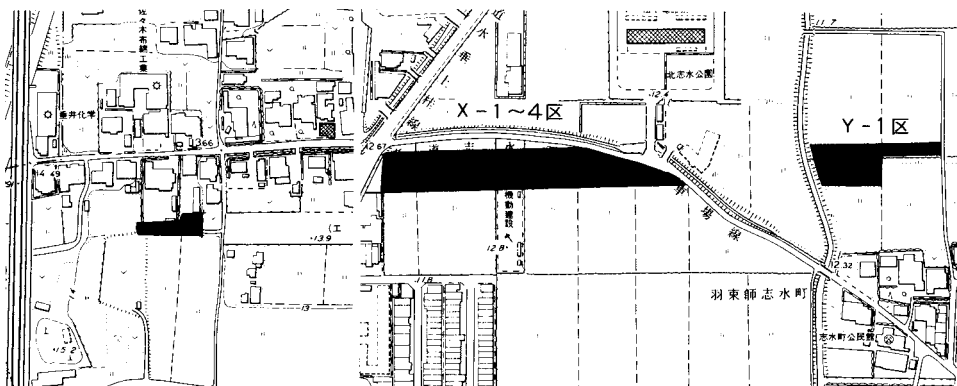


図1 T-2区調査位置図 (1:5000) 図2 X-1~4・Y-1区調査位置図 (1:5000)

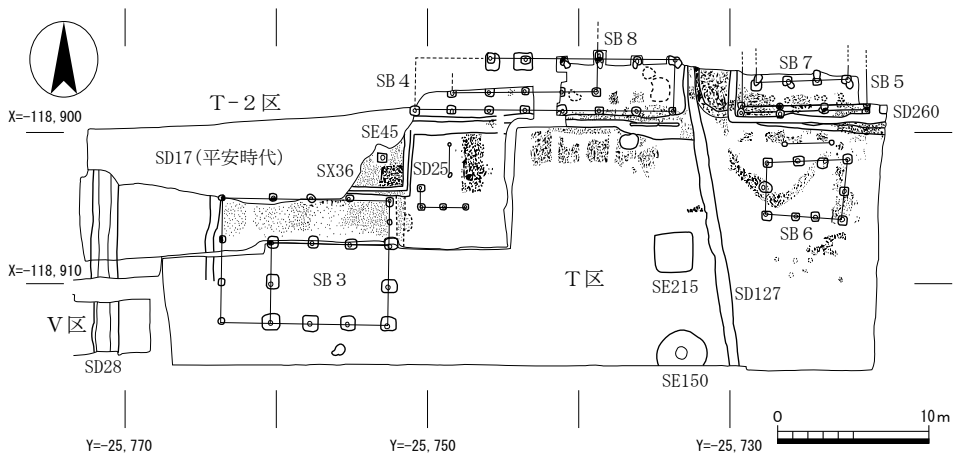


図3 T-2区长岡京期遺構実測図 (1:500)

7間、南北1間の細長い建物と考えられる。

第3面から第5面の水田は、すべて条里制に伴うもので、坪境や坪内畦畔を検出した。

X-1~4区 ここでは弥生時代から長岡京期の遺構をほぼ同一面で検出した。遺構面の地形は、ほぼ平坦であるが、調査区中央付近が標高約9.6mで最も低く、東西へ若干高まっている。特に東部は微高地状に盛り上がり、最後部で標高10m前後を測る。

検出した主な遺構は、その状況によって弥生時代から古墳時代、奈良時代、長岡京期の3時期に分けることができる(図5)。

弥生時代から古墳時代の遺構は、調査区東部の微高地上に分布しており、主に北西から南東方向の溝を数条検出している。この中で、途中から北東方向へ曲がる溝SD5は、古墳時代前期の方形周溝墓の一部であると考えられる。主体部は後世の流路によって壊されているが、溝内からは供献と考えられる古式土師器の壺が1個体出土している。

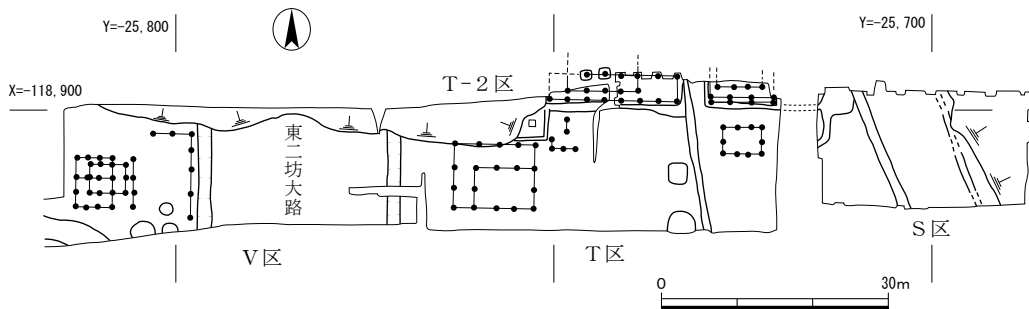


図4 S・T・T-2・V区长岡京期遺構配置図 (1:1000)

奈良時代の遺構もやはり、調査区東部の微高地上に集中しており、集落の一部と考えられる掘立柱建物・柵列・井戸・溝などを検出した。それぞれの遺構の主軸方向は、ほぼ北に対して西へ傾く状況で揃っており、この集落の形成に対して計画性が窺える。また、建物群の西側には南北溝SD6がある。これ以西には、奈良時代の建物はなく、集落はこの溝によって区画されていたと考えられる。

長岡京期の遺構は、調査区西部で東四坊坊間小路と、その東西両側溝をほぼ推定通りに検出できた。この道路を挟んだ三町及び十一町内では、掘立柱建物・井戸・柵列・土塋など多くの遺構を検出した。これらの遺構は、基本的に1基の井戸を中心に数棟の建物とそれに附属する柵列や土塋によって構成されており、これが1戸の宅地を示していると考えられる。十一町内では、宅地内に小規模な通路が確保されている状況や、宅地の端に1基の土塋墓を配置している状況などが検出でき、当時の宅地利用を知る上で興味深い資料となった。また、当時は小規模な建物が密集して造られており、重複しているものも多い。更に、小路の路面にまで延びる建物もあり、占地を越えて敷地が拡大している状況など側溝との関連でも興味深いものといえる。

長岡京期以後は急速に耕地化が進んだようで、小溝や堀などの遺構が若干存在するだけになる。

Y-1区 調査地は、現在の羽東師志水町集落の北西部にあたる。調査区の西側約3分の2は近世以降の深い湿地状堆積で、遺構面はその東側に4面を認めた。第1面は江戸時代中期で、溝・南北の畦畔などを認めた。第2面は桃山時代から江戸時代前期とみられる。3×5間の南北棟で南西部に方形の集石遺構を含む1×2間の張り出し部を持ち、柱穴内に礎石を据える建物や、土塋・溝などを検出した。第3面は室町時代中期頃とみられる溝・東西の濠と土塋墓7基を検出した。その内5基は火葬墓で、焼土壁がみられ、一部には焼け残った木棺の痕跡がみられた。棺内には副葬品を持たず、また遺骨も少ない。恐らく荼毘に付された後、遺骨を蔵骨器に拾い上げ、本来の墓所に葬られたと思われる。なお一つの土塋は焼土壁を持たず、骨が多量に詰まっていた。蔵骨器に収めきれなかった遺骨を集めたものと思われる。第4面は砂礫層の上面である。調査区の北東部で柱穴をいくつか検出したが建物としてまとまるものではない。平安時代後期と思われる。

遺物 T-2区 第2面の長岡京期の土器にのみ触れる。第2面の総出土数は3918片で、器種ごとの百分率は土師器 81.78%、須恵器 8.70%、黒色土器 0.31%、瓦 1.40%、製塩土器 7.68%、その他 0.31%となる。機能ごとでは食器 67.26%・調理器 20.39%・貯蔵器 3.14%・その他 9.21%



図5 X-1 ~ 4区遺構配置図 (1 : 1000)

となる。また土師器は食器3：調理器1，須恵器は食器2：貯蔵器1の比率が得られる。T区でも同期の総出土数11017片は，土師器78.84%，須恵器8.65%，黒色土器1.04%，瓦1.45%，製塩土器9.20%，その他0.82%で，機能ごとは食器65.27%・調理器19.92%・貯蔵器3.40%・その他11.41%である。また土師器の食器3：調理器1，須恵器の食器2：貯蔵器1など同傾向である。このように食事に関して，造る側の道具類・調味料の入れ物などが多いことは，この遺構の特異性であり，川原寺に関連する大衆院である可能性を補足するものと思われる。

X-1～4区 今回出土した遺物は弥生時代から中世にわたる。その大半は土器類であるが，他に木製品，金属製品なども存在する。

弥生時代から古墳時代の遺物は，溝などから弥生土器，土師器，須恵器などの土器類が出土している。量も少なく，保存状況もあまりよくない。

奈良時代の遺物は，土器類が多量に出土している。特に，集落を区画する溝SD7からの出土量が多い。この溝の土器類は土師器，須恵器が中心で，その器形は椀・皿・杯など供膳形態のものが主である。しかし，鉢・壺・甕など調理あるいは貯蔵形態の器形も多くみられる。このほか，製塩土器，灰釉陶器の蓋，奈良三彩と考えられる小壺も出土しており，極めて多彩な様相を呈している。

長岡京期の遺物も，主に土器類が各遺構から出土している。特に，各井戸内からは，極めて保存状況の良い土器が一括出土している。この中で，調査区中央南寄りで検出した井戸SE7からは土師器と須恵器の杯・皿が数個体完形で出土したが，その大半のものの底部裏面に墨書が認められる。墨書はいずれもほぼ同一の記号で，土器の底部いっばいに2本の平行線が書かれており，興味深い資料であ

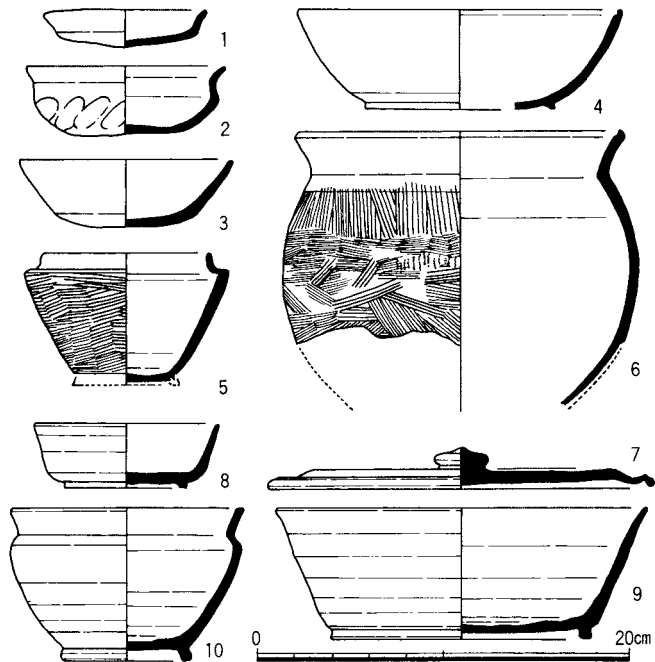


図6 T-2区出土遺物実測図(1:4)

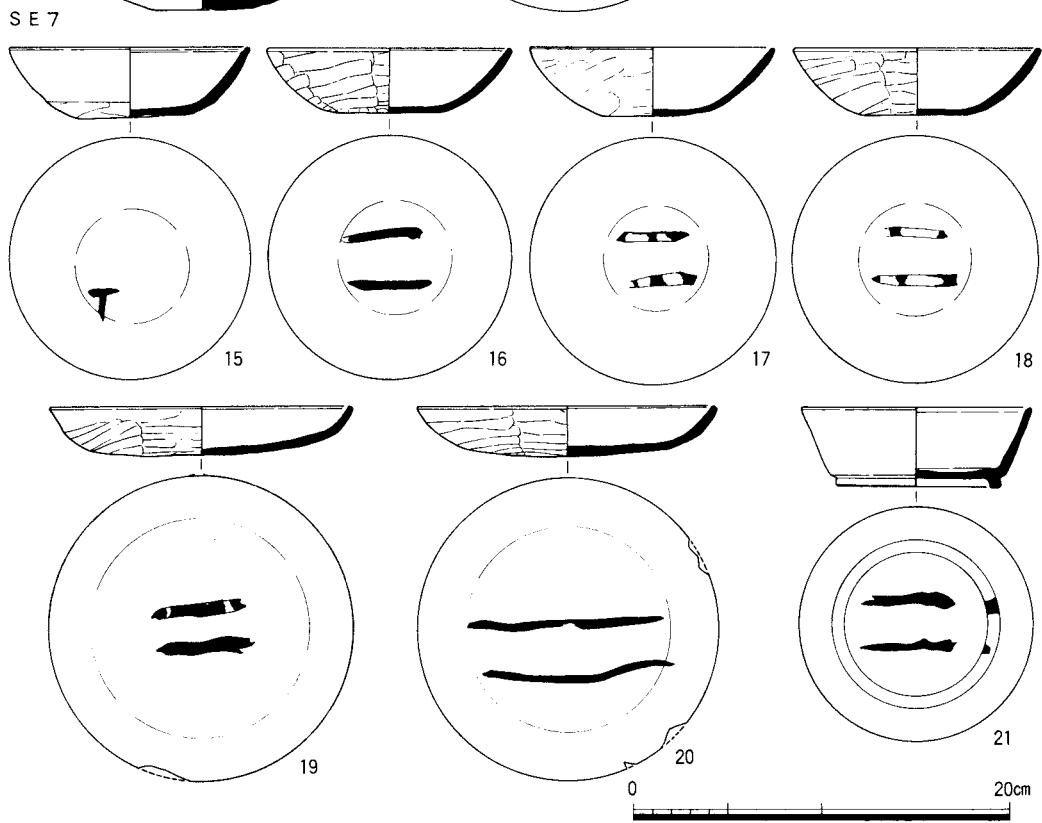
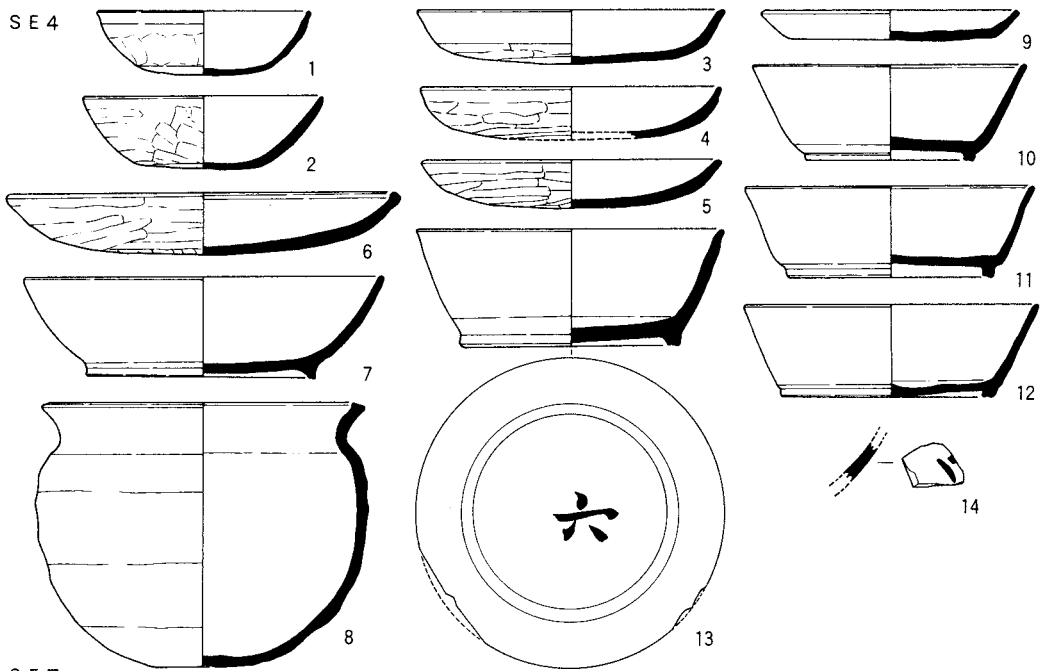


图7 X-2区 SE4出土遺物実測図(土師器1~8、須恵器9~14)・
SE7(土師器15~20、須恵器21)(1:4)

る。土器類以外の主な遺物としては、小路の西側溝から漆紙文書の断簡が出土しており、内容は不明であるが私文書の一部であるらしい。また、調査区南端で検出した井戸SE6は井戸枠に建物の扉を転用しており、各部材が良好に残っている。

長岡京期以降の遺物は、出土量も少なく耕作に関する小溝などから、主に土師器、瓦器などが出土したに過ぎない。

Y-1区 出土した遺物は整理箱にして9箱と少ない。器種は土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦などであるが、平安時代から江戸時代まで長期間にわたるため多様さに富んでいる。ここでは第3面の室町時代の遺物について若干触れたい。

第3面の遺構・包含層からの総出土数は466片で、器種ごとの百分比は土師器70.17%、瓦器22.96%、陶器Ⅰ類2.58%、陶器Ⅱ類1.29%、輸入陶磁器0.21%、瓦1.29%である。

機能ごとでは食器83.69%・調理器11.59%・貯蔵器1.93%・その他2.79%となる。器種構成百分率の分布は久我東町集落跡の同期の遺跡の出土傾向と類似している。機能の面では当遺跡は、室町時代に墓域であったためか、食器以外の器形がやや少ない。これは久我東町集落跡の墓域でも同様の傾向がみられる。羽東師志水町集落跡の調査は今後も予定されており、新たな成果が見込まれる。

小結 左京四条三坊で実施したT-2区の調査は既往の周辺調査を含めて推定「川原寺」の関連遺構と考えられる。石敷と側板を付設する井戸は東側のT区の調査から続く遺構群の一部を為すものといえる。

左京四条四坊ではX-1からX-4区にかけて一連の調査を実施した。この区間は、他区に比べ非常に安定した弥生時代以来の微高地上に位置し、黄褐色を呈した固い泥土層上に遺構を検出した。この微高地は、更に北及び南に広がることから、一帯に重複する集落跡が想定できる。長岡京期の条坊跡や宅地跡の成果もさることながら、奈良時代の建物群の検出は他区の調査では類例はなく、この区間のみ検出したもので特筆すべきものである。

(長宗繁一・吉崎 伸・鈴木廣司)

注 陶器Ⅰ類は、平安時代以前の須恵器と、中世の須恵器の系譜を引く陶器類とを区別するために、陶器Ⅱ類は、いわゆる焼き締め陶器のことで鈴木が便宜上使用している。

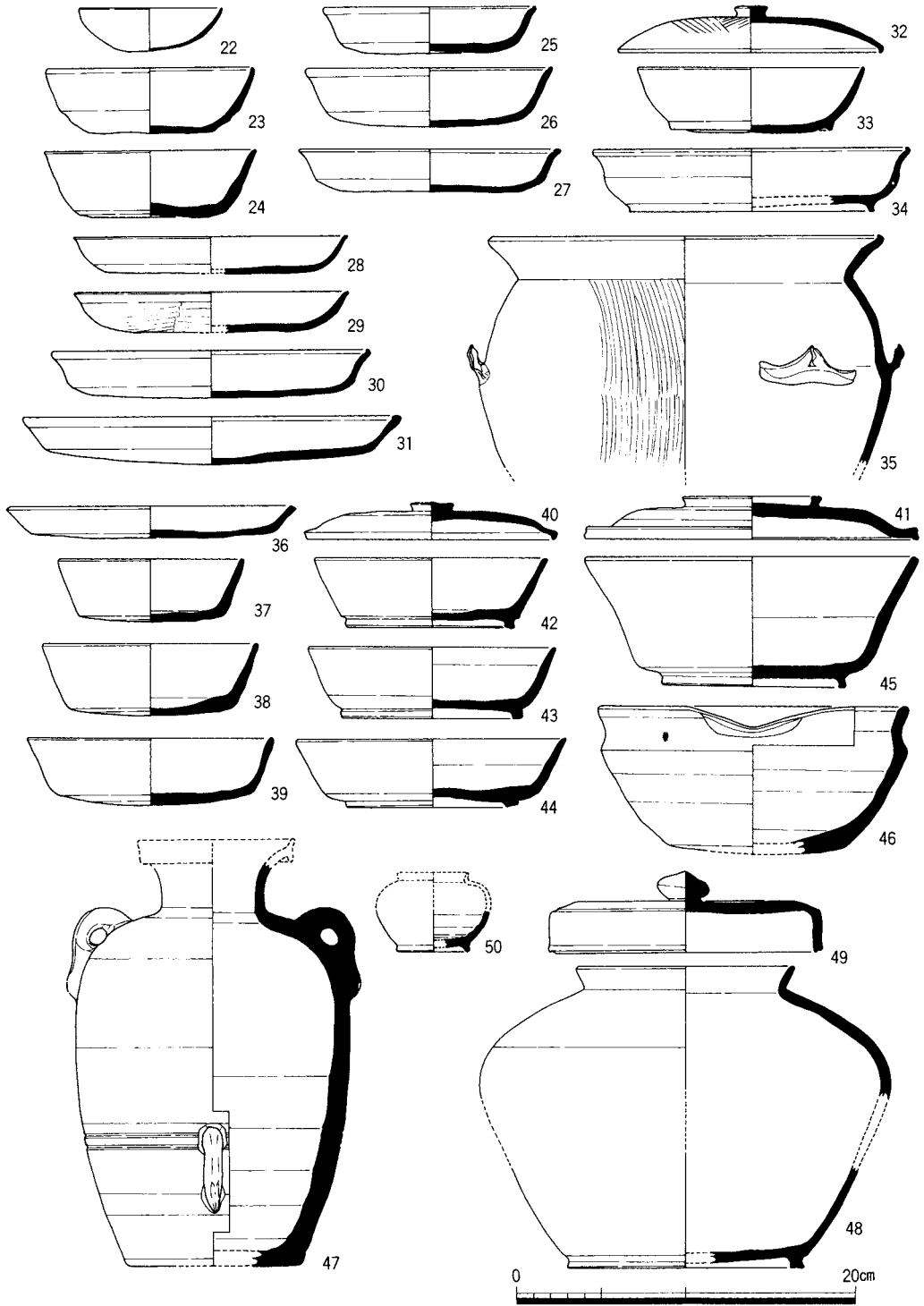


图8 X-3区 SD7出土遺物実測図(土師器22~35、須恵器36~48、
灰釉陶器49、三彩陶器50)(1:4)

41 久我東町遺跡

経過 昭和57・59・61年度に調査を実施した久我東町遺跡に隣接する東側農道にガス管の布設が計画された。このため遺構が集中して検出される区間については、発掘調査を実施する運びとなった。この区間は、久我東町遺跡の北を限る東西方向の濠が位置するあたりから南へ約300mまでの間にも及んだ。他の区間については立会調査を実施した。調査は工事に伴い都合2回に分けて実施し、61年度調査の南端部より以北をA区、以南をB区とした。なお、A区遺構配置図は『京都市埋蔵文化財調査概要』61年度に附載した。

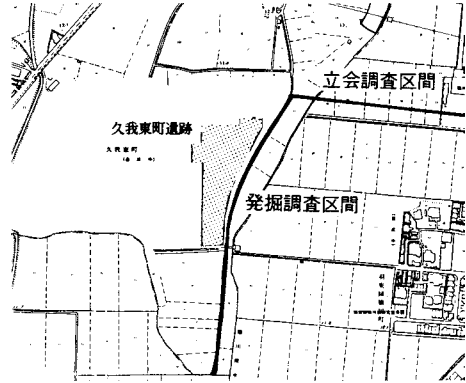


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 ガス管理設に伴う掘削幅約1.4mを調査し、地表下2～3mで遺構・遺物を確認した。A区では全長約180m間のうち南半部に集中して柱穴・土壇・井戸・溝などの遺構を検出した。総数160を数える大部分は柱穴で占められ、土壇・溝が続き井戸は掘形を1基検出したのみである。推定北限の濠の位置には、59年度で検出したような遺構は検出できず、東西方向に3条の小規模な溝を検出したにとどまり、代わって道に沿うような形で北に延びる濠状遺構の東肩部を検出した。区間全域に遺物の出土がみられ、遺構は更に東へ伸びることが明らかになった。B区は全長約100mを調査し、北端より20mまでには柱穴・溝などを検出したが、これ以南では落込状遺構や、杭列・流路などがみられるのみで集落本体から遠のいた状況にある。ただし遺物の散布や一部集中して出土する箇所は南端部に近い位置まで及んでいた。61年度調査の集落西限の濠は明確に検出できなかったが、南半部の杭列や流路に続くものと判断した。

小結 今回の調査で、久我東町遺跡の南北方向の範囲が大まかであるがわかってきた。東西方向については、西限は濠で画されることから明らかであるが、東限は更に東へ延びると言えるが、その位置の確定は今後の機会を待たねばならない。A区の区間の遺構の密度は、予想した北半部では疎で、南半部では密にみられた。このことは、既往の調査と考え合わせると、集落の建物配置が南北方向に集中していることが窺われ、当遺跡の性格を知る手懸かりと考えている。

(長宗繁一)

Ⅶ その他の遺跡

42 円乗寺跡（図版 47）

経過 右京区御室堅町 23-1, 24-1 所在の敷地約 2300㎡に(株)オリエン・ファイナンスが保養所の建設を計画した。当該地は天喜三年(1055)に造営された円乗寺跡に比定されている。このことで昭和 62 年 4 月 24 日に試掘調査を実施し遺構の有無を調査した。調査の結果、平安時代の瓦を含む土壌、柱穴などを検出したため、本格的な調査が必要となり、同年 5 月 11 日から 5 月 26 日までの期間に発掘調査を実施した。調査区は保養所建物によって破壊される地区を中心に東西 14 m、南北 22 m の約 300㎡を対象として設定した。

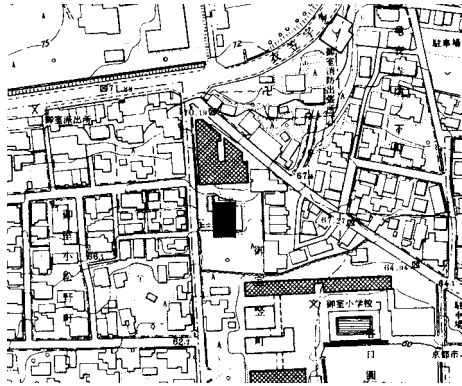


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 検出した遺構は平安時代中期・後期、江戸時代、その他に分けられる。

平安時代中期に属する遺構は溝 3 条 (S D 22・23・24) で調査区中央のみに遺存しており北側と南側部分は削平されている。これらは共に 9 世紀末から 10 世紀前半の遺物を伴っている。S D 22 は幅約 1 m、深さ 10 cm、S D 23 は幅 70 cm、深さ 20 cm、S D 24 は幅 50 cm、深さ 10 cm を測る。S D 24 は S D 23 に切られるが出土遺物での時期差はない。

平安時代後期の遺構には、溝 1 条 (S D 14) と自然地形による落込 (S K 10) がある。S D 14 は S D 23・24 に沿って南北に検出した。調査区中央で西へ屈曲する。11 世紀中葉に属する遺物を伴う。S K 10 は調査区南側の落込で 12 世紀前半の遺物を伴う。

その他、時期不明の東西溝 (S D 8)・柵列 (S A 18) や江戸時代に属する石組井戸、調査区西半に集中する柱穴群がある。S D 8 は遺物が出土せず時期の確定はできないが、平安時代中期の溝と直交する。

遺物 出土遺物は平安時代中期・後期、江戸時代に属するものが出土した。平安時代中期の遺物は築地両側溝と考えられる溝 (S D 22・23・24) から主として出土した。量的には少ないが、9 世紀末から 10 世紀前半の時期と考えられる土師器皿、灰釉陶器壺・椀、黒色土器椀・甕、須恵器椀・壺・鉢・甕、緑釉陶器椀・壺、瓦片、緑釉瓦片などがある。

平安時代後期の遺物はSK 10, SD 14 から出土した。特にSK 10からは、11世紀中葉から12世紀前半の土師器皿、須恵器甕、輸入陶磁器白磁碗、瓦・軒瓦（図3）などがある。

江戸時代の遺物は、溝・土塋・柱穴などから伊万里焼、京焼系の「仁清」銘碗片、「朝日」銘碗片など18世紀前半以降の土器類が出土した。

小結 調査で検出した並行する南北溝3条（東側溝2条が切り合う）は心々間4.5mを測り、築地塀に伴う両側溝の可能性が高い。また溝3条から出土した遺物は10世紀前半代を下らないものであり、遅くとも10世紀中葉までには埋没していたと考えられる。

調査地に推定されている円乗寺は天喜三年（1055）に供養されたとあり、この両側溝の存続・埋没時期には合致せず、円乗寺跡に関係するものとは考えられない。周辺では仁和二年（886）創建の仁和寺及び昌泰二年（899）創建の円堂院が、この両側溝の時期に近接している。

仁和寺は延喜四年（904）に移転の後、寛永十八年（1641）の再建時まで寺域の変更・移動は記録されていない。しかし円堂院は昌泰二年創建を含めて、延喜四年、延喜五年（905）、天慶二年（939）の4度の供養が行われた記録がある。昌泰二年を除く延喜四年・五年、天慶二年が修理及び移転に伴う供養と考えられる。このうち天慶二年の供養に伴う修理及び移転が、検出した両溝の埋没時期に極めて近接する。

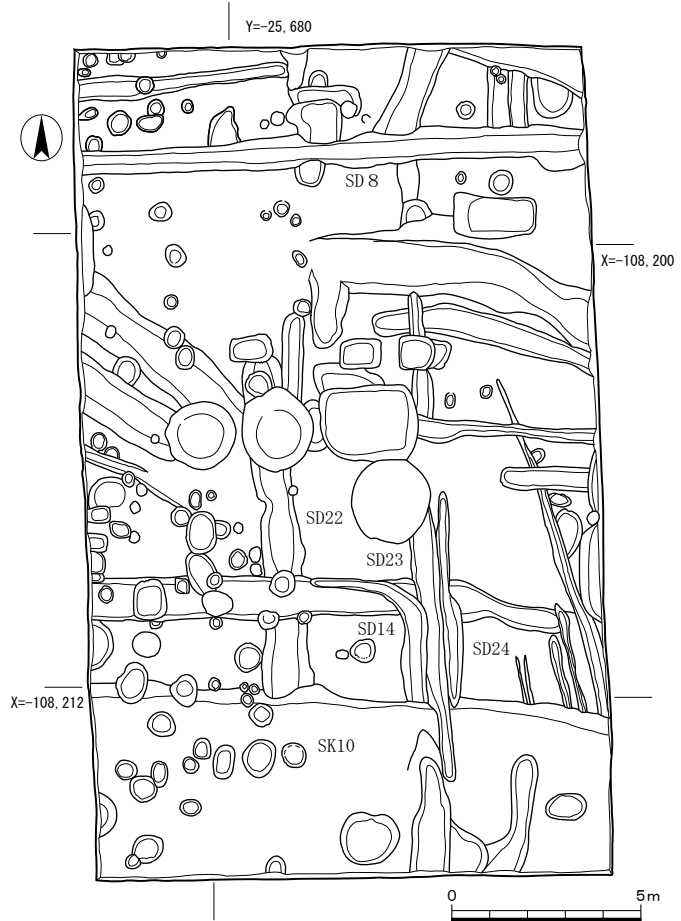


図2 遺構実測図（1：200）

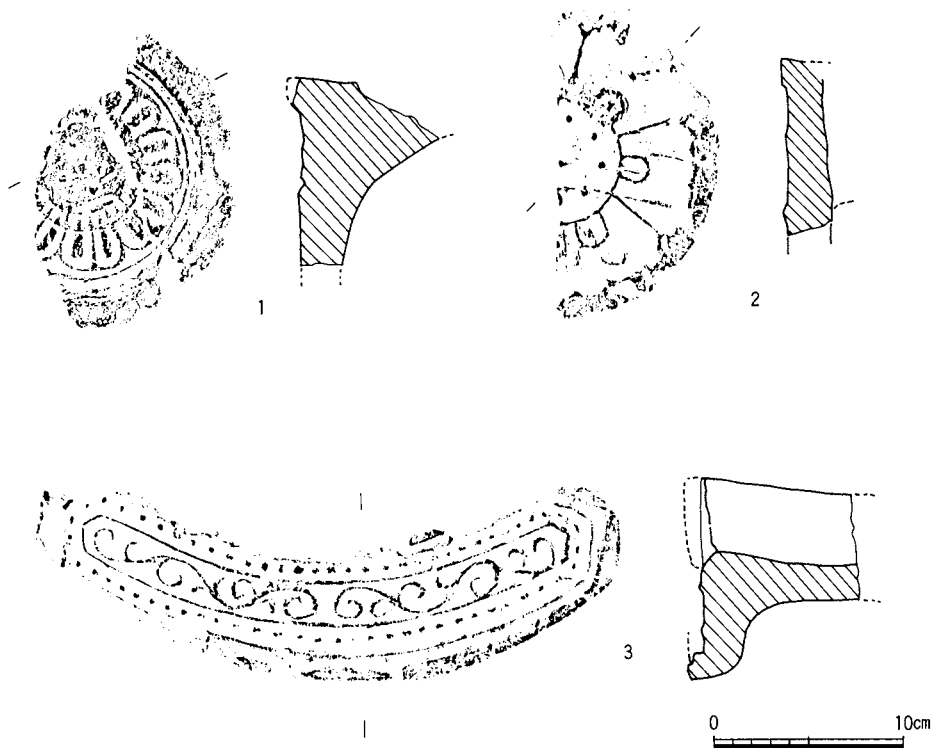


図3 出土瓦 (SD 14・2・3、SK 10) 拓影・実測図 (1:4)

以上のことから、上記検出の両側溝は円堂院に関係した遺構の可能性があり、10世紀前半代に移転した後、廃棄・埋没したものとみることができよう。また調査地東側は極めて急傾斜の谷状地形を呈していることから、この両側溝は寺域の東側築地塀に伴うものと考えられる。このほか、平安時代後期に属する遺構にSD 14とSK 10がある。この時期に調査地周辺で何らかの造作が行われたことを示しており、あるいは円乗寺跡 (1055年～1105年) に関係した遺構の可能性もある。

調査区では、平安時代後期以後、江戸時代に至る間の遺構・遺物はまったく検出していない。江戸時代中期に至って柱穴・土壇・井戸などが現れ、居住空間として利用され始める。これら江戸時代中期の遺構は、特に柱穴群が平安時代中期埋没の両側溝以西に集中しており、江戸時代に至るまで両側溝のラインが何らかの制約を残していたものと考えられる。出土遺物にも、「仁清」銘の小椀、「朝日」銘の茶碗などと共に菊花文の配された伊万里焼椀の優品が多く出土しており、居住者と仁和寺との関わりを推測させる資料として重要なものと考えられる。

(平田 泰)

43 和泉式部町遺跡（図版 48～56, 巻頭カラー図版3）

経過 和泉式部町遺跡は、当調査地点を含む太秦地域の公共下水道工事に伴う広域立会調査によって1985年に発見され、古墳時代前期に属する集落遺跡として周知されている。当遺跡は、御室川右岸の低位段丘南東部に立地し、遺跡範囲は立会調査の成果から200m四方と推定されている。当遺跡における発掘調査は今回が初例である。

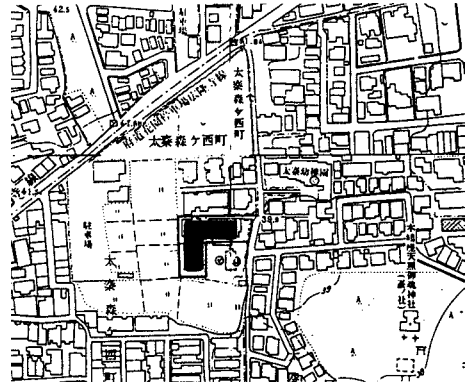


図1 調査位置図 (1:5000)

調査地点は、秦氏と縁の深いとされる木嶋坐天照御魂神社（通称蚕ノ社）の北西部に近接する。当地にマンションが建設されることに伴い、事前に試掘調査が行われた。調査の結果、竪穴住居及び遺物包含層が検出されたため発掘調査を実施することとなった。

調査区は調査対象地の現況に従い、東西36m、南北30mのL字形に設定した。また調査区外に及ぶ竪穴住居については、可能な限り調査区を拡張し、規模・構造等の解明に努めた。最終的な調査面積は約726㎡である。遺構の遺存状況は、調査対象地が元幼稚園として利用されていたため、中央部の地下室や解体時の攪乱によって一部削平を受けているものの概ね良好である。調査の結果、畿内第IV様式に属する竪穴住居1戸、古墳時代前期の竪穴住居14戸、古墳時代中期の竪穴住居7戸の計22戸を検出した。

遺構 調査区の基本層序は、表土・旧耕作土層が厚さ20～50cmあり、その下に黒褐色砂泥層が堆積する。黒褐色砂泥層は遺物包含層で、調査区南西部では厚さ約30cmあるが、北へ向かうに従い薄くなり、北半部では旧耕作土層直下が無遺物層となる。無遺物層は、北東部ではぶい黄褐色粗砂ないし砂礫層、北西部では礫混じりの黄褐色砂泥層、南西部では茶褐色砂泥層となり、南西方向に下る緩傾斜面を形成している。

竪穴住居は、無遺物層上面で検出した。竪穴住居の検出状況は、重複ないし削平あるいは調査区外に及ぶものが大半であり、全体を検出できたものは5戸程度である。竪穴住居の調査所見については一覧表にその要点を記したが、ここでは時代ごとの住居及び特徴的な住居についてその概要を述べる。

弥生時代に属する竪穴住居は、22号住居1戸を検出した。主柱穴・壁溝等の施設は存在し

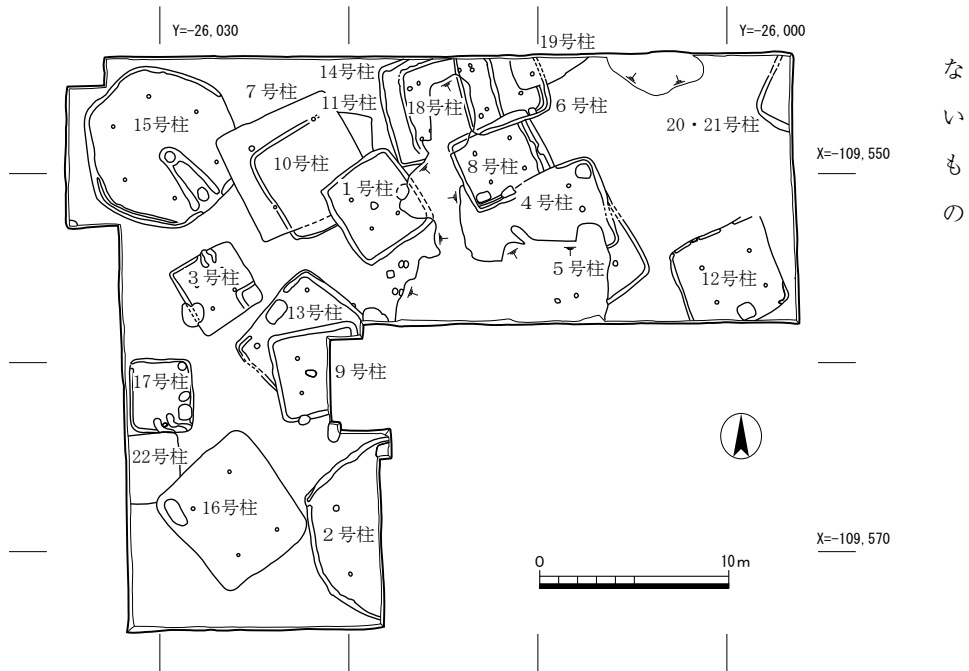


図2 調査区平面図 (1 : 400)

の、方形を呈する人為的な掘込であること、底面が平坦であること、完形ないし完形に近い土器 (図3-1~3) が出土したことから住居とした。

古墳時代前期に属する竪穴住居は、2・5・7・9~15・18~21号住居の14戸を検出したが、10・11・20号住居については不明な点が多い。また5号住居は検出面ですでに床面を検出し、遺物は出土しなかったが重複状況や規模からこの項に含めた。

当該期の住居は、平面形から2・15号住居の多角形とその他の方形を呈する住居に分けることができる。15号住居は六角形を呈する。南西辺は拡張を行っている。床面には南東辺に直交する位置に、中央ピットと貯蔵穴を囲む状態で長大な馬蹄形を呈した土堤状の高まりがある。中央ピット内周縁には小ピットが巡る。焼失住居であるが炭化材は少ない。貯蔵穴から土師器鉢 (図3-10・11) が2個体出土した。2号住居は今回検出した住居の中で最も大型の住居である。平面形は六角形に復原できる。北西隅の床面で土師器鉢及び白色粘土塊などが密着した状態で出土した。平面形が方形を呈する住居は、1辺4.60~6.60mの規模を有する。住居の主軸方向は概ね北西-南東方向を示す。これらの住居のうち、12号住居の床面直上及び覆土からは多量の土師器が出土した。

古墳時代中期に属する竪穴住居は、1・3・4・6・8・16・17号住居の7戸を検出した。平面形は方形ないしやや長方形を呈するものがある。住居の主軸方向は概ね北西-南東方向

表1 竪穴住居一覧表

番号	竪穴住居現況			主柱穴		その他の施設			遺物及び備考
	平面形	規模	深さ	数	深さ	壁溝	貯蔵穴	その他	
1号	方形	4.00×4.80m	8～30cm	4	28～39cm	○	北東辺中央	中央ピット	甕(22) 高杯(25・26) 韓式系土器(32・33) 初期須恵器(34～37) 鉄製品
2号	六角形	9.44m	9～29cm	2(6)	45～64cm	○	北隅		壺, 甕, 高杯, 鉢(8) 器台, 手焙形土器, 白色粘土塊
3号	方形	3.64×3.74m	3～12cm	4	14～16cm	○	東隅, 周堤有	造付けカマド	壺, 甕, 高杯(29) 韓式系土器(31) 白色粘土塊, 石製作業台
4号	方形	4.92m	1～6cm	1(4)	16cm	○	北隅	地床炉	壺, 甕, 高杯, 韓式系土器(30)
5号	方形	4.90m以上	1cm	3(4)	42～50cm	○			
6号	方形	4.10m	11～20cm	3(4)	27～32cm	○		地床炉	
6号	方形	4.50m	11～20cm	3(4)	27～32cm	○	南東辺中央		壺, 甕, 初期須恵器(38)
7号	方形	6.18×6.58m	3～12cm	4	43～57cm			中央ピット	壺, 甕(17) 石製作業台
8号	方形	3.72×4.14m	2～5cm	4	8～18cm	○	南隅		甕
8号	方形	4.12×4.70m	9～31cm	4	8～18cm	○	南東辺中央		壺, 甕(18・9) 高杯(24) 砥石, 焼失住居。
9号	方形	4.60×4.74m	21～29cm	2(4)	21～32cm	○		地床炉	壺, 甕(20) 高杯, 鉢, 砥石
10号	方形	5.53m							甕 竪穴状遺構
11号	方形	2.00m以上	11～15cm						竪穴状遺構
12号	方形	5.15×5.25m	6～11cm	4	18～38cm	○	南東辺中央		壺(4) 甕(6・7) 高杯, 鉢(12) 鉄製品, 器台(13・14) 手焙形土器(15・16)
13号	方形	6.05m	4～11cm	2(4)	16～26cm	○	北西辺中央		甕, 高杯, 器台 床面が北西辺に沿って窪状に窪む。
14号	方形	5.50m	4～13cm	3(4)	10～21cm	○			壺, 甕, 高杯, 鉢
15号	六角形	8.22×8.53m	12～31cm	6	51～55cm	○	南東辺中央	中央ピット	壺, 甕, 高杯, 鉢(10・11) 器台, 甌, 手焙形土器, 砥石, 石製作業台, 焼失住居。
16号	方形	5.90×6.67m	2～11cm	4	22～39cm		西隅		壺, 甕(21) 高杯(27・28) 器台, 砥石, 炭化米, 炭化建物部材, 焼失住居。
17号	方形	3.35×4.00m	2～14cm	なし			東辺	造付けカマド	壺(23) 甕, 高杯, 初期須恵器 北半部の床面僅かに下がる。
18号	方形	4.58×4.92m	5～13cm	4	10～30cm	○			甕
19号	方形	4.00m以上	2～38cm	1(4)	15cm				壺(5) 甕, 高杯, 鉢(9) 砥石, 小型石製作業台
21号	方形	3.20m以上	14～17cm			○			壺, 甕, 高杯, 鉢, 器台 20号住居より21号住居の覆土の可能性有り。
22号	方形	3.56m	2～11cm	なし					壺, 甕(1) 高杯, 水差形土器(2) 台付無頸壺(3)

を示すが、17号住居はほぼ南北方向を示す。検出面での規模は1辺3～6.7mある。1号住居は床面に浅い中央ピットがあり、中央ピットの一部及び床面の1箇所が熱を受け赤変している。主柱穴から縄蓆タタキの韓式系土器が(図5-32)、中央ピットから土師器甕(図4-22)が出土した。初期須恵器(図5-34～38)及び格子タタキの韓式系土器(図5-33)は覆土

から出土している。3号住居は後述する17号住居に次ぐ小型の住居である。北西辺に接して造り付けのカマドがある。カマド内中央に、自然石と粘土で土台を造り、上部に土師器高杯(図4-29)を倒立させて支脚とする。床面中央部が一部熱を受けて赤変する。貯蔵穴周縁には土堤状の高まりを設ける。カマド内及び周辺に甑(図4-31)が散在していた。また床面には石製作業台、白色粘土塊が遺存していた。8号住居は、北東辺及び南東辺を拡張しており、拡張後の住居は焼失住居である。主柱穴は共用する。17号住居は今回検出した住居の中で最も小規模な住居である。南辺に接してL字状を呈する造り付けのカマドがある。南辺と直交する部分がカマド部、南辺に並行する部分が煙道部に想定でき、カマド部内中央には自然石を据え支脚とする。

遺物 遺物は、遺物整理箱で60箱出土した。遺物内容は、弥生土器、土師器、須恵器、韓式系土器、陶磁器、鉄製品、砥石、炭化遺物などがある。図示した遺物は、主に各堅穴住居から出土した床直遺物を示しているが、一部覆土から出土した遺物のうち特徴的なもの(図3-13、図5-33~38)も併せて図示した。次に各時代の主な遺物についてその概略を述べる。なお図示した各遺物の番号は、堅穴住居一覧表内の遺物の項に示した。

弥生時代の遺物には、壺、甕、台付無頸壺、水差形土器、鉄製品がある。1は甕で、外面をタタキ、後に体部下半にヘラケズリし、肩部に刻目文を施す。2は水差形土器で、肩部に1条の突帯を横方向に貼付し、直下に1単位とした4条の縦方向の突帯を貼付してその間に廉状文を施す。把手側の口縁部切り込みを示す破片は出土していない。鉄製品では鉄斧状を呈するものがある。現存長11.9cm、幅6.2cm、厚さ1.0cmある。

古墳時代の遺物は、土師器、須恵器、韓式系土器、砥石、白色粘土塊、炭化遺物がある。土師器は壺(4・5・23)、甕(6・7・17~22)、鉢(8~12)、高杯(24~29)、器台(13・14)、手焙形土器(15・16)、甑(30・31)がある。壺は内外面ともハケメ調整するが、4は肩部に文様状のハケメを施す。庄内式に併行する甕や鉢は外面をタタキのち上半部にハケメを行い、内面をヘラケズリするものが多い。布留式に併行する甕では内面をヘラケズリ調整するものが多い。外面はハケメを行うものが多いが、17は体部中位に縦方向、肩部に左上がりのハケメを行い、18は体部中位に縦方向、肩部に横方向のハケメを行い、21は全体に左上がりのハケメを行う。19は肩部に波状の凹線を1条施す。手焙形土器は、体部中位に1条の突帯を巡らし、16は突帯上に更に1条の凹線を巡らし細かい刻目を施す。このほか、12号住居からは複数の手焙形土器の破片が出土している。高杯は、杯部の形態に、体部下半に稜の付くものと、椀形を呈するものがある。韓式系土器には、甕、甑がある。甕には、体部外面に縄蓆タ

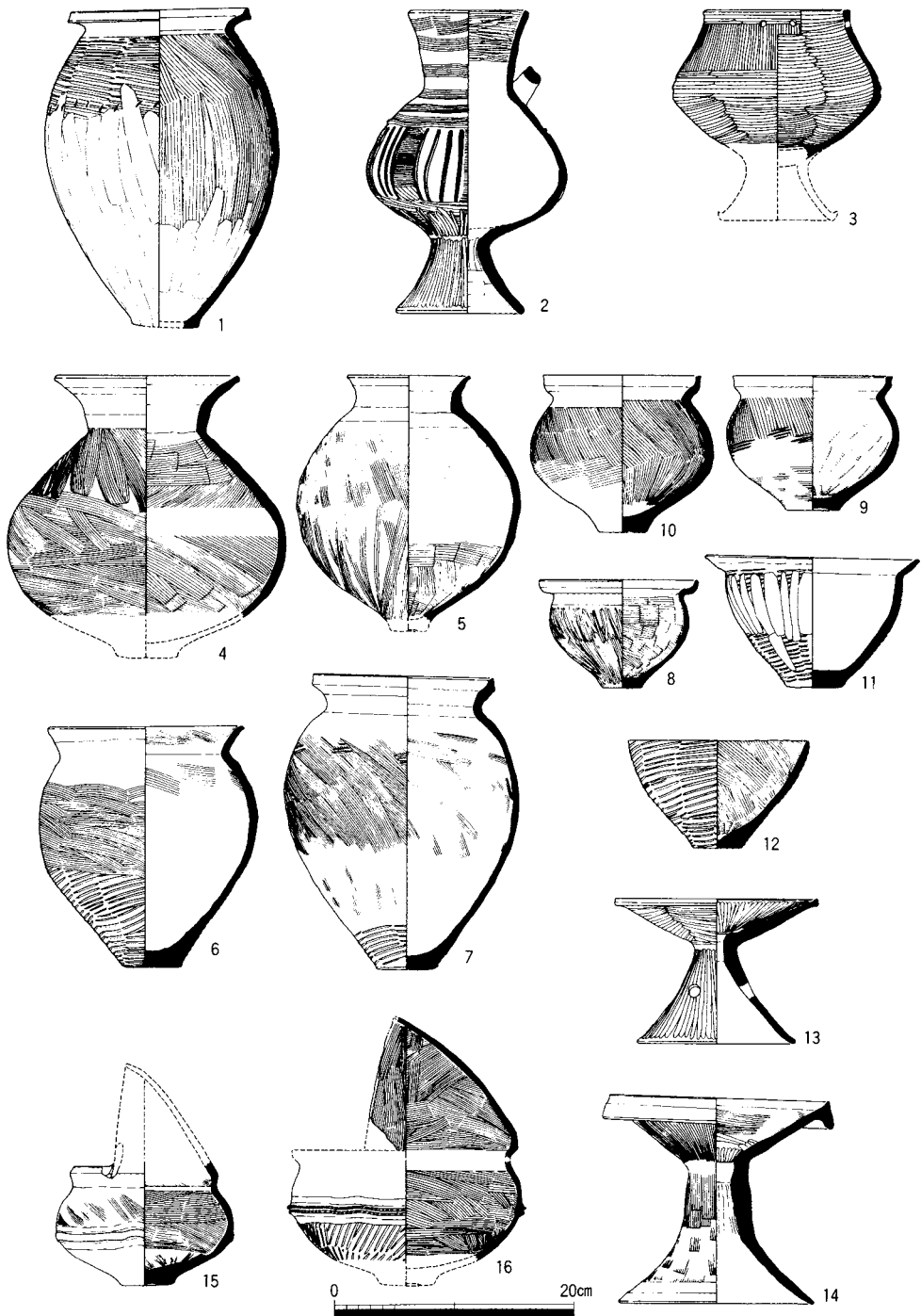


図3 2・12・15・19・22号住居出土土器(1:4)

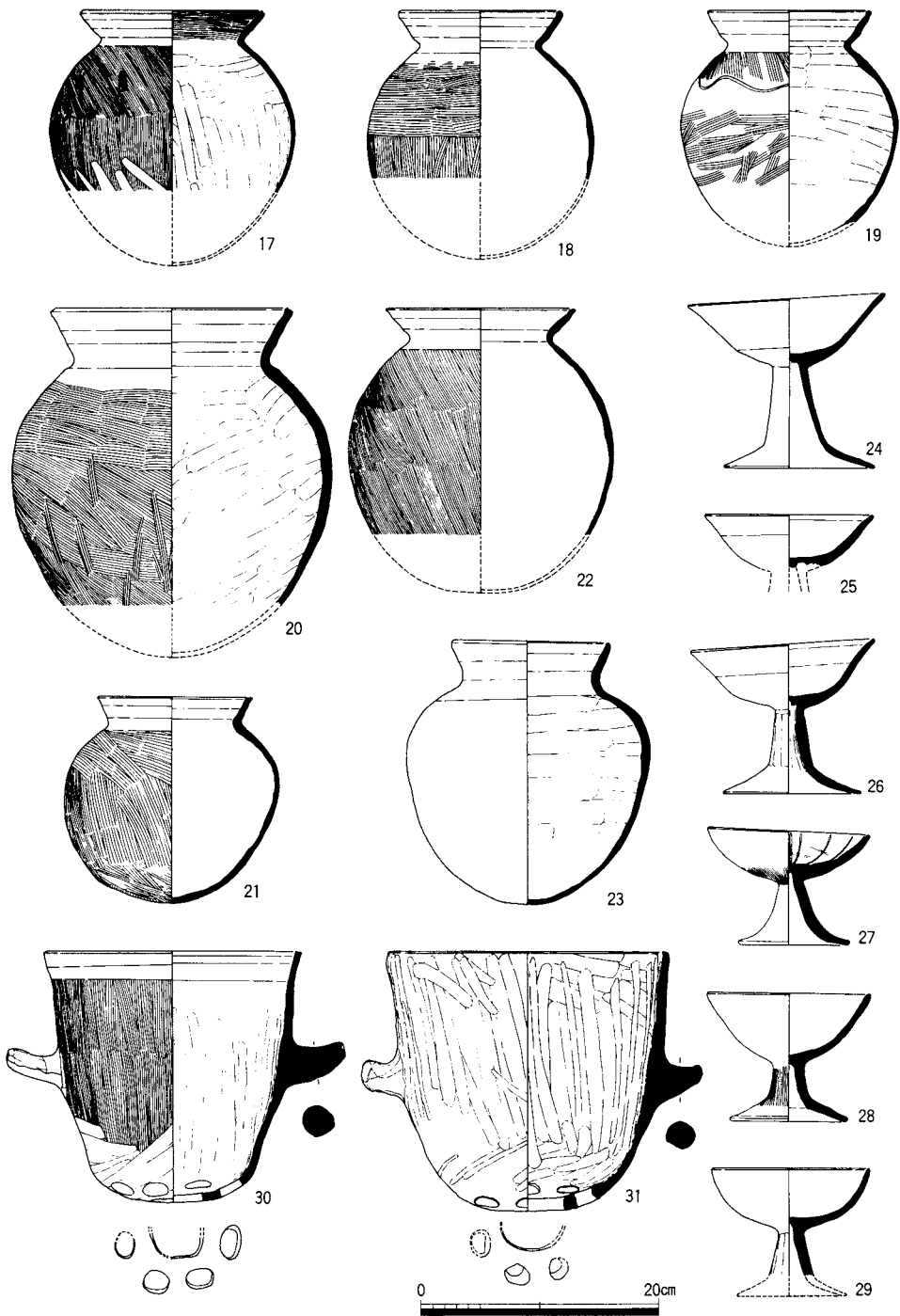


图4 1·3·4·7~9·16·17号住居出土土器 (1:4)

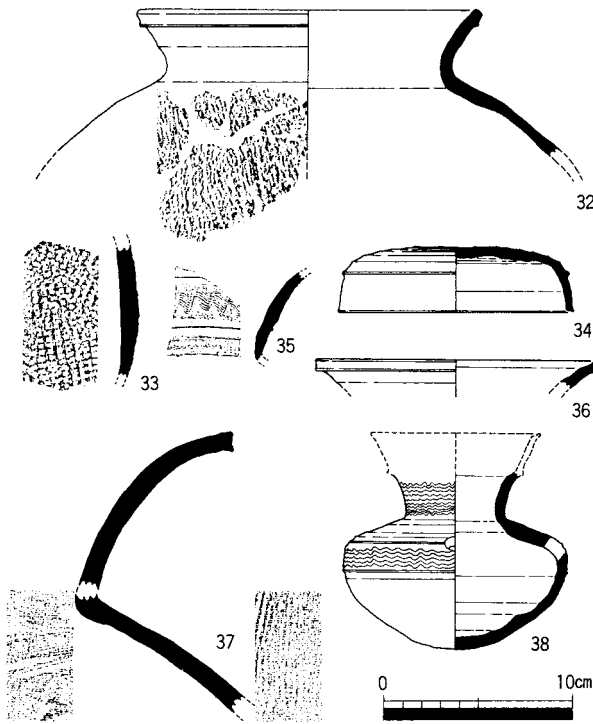


図5 1・6号住居出土土器（1：4）

タキ（32）や格子タタキ（33）を行うものがある。32は口縁部外面直下に1条の突帯を巡らす。甑はやや丸みのある底部と直線的に立ち上がる体部からなり、体部中位には1対の牛角状把手が付く。底部中央およその周縁に円孔を開ける。（30）は外面上半にハケメを行うが、他は内外面とも工具によるナデを行う。なお牛角状把手は1号住居からも出土している。初期須恵器には杯蓋（34）、壺（35・36）、甕（37）、甗（38）などがある。このうち甗を除いて他は小片である。37は総破片数で66片あるが接合できない。口縁端部に強い凹線を施し突帯状を呈する。内外面ともタタキを丁寧に

ナデ消す。外面には一部平行タタキが残る。38は肩部に強い凹線を施して文様帯とし波状文を施す。口縁部下半にも波状文を施す。底部は回転を用いないヘラケズリを行う。鉄製品では、鋤ないし鍬先に装着する農具刃先がある。両端を内側に折り曲げている。現存長11.5cm、幅6.1cm、厚さ0.3～0.4cm。

小結 以上、調査の概要を述べてきたが、二、三の補足を付け加えてまとめとしたい。

今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代中期までの竪穴住居を検出でき、従来の当遺跡の報告例より更に時代幅のある遺跡であることが判明した。検出した竪穴住居及び出土遺物は、渡来系の人々の当該地域への進出期と、その直前の時期を示唆する資料といえる。これまでの嵯峨野・太秦地域における竪穴住居の検出例は古墳時代前期及び後期のものに限られており、今回の調査は、当該地域の歴史を明らかにする上で欠くことのできない重要な資料が得られたといえよう。なお、韓式系土器及び初期須恵器や当該期の住居については韓式系土器研究会の永嶋暉臣慎・田中清美・定森秀和氏やその他の各氏から丁寧な御教示を頂いた。記して感謝する。

（辻 裕司・菅田 薫・前田義明）

44 北野廃寺（図版 57）

経過 調査地は、北区上白梅町 62 - 66 に位置する。当地は北野廃寺の推定地にあっており、付近の調査で多くの遺構・遺物が検出されている。建設工事に先立つ試掘調査でも北野廃寺の東限を画すると思われる溝を検出したことから、引き続き発掘調査を実施することになった。

遺構 検出した遺構は室町時代の根石を有する柱穴・溝・土壇，平安時代の野寺の東限を画すると思われる南北の築地状の土壇とそれ

に伴う内外溝，寺域内の東西溝 2 条である。ただ，両側溝の下層から飛鳥時代の遺物が出土しているため，いわゆる北野廃寺のものである可能性もある。土壇の上端の幅は 1.7 ~ 2.6 m，下端は 2.6 ~ 3 m を測る。外溝（SD 12）の幅は南端の断ち割り部での確認であるが幅 3.6 m，深さ 0.8 m を測る。内溝（SD 3）は幅 2.1 ~ 2.6 m，深さ 0.5 m を測り，寺域内の東西溝（SD 2・20）と接続する。調査区内の南半では土壇の両側に犬走状の段が認められる。時期が下がると土壇と内溝・外溝の北半部 SD 20 が廃絶し，調査区の南西隅に溝が「┌」状に残るだけとなる。

遺物 出土した遺物には，飛鳥時代の土師器（19 ~ 23），須恵器（25 ~ 28），瓦，軒丸瓦，軒平瓦，平安時代の土師器（1 ~ 10），須恵器（11 ~ 15），黒色土器，瓦，緑釉陶器，灰釉陶器（16）などがある。軒丸瓦には飛鳥寺系と山田寺系のものがある。また軒平瓦に興福寺式が出土している。平安時代の遺物で，特筆すべき遺物として二彩陶器の五口壺（18），緑釉陶器の生地と思われる脆い白色の椀（17），須恵器の甕腹片を馬蹄形に加工して硯として使用したもの（14），埴塼と思われる砂粒を多く含む二次焼成を受けた粗製の土器（24）がある。

小結 調査区の東半部で検出した南北方向の土壇と溝は，規模や周辺の調査などの成果から野寺の東限を画する築地とそれに附属する溝と考えられる。また，この遺構は飛鳥時代にまで遡る可能性も考えられる。

（木下保明）

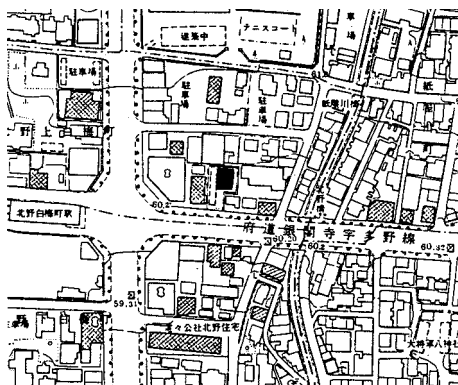


図1 調査位置図 (1:5000)

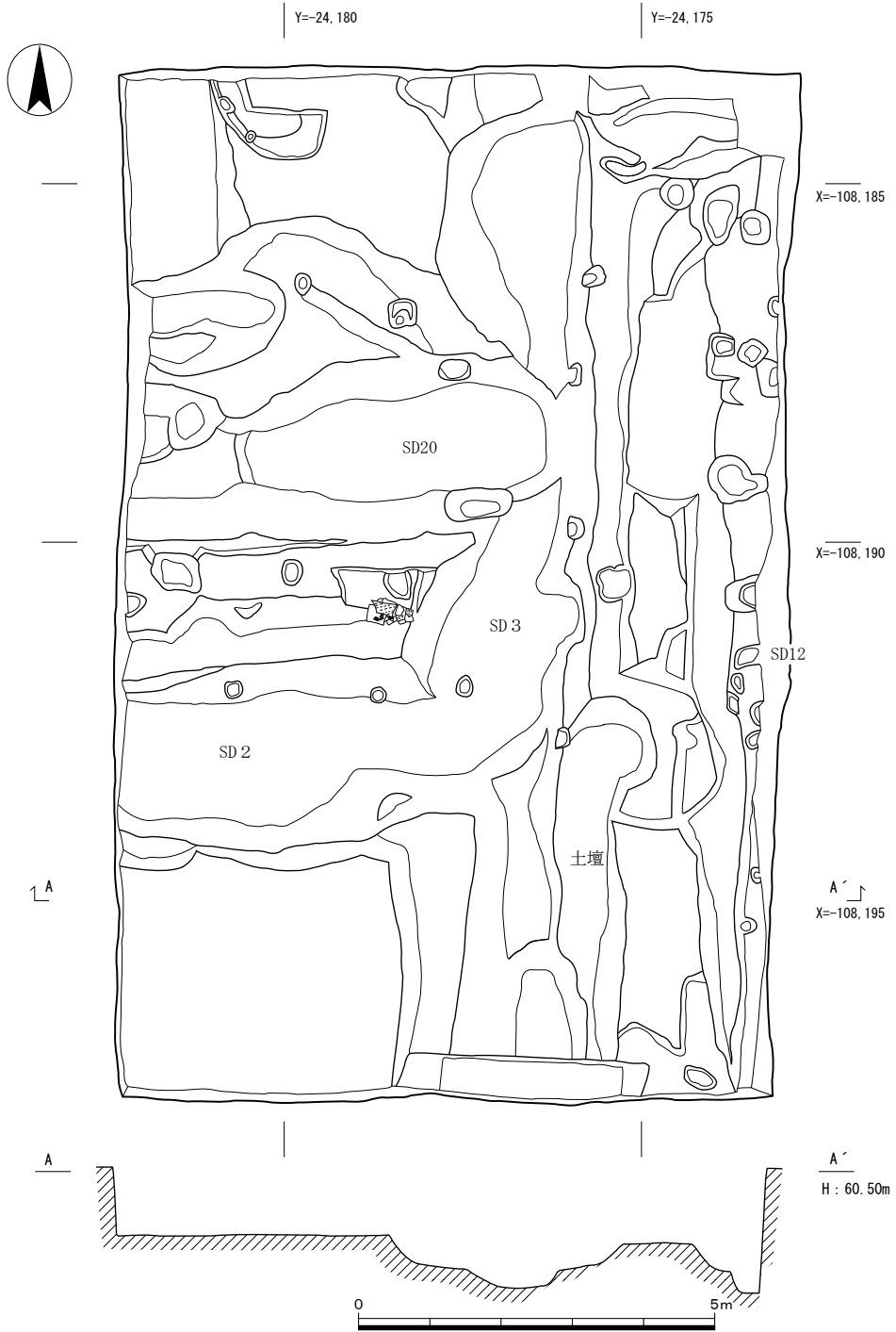


図2 遺構実測図 (1 : 100)

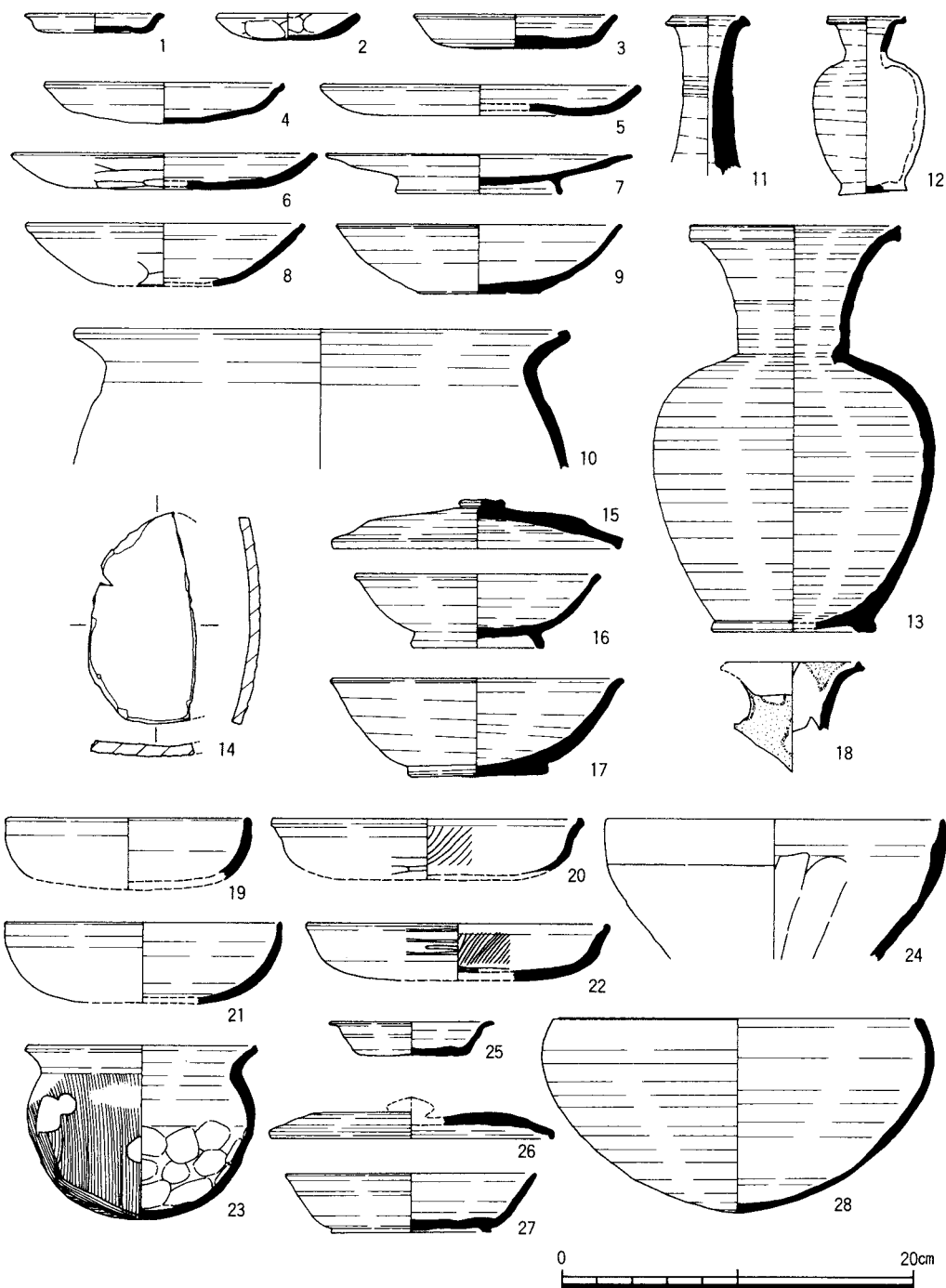


図3 出土遺物実測図 第4層(4・11・15・17) SD2(12・16) SD3(3・13)
SD12(14) SD20(1・2・5~10・18) SD3下層(19~28)(1:4)

45 南春日町遺跡（図版 58）

経過 調査は土地基盤整備事業に伴う事前の発掘調査である。

調査地は西京区大原野南春日町の南半部にあたり、現状地目は田圃である。地形からみると、西山から南東に延びる段丘中位に位置する。1984年から85年にかけて大原野地区一帯にかけて試掘調査を行い、その結果当地点では平安時代の遺構を検出している。整備事業の計画で当地が削平の対象になったため、発掘調査を実施することになった。調査にあたっては、遺構を検出した試掘地点を中心に調査区を2箇所設定した。規模は1区が南北15m、東西40mで、2区が南北10m東西20mである。

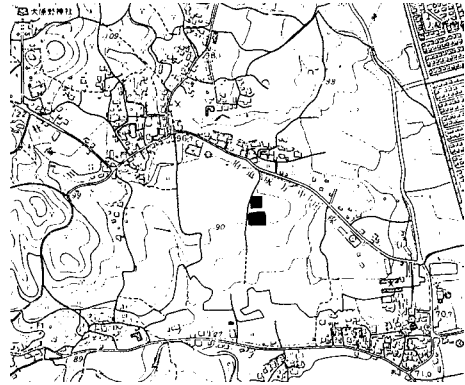


図1 調査位置図 (1:20000)

調査の結果、大原野神社に関連する平安時代後期の建物・土壇・溝を検出した。

遺構 1・2区とも、遺構は地山である黄褐色泥砂層上面で検出した。以下、調査区別に概略を述べる。

1区 基本層序は上から現耕作土、床土層、第1層 黄橙色砂泥層、第2層 明黄褐色砂泥層、第3層 灰黄褐色砂泥層でマンガン分を多量に含む、第4層 明黄褐色砂泥層である。第1層から第4層までを時期的にみると、第1層は近世、第2層は中世、第3層は平安時代後期、第4層は地山である。検出した遺構の総数は250基である。遺構は平安時代の建物・ピット・土壇・溝、中世のピット・土壇・溝という内容であった。平安時代の建物は4棟検出することができた。ここでは平安時代の建物1から4について略述する。

建物1 東西棟の掘立総柱建物で、規模は東西4間、南北3間(8.1×6.7m)である。

建物2 南北棟の掘立総柱建物で、規模は東西3間、南北4間(6×9.5m)である。

建物3 南北棟の掘立総柱建物で、規模は東西2間、南北4間(4.3×9.3m)である。

建物4 東西棟の掘立柱建物で、規模は東西2間、南北1間(4.9×2.3m)である。

建物1から4の時期関係を検出状況からみると、建物1が最も古く、次に建物2が建物3に切られていることから、建物2→建物3・4の順序となり建物3・4は同時期と考えられる。各建物の柱穴の径は30～40cmで、柱穴内には炭化物を多く含むものが多い。その他の平安時

代の遺構は、東西溝3条・多数のピットがある。

2区 基本層序は上から現耕作土・床土層、第1層 黄灰色砂泥層、第2層 灰色砂泥層、第3層 黒灰色砂泥層、第4層 黄褐色砂泥層である。第1層から第4層を時期別にみると第1層及び第2層は鎌倉時代から室町時代、第3層は平安時代から鎌倉時代、第4層は地山である。遺構は1区と同じく地山面で検出した。柱穴と考えられるピット46基を検出したが、建物としてまとめることができなかった。遺構の検出状況を見ると、調査区西半部にピットが集中する。東半部では遺構はまったく検出できなかった。

遺物 出土遺物は1・2区合わせて、整理箱で4箱とわずかであった。遺物の時期は平安時代から室町時代のもので、特に平安時代後期から鎌倉時代のものが多数を占める。遺物はほとんどが土器類である。土器類の内訳は、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、無釉陶器、輸入陶磁器、陶器である。遺物の出土状況を見ると1区では第2・3層の遺物包含層からの出土が多い。また、遺構からの出土状況を見ると、建物1の柱穴から平安時代中期の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器が、建物2・3・4の柱穴からは平安時代後期の土師器・須恵器・瓦器が出土している。2区では柱穴と考えられるピット群からの出土が多く、鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器が出土している。

小結 調査の結果、平安時代の建物を良好な状況で検出することができた。以下、そのことによって得た知見を概述してみる。

まず、平安時代の4棟の建物の時期については遺構の項でも述べたが、もう少し踏み込んで建物の変遷を捉えてみたい。4棟の建物は調査区西半部において、重複した状況で検出した。建物はいずれも大きく東に振れる。建物は、北西から南東に緩やかに傾斜する丘陵斜面に立地する。こうした地形に建物の方位が影響を受けたものとみられよう。建物の重複状況を整理すると、平安時代中期に建物1が建てられる。平安時代後期に廃絶後、建物2が建つが、柱穴内に炭・焼土が残存していた状況から、当該時期に火災を受けたと考えられ、建物3に建て替えられる。建物4はその附属舎である。

次に建物の性格について整理すると、まず、第一に各建物の柱間・方向などは何らかの規則性を有していると考えられる。第二に建物群は平安時代中期末から後期の短期間に同一地区に建て替えられている。第三に調査区の西隣地を平安時代前期に創建された大原野神社へ到達する古道が通っていることから、建物—古道—神社という構図が成立し、三者には密接な関係があったことが窺える。第四に古道沿いでの従前の調査について言えば、1985年の当調査地周辺の古道東沿いの数地点の試掘調査で、平安時代の遺構・遺物包含層を確認している。1987

年の当調査地の南約 170 mにある、古道東の地点の発掘調査では、平安時代中期の建物を検出している。

以上の四点から、今回検出した建物群は、古道が大原野神社行幸・参詣道とすれば、そのために設けられた公共施設か、あるいは神社を管理する社家の住居地を示す遺構だといえる。

(加納敬二)

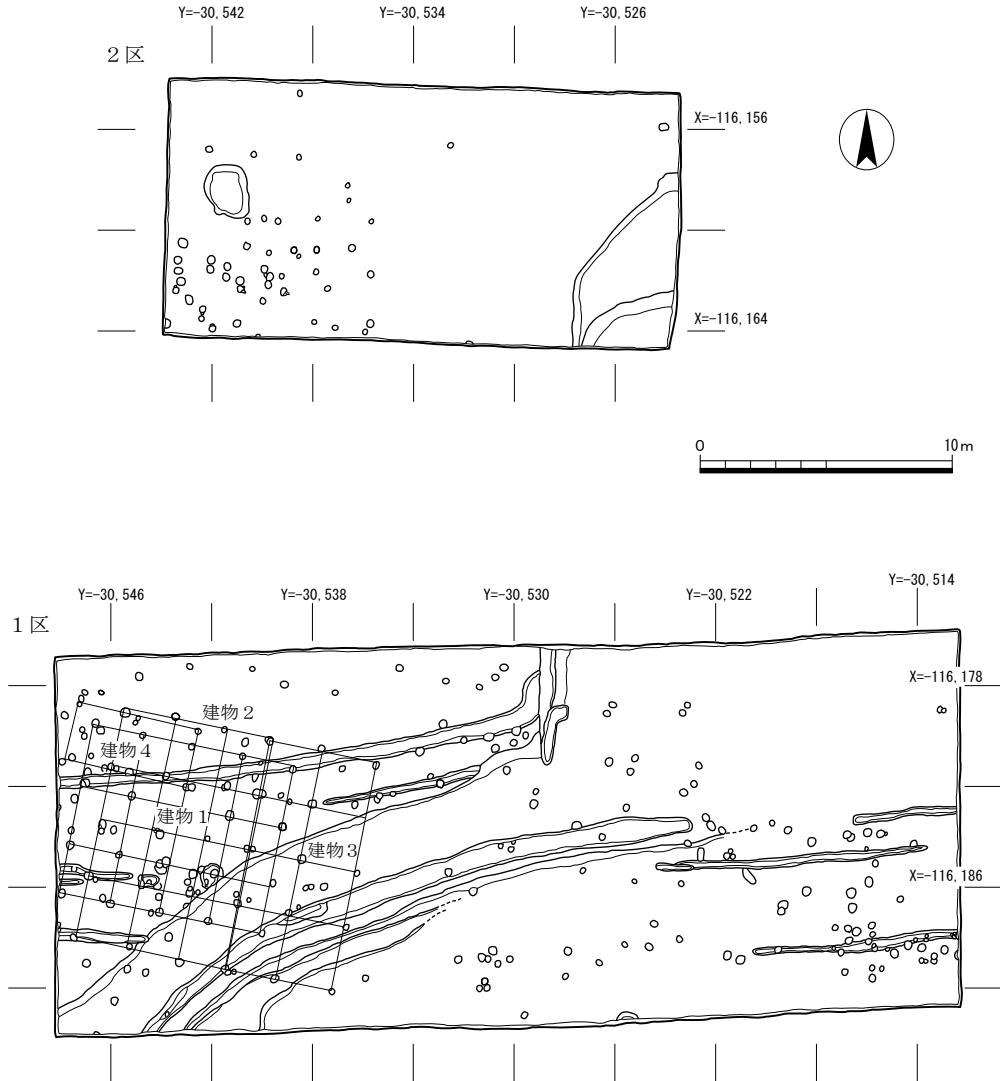


図2 遺構実測図 (1 : 300)

46 伏見城々下町（図版 60）

経過 調査対象地は旧国鉄（現JR西日本）奈良線桃山駅舎のすぐ南側に位置する。近年まで鉄道関係施設として利用されていた。当地は、伏見城と城下町の絵図などを手懸かりとすれば、伏見城大手門へ至る大手筋の南側に並ぶ大名屋敷の南部と商家街である立売の一部及び両者の境界ラインを含むあたりに位置する。立売は当地域の町名として現在にもその名をとどめている。

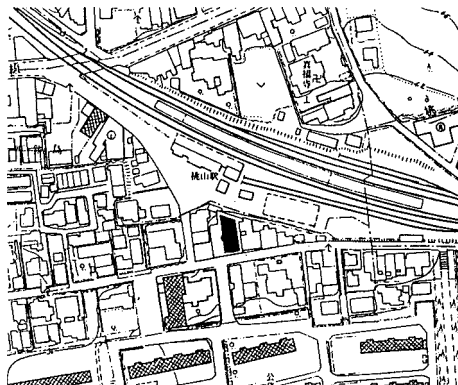


図1 調査位置図 (1:5000)

調査の結果、桃山時代の大名屋敷の南端部と立売の商家とみられる建物（礎石群）を検出し、加えて屋敷地と商家を分ける境の一端を確認することができた。

遺構 桃山時代の遺構面は、調査区南半部では焼土層を挟み2面形成されていた。焼土層下のプラン1-2は、築地とみている遺構の東西ライン付近を境にして段差があり北側の平坦面に較べて南側が数10cm以上低い平坦面となっている。築地とみている遺構は、南北両平坦面の段差部分で、幅1mが北側平坦面より帯状に10数センチ程度高みとなっているものである。その高み上面で礎石を検出しているが築地全体の残存状況は悪い。

焼土層には赤褐色の焼土に伴い多量の焼け瓦や二次的に強い火を受けた土器類が多数含まれており、プラン1-2の南北の高低差を埋めるように南側の低くみに入れられている。この焼土層はプラン1-2に展開していた遺構が被災した後の瓦礫を処理し次のプラン1-1の整地を兼ねた土層といえる。桃山時代の遺構群は上述の2枚のプラン上に展開しているが、両面の遺構群ともその様相は築地とみている遺構の東西ラインを境に大きく異なっている。ラインより北側では、井戸・土塀・ピット・掘込などを主とする遺構が展開している。これらの遺構には、南半の焼土積み上げ時に同時に埋没し廃棄されたと判断できるものも多い。ラインより南側では一定間隔で並ぶ礎石群を、焼土層を挟む上・下面でそれぞれ検出しており遺構の中心は建物である。この建物は、礎石の配置から類似した形式で連続する建物群の一部で長屋状を呈するものと考えている。江戸時代前期以降には遺構は急激に減るが中期に埋没する遺構が一定数あることからこの地域は江戸時代にも細々とではあるが人々の居住が続くようだ。

しかし、その様相は非都市的であり、当地が再度活況を呈するのは近代に入って以降である。

なお、桃山時代のプラン1-2南半の整地層（結果的には大穴の埋土上層、土質は周辺の地山と同じ）下に、伏見区役所前や御香宮西隣地の調査地で検出した大穴の同類とみられる遺構を断ち割り調査で確認したが今回は全容を解明するまでには至らなかった。検出面から1.5 m掘り下げたが底部は確認できなかった。規模は断ち割り部分の状況からみて、調査区南半部と同程度か更に大きいとみられる。掘り下げた部分の下層は水分の多いシルト土層が主であり、そこから木製品、金箔瓦、土器類などが出土している。出土遺物からみて埋没はプラン1-2形成直前の桃山時代である。

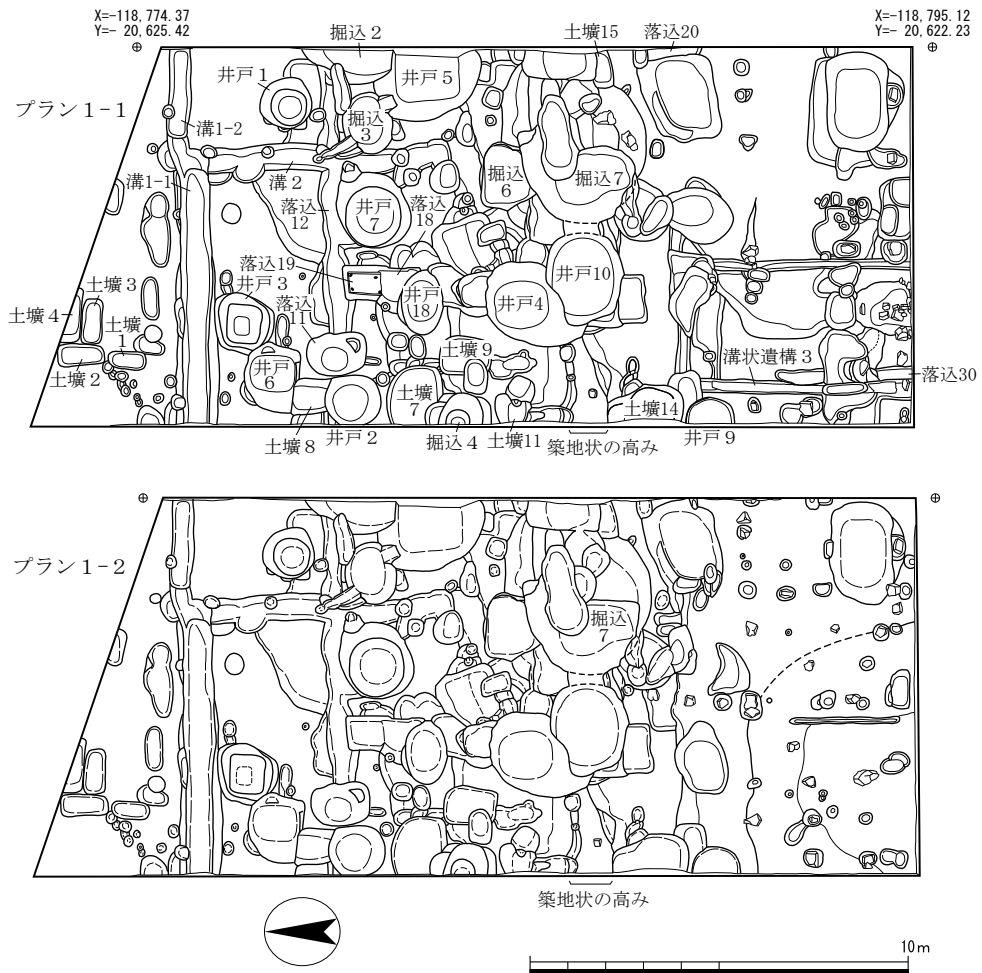


図2 遺構実測図 (1:200)

遺物 出土遺物は層・包含層への混入遺物を含めて桃山時代に比定できるものが中心で、同期より古いものはごく少ない。埴輪片かと思われる1点と須恵器が数片、他は室町時代後期の土師器皿、瓦器羽釜などが少々出土している。これらは新しい時期の遺構に混入品として出土しているものがほとんどである。これらの少量の資料から古い時代の遺跡云々とまでは言えないが埴輪は古墳と直結する遺物であり注意が必要である。室町時代後期のものは、確実性は低い遺構に伴っているとみた方がよい資料が少しあり、検討が必要である。

桃山時代の遺物は、質・量共に豊富である。層・遺構出土資料中には良好な一括資料も多い。中でも焼土層出土遺物は上・下の遺構面との関係から時期限定ができる可能性が高い資料である。若干の問題点としては土師器の皿の主力が京都中心域のものと異なる点である。けれども土師器、瓦器、陶器（瀬戸美濃系・唐津系）、磁器（明末の輸入品—伊万里は混じらない）、そのほか金箔瓦を含む瓦類や金属器（刀・刀子・刀装具・鉄砲玉など）、埴埴（皿）など鑄造関係品も多数出土している。陶器類の中には瀬戸黒茶碗など当時でも逸品といえる高級茶陶類も含まれている。土器・陶磁器の内容とセットは桃山時代の典型例として伏見城関係の標準的な資料となるだろう。他に遺構から型式的まとまりのある資料が多数出土している。井戸2・5・7・8・10、土壙7・12、落込20・31～33、掘込3・4・6・7などがあげられる。これらも加えると、桃山時代の資料は非常に多彩で多量なものとなる。

小結 今回実施した調査の結果、桃山時代の遺構・遺物を多数検出することができた。調査区中央付近で検出した東西方向の築地とみられる東西ラインより北側で検出した遺構群は、大名屋敷の南端にあった諸施設やごみ捨て穴とみられる。今回の調査では、この屋敷が誰の所有するものであったかを断定できる資料は検出できなかったが、絵図を手懸かりにすれば浅野但馬守の屋敷もしくはその西隣の屋敷地の一部を発掘した可能性が高い。出土瓦には違い鷹羽文様の軒瓦が含まれており注意しておくべきだろう。同紋は浅野家の家紋として名高いものである。同東西ラインより南側で検出した桃山時代の新旧2時期（各部分変化はそれぞれあるが）の建物は、被災による建て替えが行われたのであろう。大名屋敷地側の被災痕跡は遺構面では不明瞭だが、堆積土や出土遺物に十分認められる。これらの建物については現時点では立売の商家街を形成した建物群の一端と理解しておく。今回の調査成果からも各種のことが考察できるが、いかんせん調査面積も小さく各問題に結論が出せるまでに至っていない。今後の周辺調査に期待するところが大きい。 (平安京調査会 小森俊寛)

47 上久世遺跡 (図版 61・62)

経過 この調査はマンション建設に伴う調査である。当地一帯は上久世遺跡および城内遺跡に該当し、弥生時代から室町時代に至る複合遺跡である。このため工事に先立ち試掘調査を実施し、地下の遺構の状況を確認した。そして、調査地北部で多数の柱穴、南部で遺物を多量に含む流路の堆積土を確認したため発掘調査を実施する運びとなった。

調査は試掘の結果を受けて調査地北部に重点を置き、併せて南部の流路の状況も把握できるように調査区を設定して実施した。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、盛土約 60cm の下に旧耕作土と床土層が約 20cm ある。この下は、調査区の南端ににぶい黄褐色砂礫層が認められる以外は、大半がすぐに黄褐色砂泥層の地山となる。遺構の大部分はこの上面で検出した。遺構面の地形は北西部から南東部に向かって緩やかに傾斜しており、標高の高い北西部を中心に遺構が分布している。検出した遺構は、弥生時代から古墳時代 (Ⅰ期) と平安時代 (Ⅱ期) に大別できる。

Ⅰ期 この時期の遺構として、調査区の南側に北西から南東方向に向かう幅 10 m、深さ 1 m の流路 (SD 9) と、その北側に竪穴住居を中心とした集落跡を検出した。この流路はⅠ期を通じて存続するが、他の遺構はさらに弥生時代 (Ⅰa 期) と古墳時代 (Ⅰb 期) の遺構に分けることができる。

Ⅰa 期の主な遺構としては竪穴住居 (1 号住居) を 1 棟検出した。これは直径 7.5 m の円形で、中央に貯蔵穴があり、その周りに 5 箇所柱穴がある。遺物は少なく弥生土器がわずかに出土しているに過ぎない。このほか、SD 9 の肩部で井戸と考えられる土壙 (SK 2) を検出した。これは直径 1.1 m の円形で深さは検出面から約 50cm である。ここからは弥生土器の甕がほぼ完形で出土している。

Ⅰb 期の主な遺構としては竪穴住居 2 棟・掘立柱建物 1 棟を検出した。竪穴住居の 1 棟 (3 号住居) は 4.8 × 6.3 m の隅丸長方形で、中央に貯蔵穴があり、柱穴は 2 箇所である。他の 1 棟 (4 号住居) は一辺約 6.5 m の方形で、東辺中ほどに貯蔵穴があり、柱穴は 4 箇所である。

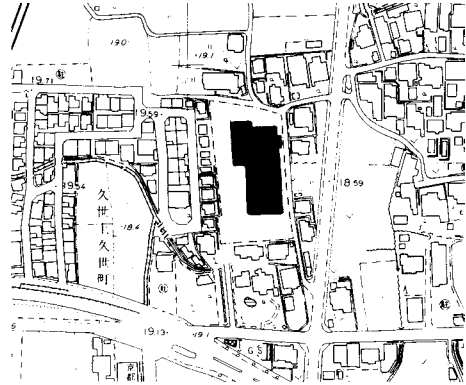


図1 調査位置図 (1:5000)

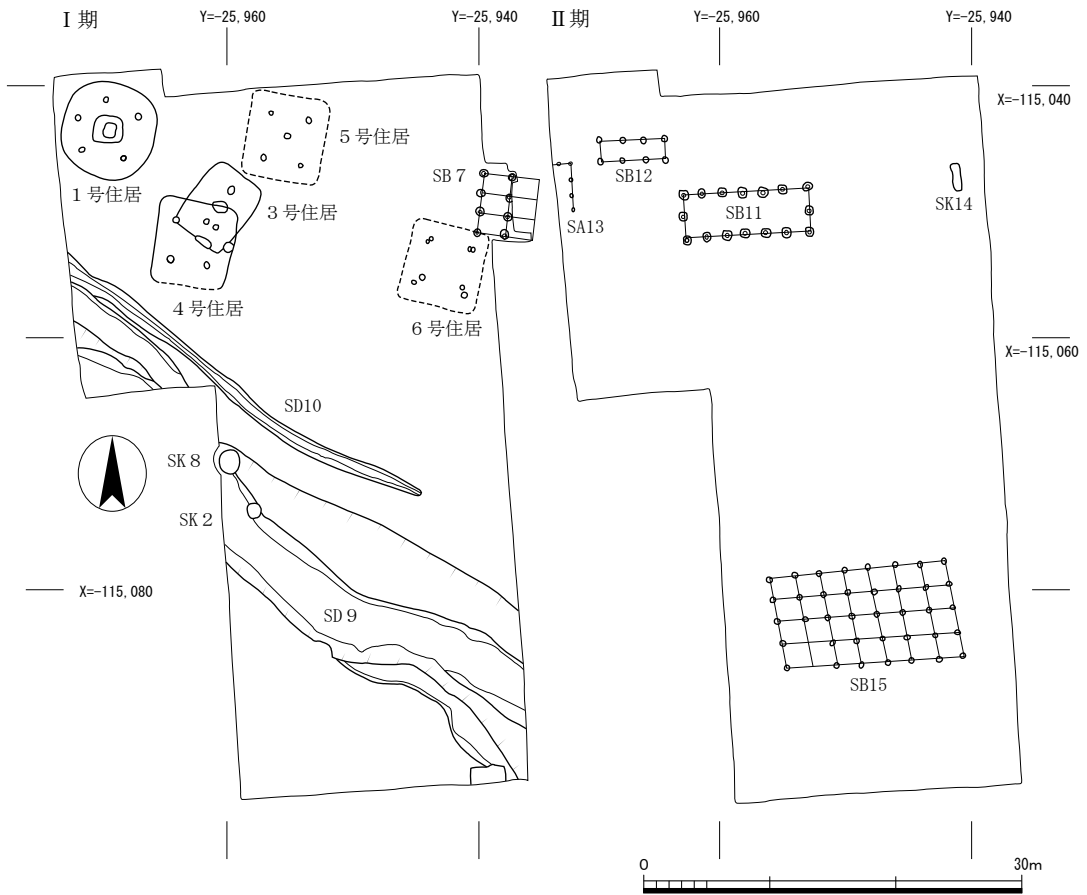


図2 遺構配置図 (1 : 600)

また柱穴や貯蔵穴の配置から、竪穴住居が2棟（5・6号住居）復原できる。掘立柱建物（SB7）は調査区の東端で検出し、さらに調査区外へ延びる。南北3間、東西2間の総柱建物であると考えられる。このほかにSD9と並行して走る溝（SD10）や、井戸と考えられる土坑（SK8）などを検出している。SD9はこの時期に埋まり始め、I b期の終りには埋没している。その埋土からは多量の土器が出土している。なお、I b期の遺構は重複するものがあり、さらに細分できる可能性がある。

Ⅱ期 Ⅱ期の遺構として掘立柱建物群を検出したが、これはさらに平安時代中期（Ⅱa期）のもの、平安時代後期（Ⅱb期）のものに分けることができる。

Ⅱa期の主な遺構として調査区の北部を中心に掘立柱建物2棟・柵列1列・土墳墓1基を検出した。調査区の中央部で検出した建物（SB11）は東西6間、南北2間の東西棟である。そ

の北西の建物（SB 12）も東西3間、南北1間の東西棟である。柵列（SA 13）は調査区西端で南北3間を検出したが、北辺が西へ延びるようである。土壙墓（SK 14）は木棺墓であった可能性が高く、中に土師器皿、須恵器壺、緑釉陶器椀、鉄製刀子などが埋納されていた。

Ⅱ b期の遺構は調査区の南部に分布しており、主なものとして掘立柱建物（SB 15）がある。この建物は東西7間、南北4間の総柱の東西棟である。

これらの遺構のほかに時期不明の柱穴や小溝・土壙などが多数存在する。

小結 今回の調査成果は大きく2点をあげることができよう。その1点は、弥生時代から古墳時代に至る集落跡を検出できたことである。調査では集落全体の規模を知ることはできず、各住居跡も後世の削平によって遺存状況は良くなかった。しかし、検出した遺構は水利を

求めて流路の近くに営んだ当時の集落の様子を良く伝えている。また、今回検出したものと同様な流路はこれまでに上久世・中久世地区で数条を確認している。この時期、当地一帯の集落はこうした流路の自然堤防上に点々と営まれたと考えられよう。

成果の第2点は、平安時代の邸宅の様相が明らかになったことである。特に調査区北部で検出した平安時代中期（Ⅱ a期）の掘立柱建物・柵列・土壙墓などは、主軸の方位が揃っていることや、小型の建物が大型の建物の2分の1の規模であることなど、造営にかなりの計画性が窺える。平安京近郊のこうした邸宅跡はこれまでにあまり調査例がなく、好資料であるといえよう。また、調査区東部で検出した土壙墓は宅地内に単独で存在し、副葬品も豊富である。同様な例は京都市内で数例が認められており、当時の葬喪観を知る上で興味深い資料である。

（吉崎 伸）

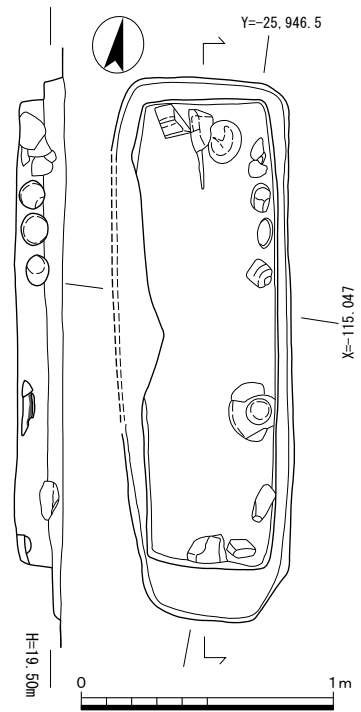


図3 SK14実測図（1：30）

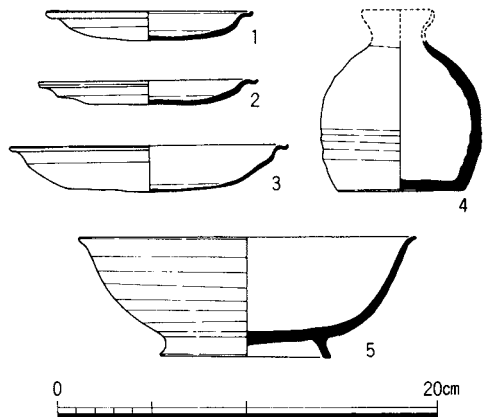


図4 SK 14 出土遺物土師器（1～3）・須恵器（4）・緑釉陶器（5）（1：4）

48 大藪遺跡

経過 京都市南区久世大藪町 234 他の畑地が造成され、団地が建設されることになった。同地は大藪遺跡にあたるため、まず試掘調査を実施した。その結果、久世中学校内で検出した流路の左岸に設けられた護岸施設に続くとみられる杭列および北東部の高台部において弥生時代の遺構・遺物を検出したことから発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物 試掘調査で確認した杭列部分と、高台部の弥生時代の遺構を検出した部分にかけ東西に長い調査区を平行に2箇所設定し、南を1区、北の調査区を2区とした。

2区で検出した遺構は、鎌倉時代頃の幅約6m、深さ約80cmの南北濠がある。この濠は1区を通り現在の藪集落の西端をかすめさらに南へ延びるものと思われる。濠内から少量の土師器、瓦器のほか、漆器の皿・椀が折敷の上に伏せられた状況で出土した。

流路は2区の西南端をかすめる。杭列の規模は久世中学校のものとは比較にならないものの、それでも基本的な工作状況は共通しており、立派に護岸の役を担っている。

南北の濠に切られる形で弥生時代の竪穴住居を検出した。北東から南西の傾きを持っており、その東側のみであるが壁溝と3箇所の柱穴を認めた。竪穴住居は方形で、辺長10mほどの大きなものである。柱穴間は5.4mを測る。濠対岸の1基を除く2基の柱穴に柱根が残存していた、1本は直径45cmの太いもので、手斧で丁寧に削られた痕跡がみられる。またこれらの柱根には礎板が伴っている。出土遺物は遺存状況が悪く、破片がほとんどである。畿内第V様式に併行するものと思われる。

小結 調査地の北東に位置する久世中学校では、これまでに8次に及ぶ発掘調査が実施され、流路と奈良時代頃に築造されたと考えられる大規模な護岸施設を認めている。今回の杭列はこれに連続し、立会調査で検出した杭列も合わせ全長250mを確認したことになる。中世および弥生時代の遺構・遺物はこれまでも近辺で若干は認められてはいるが、今回のように明確になったのは少ない。今後の調査に期待している。(鈴木廣司)

『大藪遺跡発掘調査概報』昭和62年度 1988年報告

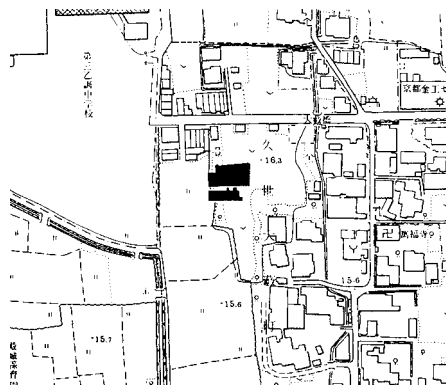


図1 調査位置図 (1:5000)

第2章 試掘・立会調査

I 昭和62年度の試掘・立会調査概要

昭和62年度の試掘・立会調査は付表2に示したように31件を実施している。内訳は試掘調査が13件で、このうちその成果により発掘調査に移行したものが6件と半数を数える。発掘調査に移行したものはそれぞれ第1章に示した。立会調査は18件があげられる。このうちには、立会調査と可能な部分のみ発掘調査を行った2件が含まれる。付表2の1については本稿に、同18については第1章に示した。これらは原因者の委託により当研究所が実施したものである。また、付表2の31は文化庁国庫補助事業として継続的に実施しているもので、試掘調査124件、立会調査764件を数える。31については『京都市内遺跡試掘立会調査概報』

昭和62年度 京都市文化観光局 として報告しており、詳細はそちらを参照して頂きたい。以下、概要を簡単に示す。

平安宮・京跡

1 応天門付近の遺構は、破壊が進行していたにも拘らず、凝灰岩の切石を発見したことは大切である。

2 兵庫寮跡では調査面積が狭いためもあり平安時代の包含層の確認に終わった。

3 京跡は、中京区壬生朱雀町の朱雀第一小学校では既往の調査で建物・溝・井戸・土壌を検出しているが、今回の調査では池を検出した。池は平安時代に属し、木簡・桧扇・箸などが出土し、寝殿造り建物の園池の存在が推定できた。

4 同じく壬生東土居ノ内町の朱雀第七小学校では、同校内における6度目の調査が行われ、以前に検出している流路が幅30mを越える大規模なものと推定でき、かつ室町時代まで存続していたことが判明した。

5 右京区太秦柳通町14-1の安井小学校では、平安時代の遺構は検出できなかったものの、地表下1.3mで始良Tn火山灰層を検出している。

6 下京区中堂寺南町の大坂ガス跡地では、皇嘉門大路・楊梅小路に関連する良好な遺構を確認し、かつ平安時代の安定した遺構面が存在していることがわかった。

平安京域外の遺跡

7 岡崎の京都市動物園内ではこれまでに法勝寺に関連する数回の調査が実施されているが、今回は動物園の中央北端部の金堂南庭にあたる部分を調査している。明確な遺構は認め

られなかったが寺院関係の遺物と、下層で布留式併行期の遺物が出土している。

8・9 鳥羽離宮跡の立会調査は、その東側の地域を除くものの北から南まで広い範囲の調査となった。明確な遺構の発見は少なかったが、鳥羽離宮跡をほぼ南北に縦断する形の土層柱状断面図を得ることができた。

10 下鳥羽遺跡の立会調査では、古墳時代から平安時代の遺物包含層を認めている。I-33の下鳥羽遺跡などからみれば、やや中心から外れている可能性は否めないが、それでも遺物包含層の検出は見逃すことができない。

11・12 太秦一帯の広域下水道工事に伴う立会調査では、森ヶ東瓦窯の瓦類、広隆寺旧境内では古墳時代および平安時代の遺構群を検出している。常盤仲之町・東ノ町、太秦和泉式部町地内でも古墳時代後期の溝および遺物を検出し、従来から知られている古墳群の遺構であると考えられる。

13 法成寺関係の立会調査では、鴨沂高校の南方において平安時代から鎌倉時代の遺構の一部とみられる池状堆積層や集石遺構の存在がみられた。

14 檜原廃寺関係の立会調査では、寺院建立以前の弥生時代遺物包含層を検出している。寺院関係では瓦窯を3基確認した。これは、史跡公園南方150mにある2基の瓦窯に加え、新発見である。保存を含め積極的資料を提示できたことは重要である。

15 洛西大枝地区峰ヶ堂城跡（鳴谷古墳）では、人工的土盛りを調査したが「砂防堰堤」と想定したにとどまった。

16 中久世・大藪遺跡では、従来の発掘および立会調査を追認する成果があり、他に糸里関係の溝や久世中学校内の流路についても、弥生時代から奈良時代までわずかずつ移動を繰り返しながら存続し、平安時代の終り頃に埋没したことが判明した。

17 深草・稲荷地区の立会調査では、弥生時代の遺構・遺物の報告があつて、小河川単位に小遺跡が存在していることが明らかになった。

18 伏見城跡では、城下町部分の調査があり、広い整地層と良好な遺構が存在していること、これが桃山時代から江戸時代にわたっていることが明らかになった。

試掘・立会調査は、発掘調査に比して軽視されがちであるが、広い面積や遺構の濃密、遺存状況を手早く把握できる極めて有効な手法であることが実証されたと思う。今後とも可能な限り遺跡周辺地域、また現在遺跡として周知されていない地域についても実施されることを希望する。

(吉村正親)

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院

経過 日本電信電話株式会社によって千本通の丸太町から二条駅までの間に電気通信施設の埋設が計画された。工事区間は朝堂院の中心部を縦断する形になり、竜尾壇、大嘗宮、会昌門、応天門、朱雀門などの遺構が推定される。そのため、主要箇所については発掘調査を行い、それ以外については立会調査を実施した。発掘調査地点は大嘗宮、応天門、朱雀門の各推定地に3箇所設定し、北よりA・B・Cとした。発掘調査は昭和62年11月21日から12月13日までの間、立会調査は昭和63年より開始し、6月14日までの間それぞれ実施した。

遺構・遺物 基本層序は、調査区全域がほぼ同様の状況で地表下70cmまでが道路敷き、以下に近世以降の褐灰色泥土層(10cm)、灰褐色泥砂層(10cm)があり、地山の黄褐色砂泥層となる。

発掘調査で検出した遺構には平安時代、室町時代、江戸時代のものがある。応天門、朱雀門の基壇はすべて削平されており、平安時代の遺構はBトレンチで2例の土壇を確認したにとどまった。土壇はいずれも径1.2mで深さ14cmを測り、礫・瓦を含む。Cトレンチでは室町時代の東西方向の溝状遺構を検出した。立会調査で検出した遺構の主なもの、整地層(D地点)と多量の瓦を含む土壇(E地点)がある。整地層は地表下0.55mにおいて現れ、0.4mほどの落差を持って南へ落ち、地表下1mで平坦な面が続く。土壇は、地表下0.6mにて検出したもので長さ5m、深さ0.4mの規模を持つ。掘形内には多量の平安時代の瓦があり、化粧石とみられる凝灰岩の切石が2個体混在する。

小結 D地点で検出した整地層は、時期は不明なものの大極殿院の竜尾壇の一部とみられる。E地点の土壇は、応天門の南辺部に位置し、凝灰岩の切石は応天門に使われていた基壇化粧であろう。

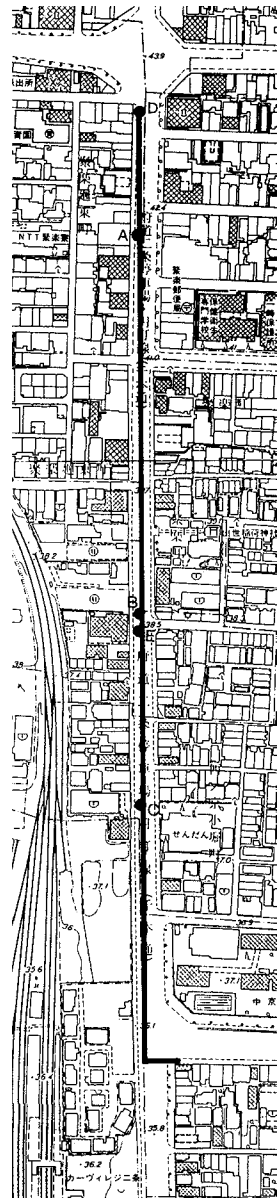


図1 調査位置図(1:5000)

(家崎孝治・本 弥八郎)

2 平安宮兵庫寮

経過 調査地は上京区御前通一条下ル東堅町132-1の仁和小学校敷地内である。

今回の調査は防火水槽設置工事に伴う事前の調査である。当地は平安宮大内裏の兵庫寮に推定されており、当小学校敷地内では過去数回にわたって調査が実施されている。しかし特に注目すべき遺構・遺物は確認されていない。今回の調査でも検出した遺構はすべて近世のもので、平安時代の遺構は検出できなかった。調査面積は32㎡で、調査期間は昭和63年1月18日から同月20日までの3日間である。

遺構・遺物 基本層序は、地表下35cmまでが現代層で、以下に暗茶褐色砂泥層10cm、暗褐色砂泥層25cmが堆積する。暗茶褐色砂泥層は近世の遺物包含層、暗褐色砂泥層は平安時代の瓦片を包含する同時代の包含層である。同層以下は黒褐色砂泥層40cmがあり、暗褐色砂礫層と続く。下部2層からは遺物を検出していない。検出した遺構は、溝状遺構が2例、不整形な土壇が4例であり、いずれも近世以降のものである。

清掃中および各遺構から出土した遺物量は極めて少なく、近世末の土師器・磁器、桃山時代の土師器、平安時代の土師器・瓦などがある。

小結 調査地は兵庫寮の南西隅に推定されており、同寮の区画を解明する上にも重要な区域であった。しかし調査面積が狭いためあって関連する遺構は検出できなかった。ただし平安時代の遺物包含層が残存することから、周辺地に遺構の残存する可能性は高く今後の調査に期待したい。(本 弥八郎)

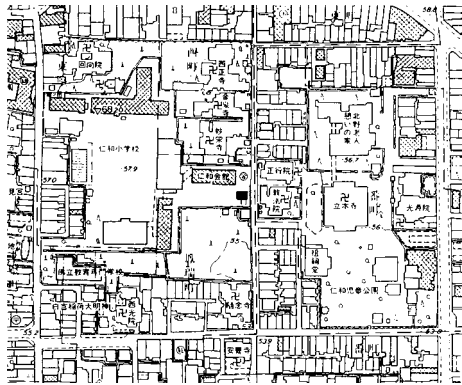


図1 調査位置図(1:5000)



図2 調査区全景(北から)

3 平安京左京四条一坊

経過 調査地は、京都市中京区壬生朱雀町に所在する朱雀第一小学校の校内である。調査区は、敷地東側に設けられている校庭の一画に位置する。当地は、1974年度と1976年度において平安京調査会が発掘調査を実施している。2回の調査によって平安時代の建物、溝、井戸、土壌、池などを検出している。今回の調査地は、平安京調査会が実施した第1次調査地のすぐ南側に位置する。

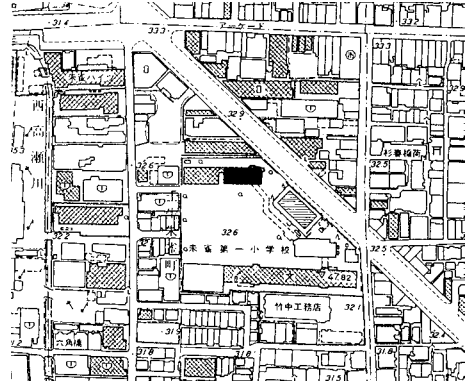


図1 調査位置図 (1:5000)

調査区を設定した場所には、児童が使用する遊技具やプール用の水道管が埋設されているために調査面積は計画当初の半分になってしまった。調査は重機を使用して、遊技具の撤去から開始した。

遺構・遺物 調査区の基本層位は、校庭造成時の整地層 (25cm) 下にはいわゆる石炭ガラ (50cm) が認められた。その下層には黒褐色砂泥層 (15cm)、灰黄褐色砂泥層 (30cm)、などが堆積していた。これより下層は、池の埋土で上から順に黒褐色腐植土層 (20cm)、暗褐色腐植土層 (20cm)、黒褐色砂泥層 (20cm) などがみられた。調査の結果、検出した遺構は中世の溝と、平安時代の池である。

中世の溝は、幅 70cm、深さ 30cm で南北方向であった。遺物はほとんど出土していない。性格については明らかにすることができなかった。

池は、調査区全体に認められた。池内の堆積状態については、調査区の基本層位で述べた通りである。腐植土層からは土器や瓦に混じって、木簡や桧扇、箸なども出土した。なお、木簡は解読できなかった。

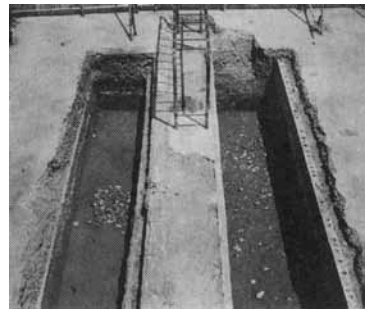


図2 調査区全景 (西から)

小結 今回の調査で発見した池は、池内の堆積状況や遺物の出土状況などから自然の溜め池のものではなく、人工的なものではないかと考えている。平安京調査会が1974年と1976年に実施した発掘調査の成果や今回の調査によって、当地に寝殿造りの建物や園池の存在した可能性が極めて高くなった。

(鈴木久男)

4 平安京右京二条四坊

経過 調査地は、右京区太秦安井柳通町 14-1 の京都市立安井小学校である。本調査は屋内体育館改築に伴う試掘調査である。当該地は、平安京右京二条四坊十二町に推定されるところで、無差小路の条坊遺構が調査対象地に通ることが予想された。調査は、旧屋内体育館の解体に先立ち、建設予定地の一部を対象に昭和 62 年 6 月 2 日に実施し、その日の内に終了した。調査面積は、南北 1 m、東西 13 m の 13m²であった。

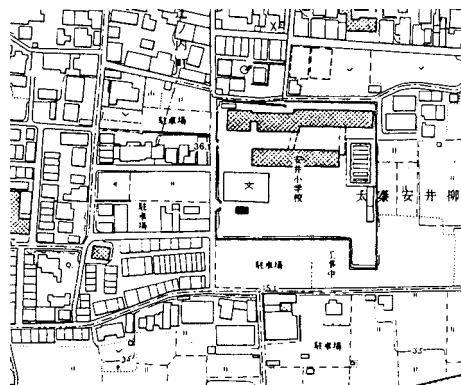


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 基本層序は、地表下 0.8 m まで、盛土およびグラウンドの整地層で、その下に厚さ 20cm の旧耕作土層がある。旧耕作土層以下は、黒色泥土層 (30cm)、火山灰層 (5 cm)、黒褐色泥土層 (12cm)、灰黄褐色泥土層 (15cm)、暗灰黄色砂礫層となる。黒色泥土層以下の土層堆積は東より西へ緩やかに下がる様相を呈する。遺構は黒色泥土層の上面において、南北溝 13 条を検出した。これらの溝は、幅 0.2 ~ 1 m、深さ 10 ~ 20cm の規模で U 字形の掘形を持つ。各溝はほぼ並行関係にあり、一部切り合い関係が認められ、時期差があるが、埋土がいずれも黒褐色砂泥層の同色であることから、時期的に近接した遺構群とみられる。出土遺物は、土師器皿、陶器甕片などが少量あり、江戸時代以降のものである。

小結 当小学校では、昭和 52 年度に北側の校舎建設時に発掘調査を行っており、今回の調査結果はほぼそれと一致し、平安時代の遺構を検出することができなかった。これは、後世において、耕地化に伴い削平を受けた結果と考えられ、今回検出した各溝も耕作に伴うものであろう。なお、地表下 1.3 m において検出した火山灰層は、平安京右京一帯で確認されている始良火山灰層とみられる。(家崎孝治)

5 平安京右京五条二坊

経過 この調査は、京都市中京区壬生東土居ノ内町に所在する朱雀第七小学校の防火水槽設置工事に伴って実施した。調査地は、右京五条二坊一町にあたり、北を四条大路、南を綾小路、東を西大宮大路、西を西鞠負小路に囲まれた一町の東南に位置する。小学校の敷地内では今までに5度にわたる発掘調査が行われ、平安時代前期の掘立柱建物、柵列、井戸、流路などが検出されていることから今回の調査でもこれらに関連する遺構・遺物の存在が予想された。また、当該地周辺には弥生時代から古墳時代の遺物が散布する壬生遺跡があることから、これに関連する遺構の存在も予想された。調査は、工事面積 62㎡を対象として、1987年7月27日から5日間調査を行った。

遺構・遺物 今回の調査の結果、南北方向の流路を検出した以外は、明瞭な遺構は認められなかった。調査区全面が流路に相当するが、中世には川幅が東にずれ、調査区内でその西肩を検出することができた。この規模は、従前調査した東側の体育館や北側の校舎でも同一の流路を検出していることから、幅 30 m を越える大規模なものと考えられる。

遺物は、いずれも2次的なものであるが、西肩付近から古墳時代前期から平安時代中期の遺物がややまとまって出土する。その中で越州窯系青磁輪花椀・壺、緑釉陶器陰刻花文椀などのものが注目される。

小結 調査の結果、宅地内で室町時代まで存続した流路を検出することができた。

(堀内明博)

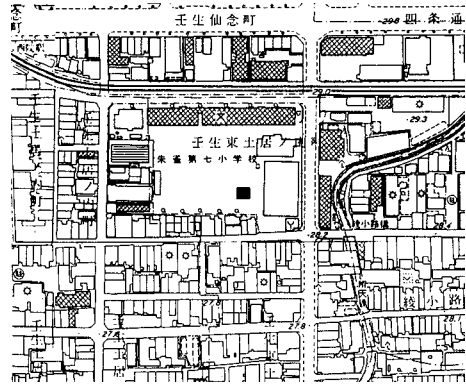


図1 調査位置図 (1:5000)



図2 調査区全景 (北から)

6 平安京右京六条一坊 (図版 28)

経過 試掘調査の対象地は、京都市下京区中堂寺南町の大阪ガスのタンクなどが設置されていた跡地であり、敷地は10,000㎡を越える広大なものである。平安京においては、右京六条一坊五・六町にあたる。同地の北半部には、五・六町間に楊梅小路、西辺には皇嘉門大路、東側に西坊城小路、南側に六条大路が走る。五・六町については明確な文献史料がなく特定の邸宅跡などは推定されていない。

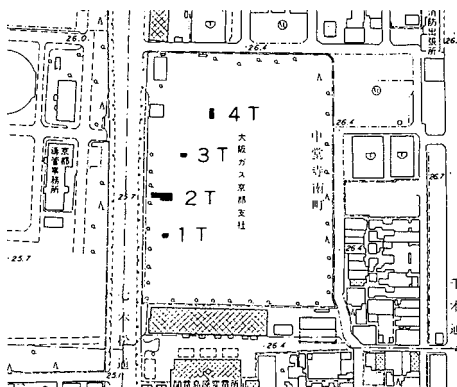


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 調査区を南側から試掘1トレンチ～4トレンチとし、試掘1トレンチから機械掘削を開始した。

1トレンチは、旧ガスタンク跡地内で基礎の撤去によって攪乱されているとの情報を確認することを目的としていた。結果的には表土下3mまで掘り下げたが、それ以下にもコンクリート塊などが入っていることを確認してすぐに埋め戻した。

2トレンチは、皇嘉門大路の東側溝の検出およびその東側宅地内の状況確認を目的として設定した東西に長い調査区である。調査区西部で東側溝東半と東肩および並走する犬走り状の平坦面やそれに沿う築地と思われる若干の高みを検出した。加えて調査区中央部から東部にかけては、それから東へ延びる宅地内の平坦な遺構面を検出した。遺構面およびベースの地層の残存状況は非常に良好といえる。ベースの地層は黄褐色から茶褐色を呈する泥砂土層であり、地山であろう。なお、東側溝堆積土上面で採集した遺物は平安時代末期から鎌倉時代前半に比定できる瓦器盤などが含まれている。

3トレンチでは、2トレンチから連続している地山直上遺構面を検出、溝状の遺構も若干検出した。遺構密度は高くないが遺構面の残存状況はきわめて良好といえる。

4トレンチでは、楊梅小路北側側溝推定線近くで溝状の遺構を2条検出し溝1・2とした。しかし路面は検出しておらず両者とも側溝もしくは宅地内側の溝などと断定できる段階ではないが、何らかの関連がある遺構とは言えるであろう。また溝2を掘り下げた下層に検出した茶灰色シルト層からは土師器皿・杯・碗、須恵器杯蓋・甕、瓦類など多数の遺物が出土した。これらの遺物は平安時代前期に比定できるものがほとんどである。

なお、この茶灰色シルト層は溝2のベースである黄褐色泥砂（粘質）層下で溝2の南北両サイドへ広がって行くものとみられ、自然地形の窪地内に堆積している土層の可能性もある。遺物検出状況から同層には多量の平安時代前期の遺物が包含されている可能性も大きい。

小結 皇嘉門大路、楊梅小路に関連する遺構の良好な残存状況を確認し、広範囲に平安時代の遺構面が安定した状況で遺存していることが明らかになった。このような試掘結果からみれば、調査対象地全域を対象とした発掘調査を実施する必要があるだろう。

(平安京調査会・小森俊寛)

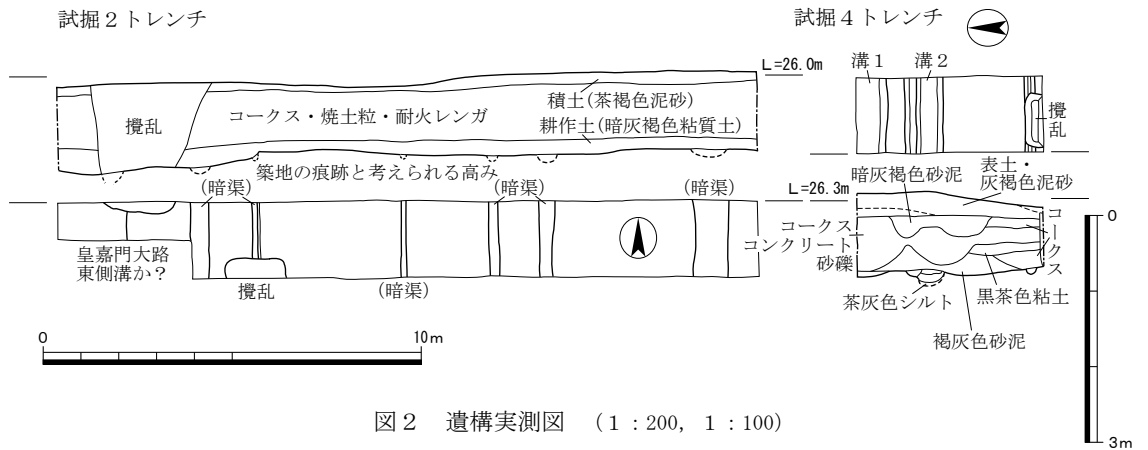


図2 遺構実測図 (1:200, 1:100)

III 平安京域以外の遺跡

7 法勝寺跡

経過 京都市動物園内の中央北端にある獣舎改築に伴い、事前に試掘調査を行った。調査地点は法勝寺金堂の南庭に該当する。

調査対象地は、現獣舎柵列に沿って新たに水路の構築される、長さ数十メートルにわたる狭長な区域である。現況は、北半が丘状に高

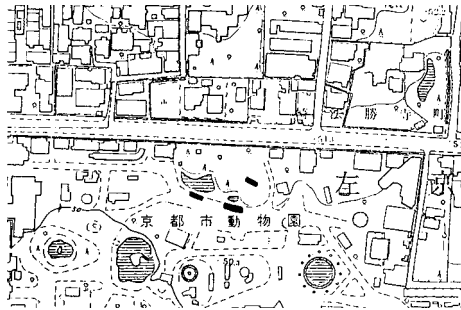


図1 調査位置図 (1:5000)

まり、南半には大小2箇所の池がある。調査区は、使用中の埋設管を避け、東・西に1箇所ずつ、丘状高まり部の解明のため、東区の北に1箇所の、計3箇所に設置した。

遺構 基本層序は、東・西区が現地表から約40cmまで動物園の整地層、北区は現地表から約1mまで盛土で、各土層下は灰白色粗砂層、橙色砂礫層などの無遺物層（白川砂）となる。東区では無遺物層上面で溝1を検出した。規模は、幅1.6～1.8m、深さ約0.6mあり、ほぼ真南北方向を示す。法勝寺東回廊の西縁雨落溝から溝心々で西へ約9mの地点に位置する。東・西区で検出した柵列・石組溝は、動物園旧獣舎に伴うものである。

遺物 遺物整理箱で9箱出土した。大半が瓦で、土器類は土師器、瓦器、陶磁器がある。土師器では、北区の盛土層から古墳時代前期（布留式併行期）の甕の小片が出土した。瓦は大半が北・東区から出土し、丸・平瓦、軒丸・軒平瓦がある。平瓦では、凹面に五輪塔、端面に「上」を刻印するものがある。

小結 前述したように、動物園北端には丘状の高まりがあるが、この高まりは調査の結果、動物園に伴う盛土と判明した。しかし幸いにも、この盛土によって無遺物層は大規模な削平を受けるに至っていない。無遺物層上面は、二条通を挟んで北接する回廊調査地点とほぼ同一の海拔高で、南延する回廊は盛土下に遺存している可能性は高いといえる。

(辻 裕司)

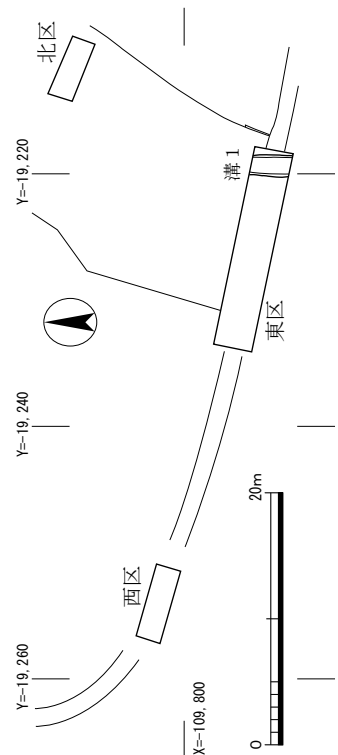


図2 調査区模式図 (1:600)

8 鳥羽離宮跡1

経過 この立会調査は、電話地下設備埋設工事に伴い、鳥羽離宮跡（東殿）で実施したものである。調査地は、京都市伏見区竹田浄菩提院町、竹田真幡木町の新城南宮道と新堀川通の交差点から府道六地藏下鳥羽線までの約500mの道路上である。調査の結果、鳥羽離宮に関する明確な遺構は検出できなかったが、遺物包含層、湿地状の堆積と考える土層が確認できた。

遺構・遺物 平安時代の遺物包含層（陸部）を検出したのは3箇所、マンホールNo.8から北へ30～40m。No.9から15～20m、70～90mの間である。3箇所の基本層序は、道路舗装部および現代盛土層が70～110cm堆積し、以下、茶灰色砂泥層、茶褐色泥砂層、黄褐色砂礫層となる。湿地状遺構はNo.10から南へ30m地点までの間である。埋土は暗灰色泥土層で腐植土が混じる。

出土遺物は少なく、遺物包含層から平安時代後期の土師器、平瓦が数片と、黄褐色砂礫層から古墳時代のものとする須恵器の甕体部片が出土している。

小結 区画整理道路建設に伴う発掘調査や道路工事により、鳥羽離宮期の遺構面は一部削平を受け、明確な遺構は検出できなかったが、数箇所、平安時代後期の遺物包含層（陸部）、湿地状遺構が検出された。この周辺地域における発掘調査および、鳥羽離宮跡を復原するための資料となる成果と言える。またこの周辺でみられる砂礫層は、いわゆる地山（ベース）ではなく鴨川や高瀬川の大規模な氾濫によってできた堆積土層と考える。

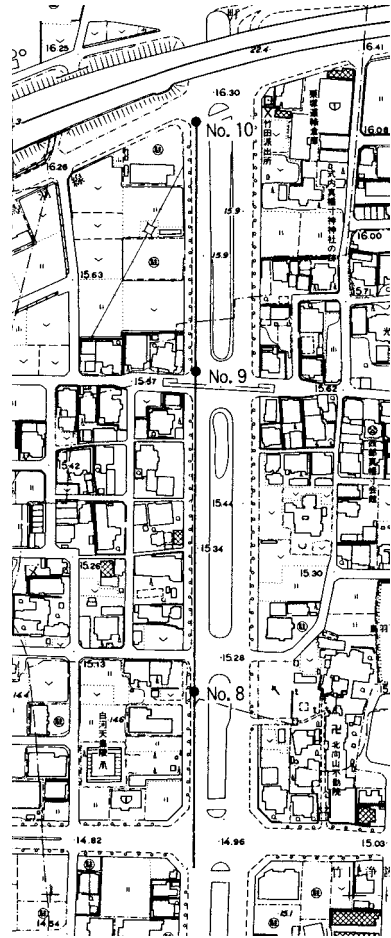


図1 調査位置図 (1:5000)

(磯部 勝)

9 鳥羽離宮跡2

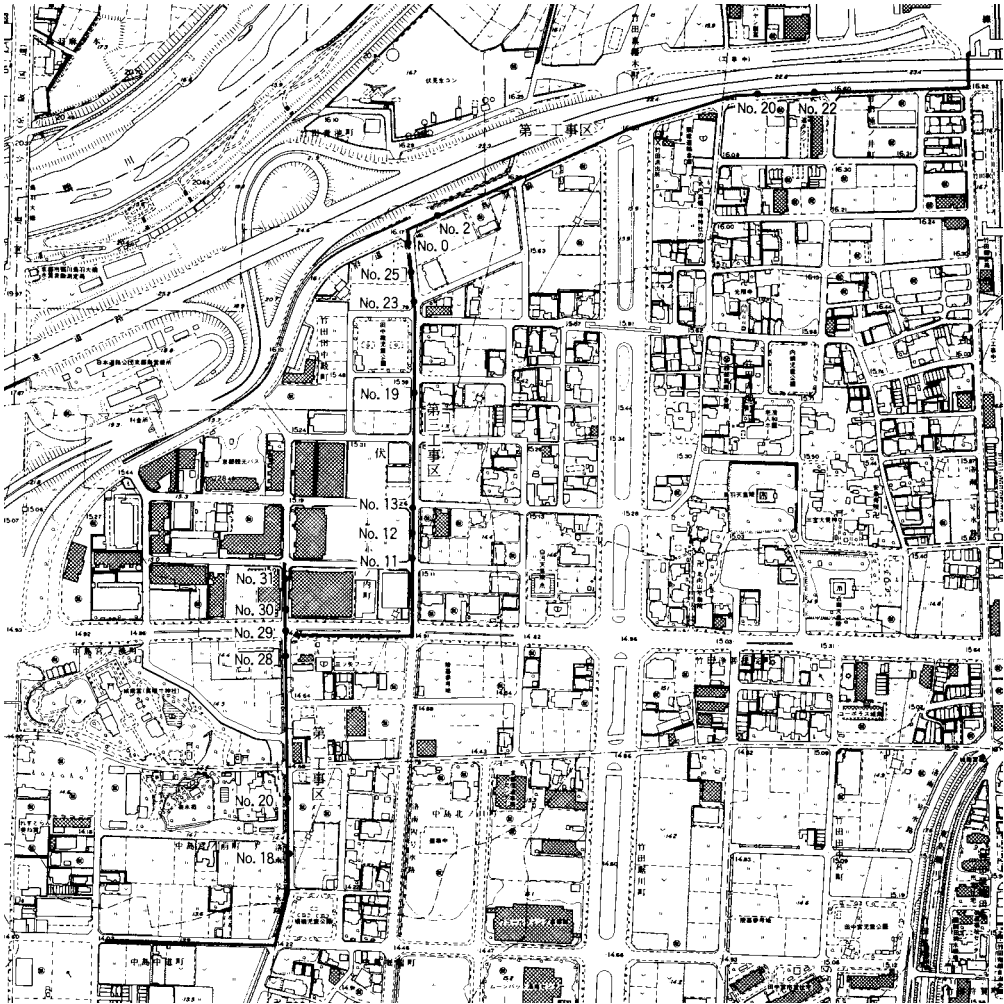


図1 調査位置図 (1:7500)

経過 この立会調査は大阪瓦斯株式会社の委託により、ガス配管布設工事に伴い実施したものである。配管工事区は3工事区に分かれているが、同じ鳥羽離宮跡内に位置しているので3工事区分をまとめて報告する（付表2-14・15・16）。

調査地は、京都市伏見区竹田中殿町、桶ノ井町、小屋ノ内町、中島御所ノ内町、宮ノ内町、中道町の各道路敷である。調査は第一工事区の約300m、第二工事区の約570m、第三工事区の約540mで実施した。調査の結果、古墳時代から平安時代の遺物包含層、溝、土壌、湿地状遺構、自然流路などが確認できた。

遺構・遺物 第一工事区ではNo.20～28、30～31の間で、鳥羽離宮跡の遺構面（陸部）と考える土層を確認した。No.18～20、29～30では池を示すような、暗青灰色泥土層（腐植土混じり）の堆積をしていた。陸部の基本層序は現地地表下80～90cmまでは道路舗装部および盛土層、次に茶褐色砂泥層が約60cm堆積している。以下は掘削されず不明。

第二工事区ではNo.0～2、20～22で陸部が検出できた。他の箇所では湿地状の堆積土層と砂礫層で遺構は確認できなかった。

第三工事区で陸部と考えられる土層が検出できたのは、No.11～13、No.19～23である。No.18～19の間では、池埋土と考える厚さ約80cmの暗灰色泥土層（一部腐植土混じり）を検出している。古墳時代の遺物包含層（茶褐色砂泥層）は、No.11～13の鳥羽離宮跡遺構面の下層（厚さ約30cm）で確認できた。No.25から北へ5mの地点の地表下1mで、幅約3m、深さ約90cmを測る東西方向と考える溝を検出した。埋土は暗灰色砂泥層（一部炭混じり）である。

3工事区で古墳時代から平安時代の遺物包含層、池、溝、流路などから土師器、瓦器、瓦などが出土しているが、量的にも少なく、小片のものが多し。

小結 今回の3工事区における立会調査では明確な遺構の発見は少なかったが、これまで発掘調査例も少なく、遺跡空白部分の多い地域であった。第二工事区のNo.20～22の間で鳥羽離宮期の遺構面（陸部）と考えられる土層の確認は、この地区における鳥羽離宮跡に関係する遺構の存在を示すものと考えられ、重要な成果であった。さらに鳥羽離宮跡をほぼ南北に縦断する土層柱状図が作成できたことで、今後の発掘調査、および鳥羽離宮跡復原の資料として重要な成果が得られた。

（磯部 勝）

10 下鳥羽遺跡

経過 この調査は、伏見排水区横大路系統竹田（その5）公共下水道工事に伴う立会調査である。調査地は京都市伏見区治部町、毛利町、北端町、竹田松林町の各道路敷で、下鳥羽遺跡の東半部に位置する。調査対象区域は、東側が東高瀬川の西側通り、西は新堀川通、南は丹波橋通、北は府道伏見向日線までの範囲で、総延長約 2800 m に達する。

調査の結果、古墳時代から平安時代の遺物包含層、湿地状遺構、流路などが検出できた。

遺構・遺物 一部で遺物包含層を検出したが、明確な遺構は認められなかった。また流路と考える堆積土層も人工的なものでなく、自然流路あるいは広範囲の氾濫跡と考える。古墳時代から平安時代の遺物包含層（陸部）を検出したのは、調査範囲の北半部（マンホール No.90～92・81～88・66～68・59～60）にあたる。検出地区の基本層序は、現地表下 95～120cm までが道路舗装部および盛土層で、以下、黄灰色砂泥層、茶褐色砂泥層、褐色砂礫層となる。

出土遺物は少なく、小片ばかりである。古墳時代の遺物は、砂礫層、茶褐色砂泥層から出土した土師器の壺片、須恵器の甕片がある。平安時代の遺物は、黄灰色砂泥層・茶褐色砂泥層から土師器の皿片、平瓦片などが出土している。

小結 この調査地域では、過去に考古学的な調査が実施されたのは数例しかなく遺跡空白地であったが、今回の調査で古墳時代から平安時代の遺物包含層、自然流路の範囲が確認できたことは成果であった。特に平安時代の遺物包含層が検出できたことは、鳥羽離宮跡の関係において重要な発見であった。

（磯部 勝）

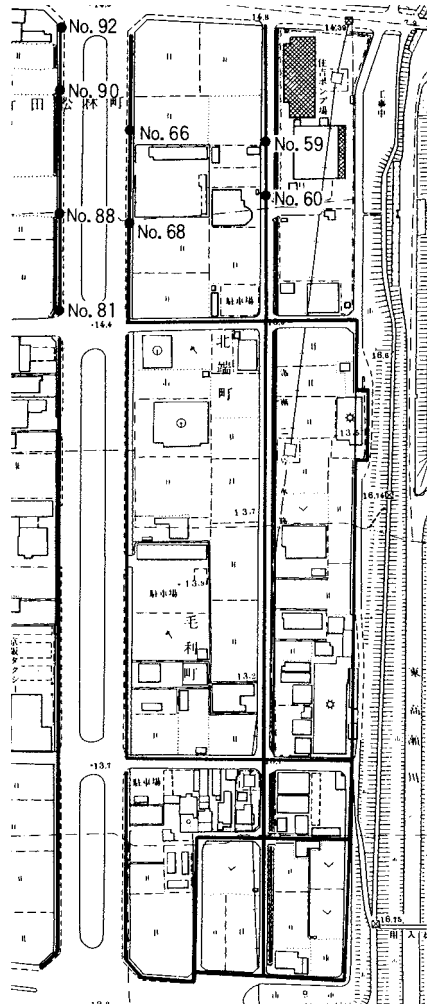


図1 調査位置図 (1:5000)

11 広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡・和泉式部町遺跡・一ノ井町遺跡・森ヶ東瓦窯・常盤東ノ町古墳群

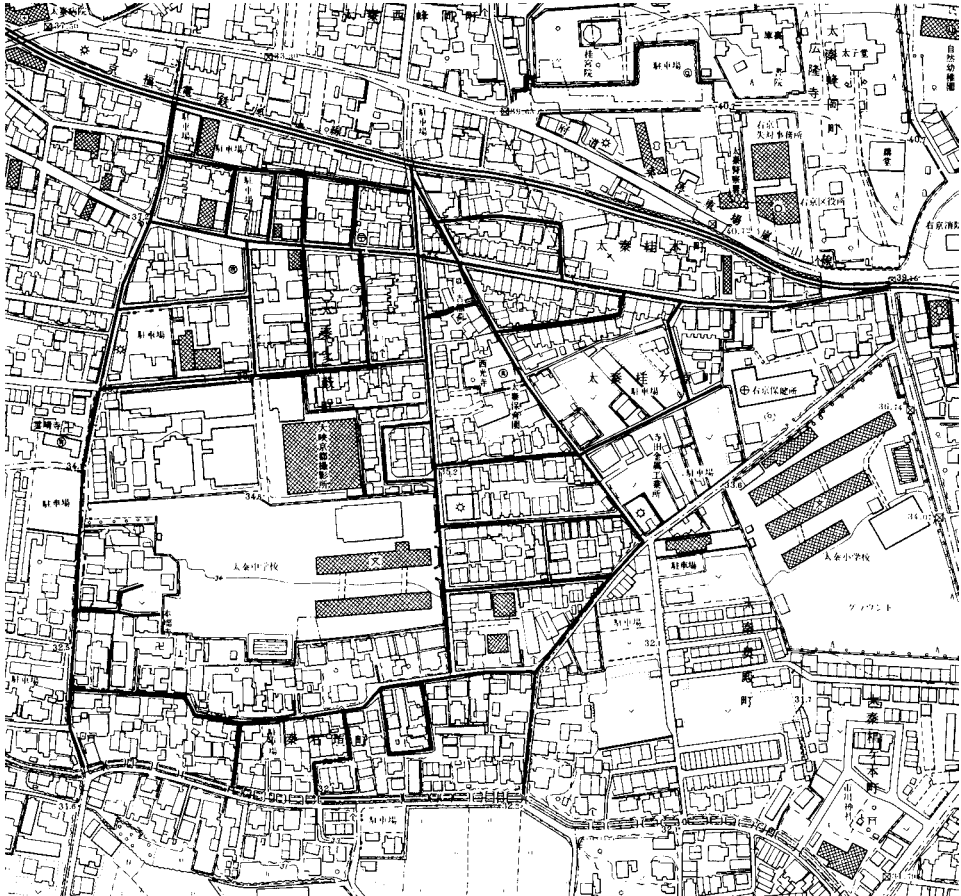


図1 調査位置図 (1:5000)

経過 西部第二排水区西部（第二）系統太秦（その9・11・13・15）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は右京区太秦石垣町，多数町，桂ヶ原町，東蜂岡町，一ノ井町，和泉式部町地内である。調査期間は昭和62年2月23日から翌年3月30日までであった。調査の結果，太秦（その15）地区では森ヶ東瓦窯に関係した瓦類を多量に検出した。太秦（その13）では広隆寺旧境内の東側で古墳時代および平安時代の遺構群を検出し，太秦（その9）・（その11）では古墳時代から平安時代前期の新たな遺跡を発見する成果を得た。特に広隆寺旧境内の東辺地域の調査では，旧境内の東側を画すると考えられる平安時代中期の溝を2箇所確認した。

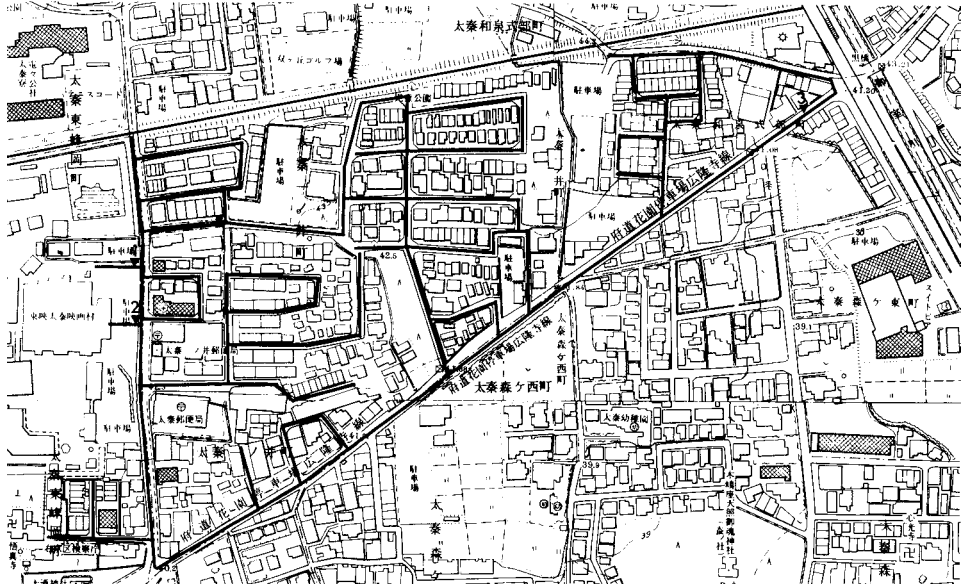


図2 調査位置図 (1:5000)

遺構 検出した遺構は、古墳時代前期・後期，奈良時代，平安時代前期・中期・後期，鎌倉時代，南北朝時代，戦国時代，桃山時代，江戸時代に属するものがある。古墳時代前期の遺構は遺物包含層に限られるが，後期の遺構には土壌・流路・柱穴などがある。太秦（その11）地区の大半と太秦（その9）地区の南西部，太秦（その13）地区の西側で検出した。奈良時代，平安時代前期・中期の遺構は土壌・溝・柱穴などで，同様に太秦（その11）地区全域と太秦（その13）地区西側，太秦（その15）西部地区に顕著である。平安時代後期の遺構は太秦（その9）地区中央部，太秦（その11）北西部，太秦（その13）西南部に多く検出した。土壌・柱穴・溝・遺物包含層がある。鎌倉時代，南北朝時代，戦国時代の遺構は遺物包含層・土壌などが，太秦（その9）・（その11）の大映通沿いに集中している。桃山時代，江戸時代の遺構分布も同様の傾向を示す。

遺物 出土遺物は古墳時代前期の土師器，同後期の土師器・須恵器，奈良時代の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦，平安時代前期の土師器・緑釉陶器・須恵器，同中期の土師器・須恵器・黒色土器・輸入陶磁器白磁・瓦，同後期の土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器青磁・瓦・鉄滓などがある。鎌倉・南北朝・戦国・桃山・江戸時代は，土師器・瓦器・陶器・瓦がある。その他，凝灰岩片・五輪塔の一部などの石製品が出土した。

古墳時代前期の土器は庄内式併行期と考えられる時期のものであるが，量は少ない。奈良時代から平安時代前期の遺物が地域的にまとまって出土した反面，これも量は少ない。

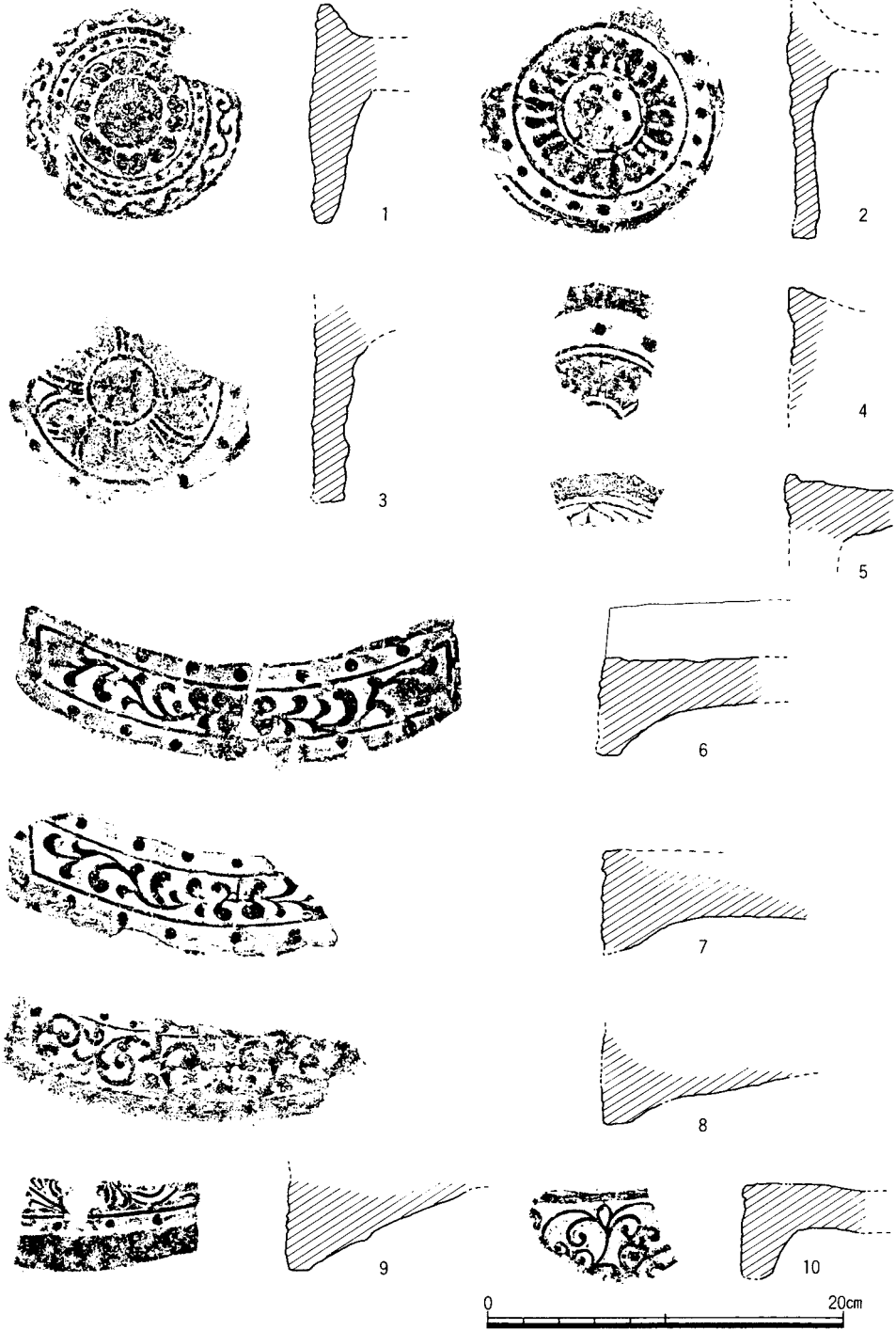


图3 出土軒瓦拓影・実測図 (1: 4)

平安時代中期と考えられる軒瓦 40 数点を含む多量の瓦類が出土したが、これは位置的に森ヶ東瓦窯に関係した瓦類と考えられる（図3）。1は複弁八葉蓮華文で、周縁部に唐草文が巡る。2は複弁六葉蓮華文で、弁間文も複弁を施し、主文帯内外に圏線が認められる。3は「下」銘単弁八葉蓮華文である。4は単弁八葉蓮華文で、二重圏線を有し花弁先端が尖る。6・7は「下」銘均整唐草文である。瓦当面に離れ砂が明瞭である。8は唐草文。唐草は大きく巻き、三巴文風である。9は均整唐草文で、水滴状の中心飾りが付き周縁は幅広である。10は偏行唐草文で唐草は大きく反転する。

平安時代後期の土器は、土師器皿・須恵器椀が良好な一括遺物として出土した。南北朝期に属する土器として、土壌から完形の土師器皿が多量に出土したことが注目される。そのほか、凝灰岩片が広隆寺前面の大映通沿いで出土しており、当寺に関係した石材片と考えられる。

小結 太秦多藪町，太秦石垣町，太秦桂ヶ原町，太秦桂木町西半地域に古墳時代後期から平安時代後期にかけての各時期の遺構・遺物を集中して検出した。結論的に言えば、当該地区が、古墳時代後期以来の長期にわたる集落跡の中心地区を形成していた可能性が高い。位置的には広隆寺旧境内の南西地区にその北辺を接しており、後の室町時代から近代に至る広隆寺門前としての太秦村の中心地域の範囲と重なり合う。

太秦一ノ井町では、東映太秦映画村前の調査で、平安時代中期に属する幅3m、深さ1mの溝（濠）を南北2箇所で見出し、広隆寺旧境内の東辺を区画した溝と考えられる（図2-1・2）。またこの東側一帯では、奈良時代から平安時代後期に至る遺構・遺物を広範囲な地域で見出した。一ノ井町遺跡の中心地区と考えられよう。

太秦和泉式部町では、森ヶ東瓦窯産と考えられる多量の瓦が出土した（図2-3）。これは府道花園停車場広隆寺線の盛土部分から検出したもので、西南方の斜面を削平して運び込んだ土砂中に含まれていたと考えられる。旧工事中に瓦窯を削平した時の瓦類であろう。

太秦一ノ井町東側の地域は、平安時代前期から後期にかけての遺物包含層が遺存しており、広範囲な湿地的様相も観察できた。和泉式部町遺跡については、府道北部地域で少量の古墳時代前期の土器片が出土したのみで、顕著な遺構は検出されない。遺跡の中心的地区は府道以南に形成されていたと考えられる。 （平田 泰・加納敬二）

12 常盤東ノ町古墳群・常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

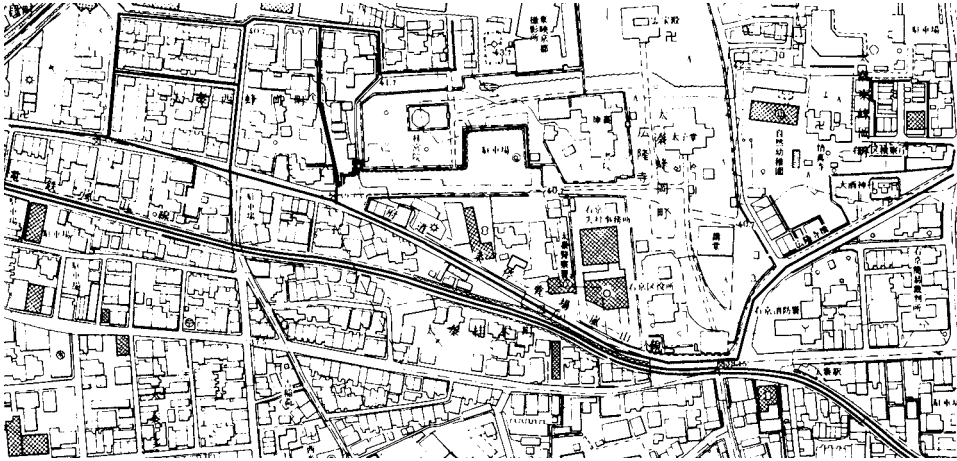


図1 調査位置図 (1:5000)

経過 西部第二排水区西部（第二）系統太秦（その12）・（その14）公共下水道工事に伴う立会調査を昭和62年3月23日から昭和63年3月9日まで実施した。調査区は右京区太秦一ノ井町、常盤東ノ町、太秦蜂岡町、太秦桂木町地域である。

調査の結果、太秦（その12）地域では平安時代中期から後期の遺構・遺物群を、太秦（その14）地域では古墳時代後期、平安時代前期・後期の遺構・遺物を検出した。特に（その14）地域では古墳時代以降、現代まで補修しつつ使用されていると考えられる数層に分けられる厚さ50cm以上の路面を検出した。

遺構 太秦（その12）では平安時代前期の遺物包含層を、広隆寺旧境内西側付近で検出した。平安時代後期の遺物包含層は12世

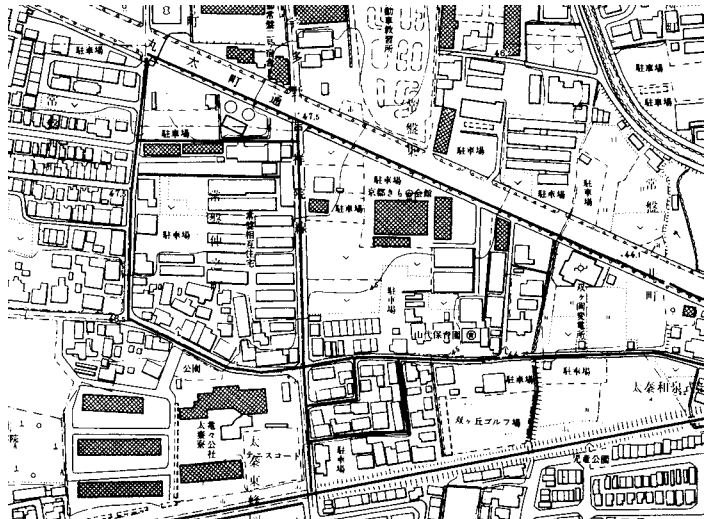


図1 調査位置図 (1:5000)

紀前半から後半にかけてのもので、主として広隆寺桂宮院周辺で検出した。太秦（その14）では常盤東ノ町古墳群で、古墳時代後期の遺物包含層を検出した。また遺物は未確認であるが、古墳の周溝と考えられる溝も検出している。そのほか、広隆寺旧境内東北地区でも平安時代に属する遺物包含層から瓦類を検出している。

遺物 出土遺物の時期と内訳は以下のとおりである。古墳時代後期の土器には須恵器杯蓋、土師器甕などが出土したが量は少ない。平安時代前期・後期では土師器皿、須恵器杯、瓦片があるがこれも量は少ない。江戸時代の遺物には土師器皿、瓦器鉢、軒瓦、瓦片が出土した。その他、時期不明であるが鋳型片と考えられるものや凝灰岩の小片も出土した。

小結 太秦西蜂岡町地内、広隆寺旧境内北側および東側で、平安時代後期の遺構・遺物を、同じく太秦西蜂岡町西側で平安時代前期の土器片と鋳型片が出土した。

平安時代の広隆寺は9世紀前半の弘仁九年（818）に発生した火災により、堂塔・伽藍のすべてが失われたのち、^{註1} 承和年間（834～847）に至り、^{註2} 道昌によって復興される。さらに12世紀中葉の久安六年（1150）1月19日再び焼亡し、^{註3} 永万元年（1165）6月13日ようやく^{註4} 広隆寺の供養が行われたとある。桂宮院周辺の平安時代後期の遺構・遺物や、旧境内西辺の平安時代前期の遺物が上記記録に直接関係するとは考え難いが、焼亡や復興を繰り返す広隆寺の歴史的経過があることや、旧境内で検出した遺構・遺物であることから、平安時代の広隆寺の変遷と無縁でないことは指摘できる。

常盤仲之町、常盤東ノ町、太秦和泉式部町地区の調査では、調査地区北辺の丸太町通り沿いで古墳時代後期の溝と遺物を検出した。溝は周辺一帯に分布する古墳群の周溝である可能性がある。南辺地区の東西に延びる道路上の調査では層厚50cmに達する数時期にわたる路面が検出され、古墳時代以来の古道であったとみられよう。

（平田 泰・加納敬二）

註1 『日本紀略』弘仁九年四月二十三日条

註2 『広隆寺縁起資財帳』

註3 『台記』

註4 『百練抄』

13 法成寺跡

経過 調査地は、上京区寺町通の今出川通から丸太町通の間である。当該地は、藤原道長によって造営された法成寺跡に推定される場所である。以前、鴨沂高校内において緑釉瓦などが出土しているが、法成寺の建物およびその寺域については現在の所確認されていない。調査では、寺域を把握することに主眼をおいて行なった。調査は、昭和63年1月25日から3月30日までの、28日間実施した。

遺構・遺物 平安時代の遺構を検出したのは、鴨沂高校の正門より、南へ280mほどまでの範囲内である。盛土・近世土層の下において時期不明の路面状整地層、集石遺構、平安時代末期から鎌倉時代の遺物を含む池状堆積土層などを検出した。池状堆積土層は地表下0.6mで現れ、深さ0.6mほどあり、園池の一部である可能性がある。平安時代の遺物は、同志社大学の新島会館前において集中して出土した。その中には土師器、須恵器、瓦器に混じって、丸・平瓦などがある。他には、鎌倉時代の土器類が少量と、江戸時代の土壙より石塔が2点出土している。

小結 法成寺推定地内と考えられる調査範囲においては、近世の石組、現代の道路側溝のために、近世以前の土層を観察することは不可能であった。しかし鴨沂高校の南方において平安時代から鎌倉時代の遺構を検出することができた。その中には、庭園遺構の一部とみられる池状堆積土層や集石遺構があり、法成寺との関連で注目される。

(家崎孝治)

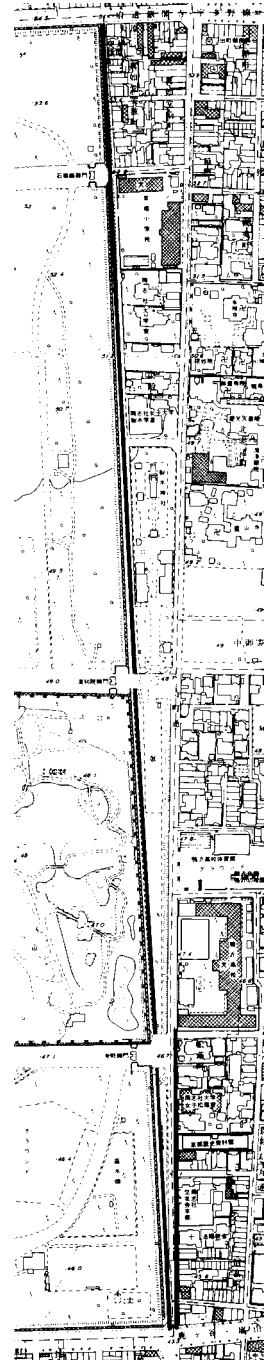


図1 調査位置図(1:7500)

14 檜原廃寺・檜原遺跡・檜原廃寺瓦窯

経過 この調査は、桂川右岸流域関連の公共下水道工事に伴う檜原廃寺および檜原遺跡を含む工区の立会調査である。調査期間は昭和62年1月12日～11月28日である。

檜原廃寺は、1967年に京都市住宅供給公社の宅地造成に関連して行われた発掘調査によって、八角基壇を持つ塔・中門・築地およびその側溝などが検出され、伽藍の南半部が確認されている。塔の心礎の形式、出土する軒瓦、瓦積み基壇の手法などから、奈良時代前期に創建された寺と推定されている。

檜原遺跡は、弥生時代から平安時代の土器の散布地としてよく知られている。この遺跡内

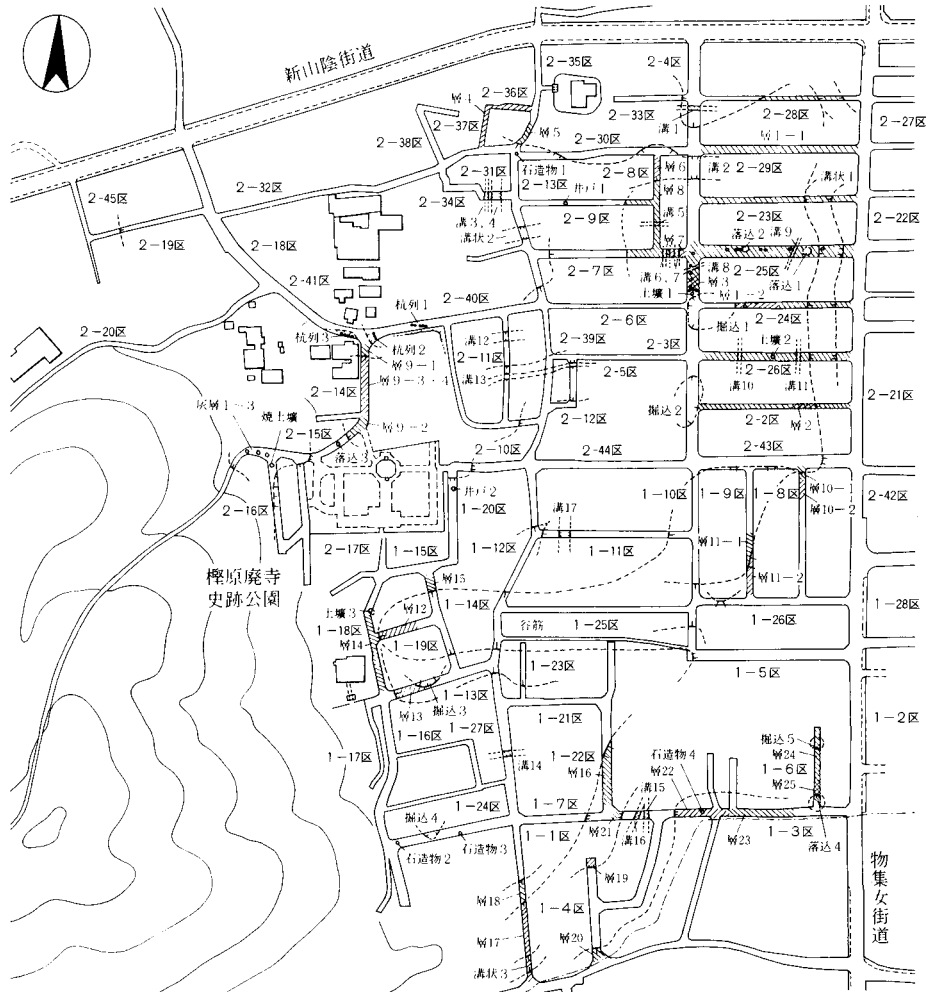


図1 調査位置図 (1:5000)

の既調査地から平安時代前期の緑釉・灰釉陶器の一群の好資料が出土している。他に、檜原廃寺瓦窯、塚ノ本古墳、権現原古墳など周知の遺跡が点在する地域である。

調査対象区は2工区あり、南部をNo. 1地区、北部をNo. 2地区として地区分けした。工事区間は、計73区間を数え、No. 1地区が28区間、No. 2地区が45区間ある。距離にして総延長6.4kmである。調査は10mを単位として柱状断面図を取り、これを基に全域の層位模式図を作成し、全体の堆積状況を理解することとした。試掘調査は、檜原廃寺関連の遺構確認を目的として、史跡公園北側の2-14・15区において3地点で実施した。

遺物包含層 各時代の遺物包含層を、計25層確認した。

弥生時代の包含層は2-3区、表土下1.3～1.6m、南北長10m以上、厚さ約0.3mで自然堆積と思われた黄褐色粘質土の下に堆積している灰色砂層（層3）である。古墳時代の包含層は、1-6区、表土下0.5～0.8m、厚さ約0.3mで落込4の肩部ベースに黄褐色粘質土層（層25）を確認している。奈良時代後期の包含層は、檜原廃寺の東方約220mの位置（2-2区）に表土下1.0～1.4m、東西長20m以上、厚さ0.2～0.3mで堆積している。須恵器杯などを含む青灰色微砂層（層2）である。この層も、黄褐色粘質土層の下層に堆積する。平安時代前期の包含層は、檜原廃寺北部と檜原遺跡東部にみられる。檜原廃寺北部（2-14・15区）では、暗褐色泥砂層（層9-2）が表土下0.6～1.4mに南北20m以上、厚さ0.3～0.7mで広がっており、さらに北部で灰色泥砂層（層9-1）を確認している。檜原遺跡東部では、向日市境界の水路北側の位置（1-3区）に、深さ1.0m以上の湿地あるいは流路と考えられる大きな落込の底部付近で検出した、灰色砂礫層と灰褐色粘質土層（層22・23）がある。東西長約60m以上。厚さ約0.2m前後で相互に薄く堆積している。この区間の北側（1-6区）では、南北50mにわたって平安時代前期と後期の遺物が混在する暗褐色粘質土層（層24）が表土下0.1～0.7mに堆積する。落込4・掘込5を覆う層である。このほか、檜原廃寺の東方約200～240mの位置（1-8区）では、湿地と思われる落差0.8～1.7mの大きな落込の肩部および裾部で平安時代前期から中期の遺物が暗褐色泥砂層・暗灰黄色粘質土層（層10-1・2）から出土した。平安時代中期の遺物包含層で注目されるのは、物集女街道沿いの西側一帯に広がる灰色泥砂（粘質）層である。（層1-1, 2-2～4・23～26・28・29区）場所によっては、ほぼ現路面直下で検出し、表土下0.1～0.7m、厚さ0.1～0.5mで黄褐色粘質土層の直上に位置する。同層上で溝・土壙・ピットなどを比較的多数検出した。灰色泥砂層（層1-2, 2-24区）には奈良時代後期から平安時代前期の遺物も含まれており、このことから檜原廃寺の時期にはすでにこの地域でも生活が営まれ、平安時代中期のある時期に

改めて広範囲にわたり生活面を再整備したのであらうと考えている。この整地層のさらに西側（2-7～9区）では、平安時代後期の遺物包含層の広がり認められる。表土下0.2～0.7m、厚さ0.3～0.5mで堆積する暗褐色粘質土層（層8）である。この層上で溝3条を検出した。中期に続く整地層である。

檜原廃寺の南方30～110mの区域（1-13～15・18・19区）では谷口の肩部と斜面に沿って平安時代後期から鎌倉・室町・江戸時代に至る遺物が混在して出土する。（層12～15）この区域では他に鎌倉時代の土壙・掘込を検出した。これらの遺物包含層・遺構については、長岡京造営当初、新京の鬼門塞ぎとして創建されたと伝えられている隣接する福成寺との関連が想定される。

遺構 古墳時代から江戸時代までの溝・溝状遺構・井戸・土壙・ピット・掘込・落込・杭列・灰層・焼土壙を計58基確認している。

溝は17条を確認した。幅0.7m、深さ0.3mの小さな溝から、幅6.4m、深さ1.7mの溝、あるいは杭列を伴う溝、同一地点で数回改修されて存続していたとみられる溝など、規模・種類・検出状況は多様であるが、概して出土遺物は少量であり、明確に時期を判定できる溝は少ない。他に、川か谷底の流路の可能性が考えられる溝状遺構を3条確認している。井戸は、石組井戸を2基検出した。井戸1は内径0.8～0.9m、10～20cm大の河原石を使用しており、表土下0.7～1.8mに約7～8段の石組を検出した。井戸2は表土下0.8～1.7mで検出しており内径0.8～0.9mで、20～30cm大の河原石を使用した石組が3～4段残存する。底部に方形の木枠を伴い、木枠は長さ90～108cmの丸太半裁の材を使用している。何れも室町時代以降の井戸である。土壙は3基検出した。土壙3は福成寺の北約30mの位置で検出した。鎌倉時代の遺物がまとまって出土している。ピットは主に2-3・4・24・25区で、平安時代中期の整地層をベースにして17基を確認した。掘込とした遺構は5基ある。掘込1・2は南北長30m前後、深さ2.3m以上を測り、谷筋の一部かとも考えたが、周辺につながらないので溜池などの可能性が考えられる。掘込3からは鎌倉時代、掘込5からは平安時代前期の遺物が一括出土している。落込としたものは4基ある。落込3は檜原廃寺の築地延長線上にあるが、その性格は定かではない。落込4では古墳時代中期の遺物は密集して出土している。檜原廃寺の北方約75mの位置で杭列を3条検出したが、その性格は明らかではない。

檜原廃寺関連の遺構として史跡公園西側の山裾で瓦窯の一部と考えられる焼土壙と灰層と考えられる瓦包含層を4地点で確認した。檜原廃寺所用の瓦窯の一部と考えられ、少なくとも3基以上の窯の残存が考えられる。

遺物 弥生時代から江戸時代に至る各時代の各種の遺物が出土している。奈良時代の瓦窯出土の瓦は、4地点で整理箱8箱分になる。棟先飾り瓦などの数点を除けばほとんど平瓦であるが、遺存状態も良く、好資料といえよう。土器類では、古墳時代中期の土師器高杯・壺・甕などが落込4からまとまって出土している。平安時代前期の土器は、掘込5から土師器杯、須恵器杯・鉢・壺・甕、黒色土器甕などが出土している。平安時代中期の土器は広範囲にわたる層1出土の遺物をまとめれば、比較的多量に出土している。鎌倉時代の遺物を混在するが層6からも土師器皿・甕、須恵器杯・椀・甕、緑釉陶器椀などが比較的まとまって出土している。平安時代後期の土器については一括出土がみられない。鎌倉時代の土器は、土壇3から土師器皿、須恵器甕、瓦器皿・椀・鍋・羽釜、須恵質土器鉢・甕、土師質土器羽釜、青磁、瓦など整理箱1箱分が出土している。桂川右岸の地域性を反映した器種構成を示すとみられる一括出土の好資料といえる。他に、石仏、五輪塔などの石造物が4地点から出土している。石造物1とした地点では石仏2体、五輪塔4基がまとまって出土している。室町時代のものである。

小結 榎原廃寺関連の遺構・遺物の発見として、灰層および瓦窯の一部と考えられる遺構の確認は大きな成果である。すでに知られている史跡公園南方約150mの2基の榎原廃寺瓦窯跡に加えて、さらに近接した位置でも瓦窯が営まれていた可能性が濃厚になった。

試掘調査は、榎原廃寺推定西側築地および溝、推定金堂および講堂の附属施設の有無の確認調査であったが、それらしい遺構は検出できなかった。

榎原遺跡については、1977年に行われた調査の周辺地では、宅地造成時相当の削平等が行われたものと思われ、期待した遺構・遺物は確認できなかった。しかし、遺跡内東部には古墳時代から平安時代前期の遺構・遺物が良好な状態で残存していることを確かめた。

桂川右岸流域北部では、弥生時代の遺跡は、松室遺跡から榎原遺跡・下津林遺跡までの間が広範囲の未確認地域である。今回、榎原遺跡に隣接した地点であるが、この空白地域で弥生時代の遺物包含層が確認できたことは成果の一つであるといえる。

物集女街道以西に広がる平安時代中期・後期の整地層と考えられる遺物包含層および遺構群は新発見の遺跡である。榎原廃寺以後の当地の歴史の展開を解明する上で重要な手がかりとなるだろう。なお、調査地全体の旧地形の状況、遺物包含層・遺構の残存状況などについては、その概略を図1に示した。

(平安京調査会 長戸満男)

15 鳴谷古墳・盆山経塚・峰ヶ堂城跡（図版 63）

経過 住宅・都市整備公団の開発工事に先立って試掘調査を実施した。昨年度は対象地内で分布調査を実施しており、遺構の可能性を持つ箇所が明らかになったので、今年度はこの内の6箇所について試掘調査を行なった。

結果、古墳・墳墓の可能性が考えられた4箇所については何れも人工的な遺構でないことが判明したが、峰ヶ堂城跡との関連が想定された第4・5地点は、土盛りの状態などから人工的な遺構であると判断した。



図1 調査位置図 (1:60000)

遺構・遺物 ここでは、人工的な遺構と判断した第4・5地点について述べる。

第4地点 御陵細谷に位置する。標高120～128m。周囲より開けた平坦地があること、土手状の高まりが認められることなどから調査を実施した。結果、平坦地上では遺構は認められなかったが、土手状の高まりは人工的に盛土して造られたものであることが判明した。しかし遺物がまったく出土せず、年代や性格については十分に考察できなかった。

第5地点 同じく御陵細谷に位置する。標高120～130m。中山に流れ出る谷川の東上流部に位置する。付近の谷筋には土手状の遺構が分布する。今回は、裾部に石を並べたものを含む2箇所を調査した。

2つの土手状遺構は同じ構造を持つ。まず、谷の狭い部分を横断する形で、岩盤の礫を含む層で土手を築く。土手本体は、長さ約8m、幅は上部で1.3m、裾部で4m、高さ1.2mの規模を持ち、平面形はアーチ状のダムに似る。上部の中央部は窪む。外斜面には階段状の段がつき、裾には人頭大の石が1列並ぶ。土手背後は傾斜が緩やかで、ここには砂と泥が互層となって堆積する。

遺物はきわめて少ない。第5地点の北外斜面からは江戸時代後半以降とみられる陶磁器(壺)の破片が1片出土している。

小結 第4地点の土塁状の遺構は、人工的に盛土してできたものと判断されたが、性格や年代などは明らかにできなかった。一方、第5地点の土手状の遺構はその構造からみて、下流に土砂を流さない目的で造られた今日で言う「砂防堰堤」に類似した施設であると解釈さ

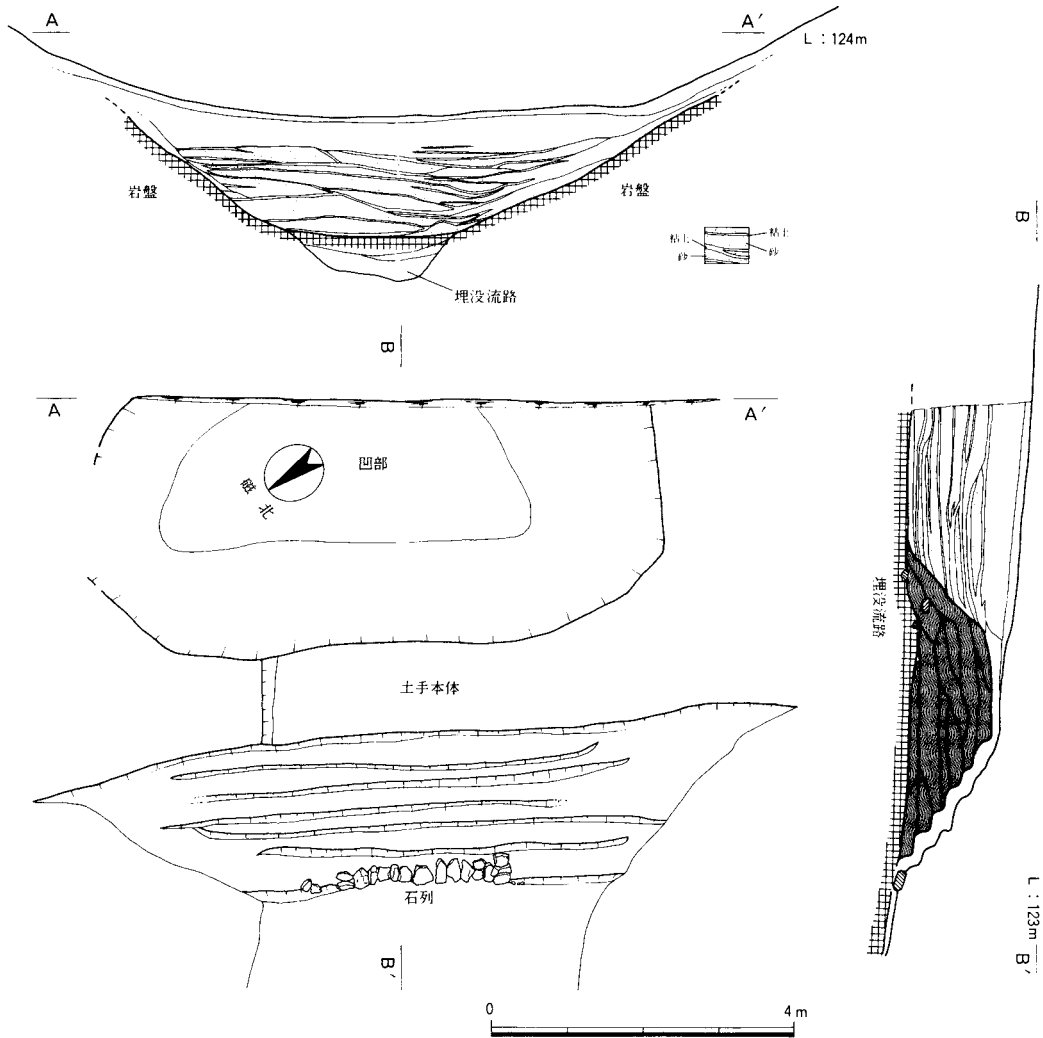


図2 第5地点南土手実測図 (1:100)

れる。傾斜の緩やかな支谷に造られることや裾部に石を並べることなど、効果が疑問みされる部分もあるが、本流に流れ込む各支谷に築かれていること、深い支谷では2～3段に築かれること、外斜面に石が積まれたものも存在することなどから、本流の谷川に土砂を流さないための堰堤施設が想定できる。その築造時期であるが、ここでは北側土手で出土した陶磁器片から江戸時代の後半以降と考えておきたい。後世のものに比べ、小規模で石が多用されないといった違いは、時期的な点と共に築造主体が集落あるいは家単位であったためと想定できるのではなかろうか。

(丸川義広)

16 大藪遺跡・中久世遺跡

経過 この調査では公共下水道建設工事に伴う立会調査である。当地は中久世および大藪遺跡に該当し、弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。特に久世中学校構内では過去数例の調査によって、奈良時代の流路としがらみ状の遺構を検出し、あわせて多量の土器・木器などの遺物を採集している。今回は、この流路としがらみの規模や性格を明らかにすることに重点をおいた。調査は範囲が広域にわたるため、記録を整理しやすいように対象地をA～K区の11区画に分けて実施した。実際の調査は土層断面の観察を主とし、状況の許す限り5mごとに柱状図を作成した。また、必要に応じて詳細図の作成や写真の撮影を行なった。

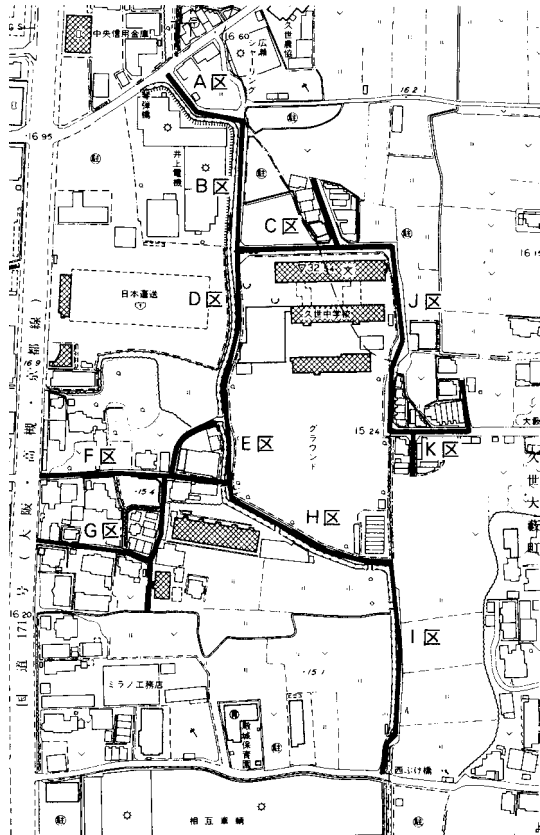


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 今回の調査では弥生時代から江戸時代までの遺構・遺物を検出している。弥生時代の遺構としては、久世中学校を中心に、北西から南東方向に向かう自然流路を数条検出しており、中には弥生土器・木器などの遺物を多く含むものがある。これらの岸边にあたるC・J区やF区には土壇・小溝などが存在する。

古墳時代には弥生時代に引き続いて流路があったと考えられるが、明確な遺構は確認できなかった。しかし、土師器や須恵器などの遺物が出土している。

弥生時代からの流路は若干の移動はあるものの奈良時代まで続いている。この時期、流路の左岸にしがらみ状の遺構が存在しており、それをB区とJ区で確認している。

平安時代以降の遺構は、現在の殿城の集落にあたるF・G区を中心に分布しており、柱穴・土壇などを検出している。また、条里制に関係すると考えられる溝をG区・J区・I区の3箇所で見出している。

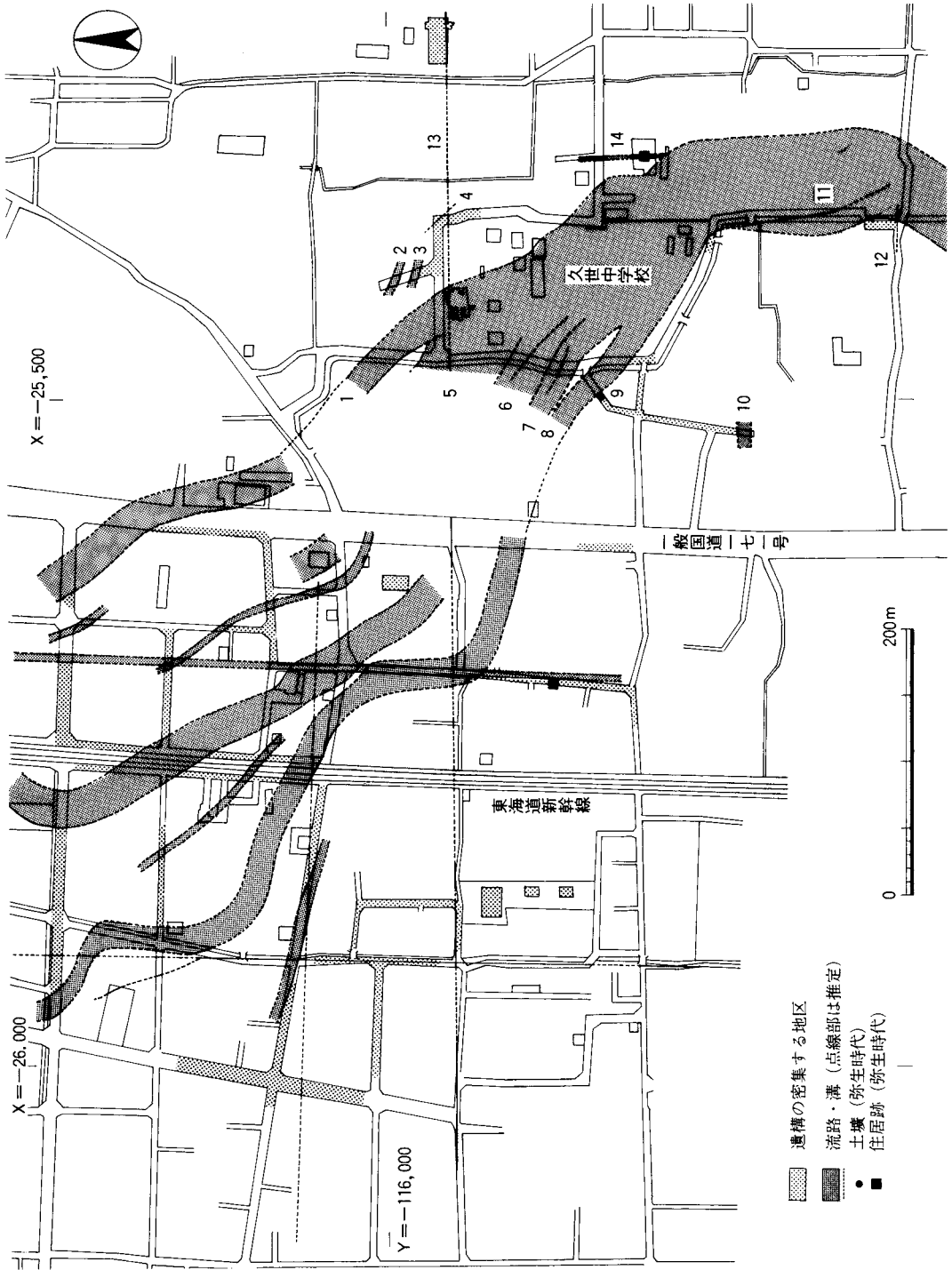


図2 遺構配置図 (1:5000) 図中番号は検出遺構一覧表参照

表1 検出遺構一覧表

(単位：m)

番号	遺構	検出断面の規模		標高	出土遺物	時期 (時代)	備 考
		幅	深さ				
1	流路	25.0	2.0	14.7	弥生土器, 土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 製塩土器, 瓦	弥 生 ～奈良	左岸にしがらみ状遺構を有する
2	溝	10.0	0.7 以上	15.3	弥生土器	弥 生 (後期)	
3	溝	5.0 以上	0.9 以上	15.2	弥生土器	弥 生 (後期)	
4	溝	0.8	0.3	15.3	弥生土器	弥 生 (後期)	
5	流路	75.0	2.1 以上	14.6	弥生土器, 木器	弥 生 (後期)	
6	流路	40.0	1.2	14.6		不明	平安時代後期には埋没している
7	流路	17.5	1.2	14.5		不明	平安時代後期には埋没している
8	流路	20.0	1.2	14.6		不明	平安時代後期には埋没している
9	土壙	1.8 以上	0.5	15.0	弥生土器	弥 生 (中期)	
10	溝	11.5	1.1	15.0	土師器, 瓦器, 瓦	鎌倉	堀の可能性あり
11	流路	30.0 以上	1.4	14.0	弥生土器	弥 生 (後期)	
12	溝	1.6	0.6	14.5		不明	条里の溝か(乙訓郡川依里の中央に推定)
13	溝	1.0	0.3	15.2		不明	条里の溝か(笠鹿里と川依里の境に推定)
14	溝	5.0	0.7	15.2	土師器	鎌倉	条里の溝か

小結 今回の成果は、一つは課題であった久世中学校内の流路としがらみ状遺構の規模や性格が把握できたこと、もう一つは弥生時代の遺構の立地が明らかにできたことである。掲載した図2はこの地区の遺構の状況を復原したものである。これによると、国道171号線の西側一帯で検出した幅5mから30mの数条の流路が、久世中学校付近で合流して一条の大きな流れとなり、さらに南へ方向を変えている状況がよくわかる。問題のしがらみ状の遺構は、流路の屈曲部を水流の侵食から守るために施されたものであると考えられよう。これらの流路は弥生時代から奈良時代まで、わずかずつ移動を繰り返しながら存続し、平安時代の終わり頃に至ってほぼ埋没している。

流路の両岸には黄褐色の安定した土層が認められ、ここに弥生時代の遺構が存在する。

今回の調査では、堅穴住居は確認できなかったが、おそらくは付近に集落が存在するものと考えられる。

(吉崎 伸)

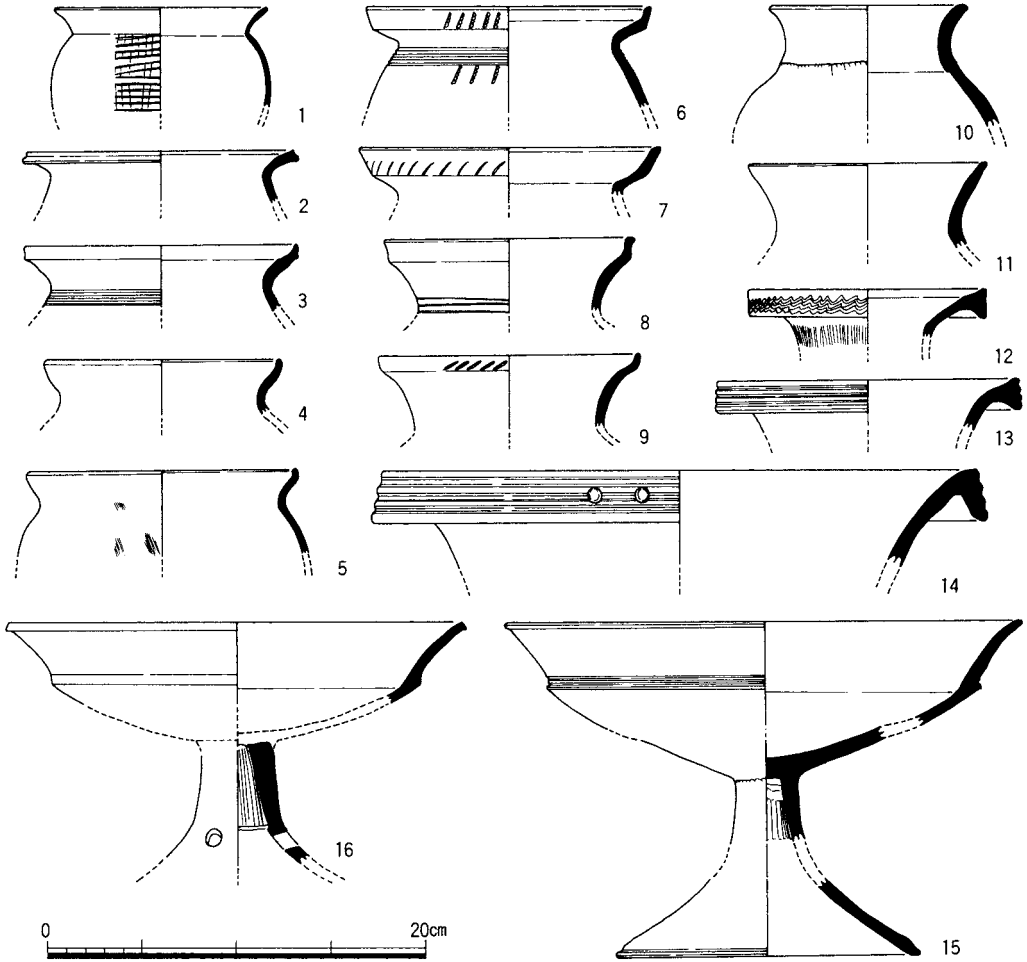
註1 『大藪遺跡』六勝寺研究会 1972年

『大藪遺跡』『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度 1985年

『大藪遺跡』『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 1988年

註2 「中久世遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会編)』昭和56年度 1983年

流路11



流路1

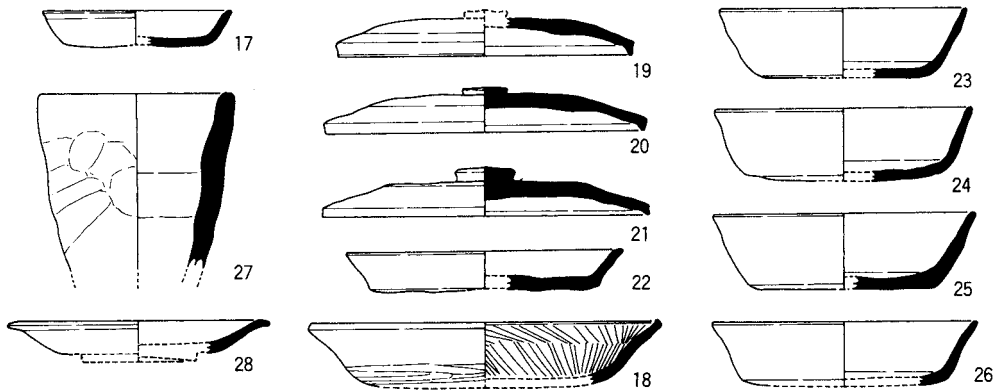


図3 出土遺物実測図 弥生土器 (1~16)、土師器 (17・18)、須恵器 (19~26)
製塩土器 (27)、緑釉陶器 (28) (1:4)

17 法性寺跡・正覚寺跡



図1 調査位置図(1:10000)

経過 伏見横大路系統下水道埋設工事に伴う立会調査である。工区は4箇所に分けて実施され、一部隣接工区も参考にした。立会調査範囲は、西を師団街道とし、一部（東西方向）加茂川東岸まで行った。南は稲荷小学校までとし、一部菟川町を参考にした。東は、稲荷山西斜面一帯、北は(株)任天堂工場北側、東福寺南大門道に囲まれる地域である。予想される遺跡は、法性寺跡・正覚寺跡・深草遺跡の一部を含むきわめて広い範囲を対象としている。また、合わせて旧鴨川流路の東岸も対象とした。本工区は、昭和62年3月より一部開始され、最終は平成元年6月に及んだ。今回は、弥生時代関係の遺構・遺物について報告することとし、次年度に寺院関係の報告をすることとした。

遺構 弥生土器ないし同時代と考えられる遺物を包含する地点を図1に示した。

①福稲下高松町内に集中して存在するもので、畿内第Ⅲ様式新相を示す一群の遺物が出土している。疎水の西側では、暗灰色泥土層中（地表下0.5～1m）に存在し、流路の一部と考えている。疎水の東側は主に暗褐色泥土層（地表下1m）に包含層を確認することができる。

②深草正覚寺町の中央部20mの範囲に限定できるもので、地表下0.3～0.6mに暗紫色の泥土層があり、断面を観察すると土壙状ないし溝状の落込が検出された。畿内第Ⅲ様式と考えられる土器が出土するが、土器の風化が進んでいる。

③深草森吉町東部に限定できる遺物出土地点で、ここは1mの段差をもつ微高地を形成している。土壙は褐色泥砂層で、出土遺物は小片が多く、土師質であった。

④深草開土町内稲荷小学校北側にあつて、深さ0.5m以内に存在し、畿内第Ⅱ～第Ⅲ様式の遺物を包含する。土壌は暗灰色を呈する泥土層であった。

⑤深草菟川町内にあつて、0.5～0.8mの深さで遺物を採集した。畿内第Ⅴ様式にかかるものと考えている。

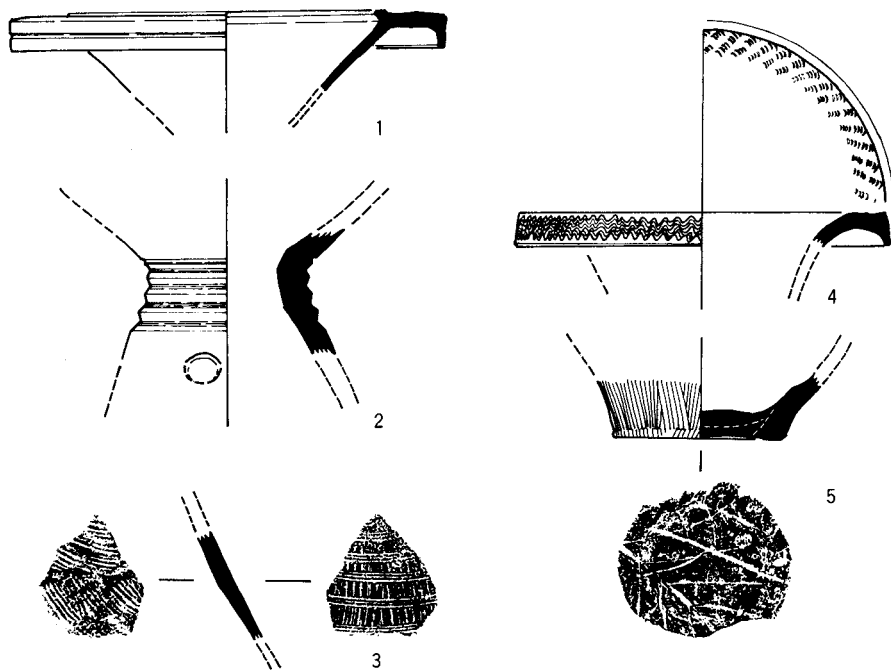
遺物 出土した土器は完形の1点を除き総量で遺物整理箱1箱に収まる。

実測できる土器類はすべて図2に示した。①地点出土品（1～5）は畿内第Ⅲ様式新相段階であり、木の葉手法もみられる。⑤地点出土の壺（6）はやや受け口状になっており近江系と考えるべきものであろう。

小結 大規模な遺跡の発見ではなかったが、稲荷山から発する小河川に沿って発達した弥生時代の遺跡で、川の大きさが遺跡の規模を規定するという法則がみうけられる。

（吉村正親）

①地点出土土器



⑤地点出土土器

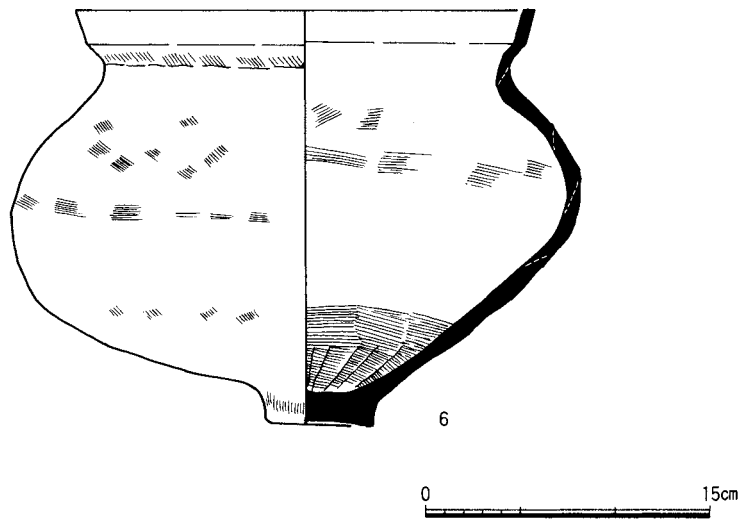


图2 遺物実測図(1:4)

18 伏見城々下町（図版 59）

経過 対象地は桃山時代から江戸時代初頭の伏見城が存続した時期に城下町に組み込まれた地域である。『豊公伏見城之図』などの古絵図によれば城下町時代には東半が京町七丁目、西半は両替町九丁目に属している。接する南北方向の通りも東側が京町通、西側が両替町通で、町名・通り名共に現在もそのまま使用されている。この町名や通り名の示すようにこの地域は大名屋敷から少し外れた商工民の居住するいわゆる町屋地帯であったようだ。両替

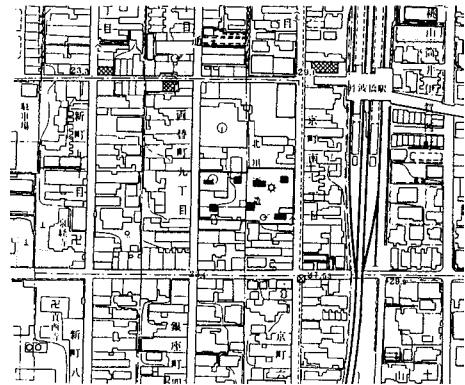


図1 調査位置図 (1:5000)

町通の大手筋に面した地には銀座役所がおかれてその北側が銀座町になり両替町はこの銀座町をはさんで南側に一丁から四丁北側に九丁・十丁と続いていく。この銀座や両替という名からも町屋であるがこの地域が伏見城下の経済的中心であったことが窺われる。この町屋地帯は伏見城が廃城になって以後も江戸時代から現代まで都市域として発展してきており近世都市の成立と発展史を解明する上で重要な地域の一つと言える。

昭和63年2月25日・26日の2日間に丹波橋の南部文化センター建設予定地南半部において試掘調査を実施した。試掘調査は伏見城期の遺構の遺存状況を確認することを主目的として行った。調査にあたっては対象地の適地にテストグリッドを設けて桃山時代あるいは地山直上の遺構面を検出し、その遺構面上で検出作業を実施した。検出遺構の一部については若干掘り下げて遺物を採集し時期推定を行なった。

遺構・遺物 対象地には中央部で東半と西半を分ける南北方向に走る段差がある。西半面が低く高低差は2m程度である。崖面は現状では石垣が構築されて保護されている。テストグリッドは現状の高低差を考慮し低い西半面を対象に1～3テストグリッド、高い東半面を対象とした6・7テストグリッド、崖面付近の状況に対する情報収集を目的とした4・5テストグリッドと各目的別に計7箇所設定した。調査の結果、各調査区で土壙・ピット・落込・掘込などとした各種遺構を検出した。

東半部の調査区では表土下20～70cmで桃山時代から江戸時代の遺構面を検出しその上面で各種の遺構を検出した。この内、古い時期の遺構は桃山時代から江戸時代初頭に比定で

きる。これらの遺構面は4・5テストグリッドの検出状況から桃山時代から江戸時代初頭と考えられる整地層をベースとして形成されるものである。もちろんこの整地層は地勢に沿って東から西に向かって厚く堆積しており上面は水平面に近い平坦面を為す。現在みられる東西の段差もこの整地層の影響が強く残っているものと思われる。

西半部の調査区では表土下10～60cmで地山直上の遺構面を検出し各種遺構を検出した。遺構は江戸時代中期以降のものが主であるが出土遺物中には桃山時代から江戸時代初頭に比定できるものも含まれている。

小結 東半部において桃山時代から江戸時代の遺構の遺存状況が良好であることが判明した。東側に比べて一段低い西半部では同期の遺構は確認できなかったが遺物は同期に比定できるものが出土している。また、東西間の崖部付近の調査では東半部に桃山時代から江戸時代初頭の整地が行われて遺構面が形成されていることが明らかとなった。問題点としては西半部の地山直上の遺構面が桃山時代に形成されたものであるかという点である。この点については東半部の整地層の在り方とも関連するが、傾斜地の宅地造成では傾斜地の高い側半分を削り込んで低い側に入れて一定範囲の水平面を造りだすのが古代以来の工法の通例である。東半部の相対的な高さは桃山時代から江戸時代初頭にはすでに形成されていた点、およびこの段差ラインが城下町期の町の境界線と重なる点などからみて、西半部の地山直上面も同時期に行なわれた都市造りによる削平により形成された遺構面の可能性が高い。

このような状況認識から東半部と共に西半部も発掘調査を実施することによって、遺跡の様相を解明し、記録する必要があると考えている。
(平安京調査会
長戸満男)

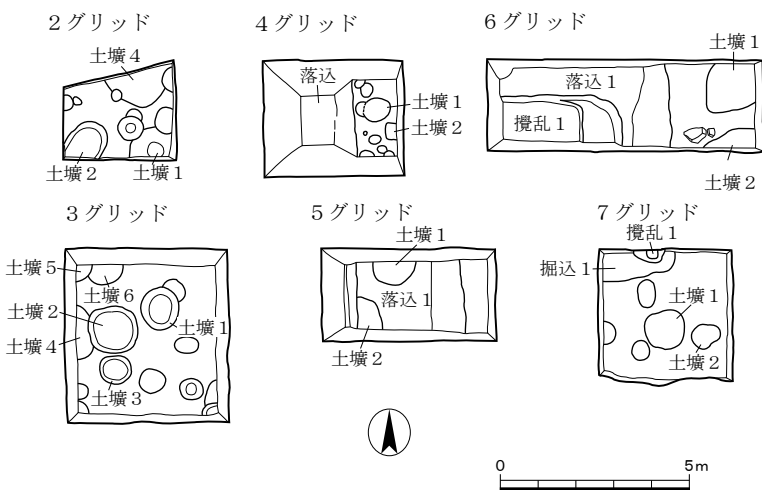


図2 遺構実測図 (1 : 200)

第3章 資料整理

1 遺跡測量

昭和62年度に行った遺跡測量は80件である。内訳は発掘調査69件、試掘・立会調査5件、その他6件である。その他のなかには写真測量での標定点測量および撮影作業も含まれている。

今年度は昭和59年度より開始した写真測量における空中写真撮影についての問題点を測量の面から取り上げ、その方向性を定めた。

写真測量のためには空中より垂直写真の撮影が必要であり、図面縮尺とカメラレンズの焦点距離により、その撮影高度が確定される。通常はヘリコプターによる撮影が行われるが、京都市は市街地のため、一部地域を除いては低空のヘリ撮影は不可能である。このため、当研究所では主にバルーンによる空中撮影装置を活用しているが、このほかにもロープウェイ方式やクレーンによる撮影も行い、それぞれの長所短所を把握した。特に問題となるものをあげれば、バルーン方式では

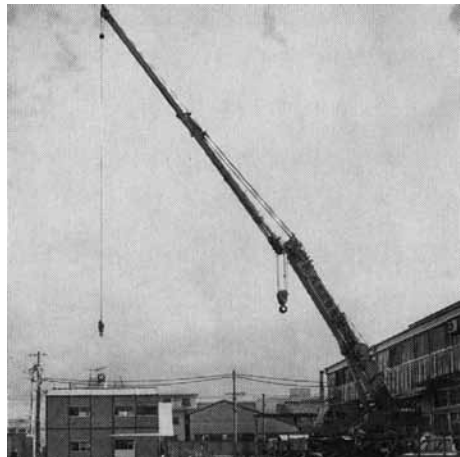
1. 風による影響を受けやすく、撮影コースからそれることが多いため、一定の撮影ラップが確保しにくい。
2. ビル街や電線などが多いところでは、危険である。
3. ヘリウムの入手やヘリウムの出し入れにやや時間がかかることが上げられる。

ロープウェイ方式では

1. 組立に時間がかかる。
2. 移動作業が困難である。
3. 撮影コースが長い場合に、中ほどでたるみがおおきくなることが上げられる。

クレーン方式では

1. アームの長さ制限があるため、撮影面積が大きいところでは使用不可能。
2. 地形条件の悪いところではクレーンを搬入できないことが上げられる。



クレーンによる撮影風景

以上の欠点と市街地である調査面積の小規模、ビル街の中での調査などの諸条件を考慮すれば、京都市域に限り、作業効率の良さ、撮影位置の安定度、安価な費用がのぞめるクレーンでの空中写真撮影が最も有効である。(辻 純一)

2 コンピュータ

今年度は新たに資料管理および試掘・立会調査用にパソコンを導入しデータ入力体制を強化している。現在までの機器構成はオフコン1台、パソコン5台、プリンター4台、デジタルカメラ1台、プロッター1台、イメージスキャナー1台である。

基本的な作業は前年度とあまりかわらないが、新規にパソコンを用いてデータベースの検索結果を分布図として出力できるものを開発している。基本的な入力作業は今年度分の調査カード1000件を入力し合計8851件になっている。そのほか、写真・測量・保存処理・資料管理などで種々のデータを入力し活用している。

また、コンピュータの導入に対して、郵政省のお年玉付き郵便葉書寄付金約1000万円の交付が内定した。このため、現在のシステムに対する問題点を解消する新たなシステムの作成に着手した。現システムの問題点と新システムの方向性は次の通りである。

現システム(オフコン)の問題点としては、

1. ディスク容量不足のため、データの一元管理ができない。
2. メインコンピュータのオフコンにネットワーク機能がない。
3. ファイルなどの安全性が低い。
4. 処理能力が低いため検索などが遅い。
5. 文字検索ができない。
6. グラフィック機能がない。
7. 単一の作業しか行えない、などがあげられる。

新システムの方向性としては、

1. 研究所に分散するデータの一元管理。
2. 調査・研究の支援体制の充実。
3. 将来にわたり使用できるソフトウェアの設計。
4. 地図・地形データの整備。
5. 高速通信によるローカルネットワークの構築。
6. 公衆回線を利用したワイドエリアネットワークの構築。

7. システム全体の安全性の確保などがあげられる。

これらは、コンピュータの利用を中心に考慮したもので、研究所内はもとより調査現場からでも扱えるものを目指している。来年度には新しいシステムに移行され、新たな問題点や試みも始まるであろう。考古学におけるコンピュータ利用の参考になれば幸いである。

(辻 純一)

3 写真撮影

今年度の4×5判, 5×7判の撮影量は遺跡・遺物撮影の両方を合わせて7655カットであった。この中では平安京右京三条三坊(昭和54年・55年・56年・59年・60年に発掘調査を実施)の報告書用遺物の撮影が874カットと多くを占める。

機材では、以前は晴天時の井戸・土壙および断面などの撮影や、光線の加減では撮影が困難な、いわゆる「天気待ち」への対応にはレフ板を用いていた。しかしそれでは撮影効率やカバーできる範囲が狭いといった欠点があり4～5年前からは、レフ板と併用してスタジオで使用しているストロボを利用して撮影していた。だが、スタジオで使用するストロボは長時間使用や連続発光に耐えられるように冷却ファンが内蔵されていることや、4灯ライティングが可能といった機能があるため大型で重といった携帯の面で満足できるものではなかった。その改善として遺跡撮影、屋外専用機としてサンスターVL 2400Ⅲジェネレータを新規に購入した。これは携帯面を重視し、大型機のような機能はないものの、大容量でありかつコンパクト、軽量設計、低価格になっている。

また、今年度はバルーン撮影装置の利用法がこれまでの俯瞰撮影としてよりも、バルーンに代わってクレーン車を利用した写真測量としての利用が多くなりつつあることを特記しておく。それは調査面積、経済性、天候、周辺の状況、作業能率などを考慮するとこの方法が最も手軽で適していると思われたことによるものであろう。

このほかに調査現場メモ、スナップ用として使用している35mm判カメラの不足補充分としてミノルタa 7000を2台購入した。

また、外部団体からの委託を受けて、次の遺構・遺物の写真撮影を行っている。

財団法人 大阪市文化財協会	遺物写真撮影
長岡京市 教育委員会	遺構・遺物写真撮影
財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター	遺物写真撮影

(牛嶋 茂)

4 保存科学

仮パックによる出土木製品の保管法の開発

昭和 53 年度に PEG 含浸槽 (PD-7301) を 1 台導入し、市内の発掘調査で出土した木製品の保存処理を開始して以来、木製品を自前で保存処理する方針を採用してきた。しかし、この 10 年間の木製品の出土量は当初の予想をはるかに上回り、昭和 62 年度には容量の大きい 2 台目 (有効処理容積 $3\text{m} \times 1\text{m} \times 1\text{m}$, PB-300) の含浸槽を導入して保存処理量の増加をはかっているが、それでも年間の処理量は出土量にとっても追いつかない状態が続いている。ここ数年来、出土木製品の整理から保存処理までの作業をできるだけシステム化して、別図のような整理作業を行っている。このなかで、未処理の木製品の水替えの人的費や、保管場所の確保が切実な問題となってきたため、保存処理前の水漬け保管方法の改善と省力化に取り組んできた。その結果、特別な装置を必要とせずに、市販のシーラーとチューブ状のポリエチレンフィルムを利用して木製品をパックするだけで水替えの大幅な省力化を可能にした。この方法は水替えが不要となるだけでなく、遺物の保護も兼ね、パックして水なしでコンテナ内に保管できる。また、フィルム表面から形態観察が可能であるだけでなく、軽量化されるため、取扱いや運搬・移動がきわめて容易となっている。

パックの基本的考え方と方法

増加する一方の出土木製品の水漬け保管上の維持・管理の省力化は、あくまでも遺物保存の質的な低下に結び付かないことが大前提であり、そのうえで、技術的、経済的側面からの省力化が検討されなければならない。水漬けの木製品をポリエチレンフィルムでパックして応急保存する方法は、漬物などの食品の包装に用いられる真空パックを応用したものである。ただ、木製品は脆弱であ



木製品パック作業状況

り、パックにより形状が損なわれることは許されないので、真空パックの技術を直接取り入れることには無理があると判断して、この方法は試行段階で中止した。

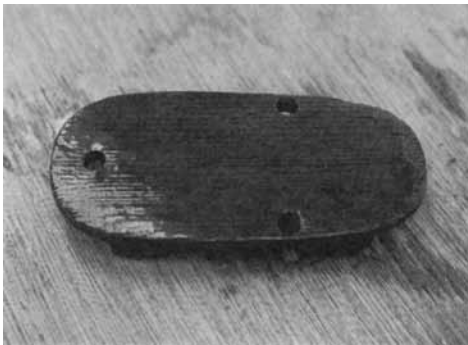
木製品の応急保存の目的は、長期間保管するのに最低必要な水分を保ち、余分な水分と空気をできるだけ除去することであると考え、ごく簡単に密封できる方法の開発に取り組んだ。パックを行ううえでの技術的な開発点は、厚手のフィルムを木製品の形状になじませながら、しかも密封状態にたもつことである。この点については40度C程度の温水中で水と空気を除去することで解決した。実際にパック可能な木製品の大きさの限度は長さが2m程度までであり、板状、丸太状を始めとして形状にかなりの凹凸の変化があるものについても有効である。

使用フィルムの選択

パックに利用できるフィルムの選択条件として、耐久性、気密性、経済性を問題とした。基本的には、日本ではフィルムの材質は日進月歩であり、その度に市販品のなかから条件にあったフィルムを選択すればよいと考えているので、将来フィルムを変える可能性はある。これまで使用してきたフィルムは市販の厚手のポリエチレンチューブ（厚さ0.1mm）で、その厚さのフィルムをシールできるポリシーラー（フジインパルスYC型、シール幅が60cmあるとチューブ加工も容易で作業効率がよい）を用意することで実用化した。これまで購入したポリエチレンチューブは実際の使用頻度が最も高いと思われる幅30cmと15cmの種類で、長さ1000m単位で市販されているものである。

効果

出土木製品の水漬け時の応急保存のためのパックには、10数万円の厚手のフィルムをパックできるシーラー（AC100V）を必要とするだけで他の施設は必要なく、屋内でも発掘現



パック処理前



パック処理後

場でも同質の作業ができる。保管上も、パックしてコンテナに収納することで、これまでのコンテナ数を約5分の1程度の量に減らすことができ、限られた空間の有効利用に役だっている。また、コンテナの重量は遺物の重量だけで余分な水がないことから軽量化され、運搬の際の取扱も容易となった。水漬け木製品の損傷が人手に触れるときに一番大きいことを考え合わせると、パックすることは取扱上の遺物の保護にもつながっている。墨書のある木簡類についても同様の保管方法を採用しており、簡単な観察は手を濡らすことなく行うことができ、パックした状態で赤外線テレビカメラでの観察が可能である。また、緊急に遺物を短期間展示したい時は、パックしたままで遺物に損傷を与えることなく目的を果たすことができる。

パックした木製品の取扱上の注意すべき点としては、ポリエチレンフィルムを使用した場合、安価ではあるが完全な気密性を有するものではないので、あまり長期間（せいぜい数年まで）にわたる保存法として考えないことである。パックを行う際に防腐剤などの薬品類はいっさい使用しなくても、ムラなくパックしたものは水道水中の塩素だけで特に菌類が繁殖した例はみられない。ただパックの仕方が十分でなかったり、穴が開いていたりすると空気が入り、カビが生えることになる。パックしても屋外に放置したり、直射日光にさらしたものはフィルムの劣化が激しく保管効果は落ちるので注意が必要である。

木製品出土	コンテナ収納
下鳥羽収蔵庫搬入	
現場の遺物台帳の確認と未洗い遺物の洗浄	現場作成の台帳をもとに整理、組替えの方針の検討
パック	木製品をすべてポリフィルムでパックして取扱の軽量化を図る
遺構・層位・日付による分類・組替え	遺物台帳により遺構・層位・日付を整理し、コンテナを入れ替える

下鳥羽収蔵庫木製品整理作業の概要

品目別に略図・計測・実測 写真単位に分類	品目別に整理し，完形品から写真1カット分ずつを並べ，略図，計測を行う。すべての製品に通し番号を与える
写真単位で穴あきバックに 収納	ポリチューブに穴を開け，木製品を写真1カット分ずつ 収納する
写真撮影	略図の順番に従って写真撮影する。終了後穴あけフィルムに戻す
PEG処理	略図・写真撮影済み木製品についてPEG処理フィルムのまま保存処理する
収納保管	収蔵庫2階で保管する。湿度を断つため必用に応じてバックして保管する
木製品台帳作成	略図，写真を貼った木製品台帳を調査地単位で作成する。台帳コピーを数部作成し，各所に配布する

(岡田文男)

5 遺物復原

復原（石膏、彩色）作業は主に平安京右京三条三坊報告書、国庫補助報告書、昭和59年度調査概要使用分を行なった。その内容は以下の通りである。

調査記号	点数	調査記号	点数
HK-SE3	10	MK-AB	5
HK-YC2	1	MK-KB	8
HK-SG13	3	MK-OE	8
HK-SM6	21	MK-HO	7
HK-IO	1	NG-SD6	2
HK-LW	4	RT-NK68	6
HK-CF	502	UZ-NG	36
TB-TB	3	UZ-SW	1
TB-DH	58	UZ-LS	1
RH-SH	1	BB-HL	14
RH-SR	45	BB-FD	1
KS-IJ	2	BB-HQ	12
		合計	752点

(牛嶋 茂)

6 報告書の刊行

昭和62年度は以下の報告書を刊行した。

1 『平安京跡発掘調査概報』 昭和62年度	1988年3月
2 『中臣遺跡発掘調査概報』 昭和62年度	1988年3月
3 『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和62年度	1988年3月
4 『下鳥羽遺跡発掘調査概報』 昭和62年度	1988年3月
5 『大藪遺跡発掘調査概報』 昭和62年度	1988年3月
6 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和62年度	1988年3月

第4章 事務報告

1 人事異動

(1) 理事の変更

就任 榑本 治（昭和62年6月25日付）

辞任 小島 泰男（昭和62年6月25日付）

(2) 事務局職員の異動

転入 研究所 総務部長 杉原 和彦（昭和62年4月1日付・
京都市人事委員会事務局から）

兼職 調査部 資料課長 永田 信一（昭和62年4月1日付・
調査部調査課長）

配置替 調査部資料課 平尾 政幸（昭和62年5月7日付・
研究所調査部調査課から）

退職 考古資料館 主任 牧 康司（昭和63年3月31日付）

2 普及啓発および技術者養成事業

(1) 文化財講演会並びに写真展の開催

ア 文化財講演会

日時 昭和62年11月8日（日） 午後2時～4時30分

会場 京都会館会議場（参加者 約350名）

講演 「平安時代の平安京左京について」

京都市埋蔵文化財研究所長 杉山 信三

「世界の歴史都市と遺跡保存」

京都大学教授 西川 幸治

イ 写真展「'87発掘調査成果写真展」

期間 昭和62年12月1日～13日

会場 京都市考古資料館（入場者 約350名）

(2) 現地説明会の開催

ア 昭和62年5月3日 「鳥羽離宮跡第122次調査」（参加者 約50名）

- イ 昭和 62 年 5 月 10 日 「精華大学校内窯跡遺跡」 (参加者 約 150 名)
- ウ 昭和 62 年 9 月 20 日 「平安宮内裏跡」 (参加者 約 100 名)
- エ 昭和 62 年 12 月 6 日 「平安宮豊楽殿跡」 (参加者 約 400 名)
- オ 昭和 63 年 2 月 28 日 午前「上久世遺跡」 (参加者 約 150 名)
- カ 昭和 63 年 2 月 28 日 午前「平安京左京四条三坊」 (参加者 約 200 名)
- キ 昭和 63 年 3 月 21 日 「平安京右京六条一坊五町」 (参加者 約 500 名)

(3) 研究会等への派遣

- ア 昭和 62 年 4 月～昭和 63 年 3 月 於・向日市 (府埋蔵文化財調査研究センター)
「長岡京連絡協議会」(毎月開催) 調査部調査課 主任 長宗 繁一
調査部調査課 鈴木 廣司
「 〃 吉崎 伸
- イ 昭和 62 年 5 月 23 日・24 日 於・東京都 (東京芸術大学)
「第 7 回古文化財科学研究会」 調査部資料課 岡田 文男
- ウ 昭和 62 年 6 月 27 日・28 日 於・奈良市 (奈良国立文化財研究所)
「昭和 62 年度日本文化財学会第 4 回大会」 調査部資料課 岡田 文男
- エ 昭和 62 年 9 月 11 日～13 日 於・東京都 (青山学院大学)
「第 8 回日本貿易陶磁研究会」 調査部調査課 堀内 明博
「 〃 百瀬 正恒
- オ 昭和 62 年 9 月 17 日 於・大阪市 (なにわ会館)
「全国埋蔵文化財法人連絡協議会 調査部調査課 課長 永田 信一
昭和 62 年度研修会」 調査部資料課 主任 牛嶋 茂
(調査研究部会でのコンピュータ導入 「 辻 純一
についての事例報告) 総務部総務課 村木 節也
- カ 昭和 62 年 10 月 3 日 於・大阪市 (大阪府立労働センター)
「第 5 回近畿地方埋蔵文化財研究会」 調査部調査課 丸川 義広
- キ 昭和 62 年 10 月 24 日～26 日 於・岡山市 (岡山大学)
「日本考古学協会岡山大会」 調査部調査課 吉村 正親
- ク 昭和 62 年 11 月 12 日 於・奈良市 (奈良国立文化財研究所)
「第 12 回近畿地方出土木器の集成研究会」 調査部調査課 主任 平方 幸雄
調査部資料課 中村 敦

- ケ 昭和 62 年 11 月 26 日・27 日 於・奈良市（奈良国立文化財研究所）
「近世社寺に関する研究集会」 研究所長 杉山 信三
調査部調査課 主任 長宗 繁一
- コ 昭和 62 年 11 月 26 日 於・大阪市（府立文化情報センター）
「写真測量研修会」 調査部資料課 主任 牛嶋 茂
〃 辻 純一
- サ 昭和 62 年 12 月 5 日・6 日 於・奈良市（奈良国立文化財研究所）
「第 9 回本簡学会研究集会」 調査部調査課 久世 康博
- シ 昭和 63 年 3 月 18 日 於・奈良市（奈良国立文化財研究所）
「第 4 回条里制研究会大会」 調査部調査課 主任 長宗 繁一

今年度の文化財講演会では、まず「平安時代の平安京左京について」と題し、研究所長の杉山信三が最近の調査成果をもとにした報告を行ったあと、京都大学の西川幸治教授から「世界の歴史都市と遺跡保存」と題した講演があった。折しも、京都市では「世界歴史都市会議」並びに「歴史都市博」が開催されており、時期を得た講演テーマであった。

講演の中で西川教授は、バリやローマといった京都と類似した世界の歴史都市が、どのようにしてその貴重な遺産を保存し、また積極的に活用しているか、について膨大なスライドを用いて述べられたあと、京都においても遺跡の保存、活用を行なっていくために「京都基金」のようなものを創設してはどうか、という提言が行われた。また、今年度は現地説明会を「鳥羽離宮跡第 122 次調査」を始め計 7 回開催したが、特に「平安宮豊楽殿跡」や「平安京右京六条一坊五町」においては過去最高の約 500 名にも及ぶ参加者があった。



文化財講演会

3 京都市考古資料館の状況

(1) 展示替えの実施

特別展示「平安宮豊楽殿」壇上積基壇の剥ぎ取りパネルの展示。羽目石、束石、緑釉鴟尾瓦、緑釉軒平瓦、軒丸瓦、垂木先飾金具など52点を公開。

(2) 文化財教室の開催

「第8回京都市考古資料館 小・中学生夏期教室」

期間 昭和62年8月5日～8日（小・中学生とも各2日間）

ア 「小学生親子教室」

第1日目 京都市社会教育総合センターでスライドを交えた学習、映画「大昔の暮らし」鑑賞後、土器づくり。

第2日目 資料館見学、映画「大枝山古墳群」鑑賞後、感想文作成。

参加者 71名（35組）

イ 「中学生サマースクール」

第1日目 移築復原した御堂ヶ池1号墳見学後、資料館見学、学習。

第2日目 長岡京跡発掘調査現場で発掘調査および遺物水洗いの実習。

参加者 55名

ウ 「土器づくり作品展」の開催 会場 京都市考古資料館

期間 昭和62年8月22日～30日

(3) 京都市考古資料館文化財講座の開催 会場 京都市考古資料館 3階会議室

第9回 昭和62年4月25日

「昭和61年度の発掘調査を振り返って」

調査部調査課 課長 永田 信一

「鳥羽離宮跡出土の和琴について」

調査部調査課 前田 義明 (受講者 65名)

第10回 昭和62年5月23日

「久我東町遺跡の環濠集落」

調査部調査課 鈴木 廣司

「平安京跡の祭祀遺物」

調査部調査課 久世 康博 (受講者 65名)

第11回 昭和62年6月27日

「平安宮の復原について」

調査部調査課 主任 家崎 孝治

「平安京の瓦 -造瓦技術を中心として-」

調査部調査課 吉村 正親 (受講者 73名)

第12回 昭和62年7月25日

「京都市内出土の弥生土器」

調査部調査課 主任 平方 幸雄

「緑釉陶器について」

調査部調査課 百瀬 正恒 (受講者 64名)

第13回 昭和62年9月26日

「日野谷寺町遺跡の発掘」

調査部調査課 菅田 薫

「醍醐古墳群の発掘」

調査部調査課 木下 保明 (受講者 65名)

第14回 昭和62年10月24日

「焼き物の消費地としての中世京都」

調査部調査課 吉崎 伸

「西京区大原野の遺跡と調査」

調査部調査課 加納 敬二 (受講者 43名)

第15回 昭和63年1月23日

「遺跡写真について」

調査部資料課 主任 牛嶋 茂

「考古学とコンピューター」

調査部資料課 中村 敦 (受講者 45名)

第16回 昭和63年2月27日

「市街地における立会調査の意味」

調査部調査課 磯部 勝

「土器の復原について」

調査部調査課 主任 本 弥八郎 (受講者 47名)

第17回 昭和63年3月26日

「埋蔵文化財行政について」

京都市埋蔵文化財調査センター所長 浪貝 毅

「資料館活動報告」

考古資料館 学芸員 峰 巍 (受講者 39名)

(4) 印刷物等の発行

- ア 特別展図録「京都市域の群集墳」
- イ 京都市考古資料館年報
- ウ 京都市考古資料館文化財講座資料 No. 9～17
- エ 小・中学生のための見学のしおり
- オ 夏期教室用テキスト
- カ 特別展図録「平安宮豊楽殿」

(5) 普及啓発, 資料収集等

- ア 入館案内用ビデオ『考古資料館への誘い』の編集製作, 一般公開。同時に, 市内小中学校, 市民グループ等への貸出。
- イ 故坂東善平氏蔵書の寄贈を受け, 来館者への公開のための整理作業の実施。
- ウ 京都府下の博物館, 美術館等のパンフレット, リーフレットの収集, 情報提供。

(6) 関係会議への参加

- ア 昭和62年5月14・15日 於：堺市博物館
「関西博物館連盟例会」 館長 小川 武
- イ 昭和62年6月29・30日 於：東京都尚友会館
「公立館長会議」 館長 小川 武
- ウ 昭和62年10月27・28日 於：奈良県社会教育センター
「関西博物館連盟例会」 館長 小川 武
- エ 昭和62年12月18・19日 於：東京都庁, 日本博物館協会
「博物館指導者研究協議会」 学芸員 峰 巍

(7) 博物館実習生の受入れ

京都橘女子大学 (10名) 立命館大学 (6名)

(8) 考古資料の貸出し

福島県立博物館, 長崎県立美術博物館, 近江風土記の丘他 27件

今年度の特別展示は「平安宮豊楽殿」を取り上げた。「平安宮豊楽殿」は近年における平安宮の発掘調査においては最大の成果であり、展示では、出土した壇上積基壇の地層をそのままの状態で剥ぎ取りを行い、大型パネルに取り付け展示した。また、緑釉鴟尾瓦をはじめ垂木先飾金具など、当時の豊楽殿の壮大さを思い起こさせる遺物の展示も行なった。

昨年度から開講した京都市考古資料館文化財講座も2年目を迎え、今年度は計9回開催したが、毎回、多くの応募者があり、資料館普及啓発事業の柱として、確立してきたように思われる。

(9) 入館者の状況

昭和62年度月別観覧者数一覧表

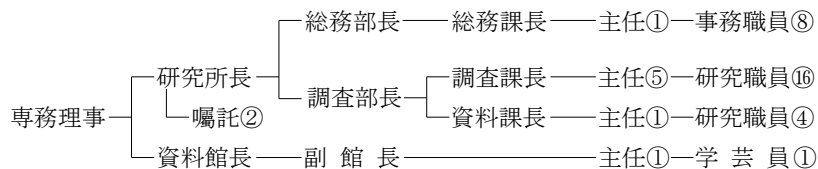
(人)

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	26	1,166	224	110	92	1,592	61.2
5	27	1,310	318	65	278	1,971	73.0
6	25	1,134	215	387	111	1,847	73.9
7	27	1,250	283	394	21	1,948	72.1
8	26	1,344	514	170	80	2,108	81.1
9	26	1,123	259	146	0	1,528	58.8
10	27	1,326	240	220	303	2,089	77.4
11	25	1,273	219	23	97	1,612	64.5
12	24	1,083	181	103	60	1,427	59.5
1	24	1,102	180	116	32	1,430	59.6
2	24	1,184	171	47	78	1,480	61.7
3	27	1,413	234	39	96	1,782	66.0
合計	308	14,708	3,038	1,820	1,248	20,814	67.6

(参考) 昭和61年度観覧者合計 22,171人 (一日平均72.2人)

4 組織および役職員 (昭和63年3月31日現在)

(1) 事務局組織



(2) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	増田 駿	京都市文化観光局長
専務理事	阪本 雅人	京都市文化観光局文化観光部参事
理事	上田 正昭	京都大学教授
	木村 捷三郎	(財)京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	齋藤 武夫	京都市文化観光局文化観光部文化財保護課長
	杉山 信三	(財)京都市埋蔵文化財研究所長
	田辺 昭三	京都芸術短期大学教授
	田中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
	角田 文衛	平安博物館館長
	西川 幸治	京都大学教授
	福山 敏男	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
	榎本 治	京都市文化観光局文化観光部長
監事	井上 嘉久	(財)京都市文化観光資源保護財団専務理事
	松山 充允	京都市会計室長

(3) 事務局職員名簿

	氏名	職名	担当
	阪本 雅人	専務理事 <small>(京都市よ り出向)</small>	
	杉山 信三	研究所長(理事)	
	木村捷三郎	嘱託(理事)	
	田辺 昭三	嘱託(理事)	
総務部 総務課	杉原和彦	総務部長 <small>(京都市よ り出向)</small>	業務 〃 庶務 業務 〃 庶務 〃 業務
	片山 巍	主任	
	菅田悦子	事務職員	
	上村京子	〃	
	村木節也	〃	
	本田憲三	〃	
	金島恵一	〃	
	小松佳子	〃	
夏原美智代	〃		
東藤 昭	〃		
調査部 調査課	永田 信一	調査課長	調査 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
	本 弥八郎	主任	
	長宗 繁一	〃	
	鈴木 久男	〃	
	家崎 孝治	〃	
	平方 幸雄	〃	
	吉村 正親	研究職員	
	平田 泰	〃	
	木下 保明	〃	
	鈴木 廣司	〃	
菅田 薫	〃		
	堀内 明博	研究職員	調査
調査部	百瀬 正恒	〃	〃
	加納 敬二	〃	〃
	磯部 勝	〃	〃
	梅川 光隆	〃	〃
	辻 裕司	〃	〃
	前田 義明	〃	〃
	久世 康	〃	〃
調査課	上村 和直	〃	〃
	丸川 義広	〃	〃
	吉崎 伸	〃	〃
調査部 資料課	牛嶋 茂	主任	資料 〃 測量 電算 保存 処理
	平尾 政幸	研究職員	
	中村 敦	〃	
	辻 純一	〃	
考古資料館	岡田 文男	〃	〃
	小川 武	館長	
	浪貝 毅	副館長 <small>(京都市埋蔵文化財調査センター所長兼任)</small>	
	牧 康司	主任	
	峰 巍	学芸員	学芸

(村木節也)

付表1 昭和62年度発掘調査一覧表

番号	契約・遺構・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類	
平安宮	1	62-001-01-03 朝堂院 87HK-LS	上京区千本通竹屋町上ル 主税町1198	87.07.10 ～87.07.31	74㎡	ND64-1J44	佐々木幸司	梅川	国庫補助
	2	62-001-01-02 内裏1 87HK-LR	上京区千本通下長者町下ル 小山町888	87.05.06 ～87.05.26	84㎡	ND64-1J23	(株) ドルス	梅川	国庫補助
	3	62-001-01-05 内裏2 87HK-LT	上京区出水通浄福寺西入 神明町284	87.08.18 ～87.09.12	44㎡	ND64-1F45	明田俊夫	丸川	国庫補助
	4	62-001-01-06 内裏3 87HK-LU	上京区下立売通千本東入 田中町445	87.08.24 ～87.09.30	40㎡	ND64-1J14	吉田彰一	梅川	国庫補助
	5	62-001-01-07 豊樂殿 87HK-LW	中京区聚楽廻西町85	87.10.20 ～88.01.26	450㎡	ND64-1J31	猪飼賢三	鈴木久	国庫補助
平安京	6	62-062 左京北辺二坊八町 87HK-MV	上京区小川通一条下ル 小川町196 他	88.02.08 ～88.03.31	300㎡	ND64-1D44	(株) 進和不動産	本	
	7	62-044 左京北辺三坊一町 87HK-MR	上京区中立売通室町西入三 丁目457 京都市立立野小学校	87.09.01 ～87.12.19	450㎡	ND64-2A51	京都市長 今川正彦	辻 裕	
	8	62-006 左京二条三坊九町 87HK-FK	上京区室町通樺木町下ル 大門通256 他	87.05.11 ～87.07.18	300㎡	ND64-2I22	(株) アーバン ライフ	百瀬 本	
	9	62-051 左京三条四坊十三町 87HK-FM	中京区三条通麩屋町東入 弁慶石町48	87.11.30 ～88.03.15	300㎡	ND64-4F35	有本嘉兵衛	堀内	
	10	62-009 左京四条三坊九町 87HK-FL	中京区三条通烏丸西入 御倉町80 他	87.11.06 ～88.03.16	910㎡	ND64-4E43	(株) 千總	平安京 調査会	
	11	62-032 左京五条一坊十五町 87HK-VC	下京区大宮通綾小路下ル 綾大宮51-2 京都市立立野中学校	87.06.13 ～87.07.14	128㎡	ND74-1C14	京都市長 今川正彦	梅川	
	12	62-003 左京五条四坊八町 87HK-PG	下京区四条通西入立売 中之町94、堺町通四条下ル 小石町110	87.04.08 ～87.05.02	110㎡	ND64-4J42	(株) 豊和住宅	平安京 調査会	
	13	62-021 左京六条二坊十二町 87HK-WE3	下京区元日町～左女牛井町	87.11.14 ～87.12.28	200㎡	ND74-1H	京都国道工事 事務所長	平安京 調査会	
	14	62-034 左京六条三坊十五町 87HK-PH	下京区東洞院通五条上ル 松屋町	87.07.10 ～87.09.22	250㎡	ND74-2E25	(株) 信和ゴルフ	平安京 調査会	
	15	62-033 左京八条二坊十六町 87HK-BG	下京区油小路下魚ノ棚下ル 油小路町293	87.06.29 ～87.08.26	160㎡	ND74-3D14	(株) タケダ メディカル サービス	木下	
	16	62-001-01-01 右京北辺二坊五町 87HK-IO	北区北野白梅町46	87.04.21 ～87.05.09	55.4㎡	ND63-2D43	中西酒店	堀内	国庫補助
	17	62-045 右京一条二坊十五町 87HK-IP	中京区西ノ京中保町1-4 京都市立北野中学校	87.10.08 ～87.11.30	1300㎡	ND63-2H43	京都市長 今川正彦	菅田	
	18	62-020 右京三条二坊十五町 87HK-RA2	中京区西ノ京東中合町7 京都市立西京商業高等学校	87.05.18 ～87.06.12	180㎡	ND63-4H13	京都市長 今川正彦	本	
	19	62-053 右京四条二坊六町 87HK-RL	中京区壬生西大竹町12 他	88.01.11 ～88.05.10	1500㎡	ND64-3A33	辻 紀久子	平方 高橋	
	20	62-031 右京五条一坊十三町 87HK-VD2	中京区壬生下溝町45 下京清掃事務所	87.07.01 ～87.07.14	108㎡	ND74-1A33	京都市長 今川正彦	本	
21	62-042 右京五条三坊四町 87HK-QA2	右京区西院矢掛町5 京都市立西院中学校	87.08.12 ～87.11.11	720㎡	ND73-2D41	京都市長 今川正彦	堀内		

	番号	契約・遺構・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
平 安 京	22	62-046 右京六条一坊五・六 町 87HK-XF2	下京区中堂寺南町	87.09.16 ～ 88.04.28	10,000 ㎡	ND74-1E・D67	(株)大阪ガス	梅川 木下 丸川	
	23	62-018 右京六条二坊十町 87HK-QD	右京区西院高田町 34	87.05.21 ～ 87.06.30	300㎡	ND73-2H14	(株)クラウドイ ア	堀内	
	24	62-001-01-08 右京八条二坊八町 87HK-YF	下京区西七条南西野町 42	87.12.14 ～ 88.02.12	255㎡	ND73-2L55	西川正規	菅田	国庫 補助
	25	62-001-01-04 右京九条二坊二町 87HK-YE	南区唐橋平垣町 47	87.07.15 ～ 87.09.12	290㎡	ND74-3E32	井上文男	菅田 本	国庫 補助
白 河 街 区	26	62-041 岡崎遺跡 87HK-OC	左京区岡崎東天王町 1 京都市立岡崎中学校	87.08.05 ～ 87.10.29	790㎡	ND65-3C11	京都市長 今川正彦	上村	
	27	62-036 法勝寺跡 87KS-ZO8	左京区岡崎法勝寺町 京都市動物園	87.09.07 ～ 87.09.28	110㎡	ND65-3B32	京都市長 今川正彦	平方	
	28	62-004 尊勝寺跡 87KS-RO	左京区岡崎西天王町 76	87.06.06 ～ 87.07.22	333㎡	ND65-1I52	(株)六盛	上村	
鳥 羽 離 宮 跡	29	62-001-03-01 第 122 次調査 87TB-TB122	伏見区竹田浄菩提院町 102	87.04.03 ～ 87.05.08	265㎡	ND84-3L21	山内俊夫	鈴木久 前田	国庫 補助
	30	62-001-03-02 第 123 次調査 87TB-TB123	伏見区竹田内畑町 13	87.05.20 ～ 87.06.09	645㎡	ND84-3H51	木下秀一	鈴木久	国庫 補助
	31	62-001-03-03 第 124 次調査 87TB-TB124	伏見区竹田内畑町 109, 110, 289-2	87.08.17 ～ 87.09.22	166㎡	ND84-3H44	樋口捨巳	鈴木久 前田	国庫 補助
	32	62-001-03-04 第 125 次調査 87TB-TB125	伏見区浄菩提院町 105-12	87.10.21 ～ 87.11.05	150㎡	N D 84-3 L 21	鶴田哲司	前田	国庫 補助
	33	62-052 下鳥羽遺跡 87TB-DI	伏見区下鳥羽芹川町	87.12.10 ～ 88.03.21	800㎡	ND94-1G24	(株)宮本経営 研究所	前田 磯部	
中 臣 遺 跡	34	62-001-02-01 第 68 次調査 87RT-NK68	山科区勤修寺東金ヶ崎 38- 4	87.07.17 ～ 87.08.10	310㎡	ND85-2E25	(株)正和不動 産	平方	国庫 補助
	35	62-001-02-02 第 69 次調査 87RT-NK69	山科区勤修寺西栗栖野町 12	87.12.08 ～ 87.12.26	580㎡	ND85-2F32	高仁義男	平方	国庫 補助
	36	62-002 勤修寺旧境内 87RT-KN4	山科区勤修寺仁王堂町地内	87.04.01 ～ 88.03.31	2700 ㎡	ND85-4B14・ 24	京都市長 今川正彦	平方 菅田 高橋	
長 岡 京	37	62-040 左京一条三坊十一町 87NG-AN	南区久世東土川町	87.08.19 ～ 87.08.20	100㎡	ND83-4J31	(株)京都アサ ノ コンク リート	長宗 百瀬	
	38	62-001-04-02・59 左京一条三坊十六町 87NG-UN	南区久世大藪町 394	88.01.22 ～ 88.03.05	1000 ㎡	ND83-4J12	(株)大成 ハウジ ング	上村	国庫 補助 (一部)
	39	62-038 左京二条三坊九・ 十六町 87NG-SD8	伏見区久我西出町 西羽東師川河川改修	87.08.20 ～ 87.10.31	800㎡	ND93-2F21・ 22	京都市長 今川正彦	百瀬 丸川 長宗	
	40	62-008 左京四条三・四坊 87NG-PV7	伏見区羽東師菱川町 外環状線道路建設	87.07.10 ～ 88.03.31	4100 ㎡	ND93-4C41・ 44・45	京都市長 今川正彦	長宗 吉崎 鈴木廣	
	41	62-016-048 久我東町遺跡 87NG-KJ4・5	伏見区久我東町～羽東師鴨 川町	87.04.25 ～ 87.06.05 87.12.16 ～ 87.12.26	250㎡ 95㎡	ND93-4D12・ 21・22	(株)大阪ガス	長宗 鈴木廣	

第4章 事務報告

番号	契約・遺構・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類	
その他の遺跡	42	62-019 円乗寺跡 87UZ-EJ	右京区御室堅町 23-1, 24-1	87.05.11 ～ 87.05.26	308㎡	ND63-2A34	(株) オリエント ファイナンス	平田	
	43	62-017 和泉式部町遺跡 87UZ-IZ	右京区太秦森ヶ西町 18-2 他	87.05.06 ～ 87.07.31	726㎡	ND63-3D15	(株) 浅沼興産	辻 裕 前田 菅田	
	44	62-010 北野庵寺 87RH-KG12	北区北野上白梅町 62, 66	87.04.27 ～ 87.06.06	137㎡	ND63-2D24	矢原庄司	木下	
	45	62-055-056 南春日町遺跡 87MK-HO14・15	西京区大原野南春日町	88.01.21 ～ 88.03.30	600・ 200㎡	ND82-3G25	京都府知事 荒巻慎一 京都市長 今川正彦	加納	
	46	62-005 伏見城城下町 87FD-AF	伏見区桃山町立売 21-4	87.04.16 ～ 87.05.23	218㎡	ND94-4C34	(株) 近畿土地	平安京 調査会	
	47	62-047 上久世遺跡 87MK-NM	南区久世上久世町 139	88.01.25 ～ 88.04.28	1500㎡	ND83-2I11	(株) 森本興産	吉崎	
	48	62-001-04-01 大藪遺跡 87MK-AB	南区久世大藪町 234 他	87.05.25 ～ 87.06.27	485㎡	ND83-4F22	(株) 大成 ハウジング	鈴木廣	国庫 補助

付表2 昭和62年度試掘・立会調査一覧表

	番号	契約・遺構・記号	所在地	調査期間	面積	種類	原因者	担当
平安宮	1	62-050 朝堂院 87HK-LX	中京区西ノ京梅尾町他	1988.02.25 ～1988.02.26	656㎡ 82.8㎡	立会 発掘	(株)NTT	家崎 本
	2	62-039 (1) 兵庫寮 87HK-SB001	上京区御前通一条下ル 東堅町132-1 京都市立仁和小学校	1988.01.18 ～1988.01.20	32㎡	試掘	京都市長 今川正彦	本
平	3	62-039 (3) 左京四条一坊一町 87HK-SB003	中京区壬生朱雀町 京都市立朱雀第一小学校	1987.07.23 ～1987.07.29	24㎡	試掘	京都市長 今川正彦	鈴木久
	4	62-026 左京五条一坊十五町 87HK-AH002	下京区大宮通綾小路下ル 綾大宮町51-2 京都市立郁文中学校	1987.06.10	9㎡	試掘	京都市長 今川正彦	家崎
安	5	62-027 右京一条二坊十五町 87HK-AH004	中京区西ノ京中保町1 京都市立北野中学校	1987.06.23	13㎡	試掘	京都市長 今川正彦	家崎
	6	62-024 右京二条四坊十二町 87HK-AH001	右京区太秦安井柳通町14-1 京都市立安井小学校	1987.06.02	13㎡	試掘	京都市長 今川正彦	家崎
	7	62-023 右京五条一坊十三町 87HK-VD001	右京区壬生下溝町45 下京清掃事務所	1987.06.05	20㎡	試掘	京都市長 今川正彦	家崎
	8	62-039 (2) 右京五条二坊一町 87HK-SB002	中京区壬生東土居ノ内町 京都市立朱雀第七小学校	1987.07.27 ～1987.07.31	62㎡	試掘	京都市長 今川正彦	堀内
京	9	62-037 右京六条一坊五町 87HK-XF001	下京区中堂寺南町17他	1987.08.03 ～1987.08.04	55㎡	試掘	(株)大阪ガス	平安京 調査会
	10	62-025 白河街区 87KS-AH003	左京区岡崎東天王町1 京都市立岡崎中学校	1987.06.11	14㎡	試掘	京都市長 今川正彦	家崎
河街	11	62-035 法勝寺跡 87KS-ZO007	左京区岡崎法勝寺町 京都市動物園	1987.08.10 ～1987.08.19	70㎡	試掘	京都市上下水道 事業管理者 山西瀨市	辻裕
	12	62-049 (2) 白河南殿 87KS-UW12	左京区冷和泉通～二条通 川端通～東大路通	1988.03.04 ～1988.03.29	1555㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西瀨市	家崎
鳥羽離宮	13	62-029 鳥羽離宮跡 87TB-NT029	伏見区竹田 浄菩提院町～竹田真幡木町	1987.07.16 ～1987.10.27	延500m	立会	(株)NTT	磯部
	14	62-028 (1) 鳥羽離宮跡 87TB-OG001	伏見区中島御所ノ内町 竹田小屋ノ内町	1987.07.15 ～1987.07.28	延300m	立会	(株)大阪ガス	磯部
	15	62-028 (2) 鳥羽離宮跡 87TB-OG002	伏見区竹田 田中殿町、樋ノ井町地先	1987.08.10 ～1988.04.05	延570m	立会	(株)大阪ガス	磯部
	16	62-028 (3) 鳥羽離宮跡 87TB-OG003	伏見区中島中道町 竹田田中殿町地先	1987.11.16 ～1988.02.12	延540m	立会	(株)大阪ガス	磯部
長岡京	17	62-066 下鳥羽遺跡 87TB-SW066	伏見区毛利町他	1988.02.15 ～1988.11.04	延2800m	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西瀨市	磯部
	18	62-016・048 久我東町遺跡 87NG-G16・G48	伏見区久我東町	1987.04.25 ～1987.06.23 1987.12.07 ～1988.02.25	延210m 延330m	立会	(株)大阪ガス	長宗 鈴木廣

第4章 事務報告

	番号	契約・遺構・記号	所在地	調査期間	面積	種類	原因者	担当
そ	19	62-015 仁和寺院家跡 常盤東ノ町古墳群 86UZ-SW053	右京区常盤森町、一ノ井町 古御所町、山下町他	1987.01.21 ～ 1988.03.31	延 2495m	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	加納 平田
	20	62-057 仁和寺院家跡 87UZ-SW057	右京区宇多野長尾町他	1988.01.19 ～ 1988.12.09	延 2600m	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	平田 加納
	21	62-054 上ノ段町遺跡 87UZ-SW054	右京区太秦帷子ヶ辻町 堀ヶ内町他	1988.02.22 ～ 1988.09.19	延 1615m	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	平田 加納
の	22	62-043 西野町遺跡、千代ノ道古墳 87UZ-SW043	右京区太秦西野町 嵯峨野千代ノ道町	1987.10.14 ～ 1988.06.17	延 4075m	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	平田 加納
	23	61-060 常盤東ノ町古墳群 上ノ段町遺跡 広隆寺旧境内 86UZ-SW060	右京区太秦 一ノ井町、蜂岡町他	1987.03.23 ～ 1988.03.09	延 3070m	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	平田 加納
他	24	62-049(1) 法成寺跡 87KS-UW10	上京区寺町通 今出川通～丸太町通	1988.01.25 ～ 1988.03.30	1069㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	家崎
	25	62-013 61-049 樫原廃寺、樫原遺跡 樫原廃寺瓦窯跡 86MK-SW049	西京区樫原岡南ノ庄地内	1987.01.12 ～ 1987.11.28	6300㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	平安京 調査会
の	26 ・ 27	62-007-01・02 鴨谷古墳、盆山経塚 峰ヶ堂城遺跡 87MK-FO002・003	西京区御陵細谷、御茶屋山 大原	1987.04.18 ～ 1988.07.11 1987.10.30 ～ 1988.03.31	430㎡ 192㎡	試掘	住宅都市整備公 団	上村 丸川
	28	62-014 大藪遺跡、中久世遺跡 86MK-SW050	南区久世殿城町、大藪町	1986.12.10 ～ 1987.07.21	1259㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	吉崎
跡	29	62-012 法性寺跡、正覚寺跡 86RT-SW020	東山区本町15丁目他 伏見区深草願成町他	1987.04.01 ～ 1988.03.31	約 7000m	立会	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	吉村
	30	62-064 伏見城々下町 87FD-AG001	伏見区京町南七丁目 35	1988.02.25 ～ 1988.02.26	82.2㎡	試掘	京都市長 今川正彦	平安京 調査会
	31	62-001-005 京都市内遺跡 87BB-	京都市内一円	1987.01.01 ～ 1987.12.31		立会 試掘	京都市長 今川正彦	家崎